
王子殿下のカタリテ

目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子殿下のカタリテ

【Nコード】

N7798N

【作者名】

旦

【あらすじ】

生真面目で堅物で負けず嫌いで読書好きな25歳が、異世界へ転がり落ちた。

それから1年。彼女は善き隣人たちに恵まれ、つつがなく、日本へ帰るすべは見つからないもののそれなりに生活していた。

彼女を拾ってくれた宿屋の主人夫妻の店を手伝い、近所の子どもたちにこれまで読んできた物語などを語って聞かせながら。

そんな彼女のもとへ、王城から使いの者が来る。

公務に忙殺され楽しみの少ない王子殿下が、彼女のめずらしい物語

りをこそ所望だというのだ。

気が進まないながらも、彼女は王子の召喚に応じることにする。

世界を救うでも、ドラゴンの生け贄になるわけでもなく。異世界を現実と受け止めたままとうに生活していた実際的で常識的な主人公が、ささやかな特技のために王子をとりまく陰謀に巻き込まれる物語。

1、アーラ

心配そうな面持ちのおかみさんを見て、アーラは何かが終わりを告げる音を聞いた気がした。

「アーラ……あなたに、お客さんが来ているのよ」

ただのお客さんであるわけがない。

宿屋にとってお客は神様だ。おかみさんがこんな顔をする必要はない。

「どんなお客ですか？」

石鹸だらけの手をすすぎ、布巾でぬぐいながらたずねると、おかみさんはちらちら振り返りながら答えた。

「それがね。お城の兵隊さんみたいなのよ」

アーラは善良な一市民だ。法律を破ったこともなければ何か因縁をつけられそうな芸当ができるわけでもない。なのに都の内とはいえ街はずれの小さな宿屋に、どうして王城の兵士が来るのだろうか？
「私、悪いことなんかしてませんからだいじょうぶですよ。ちよつと、話を聞いてきます」

アーラはおかみさんを安心させるために微笑んで、厨房を出た。

アーラは美人でもなければ富も地位もない、どうということもない一市民だが、法律的な意味合いでは「市民」ではない。何しろ、戸籍がないのだから。

約一年前。アーラは街道わきの繁みに転げ落ちた。

まさに「転げ落ちた」と表現するよりしかたがない。日本の平凡で幸せな家庭に生まれ、弟と妹の世話を焼き、人並みにたくさんの友達を持った一般人だったはずだ。……それなのに。

がむしゃらに勉強して進学校で過ごし、まじめに勉強して優秀な成績で大学を卒業し、黙々と不平をもらさず働いてきた二十五歳のある日。

有給休暇をとり、ひさしぶりの気ままな一人旅と洒落込むはずだ

った。ホテルと食事を豪勢にしたために、往復の手段は新幹線ではなくバスを選んだ。車窓の外を流れゆく山の景色をぼんやり眺めていたのだが、バスが普通ではない揺れかたをしたと感じた直後、突如見慣れた世界は彼女の足もとでぱったりとぎれ、あちこちぶつけながら転げ落ちた先が、「この世界」だったのだ。

繁みから這い出して街道を歩き、運よくすぐ近くに街が 王都
があり、すきつ腹に耐え切れず「皿洗いでも掃除でも何でもしますからご飯を食べさせてください」と頭を下げたのが、この宿屋だった。

そしてまた運のよいことに、宿屋の主人夫妻は気さくでほがらかな人たちだった。まじめでよく気のつく彼女を気に入り、そのまま宿屋に住まわせてくれ、給金まで出してくれることになったのだ。以来、ここで食器洗いや食事の下ごしらえ、部屋の掃除などをこなしてすごしている。帰る方法はもちろん探しているが、今のところ見つかってはいない。

日本にいたころの名前 本名は、だれにも告げていない。この世界、この国にそれはしつくり来ないような気がしたからで、中高生のとき友人が呼んでくれたあだ名で「アーラ」と名乗っている。

一年間何ごともなく過ごしてきたのに、いまさら戸籍がないってことで罰金とりにきたとか、つかまえに来たはずはないわよね？

とにかく、兵士から用向きを聞かないことには始まらない。

アーラはくだんの客人が待つ部屋の扉をノックした。

2、召喚

「お待たせいたしました。私がアーラです。何のご用件でしょうか」
兵士は二人いた。一人は赤みがかった金髪の長身の青年で、もう一人はさらなる長身のうえ肩幅が広く、軍人のお手本のような体格と厳しい顔つきをしている。

おかみさんは「お城の兵隊さん」とのたまったが、アーラはこの兵隊さんは？ごたいそうな？兵隊さんであると一目でわかった。

近衛クラスだ。

宿屋に昼食を食べに来るような兵士は、たいがい街まわりや詰め所番だ。気安いが、どことなくぞんざいな雰囲気がある。けれども目の前の二人は肌の表皮、そして指先にいたるまで神経がゆきとどき、電流のようにほとばしっているのが感じられた。

赤みをおびた金髪の兵士がこちらに向きなおった。二人とも、まだ若い。赤い金髪の青年など、きつとアーラと同じか、少し年下だろう。とはいってもこの国グランヴィールの人々は、西欧人ほど彫りが深くはないものの、日本人よりは早く大人びるようだ。もしかしたら、アーラこそ若く、十代に見られているのかもしれない。

「先触れもなく突然お邪魔して申し訳ない」

狐色のような赤い金髪の青年が軽く頭を下げる。顔の造作の線が細く、女性が黄色い声をあげそうな美男子だ。

お貴族様のもとに来るわけでもあるまい、先触れなどないのは当然で、謝られることなどなにもない。アーラは微笑んで見せた。

「いいえ。今ならお昼時もすぎいておりますし、不都合はございません。ご用件をうかがえますでしょうか」

「アーラ殿は物語りにすぐれていると評判であると聞き、こうしてまいりました」

もう一人の、灰色がかつてくすんだ金髪のほうが言った。上背と肩幅があるだけでなく胸板が厚く、たくましいというよりも威圧的

な印象だ。

「物語り？」

アーラはしかめてしまいそうになった眉を、かろうじて留めた。「たしかに、近所の子どもたちにはよくお話をしあげますけれど、それだけです」

グランヴィールには、当然ながらインターネットもなければ、テレビもラジオもない。現代日本に比べれば娯楽は限られている。グランヴィールの人々にとって歌い手や語り手、踊り手や吟遊詩人、芝居の一座に大道芸人のたぐいは娯楽を提供してくれる存在であり、王族貴族もそのような優れた芸能者を招くことはよくあると聞く。けれど、アーラは物語りをするので富と名声を稼ぐ語り手ではない。物語りはできてもそれは近所の子らや宿泊客を楽しませるためだけのものとして語っているのだ。

「私は語り手でも何でもありません。ただの、宿屋の手伝いです」「ご謙遜を。春の芽吹き亭のアーラ嬢は世にもめずらしい物語を次々にたゆることなくなると、兵士の中でもうわさになっております」

世にもめずらしい物語！ そりゃあそうだわ。

アーラは子どもの頃から本が好きだった。日本昔話全集全八十巻を読破し、ギリシャ神話を読み漁り、北欧神話に耽溺し、古事記の日本書紀と風土記を読み比べ……。そのほかにも時間があれば本を開いていた。「お話をし」とねだられば、語る物語が尽きることはなかった。少なくとも、今のところ。

「私の物語りに、何か障りがありましたでしょうか？」

アーラがおずおずと不安げな表情をつくって問うと、狐色の金髪とくすんだ金髪は顔を見合わせた。

「いえいえとんでもない！ アーラ殿、その逆ですよ」

「あなたの物語りのすばらしさを見込んで、我がゼファード殿下がぜひ王城にお越し願いたいと」

「……は？」

まぬけな声がこぼれる。

思わず、丁寧な言葉遣いも当たり前障りのない笑顔も忘れてきよんとしてしまった。

「王城？」

「はい。ぜひ、王子殿下はあなたの物語りを是非にとご所望です」

ちよ、ちよっと待つてよ。

王都とはいえここは街はずれ。春の芽吹き亭はこぢんまりしていて家庭的な店だ。王城の暮らしは、日本の地方都市で永田町の話聞くのと同じくらい遠いものだと思っていた。

「なのに私に、王城へ上がれと？」

めんどくさい。

まず浮かんだ正直な気持ちだが、それだった。何とかして断ろうと思うものの、相手は王子殿下だ。アーラが断って何かお咎めがあったとき、おかみさんやご主人に迷惑かかかってはいけない。なんといつても、おかみさんとご主人はアーラの大恩人なのだから。

めんどくさいしややこしそうだし何かに巻き込まれそうだし行きたくないけど、王子様ご所望の物語りとやらで少しでもご褒美がもらえるのなら、おかみさんたちへの恩返しになるかもしれない。

おかみさんと、ご主人のためなら。

アーラは覚悟を決めて、王城に上がることを承諾した旨を伝えたのだった。

3、御前へ

日本のように四季があるグランヴィールに、アーラはほっとしていた。

ただ、梅雨はない。「大風」はあるが台風はない。夏でも湿度は低く、からりとしているので日本のような蒸し暑さに悩まされることは少ない。

緑が多く、王都の外は山がちで、山すそに街が点々としているのだという。街並みは石造りと木造、折衷建築が混ざり合っている。それでも雑多な印象はあまりなく、アーラの知識で以ってたとえるなら、ドイツの田舎の質実さとイタリアの明るさという相反しそうな要素を足して二で割ったような雰囲気だ。

グランヴィールの民の誇りである王城は巨大な石造りで、初めて見たときアーラは「お城」などというロマンチックなものではなく、「要塞」のようだと思ったものだ。しかしそのいかめしい外観は、周辺諸国との物理的な戦いがたえなかった建築当時の名残で、わざわざ砂糖菓子のように繊細な建造物に造り変える趣味が歴代の王になかったというだけのことらしい。要塞じみた王城には王家の紋章と貴族議会の象徴が描かれた旗が誇らしげにかかげられていて、その旗を彩る明るい色使いが石壁の表情をわずかになごませている。

灰色の石積み of 質素な宿屋の二階で、アーラは鏡を見ていた。夏の終わりの午後。日本ならまだむしむしとして我慢ならない頃だろう。だがここ王都では、窓から差し込む陽射しも目を刺す白からはなやかな金色に変わった。カーテンを閉めなくても、鏡に映した姿がきちんと見える。

いいだけ伸びてしまったがつやだけはいい黒髪に、焦がし砂糖のような褐色の瞳。肌は白いほうだろう。身長は日本女性の平均よりやや低い。さらに丸顔なので、二十六という年齢ながら幾分少女じみて見える。

美人でもないが不細工でもない。しかし化粧映えのしない童顔だ。日本にいたころは必要最低限、身だしなみ程度のことはしていたが、グランヴィールに転げ出てからというものの、ほとんど化粧らしい化粧をしていなかった。

そんなアーラだから、王城に上がる当日である今日もたいしたことはしていない。

給金で買ったよそゆき用の焦げ茶色のワンピースを着て、おかみさんに借りた粉を肌にはたき、蜂蜜をなめて唇にほんのりとつやを出せば、それで準備は終わりだった。

アーラが知っているヨーロッパと同じく、グランヴィールでも過去の時代には汚物を路上に捨てていてそのにおいが我慢ならないものだったため、香水が発達したらしい。きちんとした廃物処理が義務付けられて何十年かたっているようで、現在ではそのようなことはないものの、女性たちは香水を好んでつけている。おかみさんもお主人と外出するときにお気に入りの香水をふりかけていくが、アーラはひとつも持っていない。ありがたい給金は、香水よりももっとほかのものに使いたかったからだ。

もちろん、王城に出向く今日でさえ何も香らせてはいない。ひよつとすると昨晚洗った髪に、まだわずかに紫草水の匂いが残っているかもしれないが。

時間になると、先日も来た二人の兵士が迎えにやってきた。

アーラは気をもむおかみさんに明るく手をふって馬車に乗り込むと、御者の見事な手綱さばきによって、あっという間に王城へと連れ去られた。

「こちらでしばらくお待ちを」

簡素な応接間のようなところで待たされながらアーラは、じきに王子の部屋へ案内されるものだと思い込んでいた。

けれども、その予想は大いにはずれた。

なんともおそろしいことがおきたのだ。

女官がざつと二十人。軍隊の行進のように整然と部屋に入ってきたには、アーラは本気で逃げ出そうかと思った。女官たちは有無を言わずアーラから服を剥ぎ取り、下着まで問答無用で脱がそうとするありさまで、アーラは追い立てられるようにして浴槽へ落とされた。

上下水道が調っている王城の浴室は、アーラに？あちら？を思い出させた。金メッキの管から適温の湯が注ぎ、石鹸はとても泡立ちがよい。しかし豪華な浴室の雰囲気に入る余裕などあったものではなかった。

皮がむけるのではと思われるほど肌をこすられ、湯と水を交互にかけられ、バラの花びらが浮いた盥の全身を頭からかけられ、香油をすりこまれて、アーラは泣きたくなかった。

風呂に入れるなら最初っからそう言いなさいよ！

いったい何の因果で、初対面の人々に裸をさらさなくてはいけないのか。

けれども女官たちは裸の人間を磨きたてることなど日常茶飯事という顔で、嫌味もなく晒うこともなかったのがせめてもの救いだっ

た。
コインランドリーの巨大ドラムでさんざん引っ掻き回されたかのようにへろへろになったアーラを次に待ち受けていたのは、衣装合わせだった。

衣装系の女官たちは入浴係とは打って変わってにぎやかしく、アーラにいろいろなドレスをあててはああでもないこうでもないとか、やかましくさえずった。

着がえなんかさせなくたって、あのワンピースで充分じゃないの！

アーラが至極丁寧に且つ熱意をこめて抗議すると、充分不十分必要不必要の問題ではなく、女官としての沽券と面子が大切なのだとの回答があった。

やっと濃い紫に淡い紫苑のシフォンをあしらったドレスが選ばれ、

着付けられ、真珠の髪留めが飾られた。

コルセットが締め上げられ、息がつかまる。鯨骨や木製でなく厚布製のものがせめてもの救いだ。ドレスの無駄に多い後身頃の裾が一枚掬い上げられ、腰で振袖の帯のように豪華絢爛に留められた。

女官たちに部屋から押し出されると、廊下には例の兵士二人組が待ち受けていた。狐色と、灰色の金髪の例の二人だ。

彼らは同時に「ほう」と声をもらして、狐色のほうはにつこりし、灰色のほうは眉をぴくりと上げた。

「とてもよくお似合いですよ、アーラ殿」

「お褒めに預かり光栄にぞんじます」

「……なぜ棒読みなのですか」

「なぜはじめからお教えくださらなかったのですか！ 洗濯物みたくに洗われて、せつかくのワンピースをみっともない呼ばわりされて着替えさせられるってことを」

「そんなことをお話したら、あなたは来るのをやめたかもしれないでしょう？」

もつともだ。

疲れきった体と心に鞭打って、アーラはしかたなく、彼らの案内に従った。

4、予言

昔、一つの事件があった。

王位継承権を早々に放棄し、王族にしてはめずらしく焦がれた相手と結婚して幸せな家庭を築いていた王弟サリアン・グラントリー公だが、その幼い一人息子がかどわかされたのだ。

屋敷は天地をひっくり返さんばかりの大騒ぎとなった。奥方はシヨックのあまり倒れ、使用人は厨房の皿洗いにいたるまで王都中を駆けずり回った。

それでも、七歳になったばかりの息子は見つからない。

類はこけ目は落ち窪み、憔悴しきったそんな王弟のもとへ、さすらい人の老婆がやってきた。

老婆は、おのれは予言者だとうそぶいた。さすらい人は多く占いや先見を生業とする民だ。さすらい人に自称予言者は大勢いた。

しかし老婆は、自分こそは「本物」であるとうけあった。そして、かどわかされ行方不明となった一人息子をあきらめよと、グラントリー公に進言した。

「王弟閣下、何度でもおんなじことを申し上げます。この家を栄えさせるのはおぬしの息子ではない。娘じゃ」

言いながら、老婆は浅黒い肌の若い女を差し出した。さすらい人の女だ。

「わしには見える。おぬしの娘が、この家に幸と光をもたらすさまが。……息子のことはあきらめよ。いかほどのことがあるう？ ちっぽけな息子など忘れ、このおなご枕を交わし、おぬしの輝かしきのために娘を生ませるがよい」

王弟は大切な一人息子を「ちっぽけ」呼ばわりしたさすらい人たちをたちまちのうちに屋敷からたたき出した。もとより彼は、愛しい妻のほかになんか女をも腕に抱くつもりなどなかった。

その日の夕暮れ。

多くの者どもがもう駄目かと思っていたところに、一人息子は帰ってきた。沈みかけた西日に照らされて、真っ赤に染まって見えた。王弟閣下は息子に駆け寄り、力強く抱きしめた。

そのとき、ぬるりと指が滑った。あらためてよく見てみると、息子の姿が赤く見えるのは西日のせいではなく、血染めになっているからだった。

だが、幼い彼が大きな怪我をしているわけではない。

「おまえをさらった奴は、どこにいるのか、どうなったのか」
父親に問われて、ひとこと息子は答えた。

「ころした」

この息子の名を、ジルフィス・グラントリーという。

二十年後。

二十七歳になったジルフィス・グラントリーは近衛隊の筆頭騎士を務め、王子殿下の親友であり腹心として宮廷で活躍していた。

「かわいい子だったな」

ジルフィスは狐色の髪をかきあげて、次席騎士のクオードをふり返った。クオードはぴくりと眉を上げた。

「おまえはあんな子どもじみている女が好みだったか？ もっと、派手な美人が好きだと思っていたが」

「花街で遊ぶときに選ぶ女とはちがうって」

ジルフィスはゼファード王子のために連れてきた語り手の声を思い出した。

『私の物語りに、何か障りがありましたでしょうか？』

よい声だった。高からず低からず、穏やかな抑揚で響く声音。

そして彼女はどことなく幼げな容貌に反して、几帳面で落ちついた口調をしていた。

「語り手ってのはさすらい人によくいるだろ？ 俺はさすらい人がきらいだから今回の話も、実は乗り気じゃなかった。けどあの子は

さすらい人じゃないな。さすらい人にしては色が白すぎる。顔立ちもちがう」

「春の芽吹き亭の主人夫妻の親戚か何かなんだろう？ あの娘は。名前は、何と言ったか……」

クオードが思い出そうとしてこめかみをもむ。ジルフィスは教えてやった。

「アーラだつてき。話し方もしつかりしているし、態度も丁寧だ。きちんとしてつけられている。宿屋の看板娘にしとくだけじゃもったいないな。ゼファの用事がすんだら、俺もあの子を屋敷に呼ぼうかな」

軽口をたたいていると、部屋の扉が開いた。

御前に引き出されるにふさわしいなりに飾られ、げっそりと疲れきった様子のアーラが女官たちに押し出された。平民にはやはり、女官たちによる？洗濯？がよほどこたえたらしい。

それでも、彼女は慎みを忘れずに姿勢正しく立っていた。

「とてもよくお似合いですよ、アーラ殿」

お世辞ではなく、実際よく似合っているとジルフィスは思ったのだ。

ゼファード王子に引き渡すのが惜しくなるほどに。

幕間

そういえば、ことの発端は自分自身の一言だったと、ジルフィスは思い出した。

それは一週間ほど前のこと。

いつもながら喧喧諤諤、わざと収拾がつかないようにかき混ぜているのではないかと思われるほどに長引いた、貴族議会の代表と王族による会議がようやく終わったとき。ジルフィスは気取られないようにこつそりため息をついた。

巨大な長机の向こう端でジルフィスの父、王弟サリアンがグランヴィール王となにやら小声で話しこんでいる。王の末弟　つまりジルフィスの叔父でもある　ヴァーデイスは、秘書官に議事録を持ってこさせ、中身を確認している。自分に不利なことが書かれていないか確認をしているのだろう。内容の曲げられた議事録など意味がないはずなのに、今のところ誰も見て見ぬふりをしている。国王でさえそうなのだ。国王陛下にどんな腹積もりがあるのか若輩者には汲めるはずもないが、末弟派はほうっておけばますますのさばるにちがいないと、ジルフィスは確信していた。

「末弟派の古狸どもは、揚げ足取りの達人だな」

ジルフィスの隣で資料を見直していた、従弟のゼファードがぼやいた。

「しかも不利な質問をされると、はいかいいえで答えるべきなのに修辞ばかりをやたらめったらつなげた意味不明の長文ではぐらかす。口頭でやる会議なんぞ無意味だな。紙面に質問を印字して選択した答えの欄にしるしをつけさせるとか、そういうた方式でないとまるでだめだ」

「そんな証拠文書が残る方式を、末弟派が認めるわけがないだろ」
ジルフィスが小声で返すと、従弟はわずかに肩をすくめた。

「わかってて言っているんだ。だから父上も、馬鹿らしいと思いつ

つこの古典的な会議を続けていらっしやるんだろっ」

先々代の王の頃までは、諸外国との武力交渉が絶えなかつたらしい。しかし今は「表向き平和」と言えるほどまでになり、王侯貴族が佩いている剣はほとんど家門の紋章代わりだ。無論、近衛隊をはじめ兵士が帯びている剣の刃は本物で、決闘や危急の際には使用されるものの、大軍同士がぶつかり合つて互いに首を刎ね胸を貫きという時代はとうに終わっている。だからこそ、貴族も王族もこんなふうにくぐだたと内政をこねくり回していられるのだろっ。

ジルフィスは首の後ろをもみながら立ち上がった。

「ゼファ、これからひさしぶりに花街へ遊びに行かないか？　こんなふうになんか神経をげっすり削り取られた日にはさ、ぱあっと遊んで英気を養いたくなるってもんだろ？」

ジルフィスが予想していたとおり、ゼファードはあまり乗り気ではなかつた。

「俺は花街へ行くと、余計に疲れる気がする」

「そりゃある意味、当然そうだろう」

「……言っておくが、おまえが想像しているのとは違っぞ。気疲れするんだ」

ジルフィスは「娼館が肌に合わないって？　王子様はお上品なことで」と茶化そうかとも思ったが、やめにした。ゼファードが本当に疲れて見えたのと、そして何より、末弟派のポーロック公がこちらへやってくるのに気づいたからだ。

「これはこれは王子殿下、ご機嫌麗しく。筆頭騎士のジルフィス様も」

もちろん麗しくないことなど承知の上の挨拶の常套句だ。ジルフィスもゼファードもそれなりのおざなりな挨拶をポーロック公に返す。

ポーロック公は、最高級の布地を惜しげもなくたっぷり使った規格外のヴェストコートでなければ覆い切れない太鼓腹をでんと突き出して、もみ手をした。

「このたびは殿下にひとつお願いがありまして、こうして参ったわけなのです。お聞き願えまじょうかな？」

「力になれるかどうかは別として、聞くだけなら聞こう」

そう答えたゼファードにポーロック公は大いに恐縮して見せたが、腹の中では馬鹿にしきっているに違いない。

「殿下の管理召されている天領に隣接しております我が領地の商人から、街道の整備について訴えが出ておりますな。間の森に道を造ればずっと楽に大きな商いができるものを、現存の街道だけにしておくのはもつたいないと申すのです」

ゼファードは天領二つと南西部の一部の管理を、グランヴィール王から任されている。ジルフィスも天領内の農場視察に何度かついでいったことがあり、たいそう質のいい赤ぶどうがとれることに感心したものだ。従弟は平板な口調で応じた。

「あの森林は代々王族の管理下だ。整備するとなれば国庫ではなく王家の金庫からの持ち出しになる。表街道があるというのに莫大な金と貴重な森林資源を切つてまで新しい道を作る価値はないという結論を、俺の前の管理者だつてしてきたんだ」

「臣民のために王家が身をお切りになり新たな道を造られれば、民は総じて感謝し殿下を支持申し上げるか」と

「その道をつつたとして、使うのは主にそちらの領地の民だ。商いが大きくなればそれだけ税も上がるはずだが、その税はそちらに納められる。そうなれば、森林の中の道だけに維持管理費が相当かさむのにこちらに実入りは少なく、道の造り損だ。それに問題は、金の面だけではない。あの森林を伐採すれば川のかさが増えたときに水が逃げて、町に危険が及ぶかもしれない。領内に大水の心配をされるご婦人がいて、安心させるために技師に森林の貯水量と水害の被害規模を想定計算させたことがあるんだ。よって、貴殿の領内の声にこたえることはたいへん難しい。代わりにそちらの領内の岩山の岩盤を掘つてこちらに穴道を通すというのなら、少しばかりの支援を考えないでもないが？」

ボーロック公は大げさな身振りでお辞儀をした。

「いやはや、残念ではございますが、まったく殿下のおっしゃる通りでございます」

そして何ごともなかったように退室してゆく巨大な後姿に、ジルフィスは思わず眉をひそめた。

「あいつ……何がしたかったんだ？」

「さあ？ 俺をおちよくって楽しみたかっただけだろう」

「おまえももうちょっと楽しみを覚えろよ。楽しみすぎてあんなに膨れるのはどうかと思うけど。……なあ？ 花街、一緒にどうだ？」

ゼファードが考えるそぶりを見せたので行く気になったのかと思つたのもつかの間、

「ジル。声のいい歌い手か語り手を知らないか？」

ジルフィスはわけがわからなかった。

「娼館には歌い手や踊り手の一人や二人、いるもんだろ。それがどうした？」

「だから花街は行かないと言ってるだろう。おまえの頭の中はいつたい何が詰まってるんだ、桃色の綿か？ 俺はただ、さすらい人か吟遊詩人でも呼んで、めずらしいバラッドや物語りを聞いてたまには気分転換したいと思っただけだ」

そんなことを言い出した従弟のためにジルフィスは、「安くてうまい飯を食わせてくれる下町の宿屋に、おもしろい娘がいる」という部下からの情報を教えたのだ。

それが、ことの発端だったのだ。

5、執務室

いくつもの回廊を抜けてたどり着いた一角。

狐色の髪の青年がノッカーをたたいて用件を告げると、「入れ」と返事があつた。よい声だと、アーラは素直に感心した。

声は生まれ持った資質でもあるが、成長に伴って磨かれも、当人が磨きもする。だからこそ声はその人物の人となりを大いに表す

とアーラは信じていた。今扉越しに聞いた声は、人の上に立つ者として、よく磨かれたに違いなかった。

王子様なら、それも当然か。

政治的駆け引きや剣の腕を磨くのと同じに、声や話術を磨くのも王族としての必須科目なのだろう。たぶん。

扉が開き、狐色の髪の青年が流れるような優雅さで臣下の礼をした。動作は同じなのに、となりの灰みがかつた金髪の彼がすると堅苦しく軍人らしい礼に見えた。

「筆頭騎士ジルフィス・グラントリー、次席騎士クオード・マルカスとともに城下、春の芽吹き亭より、語り手アーラ嬢をおつれいたしました」

赤みをおびた狐色の金髪がジルフィス。筆頭騎士。

灰色がかつた金髪がクオード。次席騎士。

やっぱり、？ただの兵隊さん？じゃなかったわけね。

アーラは胸の内ですりごちた。ただの王城兵でないばかりか、近衛騎士隊のトップなのだ。

そして、目の前に鎮座しますので、

ゼファード王子殿下だ。

王子は重厚な書斎机の前に座り、書類の山をばりばりと処理しているさなかだった。ここは王子の執務室なのだ。とても実際の、装飾が少ない。ただ、書斎机と床に敷かれた臙脂色の絨毯だけは経てきた年月とそれらを作り出した職人の手腕によって、素晴らしい

存在感を放っている。

アーラはひとまず膝を折って、この執務室の主に敬意を表すために、一番一般的な礼をした。

「失礼いたします。春の芽吹き亭のアーラと申します。このたびはこのようなつまらぬ町娘風情をいと高い王城までお招きくださいまして、身にあまる名譽と存」

「あいさつはいい。そこに座れ」

王子殿下は書類に目を落としたままで、こちらを見向きもしない。ペンを持っていない左手をひらりとふって、アーラの目の前の床におかれた巨大な一人がけソファを示す。

座っていいものなの？

いと高きところにおわす王子殿下のお許しがあったとはいえ、ただかだか町娘風情が王子殿下の目と鼻の先で腰を下ろしていいものだろうか。こういうときは身分というものをわきまえて、立っているものではないのだろうか？

「座れと言っている。吟遊詩人だって座らなければバラッドは始められない。物語りだってそうなのだろうか？」

アーラの心を読んだかのように王子は言った。

吟遊詩人はリユートを弾くから座るんだろうけど、私にリユートは要らないわよ。

しかし立っているのも、疲れている身には堪える。ありがたく、アーラはふかふかのクッションに身を沈めた。極上のやわらかさと肌触りのクッションは眠気を誘う。猫にでもなった気分だった。

王子はちらと一瞬だけ視線を上げて、アーラではなく後ろに控えている二人の騎士を見た。

「ジル、クオード、ご苦労だった。もどっていいぞ」

「殿下、畏れながら拝聴させていただくわけにはまいりませんか」
ジルフィスが言いながらアーラの肩に手を置いたので、彼女はびつくりした。あわてて顔を上げると、ジルフィスはやわらかく微笑んでこちらを見下ろしている。細身に見えるのに、左肩に置かれた

手はとても力強い。

「おまえはさすらい人や大道芸や吟遊詩人がきらいじゃなかったか？ 語り手の物語りを聞きたいとは、どういった風の吹き回しだ？」
向きなおると王子は純粹におどろいたようすでジルフィスをながめている。ジルフィスはひよいと肩をすくめた。

「ちよつとした気まぐれだよ」

口調ががらりと変わった。王子を相手に、ずいぶんくだけている。「アーラ嬢がどの程度の物語りをするのか、興味がわいてね。ゼファだって、この子を独り占めしなきゃ気がすまないってほど狭量じゃないだろ？」

「ジルフィス」

咎めるように、クオードが言った。

「忘れたのか。おまえはこのあと、隊長とともに陛下の随行をする予定のはずだぞ。残念ながら物語りの楽しみは次の機会にしておくんだな。……殿下、失礼します」

ジルフィスの舌打ちが聞こえてしまった。小さな音だが、あれは舌打ちだ。

筆頭騎士なのに！

アーラは左肩のぬくもりがゆっくりと去ってゆくのを感じた。

王子が軽くうなずくと、クオードがジルフィスを連れて退出した。扉が閉まる。

たちまち空気が重くなり、アーラはごくりとつばを飲み込んだ。居づらい。

執務室に、いと高きところにおわすはずの王子殿下と二人きりになっちゃった。

6、物語り

役割をさっさとすませてさっさと帰りたい。

このソファとクッションは魅力的だが、初対面の人と、しかも王子殿下と二人きり、気まずさと緊張感の伴うこの空間にはまったくもって魅力がない。むしろ早く逃げ出したかった。

「どのような物語りをご希望でしょうか」

アーラは重ねて言った。

「師について語るすべてを学んだこともなくつたない業ではございますが、できるかぎりご希望にそつよう努力いたします。お申し付けくださいませ」

王子ははじめて、書類に走らせていたペンを止め、じつとアーラを見つめた。

アーラは心もち目を伏せた。あまりに目を合わせないのも不誠実と見なされるが、まっすぐに見返すのもぶしつけで不敬だろう。相手は王子殿下であらせられるのだから。

建国祭でバルコニーに登場した国王陛下が色素の淡い髪だったので王子もそうだろうと、当然のように思い込んでいたアーラにとつて、ゼファード王子の髪がつやのある漆黒だったのは新鮮な驚きだった。

白い額にさらさらと前髪がこぼれている。切れ長の目元は涼しく、鼻は高すぎず低からず。世の女性を狂気に駆り立てるような絶世の美貌ではないが、端整と評せられるのはたしかだ。

伏せた目を、ちらと上げて様子を伺う。そのわずかな一瞬に、王子とアーラのまなざしがぶつかった。

瞳の色が、アーラは王子の容貌の中で一番気に入った。青い瞳だが、陽気な碧眼でも氷のような青灰色でもない。深く澄んだ、深海の青だ。

平凡な褐色の私の目とは大違い。

だが深海のような瞳は一時アールの目をとらえただけで、また書類にもどってしまった。

再びペンを走らせながら、王子はのたまった。

「適当でかまわない。おまえが俺にふさわしいと思う物語りをすれればいい」

つまり、何でもいいから勝手に始めるとのことね。

アールはさとられぬように胸のうちだけでため息をついて、当たり障りがなく且つ恋愛物でも悲劇でも喜劇でも長編でもないものを脳内で検索した。

「……それでは、グランヴィールを抱きし世界とは異なりし世に伝わる、とある原初の物語りをいたしましょう」

アールは記憶の雑多な山に埋もれた、北欧神話の原初神話を引っ張り出した。固有名詞を省き、グランヴィール人の王子にわかりやすいように言葉を選び、また納得しやすいかたちに話を再構成して物語る。

「原初のころ。世界はまだなく、混沌が渦巻くばかりでした。その混沌の一部が凝り、一頭の巨大な牝牛が生まれました。牝牛は混沌が凍った氷をなめたことにより、強い霊気を宿しました。その霊気が腹の中でかたちをなし、牝牛はやがて一人の巨人を産み落としたのです」

王子は書類を処理する手を止めなかった。物語りを聞いているのか聞いていないのかわからない。けれど呼びつけられた語り手であるという立場上、アールも物語りを止めなかった。

「生まれた途方もなく大きい巨人は、両性具有でした。巨人は自身と交わって、三柱の男神を生みました。男神たちは自分たちで世界を支配するために、おのれの親である巨人を殺してしまいます。そして巨人の亡骸から、自分たちが治めるべき世界を作り生み出したのです。巨人の血潮を海に、肉を大地に、頭蓋を天に、脳髓を雲に、骨を山に、歯を岩に、髪を草木にして」

「血なまぐさい創世神話だな」

王子がぼそりとつぶやいたので、アーラは驚きを顔に出さないために最大限の努力をしなければならなかった。

聞いていたのだ、王子は。

アーラの物語りを。

「たしかに美しいと申せる創世ではございません。ですが命であれ物事であれ大きなものを生み出す際には苦しみがつきもの。人であってもそうなのですから、世界を生み出すともなれば、血なまぐさいほどのことも多分にございましょう」

王子はふんと鼻を鳴らして、頬杖をついた。

「続ける」

ペンも書類を繰る手も止まっていた。

「……世界を生み出した三柱の男神たちは、今度はだれが世界の主となるかで争いを始めました。結局末子が兄二人を倒し、世界の主神となったのです。この主神は戦と詩作に秀で、知識欲はすさまじく貪欲でした。すべての叡知を得るために片目を差し出し、力ある文字を手に入れるためにおのが首をしめてぶら下がり、みずからの体をやりで貫いたほどです」

「そんなことをして、死なないのか」

「もう少しで神とはいえ死ぬところでした。しかし、首を絞めていた縄が切れたので助かったのです」

「都合のよいことだな」

王子が、笑っていた。唇のはしだけでだが、笑ったことにはちがいない。アーラは一礼した。

「この主神は全知全能のもっとも恐れ畏られるべき神とされておりますが、巨人の首を蜜酒につけて未来を語らせた話や他種族の女神と戦死者の魂を分ける契約をした話など、興味深い逸話もたくさん伝えられております。それらはまた、機会がございましたら謹んで披露させていただきますが、こたびの異世の原初神話はこれまでにございませぬ」

再度深く頭を下げると、アーラの目の前に金色の小さなものが放

られた。

「受け取れ。褒美だ」

クラールレン金貨だった。

7、代価

クラーレン金貨といえば、グランヴィール貨幣の中でもっとも価値が高い。アーラの感覚では、日本円に換算すれば一枚で二十万から三十万円ほどの価値というところだ。

こんな短い物語りでクラーレン金貨？

驚き思わずいきおいよく顔を上げると、王子は何ごともなかったかのように机の上でとんとんと書類をそろえていた。澄んだ深い青の瞳でアーラを見返す。

「なんだ？ それだけでは不満か？」

「いいえ滅相もございません。多すぎるのでございます」

アーラは金貨に触れぬまま低頭した。

「私はただお耳にめずらしければと思いきい短い物語りをしただけのこと。これほどまでにたくさんのもを賜る働きなどしておりません」
「俺が褒美だと言ったのだ。素直に受け取ればいい」

王子がそう言っているのだ。ここはよろこんで「謹んで頂戴いたします」と受け取るべきなのだろう。

しかし王都の市民であつても、大金持ちでもないかぎり、クラーレン金貨を手にするなど一生かかったつてないのだ。たいてい、銀貨ですんでしまう。日常の買い物だけならば水晶でできた晶貨と、銅貨だけでまにあうのだから。春の芽吹き亭でも、よほどのことがないかぎり銀貨さえ見ない。

それなのにたかだか半時間、ひとつ物語りをしただけでクラーレン金貨を受け取るというのは、アーラにはできかねた。金貨を賜るなら、それ相応の物語なり仕事なりをすべきだと思ふのだ。

これが銀貨だったらよかつたのに。

王子は黙つたまま、珍奇なものでも見るような目でアーラを眺めている。

その沈黙に耐えかねてアーラが口を開けかけたとき、王子が書斎

机の席から立ち上がった。

「貨幣の価値に対してまともな口をきく人間を久しぶりに見た。大道芸人だろつが大商人だろつが、もらえる報酬は多ければ多いほどよいに決まってる。さらに要求することはあっても、多すぎると申し立てるなど聞いたことがない」

王子は歩み寄り、ますますものめずらしげにアーラを見た。

「おまえ、宿屋の娘だといったな。だがその主人夫妻の实の娘ではないと聞いている。それでも宿屋という商売人の店で暮らしているなら、手に入る金は多いほうがいいものだろつ？」

「見合っているかどうかが大切なのです。見合わぬ代価はいずれ必ずみや貸し借りが生じます」

アーラは心の内で冷や汗をかいていた。

経済学は専攻じゃないのに。それともこれは経営学？

どちらにしても値段が常識的なら問題はないのだ。ただ王子がアーラの物語りにつけた値段は、非常識だ。

「国庫管理官が国家財政の話をしたとき、俺は眠くていやになったものだ。だがおまえの話はさっきの物語りといい、金貨に難癖をつけることといい、おもしろい。もう一度名前を聞いておこつ」

アーラはほつとした。怒りを買ったわけではないらしい。

「春の芽吹き亭のアーラです」

「家名は？」

答えに詰まる。もちろん、異なる世界から転げ出てきたアーラにグランヴィールでの家名があるはずもなかった。

「実の両親から継いだ名だ。恐れるな、何も罰しようというわけではない。俺はおもしろいと言ったのだ。褒美を渡しこそすれ、おまえがびくつくようなことはなにもしない」

充分してるじゃないの！

アーラは唇を噛んだ。王子の声は凧いでいるが、アーラが出方を誤ればどうなるかわかったものではない。どうすればいい？

「城下の生まれでなければ、シグジャールか？ それともゲヘルか

？ シグジャールの学舎で学んだというのなら、納得がいくのだが「嘘をつくのはかんだんだ。この場かぎりの嘘ならば繕う自信はある。しかしどうしたってかんだんにばれてしまう嘘だ。どこの何を調べても、アーラの存在を記したものなど出てきはしないのだから。アーラは息を吸い込んだ。ゆっくりと吐き出す。

「もう一つ、物語りをさせていただいてもよろしいでしょうか」「ここはもう、腹をくくるしかない。」

8、証拠

アーラは王子に語って聞かせた。

一人の娘が時空のはざまを落ちて、生まれた世と異なる世界へ転げ出てしまった物語りを。

「これは、作り物語りではございません。実際にありました話でございます。そして……私の身に振りかかった出来事なのです」

アーラが正直に告白しても、王子の表情は変わらなかった。

「奇想天外だな。先ほどの話といい今のといい、おまえの物語りは興味深く、おもしろい。何も卑下する必要はないんだ、金貨を受け取ればよかっただろう」

口調も変わらない。

やっぱり、ね。

簡単に信じてもらえるなどと思っではいけない。身をもって体験している当人のアーラでさえ、途方もない話だと思っただ。

王子は深青の目をまたたいて、改めてアーラを見返した。

「ところでそろそろ家名を教えてもらおうか。気を逸らそうと新たに物語りをするほどにもつたいぶるからには、たいそうな出自なのだろうな？」

王子のおだやかだった声が探るように低くなった。背の産毛が逆立ち、アーラはあわててかぶりをふる。

怪しまれている。

王子の目がすうと細められた。

「それとも、名乗れないだけの理由があるのか。後ろめたい理由が？」

「いいえ！ それはちがいます。命をかけてもお約束できます」

「軽々しく命をかけるものではないぞ。おまえが他国の間諜ならなおさらだ」

「間諜ではございません。ですから、お心のすむようになさってく

ださればけつこうです。私は、大恩ある春の芽吹き亭のご主人夫妻にご迷惑がかかるくらいなら死を選びます」

これはアーラの本心だった。

もちろん、死ぬのは怖い。だが、

こちらの世界で死んだら、？あちら？に戻ることができるかもしれない。

そんなおろかな希望もあったのだ。

グランヴィールに来て一年。帰る方法こそ見つかっていないが、自分は、本当に運がよかったのだ。

こちらの文字は読めなかったが、こちらの言葉は最初から話せた。親切なご主人夫妻に住み込みで働かせてもらえた。衛生状態も治安も現代日本と同じとまでは行かないが、近代的で明るく、住み心地は悪くなかった。

けれどもアーラは、もとよりここには存在しないはずの人間なのだ。身元を証明したくともするすべがない。？あちら？の運転免許証も保険証も住民票も手もとになく、仮にあったとしても何の役にも立たないのだ。

アーラはまっすぐに王子の目を見返した。不敬かもしれないなどと気にしている場合ではない。目をそらしたらむしろ後ろ暗いものを抱えていると勘繰られるだろう。

王子は冷たい冬の海色になったまなざしでアーラを検分していたが、

「ではこうしよう」

そうつぶやいて、書斎机のへりをたたいた。

「おまえはたしかに異世に伝わるという原初の物語りをしてくれた。俺がおまえの素性を怪しむよりも前に、だ。間諜であれば異世や外国といったものに関わることがらは極力避けるだろう」

「では、」

信じてくださるのですかと続けるよりまえに、アーラは王子に制された。

王子は獲物を追いつめる狼のようにゆったりした足並みでアーラの周囲を歩きながら、続けた。

「俺も立場上安易に信じるわけにもいかない。おまえの特異な身の上をこちらに信用させるには、それなりの証拠が必要だな」

「何であれば証拠とお認めいただけますか」

王子はアーラの正面で歩みを止め、アーラの視線を受け止めた。

「おまえは何であれば証拠として出せる？」

「春の芽吹き亭で寝泊りさせていただいている部屋に、私の世界の物語を書きとめた帳面があります。十冊ほど。私は一年間学んではいますが、まだグランヴィールの文字を自由に操ることはできません。ですから、私が故郷の世界でもとより使っていた文字で書いてあります。それでは証拠にはなりませんか？」

王子はあごをさすって、考え深く答えた。

「見てみないことには何とも言えない。だが、おまえが仮に間諜ならそれらは重要な押収品になるし、調べてみて悪いことはないだろう。人を差し向けてとってこさせよう」

「私は牢へ入れられるのですか？ それならば帳面をとってこられる際に、ご主人やおかみさんにしばらく帰れないが心配しないでほしいとご伝言をお願いできますか」

「自分が牢に入ることよりも、宿屋のほうが心配か。妙なやつだ」

ふと王子の目元がやわらかくなつたような気がしたが、すぐにそれは消えてしまった。

「おまえの存在はしばらく伏せておこう。牢に入れば城の者の多くが知ることになるから、クオードに身柄を預ける。ついてこい」

9、囚われの身

「……で、アーラ嬢の嫌疑は晴れたわけ？」

ジルフィスは頬杖をついて、従弟を見上げた。その従弟は眉間にくつきり皺を刻みながら、

「今、宿屋で押収した帳面をクオードに調べさせている。何しろはじめて見る文字の羅列なんだ。諸国の軍事暗号なのか、本当にあいつの故郷の文字なのか、簡単に判別できるわけがないだろう」

従弟の目は苛々と群青色に燃えていた。

ジルフィスは、文字通りまったく自分と毛色がちがう従弟がここまで感情を表に出すのはどれだけぶりだろうと考えた。王子であるゼファードはジルフィスより四つも年下でありながら、普段は沈着冷静そのもので、大いに怒ることもなければ笑い声を立てることもない。そばにいるこちらがつまらなくてあくびが出るほどなのだ。

それなのに、下町からつれてきたたった一人の娘のためにこうも苛々としているのだから可笑しい。これまで四角四面にそつなく何ごとでも処理してきたゼファードにとって、異世などという常識はずれの案件は手に余るのだろう。

「めんどろなら全部俺に預けてもらってもいいよ？ あの子をうちの屋敷に閉じ込めていっさい外に出られないようにすれば、なんにも問題ないだろ。万が一間諜だったとしても外部と連絡が取れないし、俺はあの子の物語りが聞けてうれしいし」

「担当はクオードだ。ジルじゃない」

「だからクオードから俺に移せば？ クオードみたいなやつに任せると、白でも黒って言いかねないぞあいつなら」

「クオードは白を黒とは言わない。……灰色を黒とは言っただろうが」
ジルフィスの金褐色の瞳をゼファードの群青の目がのぞきこんだ。
「そんなに、あの語り手の娘が気になるか？」

「気になるね。いい目といい声をしている。肌が白くてやわらかそ

うなのもいい。今どこにいるんだ？」

ゼファードはあきれたように深々とため息をついて、視線をはずした。

「南塔の物見部屋に。……知ってどうするつもりだ？」

「会いに行こうと思ってるね。クオードが絞首台送りの書類にサインをする前に、俺があの子を引きとるよ」

「たとえ担当がクオードでも、証拠もさだかでないのに絞首台送りはできないだろう。しかし、ジルはなぜそこまでかまおうとする？」

ジルフィスは肩をすくめた。自分でも答えがわからなかったからだ。

だがジルフィスは、彼女が外つ国の間諜ではないと、ほとんど頭から信じていた。初めて春の芽吹き亭で会ったときの素直な反応、なぜ女官たちに洗われると教えてくれなかったのかとすねたときの口調、手のひらから伝わったまるやかな肩の温み、ジルフィスの舌打ちを聞いて丸くなった目。

あれはただの女の子だ。

ちゃんとした親にきちんとしつけられた、ふつうの女の子だ。

だから助けたいのだろうか？

それとも、春の芽吹き亭の客たちに評判の、彼女の物語りに未練があるのだろうか？

わからないからこそ、かまいたいのかもしれない。

「彼女は悪い子じゃないよ。春の芽吹き亭に会いに行ったときも、ここへつれてくるまでのあいだにも、怪しいそぶりは一度もなかった。物見部屋みたいなせまいところに閉じ込めるはやめてあげたら？」

「俺だつて心が痛まない訳じゃない。だがまだ間諜ではないとは言いきれないだろう。それに、物見部屋を選んだのは俺じゃなくてクオードだ」

「人のせいにするなよ、ゼファ」

「事実を述べたまでだ」

「どうだか」

何か言い返したそうなぜファードを後に残して、ジルフィスは南塔に向かった。

螺旋階段をのぼり、物見部屋の前で踏ん張っているクオードの部下の番兵をどやしつけて、しばしはずさせる。番兵はきつとクオードに言いつけるだろうが、かまうものか。

かんぬきをはずして中に入ると、アーラは部屋の隅で膝を抱えていた。目を閉じて、うとうとしている。いろいろなことがありすぎて疲れたのだろう。

「アーラ嬢」

声をかけると、彼女はびくりとして顔を上げた。

「ジルフィス、さん？」

「ジルでいいよ。みんなそう呼ぶから」

やはり疲れた顔をしている。痛々しい。

ジルフィスが観察しているあいだに、アーラはすわりなおしてドレスの裾を整えた。

「……殿下には、納得していただけたのでしょうか」

「調査結果はまだだよ。クオードはやるのが細かいんだ。おなかすいてない？」

アーラはかぶりをふった。それがとても幼げに見えて、ジルフィスはいたたまれない気持ちになった。いたたまれないなどと、そんな殊勝な感情が自分の中にあつたとは驚きだ。

「ご主人とおかみさんは？　ちゃんと、伝言はつたえていただけましたよね？」

「大丈夫。王子が君の物語りを気に入つたから、ちょっと長く引き止めていると説明されているはずだ。……しかしアーラ嬢はえらいな。ふつうなら自分の心配で手一杯で、人のことなんか考えられないはずなのに」

ジルフィスが思わず頭をなでると、アーラは弱々しく微笑んだ。

「えらいだなんて。もう子どもではありませんから」

「そりゃそうかもしれないけど。まだ十代だろう？」

十代なら、二十七の自分からみれば子どもも同然だ。けれどもアラは目に苦い色を浮かべてこう答えたのだ。

「ご冗談を。私はもう二十六歳です。グランヴィールの方々に比べて顔の凹凸が乏しいので、うれしいことによく若く見られますが」
皮肉なのか自嘲なのか、彼女は力ない笑い声を立てた。

ゼファードよりも年上？ 俺と一つ違い？

もちろん、ジルフィスは自分の耳が信じられなかった。

10、おしゃべり

「……若いのに、ずいぶんしつかりした子だとは思ってたんだ」

まだ衝撃からさめきれずに、ジルフィスは額髪をかきあげた。

「貴族に生まれついた根っからのご令嬢でも、ゼファの前に出るとのぼせてうまく話せなくなる子が多い。それなのに君はそつなくこなしていた。だからずいぶん落ち着いてしつかりした子だと、感心したんだ」

「落ち着いているとは、小さいころからよく言われました。だから故郷ではむしろ、実年齢よりも年上に見られることが多かったんです。老成しているということなんでしょう。でもそれは若さが足りなくてふるまいが老けているということですから、素直には喜べない評価ですよ」

己のことを語るアーラの口調からは、堅苦しさが幾分抜けていた。疲れのために気を張るのをやめたのかもしれないし、ひよっとすると、年齢の話題をきっかけに少しは打ち解けてくれたのかもしれない。ジルフィスは彼女の前に腰を下ろした。

「君が？老けている？というのは、俺は納得しかねるな。老成しているといわれたなら、それは褒められたんだよ」

「そうでしょうか」

「そうだよ。俺は二十七だけど、君とは反対で、もっと落ち着けて言われてるくらいだ」

「二十七歳ですか。私も、もう少しお若いのだと思っていました」

「そうだろ？ 筆頭騎士のくせにへらへら笑ってるのがガキみたいに見えるからやめろって、隊長にも言われるよ」

アーラは小首をかしげてジルフィスを見ていたが、突然目を見張ったかと思うと、はっと息をのんで低頭した。

「大変失礼をいたしました！ 筆頭騎士様ともあろうお方に馴れ馴れしく口をきくなど、私のように身分もなくそのうえ詮議中の者に

はとうてい許されぬこと。浅はかでした。礼を欠いた物言いをし、煩わせ、申し訳ございません」

真つ青になつて態度を変えたアーラにジルフィスはおどろいた。

打ち解けてくれたんじゃないやなかつたのか。疲れていて気が張れなくなつたことを、彼女は悔やんでいるのか。

それでも彼はアーラが礼儀を欠いたなどとは露ほども思っていないし、煩わせられたとも感じていない。反対に、気負わない話が出てうれしかつたくらいなのだ。ゼファードの部屋で肩書きを明かす前は、もつとくだけた調子で話せていたのだから。

「アーラ嬢、そんなにかしこまらないですよ。俺は今、しっかりした子だと君を褒めたばかりなんだ。ぜんぜん失礼だなんて思っていないし、もつと気楽にしゃべつてもいいんだよ」

「そんなこと」

できませんといわれるより前に、ジルフィスは彼女を制して続けた。

「君と話していると楽しいんだ。貴族のご令嬢の知り合いならいくらでもいるが、彼女らとはこうやって何気ないおしゃべりをするとはできない。口先では天気や観劇の話をしていても、結局は相手の機嫌を損ねないように当たり障りのない言葉を選ぶか、腹の探りあいか、家同士の政治的駆け引きになつてしまつからさ。ほら、顔をあげて」

アーラは困惑したようすで、おずおずと背筋を伸ばした。ジルフィスはうなずいた。

「もつと楽にしてくれていいよ。俺は堅苦しいのが、どつちかつていうと苦手だから。一応親友つてことになつてゐるゼファはあんなふう根をつめるタイプだし、クオードは俺のことを軽薄だと思つてる。俺が望むような？楽しいおしゃべり？がそうそうできるわけがないつてのは、想像できるだろ？金を払えば話し相手になつてくれる輩はいくらでもいるだろうが　さすらい人とかね　俺はそついうやつらと話したいとは思わない。君は、金につられてきた

わけじゃないんだろう？ クラレン金貨を要らないと言っただ
つて？」

アーラは目を伏せて答えた。

「多すぎると、申し上げたんです」

「そこが君の面白いところだよ」

「そうでしょうか？ 当然のことだと思いますが」

気を引くための方便ではなく心からそう言っているらしいアーラ
が、ジルフィスはとても気に入った。

かわいいなあ。

物事に誠実であろうと、何ごとにも分をわきまえていようと、お
のれを律している努力が垣間見えてそれがとても好ましい。

ジルフィスはあぐらをかいた膝に頬杖をつき、アーラの睫毛をと
つくりと観察した。

「アーラ嬢」

「なんででしょう？」

「君のことを、アーラって呼んでもいいかな？」

「どうぞ。王子殿下がおっしゃるように家名を名乗れない身の上で
すもの、お好きなようにお呼びいただいてかまいません」

「俺は、君にジルって呼んでほしいな」

アーラが否と言おうとするのは予想していたから、間髪入れずに
まくしたてた。

「言っただろ？ 堅苦しくじゃなくて、楽しく話したいんだって。

俺が二十七で君は二十六、年も近いから遠慮もいらさない。君はなん
にもしゃちほこばることなんかないんだ。俺がいつって言っている
んだから。それとも敬語を使うなって命令したら、君は俺にそうや
って話してくれるのかな？」

アーラは目に見えてとまどっていた。それがジルフィスにとって
とても微笑ましかった。

「ほら、ジルって言っただらん？ アーラ」

「はい」

「年増の女官みたいに『はい』とか『ええ』じゃなくって、『うん』とか『わかった』でいいんだって」

「本当に……失礼にはなりませんか？」

「心配性だなあ。ちゃんと命令したほうがいい？」

アーラが首を横に振って、くすりと笑った。ジルフィスはほっとした。

「よかった。俺は君が少しでも早くここから出られるようにゼファにせっついてみるよ。だから次に俺がここに来るのは、君を迎えに来るときだ。……といっても、明日か明後日にはそうなるように努力するけどね。そのときには？楽しいおしゃべり？ができるようにしてくれるかい？」

「わかったわ」

そう応じたアーラの声は、よそゆき用に整えられた声音よりもいくらか低く、そして少しいたずらっぽく聞こえた。

「ありがとう、ジル。来てくれて、話せて、とてもうれしかった」
ジルフィスは出口のほうを向いたままうなずいた。振り返れば、だらしなくにやけた顔をアーラに見せることになった。ただろうから。

11、帳面の文字

学友はその必要以上の美貌を鼻にかけるどころか、すつきり通った鼻梁に無造作に皺を寄せ、狼のように凶悪な目つきになってうなづいた。

「まったくなんて難解なんだ！ 大別しただけで四種類もある。こんな雑多な暗号があつてたまるか！」

「しかし実際ここにこうして存在しているんだ。おまえが解読できなければ、いつたいだれができるというんだ？ セリステイン」

「そりゃあ僕をおいてほかにはいないだろうよ。だがクオード、これは軍事暗号ではない可能性のほうがいぶん高いぞ」

「なぜだ？」

セリステインのその意見が、クオードは気に入らなかつた。

クオードとジルフィスの学生時代の悪友であるセリステイン・ヴァレンは、現在王城付属の研究院で書物と紙の束とインクの匂いに囲まれて過ごしている。

彼の白磁の美貌をとりまく銀の髪と氷色の瞳に憧れる女性は、淑女から女中まで数知れない。王都中の貴婦人から屋敷への招待状が降りそそぐようにして届くのだが、セリステイン自身は着飾った女性よりも、埃くさい書物に囲まれるほうを好むのだった。

セリステインは無駄に美しい銀髪を背に払って、クオードに向きなかつた。

「なぜって、効率が悪いからだよ。いくら敵の手に渡ったとき解読されないようにするためと云つたって、限度がある。こんなごちゃごちゃとした暗号文じゃ、味方同士の意味の疎通にいつたいどれだけの手間がかかる？ 無駄だ。大いに無駄だ。僕はこれは暗号じゃなくて、古代言語に類するものだと思う。いや、むしろ賭けてもいいね。数千年にわたる永い時に渡って文法や文字が継ぎはぎされたせいで結果雑多になってしまった、古代王朝の言語だな」

「あの娘は、外つ国の間諜ではないと？」

「ないと思うね」

セリステインはにべもなく言い放った。

「これを書いたのが君たちのいう小娘なら、間諜じゃないだろう。僕はその子が殿下に言ったとおり、これが異世の言葉だというほうが、軍事暗号つてよりはるかに真実味を感じられるね。とにかくこれは暗号じゃないよ。軍人は無駄が嫌いだ。君のようにね。こういう無駄が好きなのは、僕みたいな字者連中だな」

クオードは足を組み替えて天井をあおいだ。

「諸国の間諜でないのなら、暇をもてあました末弟派の古狸どもの暗号だという線はないか？」

「ない。老眼の古狸のお歴々が、こんな繊細な文字をどうやって読み解けるんだ？ 僕だつて苦労するのに」

セリステインはまっすぐに流していた髪を両手ですくって束ねながら、視線は帳面の文字を追っていた。

「クオードが僕を信じるか否か知らないけどね、僕の結論はもう決まっている。王子殿下が下町から召喚したその語り手は、嘘をついちやいない。彼女が本当に異世から来たのか、月から落ちてきたのか、時間のひずみからこぼれ出た古代王朝の娘なのか知ったこつちやないけれど、この証拠物件を見るかぎりはとにかく間諜ではないよ。君たちをだますためにこれだけの量の帳面を用意することは、時間的にもできなかつたはずだしね」

「……そうか」

「おもしろくないって顔をしているね、クオード。何が気に入らないんだ？」

クオードは片眉を上げてセリステインを見返した。

「殿下の御身を守るのが、俺の役目だからな。間諜の疑いが晴れたとはいえ身の上を証明できない小娘を、自由にさせておくのは我慢がならん」

「善良な一個人から自由を奪うことこそ、法を遵守すべき軍人とし

てどうかと思うよ」

「善良と決まったわけではない」

セリスティンはやれやれと肩をすくめた。

「強情だな」

「殿下のことを思えばこそだ」

「じゃあ、その語り手の子が言うようにこの帳面がでたらめじゃなく、本当に異世の物語りを記しているかどうか、僕がたしかめてあげようか？」

嬉々として申し出るセリスティンにクオードは嘆息した。

「断る」

「なぜ？ 君に断る権限なんてあるのかい？」

楽しげに輝いていたセリスティンの目はたちまち狼の鋭さをとリモどし、冷ややかな凶暴性をこめてクオードを見返した。研究を邪魔されたときや論文が思うように進まないとき、彼は絶世の美貌が凶器に変わるほど機嫌が悪くなるのだ。

「僕はこの帳面のことで殿下に進言したいんだ。これは殿下の利になる話だし、僕にとってもぜひ取り組みたい案件でね。君の一存でどうにかなるものではないよ」

クオードはうめいた。こうなるとセリスティンは力づくでもなければ止められない。力づくで止めようとすれば、命の保証ができかねるほど暴れるにちがいない。

こいつにとっては、研究のほうが王子殿下よりも大切なのだ。

セリスティンはすべての帳面をとじて小脇に抱えると、クオードの顔をさっさと通り過ぎた。

「さあ、ゼファード殿下にお話に上がろう」

12、王子殿下の語り手

アーラは窓の外をぼんやり眺めていた。皮肉なことに、物見部屋
なだけあって眺めだけは最高だった。

衝立のかけに手洗いがあるのみで、ベッドすらないせまい部屋だ。
ここに押し込められてもうすぐ丸一日がたとうとしている。夜にな
るとさすがに毛布とパンがもらえたが、気をまぎらわせるものはな
く、何もすることがない。

あちらにいたころは、暇な時間ができれば喜んで本をむさぼり読
んだものだった。

だがこちらではそれができない。アーラはグランヴィールの文字
がろくに読めなかった。意識しなくとも話せるのだから字も読める
のではという淡い期待は一年前にすでにもろく崩れ去った。やつと
数字と人名と簡単な単語がわかるようになっただけで、こちらの書
物は一冊でさえ読めていない。

本が恋しかった。漢字が、ひらがなが、カタカナが恋しかった。

そして、日本の文字を忘れるのが怖かった。だからアーラは、これ
まで読んできた物語を思い出したはしから書きとめることにしたの
だ。

春の芽吹き亭のご主人から給金をもらった日には、かならず帳面
を買いに行った。漂白されていない薄い黄色の束を紐で綴じただけ
のそれはアーラにとって「ノート」ではなく、やはり「帳面」だっ
た。

その帳面にグリム童話、アンデルセン、イソップ、日本昔話、北
欧神話から古事記、市立図書館で借りたベストセラーの単行本にい
たるまで、思いついた順に書きとめた。書き続けていけば、いくら
なんでも文字を忘れることはないだろうと己をなくさめながら。

時には自分が書いたものを読み、あちらの世界に思いを馳せた。

そんな帳面が、もう十冊以上できていた。ゼファード王子はその

帳面を調べさせると言っていた。アーラは間諜ではなく嘘もついていないという証明に、書きためた帳面の文字たちは役立つてくれただろうか。

突然部屋の外が騒がしくなり、かんぬきが動く音がした。アーラは丸めた毛布を抱きしめて、首を伸ばした。

ジル？

ジルフィスは王子やクオードのようにアーラを疑いの目では見ることはせず、親しげに話しかけてくれた。それに、アーラがここから出られるよう努力して迎えに来ると言ってくれたのだ。

だが、扉を開けて入ってきたのはジルフィスではなかった。ゼフアード王子だった。

「喜べ、おまえの嫌疑は晴れた。外へ出てかまわない」

王子が言った。言われなくともさつさと出て行くつもりだったが、王子に続いて姿を現した人物に息を飲み、アーラは動けなかった。

こんなにもきれいな異性を、アーラは初めて見た。銀の髪や薄青の瞳はまるで氷の祝福を受けたかのように。計算されつくしたとしか思えないほどの美貌なのに、新しいおもちゃを見つけた子どものように表情は生き生きと輝いている。

「殿下、この子が例の文字を書いた子かい？」

「そうだ」

その美しい人はためらいなく床に膝をつき、嬉々としてアーラと視線を合わせた。アーラは氷色の双眸に自分の姿が映っているという事実が、信じられなかった。

「この子の頭の中に、あの空恐ろしいほど難解で無駄に繊細な言語が詰まっているんだよ！ ああ今すぐにでもそれを僕に分けてほしいね。君、名前は？ 僕はセリステイン。セリステイン・ヴァレン。セリスって呼んでくれてかまわないよ」

「アーラです、セリステインさん。春の芽吹き亭の」

セリステインは美貌を惜しげもなくまぶしく輝かせて、アーラに微笑みかけた。

「セリスでいいって言うてるのに、律儀なんだなあ。セリスティンさんなんて呼びにくいだろう？　これから毎日顔を合わせるようになるのに、そのたびにそんなふうに呼んでいたら舌嚙むよ」

「セリス！」

咎めるように王子が彼の名を呼び、にらみつけた。アーラには、「毎日顔を合わせるようになるのに」と言われた意味がわかりかねた。

「俺が順を追って話そうとしているのに、先走るな」

「殿下が順を追って一から十まで話すとすると、いつ終わるかわからないじゃないか。簡潔に頼むよ。僕は早く始めたいんだ」

横で聞いているだけのアーラには、ますますわけがわからない。

ゼファード王子は嘆息して、混乱するばかりのアーラを見下ろした。

「間諜かも知れぬと疑い、ひどいあつかいをしたことを先に詫びよう」

身分と権威ある人物が多くそうであるようにとても詫びている態度には見えなかったが、そこを蒸し返すと先に進まないのはわかっていたので、アーラはおとなしく聞いていた。

「おまえが間諜でも、こちらを害する意思を持った何者でもないということは、このセリスティンが証拠品の帳面を調査したことで結論された。帳面に記されていたのは間諜が用いる通信用の暗号ではなく、おまえが言ったとおり故郷とやらの文字なのだろうという見解だ。そこで、だ」

王子がその先を続けるよりも前に、セリスティンがまくしたてた。

「王子殿下は現国王陛下の一粒種でいらっしゃるから第一王位継承権を持っているには違いないんだけど、そのことを快く思わない輩というのも存在している。だから殿下はぼろを出さないように、書類や書簡の扱いには細心の注意を払わなくてはいけない。だが、君が僕らにこの複雑怪奇で難解極まりない言語を伝授してくれたならば、君が一敵の手に一等重要な書簡が渡ってしまっても、君の国の文字

で書かれているかぎり解読不可能だとは思わないかい？ 素晴らしい思いつきだろう！」

「つまり、だ」

咳払いをしてこちらを見たゼファード王子と、アーラの目が合った。

「おまえは表向き、俺の気に入りの語り手という名目で城に滞在するんだ。もちろん、こちらも相応の扱いをしよう。おまえのために客人用の部屋を調えるし、必要なものがあれば揃えさせる。そして俺に呼ばれたなら、物語りをする周囲には思わせておきつつ、その実おまえは帳面を埋めている文字の繰り方を教えるというわけだ」

「僕にもね」

セリスティンがにつこりする。立ち上がれということなのか、王子の手が差し伸べられた。

「おまえはグランヴィールの臣民として、王子の利になる知識を伝授する役を負うわけだ」

13、外へ

自分に選択肢はないのだ　　アーラは思った。ここで断るそぶりを見せたなら、きつと春の芽吹き亭のご主人夫妻に迷惑がかかるだろう。

「王子が物語りをご所望だから参上するように」と言われたときも、同じように考えて召喚に応じることにしたのだったと思い出す。グランヴィールにおいて異分子である自分はどうなってもしかたがないが、その自分のせいで、親切なこちらの人々が迷惑をこうむるのではないたまたまれない。

王子がアーラの手をつかんで立ち上がらせた。

「おまえのための客室を用意させてある」

ただ素直に青いだけの瞳がアーラを見ている。アーラは心持ち首をすくめた。

私に拒否されることなんて、頭から考えていないのね。

やはり宿屋にもどることはあきらめて、王子殿下の気がすむまで日本語の授業につきあわなくてはならないようだ。

乱暴ではないが、優しくもない手に引かれてアーラは物見部屋から出た。臭くもこもってもいない外の空気にほっとする。

入り口の脇にはクオードがいかにめしく立っていた。彼はアーラを引く張っている王子に一礼すると、アーラが存在など目に入らぬとでも言うように視線をそらした。

クオードにはどうやら敵視されているらしい、アーラはひしひしとそう感じた。春の芽吹き亭で初めて会ったときも、人当たりのよいジルフィスに比べるまでもなくクオードは無愛想だったが、彼はアーラに間諜の疑いをかけたと同時にさらに冷ややかになったようだ。嫌われている分にはかまわないが、あからさまな態度をとられるとやはり傷つく。

王子がそのクオードをふり返った。

「ジルがもどつてくるのはいつだった？」

クオードはよどみなく答えた。

「一時間少々で陛下が執務室におもどりになられるご予定ですので、その頃にはジルフィスはこちらへ向かうかと」

「あと一時間か」

王子はつぶやいて、歩みを速めた。塔の螺旋階段を早足で下りて行く彼に、アーラは小走りでなければついていけなかった。

「セリス、おまえはどうする？」

王子に問われてセリスティンはちらとアーラを見た。

「いったん、僕は研究院にもどるよ。ジルとは顔を合わせたくないんだ。あいつは僕のこの素晴らしき探究心にけちをつけるのを趣味にしているからね。今回僕らが彼女の国の文字を学ぶことにしたのだから、反対するに決まってる」

「だがこれは長い目で見れば公の利になることじゃないか。誰も知らない文字を覚えて末弟派の目を気にせずに法案の関係書類や議事録が残せるようになれば、それだけ俺たちは力を手に入れることになる。父上がこれといった手を打たれない以上、俺たちが対抗力をつけなければだれが牽制できる？ 末弟派がこのままのさばれば国境の不安はますます増大するし、貴族議員の発言力だって偏るだろう？」

「だけど一日二日で覚えられるものじゃないだろ？ これは暗号じやなくて言語なんだから、対応表を丸暗記すればいいってもんじゃない。ジルは僕が殿下のためを思って進言したのじゃなくて、また僕の？ 病気が始まったただけだっていうよ」

「勝手に言わせておけ」

「もちろん言わせておくさ」

セリスティンはひらひらと手を振り、アーラには銀の睫毛に彩られた片目をつぶってみせて、長い足で軽々と一段抜きに階段を下っていった。

セリスティンの姿が見えなくなると、あたりはたちまち静かにな

った。聞こえるのは日ごろの運動不足がたたっているアーラの息遣いと、王子の足音、そしてあとからついてくるクオードの剣帯が鳴る音だけだ。

「何か言ったらどうだ？」

階段が終わり、南塔の地階に到着すると、ずっと押し黙っていたアーラを王子が振り返った。

「間諜の嫌疑は晴れた。身の証のないおまえだが、害なす存在ではないと一応認められたんだ。素直に喜んではどうだ？」

「自分に罪がないことは、自身が一番よく存じております」

ようやくアーラは答えた。王子の形よい目が瞬く。それでも皮肉がこもってしまうのは、どうしても止められなかった。

「私はただ、殿下に少しでも楽しんでいただければと思いつたしながら物語りをしたのです。それなのにクラーレン金貨を受け取れぬ、家名は告げられぬと申し上げた途端、身に覚えのない疑いがかけられました。実の市民ではない者がそれを秘して王城に上がりましたのを責められるのでしたら、甘んじて受けます。ですが初めから殿下を害そうなどと恐れ多いことなど思ってもみなかったのに狭い部屋に閉じ込められ、そこから出られたから喜べとおっしゃられても私にはできかねます」

「しゃべれるじゃないか。しかも一息でそんなに長々と」

王子の手と口元のこわばりが、ふとゆるんだ。

「何も言わないから、饒舌なはずの語り手が語れなくなってしまったかと思っただぞ。閉じ込めたばかりに」

「すぎたことを申しました」

「違う、俺は責めているんじゃない。怒りたいのはおまえのほうだろう。……悪かったと思っっているんだ、これでも」

唇を噛んだ王子の横顔に驚いて、アーラは思わず立ち止まってしまった。

王子が、謝っている？

日本の政治家ですら「遺憾に思う」と口先で言いはしても、謝る

ことはなかなかないのに。アーラ自身これまでいと高き人々と付き合ったためしがないので比較はしかねるが、王族という肩書きを持ちそう育ってきた人物が「悪かったと思ってる」と認めるのはしかも一介の小娘相手に口に出して認めるのは 勇気がいることに違いない。

アーラが立ち止まったので王子は少しばかりつんのめり、また歩き出すようにアーラをうながした。

「おまえを物見部屋に押し込んだあと、ジルが……ジルフェイスがやってきて、猛然と抗議したんだ。それから俺とジルでほとんど喧嘩みたいになって。そのまま昨日は別れたんだが、セリスの結論を聞いて冷静になってみると、せっかく物語りをしてくれたおまえにずいぶん手ひどいことをしてしまったのだと気がついた」

アーラは胸の片隅に灯がともったように感じた。

ジルは本当に、私のために殿下と話をしてくれたんだ。

少なくとも本場の味方が一人いるのだと知って温かい気持ちになる。

王子は気まずそうに続けた。

「おまえが望むように宿屋に帰してやるのが筋なのだろう。だが、セリスティンの進言はもつともだった。おまえの故郷の言葉を教えてほしい。それはきつと俺たちの力になるだろうから」

アーラは表情に出さずに胸の内であつた。

彼女の中で王子へのわだかまりが消えたわけではない。王子に生まれついた人の苦労や宮廷の争いなどもアーラの知ったことではない。しかし王子に生まれついた人がアーラ？ごとき？に詫びた事実が、心の整理をつけてくれた。

「わかりました。謹んでお受けいたします。ただ、一つお願いがございます」

明らかにほつとしたようすで、王子は聞き返した。

「なんだ？」

「恐れながら、私のことはアーラとお呼びいただけますでしょうか。」

私の名は、？おまえ？では「じぞう」まかせなので」

14、呼び名

ゼファードの私室は、執務室から一間へだてたところにある。

その斜向かいのこぢんまりした部屋は、もともと父王の姉　つまりゼファードの伯母が幼少時代を過ごした場所らしいが、三十年ほど前に他国に嫁いだからというものずっと空き部屋になっている。もともとが女性のための部屋なので、客室に改装されてからも、ゼファードはジルフィスやセリスティンに使わせたことがなかった。だが今回、語り手の娘を周囲の目から隠して住まわせるにはうってつけだ。

二十年以上ゼファードの衣服から寝具までを切り盛りをしてきている気心の知れた女官に客室の用意をまかせ、緘口令を敷いた。使用人たちはよく心得たもので、主の命令に疑問をさしはさむ者はひとりとしていなかった。

準備を万端に整えたところで、クオードを伴いセリスティンと共に南塔へ行った。

物見部屋から連れ出した語り手はとても疲れた様子で、後ろめたさがちくちくと胸の内を刺した。冷静に考えてみれば、特別美しいわけでも鍛えられた物腰をしているわけでもない、物語りがうまいだけの宿屋手伝いの娘が、間諜などであるはずがないのだ。家名を名乗れなかったからといって、ここまで手ひどい扱いをすることもなかったのだ。

こんな鈍った判断力では、末弟派に足元を掬われるな。

娘はずっと黙りこくっている。昨日見た折には形よくまとめられていた黒髪が、今はほどかれて背に流してあった。目の下には灰色の隈がうつすら浮き、唇は乾いて荒れていた。ドレスの袖も裾もくたびれている。

無実ながらとじこめられたことを責めてくれたほうが気が楽なのにと、ゼファードは無責任なことを考えた。王城でひどい目にあっ

たからといって王子を責めるような猛者がそうそういないことくらい、わかっているのだが。

「何か言ったらどうだ？」

沈黙にたえかねて声をかけると、娘の目にわずかに灯りがともった。

「間諜の嫌疑は晴れた。身の証のないおまえだが、害なす存在ではないと一応認められたんだ。素直に喜んではどうだ？」

「自分に罪がないことは、自身が一番よく存じております」

ようやく聞けた彼女の声はひかえめな口調だったが、大いに皮肉がこめられていた。

「私はただ、殿下に少しでも楽しんでいただければと思いつたしながら物語りをしたのです。それなのにクラーレン金貨を受け取れぬ、家名は告げられぬと申し上げた途端、身に覚えのない疑いがかけられました。実の市民ではない者がそれを秘して王城に上がりましたのを責められるのでしたら、甘んじて受けます。ですが初めから殿下を害そうなどと恐れ多いことなど思ってもみなかったのに狭い部屋に閉じ込められ、そこから出られたから喜べとおっしゃられても私にはできかねます」

「しゃべれるじゃないか。しかも一息でそんなに長々と」

なんだか可笑しかった。笑ってしまわぬように、努めて頬の筋肉を引き締める。

「何も言わぬから、饒舌なはずの語り手が語れなくなってしまったかと思っただぞ。閉じ込めたばかりに」

娘はすつと目を伏せて、低く言った。

「すぎたことを申しました」

「違う、俺は責めているんじゃない。怒りたいのはおまえのほうだろう。……悪かったと思っっているんだ、これでも」

どう切り出すべきか迷っていた謝罪をやつとのこと口にする、娘が急に立ち止まった。振り返ってみると、褐色の瞳を瞬いて呆然としている。

謝られるとは、思っていなかったのか？

王族も馬鹿にされたものだ。おのれの過ちを認められなくては、どうしてまつりごとなどができる？ 過ちをそうと認めぬ、生来の身分と無駄な権威だけの輩など、ただの屑だ。ゼファードは立ちすくんだままの彼女の腕を強く引いた。

「おまえを物見部屋に押し込んだあと、ジルが……ジルフィスがやつてきて、猛然と抗議したんだ。それから俺とジルでほとんど喧嘩みたいになって。そのまま昨日は別れたんだが、セリスの結論を聞いて冷静になってみると、せっかく物語りをしてくれたおまえにずいぶん手ひどいことをしてしまつたのだと気がついた」

ふつと、彼女の表情がゆるんだ。

ジルか。

ジルフィスは語り手の娘のことをとても気にしていた。ゼファードの知らないうちに二人きりで話すことがあつたのかもしれない。

「おまえが望むように宿屋に帰してやるのが筋なのだろう。だが、セリスティンの進言はもつともだった。おまえの故郷の言葉を教えてほしい。それはきつと俺たちの力になるだろうから」

しばらくの後、娘はまつすぐにゼファードを見上げて素朴な臣民の礼をした。

「わかりました。謹んでお受けいたします」

ゼファードは自分で思っていた以上に、ほつとした。ここで嫌だといわれたら、どうしてよいかわからなかった。また閉じ込めるわけには行くまいし、彼女が心にかけている宿屋を持ち出して脅すようなことだけはしたくない。

「ただ、一つお願いがございます」

「なんだ？」

必要なものがあるなら何でも取り揃えてやるつもりで聞き返すと、彼女は苦笑していた。

「恐れながら、私のことはアーラとお呼びいただけますでしょうか。私の名は、？おまえ？ではございませんので」

思わず、赤面した。

頬に血がのぼったとわかって、ゼファードはすぐに顔をそらした。女の名を呼ぶのが不慣れで恥ずかしいだなんて、言えるか！姉妹も従姉妹もない上、派閥争いを激化させるのを懸念して年ごろの令嬢たちとも一定の距離を保ってきたゼファードにとって、それは問題だった。

貴族の令嬢や夫人の名は家名で呼べば事足りた。リヒヤンテの令嬢、グラントリー夫人、マルカス夫人というように。

だが家名も肩書きもないこの娘は、「おまえ」でなければほかに呼びようがない。

いつまでも後ろを向いているわけにも行くまい。頬までのぼった血が冷めて下りていったことを願いつつ、ゼファードは向きなおった。

「……アーラ」

ようやく覚悟をこめて口にする、語り手の娘はにっこり微笑んで応えた。

「はい」

15、ジルフィス

「どうして俺が知らないあいだにこんなことになっているんだ？」
ジルフィスは従弟に詰め寄った。

アーラが故郷の文字を、ゼファードとセリスティンに教えることになったという。その上、自分がアーラを迎えに行く約束したのに、昨日あれほど渋っていたはずの王子が御みずから出かけて行って物見部屋から連れ出したとあつては、ジルフィスは非常におもしろくなかった。

それなのに、ゼファードは肩をすくめただけで、平然とのたまった。

「しかたがないだろう。ジルは父上についていて、ここにはいなかったんだから」

筆頭騎士の地位なんぞ今すぐ誰にでもくれてやる！ 腹の底で毒づきながら、ジルフィスはゼファードの襟元をつかんだ。

「セリスの暴走を誰も止めなかったのか？」

俺がいたら止めたのに。

ジルフィスは、自分がいない時間を狙ってゼファードがことを進めたにちがいないと踏んでいた。昨日ゼファードは、アーラを間諜と疑ったことを責めたジルフィスに、王族を守る近衛騎士のくせに危機感が足りないとさんざん剣突食らわせたのだ。その挙句、今日になってセリスティンの進言を真に受け彼女の授業を受けることに決めたのだから、顔を合わせるのはばつが悪かったにちがいない。

「あいつの暴走だって、たまには役に立つだろう？ 少なくとも、今回の進言はもっともだった。アーラが間諜でないのなら、そしてセリスティンにさえ難解だと言わしめる言語を操れるのなら、それを利用しないのはもつたいないとな」

「進言？ 聞いてあきれるよ。セリスはただ新しいおもちゃみたい
に、アーラの文字で遊びたいだけなんだろう？」

「たぶんな」

ゼファードは否定しなかった。

セリスティンが新しい研究対象を見つけたとき歯止めが利かなくなるのは、ジルフィスもゼファードもよくよく承知している。セリスティン・ヴァレンという男は、その容貌から性格から物事の優先順位にいたるまで、とにかく非常識なのだ。

「百歩ゆずって、アーラに文字を教えさせるのはいいでしょう。だが、どうして宿屋に帰してやらない？ 通いだっていいだろうに、かわいそうじゃないか」

「それでも結局、彼女は謹んでお受けしますと言ったんだ。今日から客室に滞在してもらうことになっている」

謹んでお受けしますだと？ 本心からじゃないに決まってる。何を失う心配もせずに王子に楯突ける人間が、どれほどいると思ってるんだ。

気に入らない。ジルフィスは鼻を鳴らし、手荒く従弟を突き放した。めずらしいことにゼファードは文句を言うでもなく、乱れた襟元を直している。

「文字の授業だがな、最初は明日の午後だ」

「俺も出席するぞ」

すかさずジルフィスは宣言した。ゼファードの目がすうと細められる。

「父上のほうはどうするんだ？」

「クオードに押しつける。別にかまわないだろう？ 陛下が何かおっしゃるようなら、おまえが適当に説明してさしあげてくれ」

「で、アーラが滞在する部屋というのはどこなんだ？」

「その廊下をはさんで扉三つ右の部屋」

「おまえの私室の、斜向かいじゃないか」

「相手は女の子だぞ！」

王子の寝台がある部屋のごく近くに、親族でもない娘を住まわせ

るとは！ゼファードの無神経さにジルフィスは憤然としたが、当人はきよとんとして、

「ほかの階や棟だと人の目にふれやすいだろう？末弟派に勘付かれるかもしれない。できるかぎり彼女の存在は伏せておくつもりだから、俺の縄張り内にある客室がいい。となると、伯母上が昔使われていたあの部屋がうってつけじゃないか」

従弟の答えに、ジルフィスはうめいた。そういえば生真面目で堅物で自分の将来よりも末弟派の謀略を心配するこの従弟は、令嬢どころか女官の一人さえ口説いたことがないのだった。

こいつのことだから、本当に効率と合理性を考えただけで、あとは何とも思っていないのかもしれない。

だが、アーラは不安を抱えていることだろう。自分をひどい目に合わせた張本人である王子の斜向かいに寝起きするなど、考えたくもないのではないか。

やっぱり俺が、屋敷に引き取るうか。

執務室を出ようとしたジルフィスの背中にゼファードの声がぶつかった。

「どこへ行くんだ？」

「アーラと話してくる」

ゼファードはまだ何か言いたげな様子だったが、ジルフィスは無視を決め込んだ。

そのまま退室し、向かい側の扉三つ隔てた部屋のノッカーを打ち鳴らす。「どちら様です？」と問われて答えると、やがて細く扉が開いた。

アーラはおそろおそろと言ったぐあいはこちらをのぞいていたが、上げた視線がジルフィスの目と合うとにっこりした。

「来てくれてありがとう。私からお礼を言いに行かなくちゃって思ってたのに」

乾ききっていない髪を頭の高い位置で一つに束ね、頬は明るさをとりもどしている。昨夜は物見部屋に閉じ込められていたので、早

速湯浴みをしたのだらう。髪を洗った際の香油のものなのか、花の香りがかすかにただよっていた。

「何のおもてなしもできないけれど、それでよかつたら入って」

どうやら打ちのめされてはいないようだ。彼女は物語りを披露するために着せられた紫のドレスではなく、濃紺の木綿のワンピースに着替えていた。

「お茶でも淹れられるとよかつただけ」

言いながらアーラはそばにあつた鉄製の置物を扉にそえて、勝手に閉まらないようにした。女性が身内ではない男性を部屋に入れるときにはそうすべきだと、一般的には言われている。しかし、ジルフィスはきちんとそれを実行する女性を目の当たりにしたことがなかったので、大いに感心した。

言い寄ってほしくないご令嬢に限って、密室で二人きりになりたがるものだよな。

アーラはジルフィスに一人がけのソファをすすめ、彼女自身は布張りのスツールに腰かけた。

この部屋のもとの主　ゼファードの伯母とはつまり、ジルフィスにとつても伯母に当たる。もちろん他国に嫁いだ伯母に頻繁に会うことはないが、乗馬好きで実際のな女性という印象が強い。そのため壁紙もカーテンも華美ではないこの部屋が、アーラにしっかりと見えた。

「おかげさまで無事、物見部屋から出られたわ。ジルが王子殿下に言つてくださつたんですつてね。本当にありがとう」

頭を下げるアーラをおしとどめて、ジルフィスはいちばんたずねたかったことをきいてみた。

「ゼファから聞いたよ。無理難題を引き受けたつて。でも、本当にいいのかい？　こんなゼファの目と鼻の先だなんて、虫唾が走らないか？」

アーラは笑つてかぶりをふった。

「ううん、もう大丈夫。殿下が詫びてくださつたから。私は執念深

いから全部水に流すってわけには行かないけど、目をつぶって殿下に協力してあげることにしたのよ」

そしてアールは楽しげに、とんでもないことを口にした。

「殿下って、実は意外とかわいいのね」

「どこが？ なにが？」

ゼファのやつ、いつの間にも仲良くなっているんだ？

見えるわけもないのに、ジルフィスは振り向いて壁の向こうをにらまずにはいられなかった。

16、授業

ゼファード王子が昼食からもどつてくると、ジルフィスとセリスティンの手によって執務室はにわかには教室へと変貌した。脚に果物や花の彫刻がほどこされた高価そうな丸テーブルが机代わりに据えられ、そのまわりに三脚の椅子が配される。

第一回目の授業が始まるのだ。

まるでアーサー王と円卓の騎士ね。

ゼファード王子とアーラ、そしてセリスティンがそれぞれの椅子に腰を下ろした。ジルフィスは万が一のときにすばやく動けるようにとの名目で、近衛騎士らしく立ったまま王子のそばに控えている。もつとも、ジルフィスはセリスティンとは異なり、難解な異世の言葉を学ぶことではなくこの場にいること自体を楽しみにしているらしかった。

アーラは昨晚のうちに簡単な教材をつくっておいた。ひらがなとカタカナの五十音表だ。現時点ではまだ、どのような流れで授業が進むのが見当がつかない。カリキュラムの組みようがないのでそれ以上の教材は無理だったが、大学生のころに家庭教師のアルバイトをしていたのが思い出されて、とても懐かしかった。

宿屋近くの市場では決して手に入らなかったクリーム色のなめらかな紙とペンが配られる。その紙の手触りにアーラがうっとりしている、王子がペンの端でテーブルを打った。

「では、始めてくれ」

顔を上げると、深海色の瞳と目が合った。冷たい色あいはなく、今はありありと好奇心が浮かんでいる。

「はい」

アーラはうなずくと、昨日つくったばかりの五十音表を王子とセリスティンに渡した。ゼファード王子は珍妙なものを見るような目でそれを眺め、セリスティンはまるで犬が骨を投げてもらったかの

ように夢中だった。

「殿下がどのような形式で文字を習得されるのをご希望なのか存じませんが、もっとも基本となる五十音の文字から始めようと思います。」

「五十音？ 二枚あるから百音ではないのか？」

「アーラは答えた。」

「どちらも同じ音を表す文字ですが、役割が異なるのです。」

「役割？」

セリステインは早速ペン先をインクに浸し、アーラの言葉を書き留めていた。

セリステインの手もとが流麗な線の連続をえがきだしてゆくのをちらと見て、アーラは続けた。

「私の故郷では、大きく分けて三種類の文字を使います。それらはひらがな、カタカナ、そして漢字と呼ばれています。」

「アーラはひらがなとカタカナの表を示したが、セリステインは納得していないらしかった。

「僕が君の帳面を調べたとき、使われていた文字の形は大別して四種類だったぞ。君が言う三種類じゃ、一つ足りない。」

「私が申し上げた三種類に記号を含めると、四種類になるでしょう。鉤括弧やエクスクラメーションマークなどが記号です。」

「え、えくす……？」

「エクスクラメーションマーク。俗にびっくりマークとも呼ばれます。記号は、文中の会話や感情などを表現するものです。付随的なものなので、なくても最低限の意味は伝わります。一方で、ひらがなとカタカナは表音文字です。口にする音を表しています。曲線を多くふくむひらがなは私の故郷でもっとも基本となる文字です。直線の多い簡潔な文字であるカタカナは、強調したい語や外来語を表すときに使用します。表す音はひらがなのときと変わりません。表の位置で対応させてみてください。」

セリステインはとても熱心な生徒だった。少しでも疑問が生じれ

ばアーラに質問を浴びせ、王子そっちのけで、授業を自分のものにしてた。アーラがカタカナでセリスティンの名を書いてみせると、小さな子どもがプレゼントをもらったときのように喜んだ。

ゼファード王子はセリスティンほど目立った興味は示さなかったものの、生真面目にノートをとっていた。一国の王子がひらがなとカタカナを真剣に学ぼうとしている姿は微笑みを誘うものだったが、もちろんアーラは笑うのをこらえた。

第一回の授業はひらがなとカタカナの説明と練習だけで終わってしまった。本当に家庭教師をしていた頃に戻ったようで、既視感に襲われる。けれども目に映るのは散らかった子ども部屋ではなく、王子殿下の執務室なのだった。

「アーラ、おつかれさま。本物の宮廷教師みたいだったよ」

ジルフィスが笑顔でねぎらってくれた。アーラも微笑みを返した。ジルフィスの笑顔は人を安心させる力があると、アーラは思った。

「最初はとても緊張したのだけど、途中から慣れたみたい」

「たくさんしゃべってのどが渴いただろう？ 飲み物と茶菓子の用意をさせるよ」

「ありがとう、ジル」

ジルフィスが女官にお茶の用意を言いつけに出て行くと、セリスティンが機嫌よく薄青の目をしばたいてアーラを見た。

「アーラは教えるのが上手だね。故郷では人に何か教えてたの？」

「近所の子どもの家庭教師をしていた時期があります」

「ふうん、道理で。ねえ殿下、教え方がなかなか堂に入ってたよね？ 退屈な教授連中の講義よりも、ずっと上手いと思うよ」

「もったいないお言葉です。いたらないことばかりで悔やまれるのですが、セリスティンさんにそのようにおっしゃっていただけるとほっといたします」

アーラが礼をすると、セリスティンがはなやかな笑い声を立てた。「？セリスティンさん？は舌噛みそうだから、セリスでいいって。」

ジルフィスをジルって呼ぶくせにさ、僕のこととはなんで？セリステ

インさん？なの？ 僕は殿下みたいになりたいそうなご身分じゃないんだから、もつとくだけてくれてかまわないんだよ。そんなふうにかしこまられると、見てるこっちの肩がこるよ」

「では……セリス？」

アーラがおおずおおず口にする、セリスティンの笑みはいっそう深くなった。揺れる銀髪よりも銀色の睫毛よりも、その屈託のない表情はさらに輝いて、アーラの耳たぶを熱くさせた。

「そうそう！ やっぱり、女の子に親しげに呼んでもらえるのはいいね」

そのとき、ジルフィスが両手に盆をささげ持ってもどつてきた。肘で開けた扉を足で後ろ向きに閉めるといふ横着をやらかしながら、彼はセリスティンと呼ばわった。

「セリス、おまえの小さな助手が来ているらしいぞ。研究院にないから探し回ったって。西の城門前で待ってるってさ」

「コルディアが来てるのか！」

セリスティンの笑顔はよりいっそう輝きを増して、彼は紙とペンをひったくるようにして小脇にかかげると短い挨拶だけを残し、執務室を飛び出していった。

アーラはジルフィスからポットとカップを受け取りながらたずねた。

「小さな助手って？」

「セリスの研究助手だ」

ジルフィスではなく王子が答えた。

「人形みたいに小さくて華奢で研究院にはまったく不似合いだがなというか、婚約者といったほうがいいか」

「婚約者？ どなたのです？」

「セリスのに決まっているだろう」

焼菓子用の小皿をテーブルに並べるふりをして、アーラは顔を上げなかった。胸の奥がつきりと痛んで、ひどく寂しさを感じている自分に気がついたのだ。

17、お茶の時間

北部特産のクラモン茶に口をつけながら、ジルフィスはアーラを観察した。

今日も装飾の少ない濃色のワンピースを着ている。王城にふさわしいドレスが何着も客室のクローゼットに準備されていたのだが、アーラはそれらを頑として拒否した。彼女は女官たちに洗濯物のように洗われて人形のように着せ替えられた紫のドレス以来、宮廷服に袖を通していない。

「私は隠されているはずなのに、そんな派手なかつこうができるわけないでしょう?」

貴婦人たちに人気のあるデザインドレスをあれこれすすめるジルフィスにアーラはそう言ったのだが、それだけが着ない理由ではないと彼は踏んでいた。

王城に属するものに、なりたくないんだろうな。

宿屋に……いや、転がり落ちてくる前のも似た故郷とのつながりを絶たないために、彼女はみずから線を引いて?こちら側?と自分とを隔てているのだろう。

もう一口、クラモン茶を味わう。

「おかわりはどう?」

アーラがポットを持ち上げて、ジルフィスに問うた。

アーラの授業が始まって一週間がたった。

彼女は身を隠しながらの王城暮らしもいくらか要領を得たようで、ジルフィスと話するときの表情もほがらかになった。

宿屋の主人夫妻のことを心配し一度帰りたいたと言ったときには「それはできない」とゼファードに断られ落ち込んでいたが、再度使者を出すことが約束されるとほっとした笑顔を見せた。当初かたくなだったゼファードも、セリスティンが

「この言語の文字の成り立ち、文法の説明には一貫して筋がとおっ

ている。歴史的背景も興味深い。ここまで齟齬がなければ実在の文字だということは明白で、彼女が嘘をついているなんてことはありえないよ。アーラは本当に異世から転がり落ちたんだ」

そう結論したことによって、彼女に冷たく当たるのをやめたようだった。

日々筆頭騎士としての務めがあるジルフィスは日がな一日中アーラのそばについているわけにもいかなかったが、授業の時間だけは近衛の任務をクオードに押しつけて、ゼファードの執務室にいられるようにした。

ジルフィスは授業そのものよりも、授業の後のお茶の時間が好きだった。短い時間だが、アーラととりとめもないおしゃべりができる。お茶を飲みながらゼファードがアーラに物語りをさせたときは、ジルフィスも子どものころに還ったような気持ちになってその冒険譚を楽しんだ。

「アーラは冒険物語が好きなんだね」

セリスティンも彼女の物語に満足したようすだった。彼も、アーラの授業を一度たりとも欠かしたことがない。

「髪の毛が一本一本ぜんぶへびだなんて、こわいっていつか、重そうだよ。そのへび女は首や肩がこらないのかな」

セリスティンがもつともな疑問を口にした。アーラはふきだして「へび女じゃなくて、メドゥーサ。髪はへびだけど体は人間の女性なんだから。へびの体を持つ女の魔物は別について、ラミアっていうの」

「そのメドゥーサを見ると、恐ろしさのあまり見た人が石になるんだろ？　なのに、どうして鏡に映ったものなら平気なんだ？　鏡なんだから見えるものはいっしょだろうに」

「鏡は、私の故郷の世界では神秘的な力を持つとされているの。退魔や浄化のシンボルだったり、信仰の対象になったりね。だから？　鏡に映ったものは邪悪な力が浄化されていて、石化にも遭わないのだと思う。反対に魔鏡といって、邪悪な力を宿した鏡もあるけれ

ど」

ジルフィスの目には、セリスティンと伝説や言い伝えの話をして
いるときのアーラが、一番楽しそうに見えた。幼かった頃はシルフ
イスも昔話や英雄譚を乳母にねだったものだが、剣技に夢中になっ
てからというもの、そういったものには大いにご無沙汰している。
ジルフィスは伝承や物語にうとい自分を悔やんだ。

アーラにお茶のおかわりを注いでもらい、焼菓子を一つつまむ。

アーラは差し出されたゼファードのカップにもクラモン茶を足した。

「そういえば、おまえはどうして宮廷服を着ないんだ？ 王子の専
属教師ともなれば、それなりのいでたちをするものだぞ？」

おもむろにたずねたゼファードに、アーラはやれやれと肩をすく
めた。

「おまえではなく、アーラとお呼びくださいとお願い申し上げたは
ずです」

「そう呼べと命令するのか？」

「そんな恐れ多いことを申しているわけではございません」

「アーラ、殿下は照れてるんだよ」

セリスティンがずばりと指摘した。ゼファードの頬にかつと血が
のぼる。

「殿下は女の子と仲良く遊んだりしないから、女の子の名前を呼び
慣れていないんだ。花街にだって一回か二回行っただけだろう？」

衛生係だってそれきりの付き合いだっただけというし、使用人はまっ
たくそういう対象じゃないみたいだからね」

「セリス！」

ゼファードがうめいたがセリスティンはひらひらと手をふって、

「貴族の年ごろのご令嬢とは、もっと距離を置いているしね。万が
一誰かと親しいなんて噂が立ったら、ほれご婚約だご婚礼だ、正妃
が駄目なら第二妃にうちの娘をとか、大混乱になっちゃうから。だ
から殿下は女性のことは堅苦しく家名で呼んだことしかないんだ。
アーラって呼ぶのがはざかしいんだよ」

「呼ぶのに照れていらつしやるんだなどは、私も感じておりました」
アーラが至極まじめな顔でゼファードにうなずいた。ゼファードはたじろいだようだった。

「けれど、私のアーラという名だって本当の名前ではございません。もとは友人がつけてくれた通称なのです。ですから女性の名を呼ぶことに抵抗を感じていらつしやるなら、私の場合は本当の名ではありませんから、気にしていただくほどのことはないと思います」

アーラの告白に、ジルフィスは心底驚いた。それはゼファードもセリスティンも同じじゃなかった。

「本当の名では、ない？」

「間諜の疑いが晴れたというのに、俺たちをたばかっていたというのか？」

「たばかるだなんて」

アーラは懐かしむような目でふと遠くを見た。

「そんなことはいたしません。アーラと名乗っているのは、私の本当の名はグランヴィールでは浮いてしまうからです。私の故郷の歴史に登場する、古の皇子と同じ名なのですから」

ひゅと、ゼファードが息を吸い込む音がする。

「皇子の、名？ 男名なのか」

「はい。誠実で心優しく人望厚く、将来を望まれながら、陰謀によって命を落としたという悲劇の皇子の名前です。両親が、その皇子のように誠実で心優しく人望を集める子になれという思いを託してつけてくれたようです。けれど男名ですし、どうしても皇子の悲劇が頭をよぎってしまつて。気にする私のために、友人がその本名をもじって、つけてくれたのがアーラという名でした」

言いながら、アーラは寂しげに笑った。

「ですからアーラという呼び名は私にとって、故郷と友人と思い出のよすがなのです」

「その皇子の物語りを聞かせてほしいな」

セリスティンに、アーラはゆっくりかぶりをふった。

「いつかの機会に」

そしてゼファードに向きなおり、問うた。

「それとも、実の男名のほうが呼びやすいでしょうか？　アーラよ
りも」

「いや……いい」

まじめに問われたゼファードは首を横に振った。ジルフィスは従弟を見やりつつ、アーラの実の名を訊いてくれればよかったのにと腹の内で責めた。

男名女名どちらが呼びやすいという問題ではないのだと、それはジルフィスにもわかっていた。呼びかける相手が女性であることが、ゼファードにとって苦手要因なのだから。

もうじきグランヴィール中のご令嬢を招いてのお妃候補選定の夜会があるのに、大丈夫か？

もちろん、大丈夫ではないだろう。

二十七にして身を固めていない自分がとやかくは言えないかも知れないが、何しろ従弟は王子なのだ。執務を問題なくこなすことも大切だが、夜会も如才なく過ごしてほしいものだ。ジルフィスは思った。

アーラは執務室の窓から、ぼんやりと見下ろしていた。

今日も、もうすぐ授業の時間になる。アーラだけでなく、ゼファードもジルフィスも、セリスティンが来るのを待っているのだ。

セリスティンは外で誰かに呼び止められたらしく、王城の前庭で話しこんでいる。真昼の陽射しを受けて、セリスティンの銀の髪がまばゆく輝いていた。

「アーラはああいうやつが好みなの？」

突然、話しかけられた。

驚いて振り向くと、ごく近くにジルフィスの顔があった。金褐色の瞳がからかうように、それでいてどこか咎めるようにアーラをのぞきこんでいる。

「びつくりした……。好みって、何が？」

「ずっとセリスを見てるだろう？ あんな化け物じみたに非常識なやつが いいの？」

「化け物じみた」という言い方は語弊があるだろうと感じながらも、セリスティンの容貌が人間離れしているとは、アーラも思っていた。その美貌で人を虜にする吸血鬼や夢魔のようだと例えるならば、たしかに化け物じみた美しさといえるのかもしれない。

「いいというか……とつてもきれいよね。鑑賞にたえうるというのかな？ あんなにきれいな男の人は見たことがないし、とつても貴重だと思うの。眺めていてあきないわね」

光の粒をまとったフェルメールの絵画のようで、見とれてしまう。「俺はどう？」

真顔で訊かれて、アーラは思わず笑ってしまった。

「ジルはきれいというよりも、？ かつこいいい？ かな。美形だし筆頭騎士なんだし、とつてももてるんでしょう？」

「もてるよ。迷惑するくらいにね」

本当に迷惑していそうな口ぶりだったので可笑しかった。

「セリスももてるんだろうなあ。でも、婚約者がいるのよね？ コルディアさんだっけ」

もちろん絵画的なセリスティンの美貌も好きだが、彼が授業のときに見える、知らないことを知ることが心から楽しいという笑顔や明るいまなざしが、アーラはとても好きだった。

アーラの授業や物語りに、いつも一番興味を示してくれるのはセリスティンなのだ。ゼファード王子も今ではひらがなとカタカナをほとんどマスターし、アーラの説明によく耳をかたむけてくれるが、それにはどこか義務感のようなものが付きまとう。「学びたい」という意欲ではなく、利になることなのだから「学ばねば」というような。

心底楽しんで授業に取り組み、？あちらの世界？の伝承や伝説について会話が盛り上がるのは、ゼファードでもジルフィスでもなく、セリスティンなのだった。

アーラは王城で隠れ暮らすことを余儀なくされてからというもの、セリスティンとの会話を一番の楽しみとしていた。けれどもセリスティンにとってはきつと、アーラとのとりとめもない話をする時間は？一番？ではないに違いない。

そりゃあ、婚約者さんといっしょに研究にいそしむほうが楽しいでしょうね。

寂しさが胸をよぎる。もしも？こちら？に友人がたくさんいたのなら、こんな自分勝手な寂しさを抱えずにすんだらうか。

セリスティンの婚約者だという女性コルディアに、アーラはまだ会ったことがない。研究の助手をしているほどなのだから、きつと優秀な女性なのだろう。いつかセリスティンに紹介してもらって、友達になりたいものだと思う。

「コルディアさんがうらやましいな。いいなあ……セリスみたいにあんなきれいで楽しい人がフィアンセで」

ジルフィスは、アーラの感想に賛成しかねるようだった。

「セリスって楽しいか？ うるさいだろう、いつつもアーラを質問攻めにして」

「自分の好きな話題で盛り上げられるのがうれしいの。全然うるさくなんかないわ」

「アーラ」

不意にジルフィスの声がひそめられ、低くなった。書斎机にいる王子の耳には届かないだろう。

「アーラは、セリスをコルディアからとりたいとは思わないのか？」
問われて、アーラは大いに戸惑った。かなり一足飛びに話題が飛躍した気がする。

「どうして？」

「コルディアが、うらやましいって」

「そうはいったけど、うらやましいとねたましいは違うもの。こういう気持ちって、恋とは言わないんじゃない？」

そう答えると、ジルフィスは拍子抜けしたようだった。

「私は、いいなあって外から眺めていたいとは思っても、婚約者がいる人とわざわざ恋仲になりたいだなんて思ったことがないの。恋愛をしなくても死ぬわけじゃないしね」

まあ、その結果として、遺伝子が残せないということにはなるかもしれないけど。

アーラは心底誰かに恋焦がれるという経験を、したことがない。無理に身を慎んだわけでも男性恐怖症というわけでもなく、本当にこれまで、その必要性を感じたことがないのだ。それは長いあいだ修道院付きの女子校で過ごしてきたせいかもしれないし、蔓延してある？若者の常識？がどんなに間違っていてどのような行為でどれほどのリスクが生じるかを、家庭科や保健でシスターたちから具体的なパーセンテージにいたるまで教えられたせいかもしれない。

だからこそ、好きでもない誰かとなんとなく付き合う、などということがアーラには信じられない。友情が恋に、それから愛へと変わることはあるだろう。だが、常に恋人というポジションがうまく

ていないと不安だとこぼす同年代の意見には、賛成しかねるのがア
ーラなのだった。

アーラの持論を聞いて、拍子抜けというよりも狐につままれたよ
うな面持ちになっているジルフィスに気づき、彼女はあわてて弁解
した。

「別に世の恋人たちを否定してるわけじゃないのよ？ 私が、これ
までそういったものを必要と感じなかったというだけで。もしかし
たらこれから一目で恋に落ちるようなことがあって嫉妬に狂う日が
来るのかもしれないし、お見合いをして、恋愛というよりもおたが
いを認めあつて尊敬しあつて家庭を築いていくのかもしれない。先
のことはわからないけれど……グランヴィールでも私のような考え
つて、やっぱりおかしいの？」

「めずらしいとは、思う」

そう答えると何かが吹っ切れたように、ジルフィスはにやつと笑
った。

「俺はアーラが、セリスのことを好きなんだと思ってたんだ」

「セリスをきれいだなあつて眺めているのは好きだし、物語につい
て一緒に話すのはもっと好き。でも、ジルが想像していたようなの
とは違うわね」

「もうじき、ゼファのための夜会があるんだ。アーラも出ないか？

俺と一緒に」

唐突な誘いに、今度はアーラが狐につままれた気分になった。

「どうして急に夜会なの？」

「セリスもコルディアも出席するんだ。きれいに着飾った二人が見
られるから、アーラがよろこぶかと思って」

「ああ、そういうこと」

合点がいった。セリスティンは夜会用に着飾ったなら、女性を圧
倒する美しさをほこるだろう。コルディアにも会ってみたい。けれ
ど、問題のほうが多かった。

「お誘いありがとう。でも、やめとくわ。私はグランヴィールの音

「楽やダンスにくわしくないから、きつと恥をかくだけだもの」

「毎日の授業のお礼に、俺がダンスのレッスンをつけるといっても？」

「ジルはいそがしくってあたしの面倒を見る時間なんかありませんよ」

と、まさにそのとき。扉が開いて、セリスティンが入ってきた。

「遅くなってすまなかったね！ これだから人気者は体が足りなくて困る。さあアーラの授業を始めよう！」

19、悩み

父王からそれとなく伴侶選びについてうながされたのは、半年以上も前のこと。

自分より四つも年上の従兄ジルフィスが、身を固めるどころか特定の女性とつきあってすらくなく花街で遊び歩いているというのに、どうして自分だけがとゼファードは憤慨したものだ。

だが憤慨しつつもその実、理解してもいた。

ジルフィスは父の代から王位継承権を放棄している傍系王族だが、ゼファードは現王の一粒種なのだ。ゼファードが伴侶を得て子をもうけ、王家直系の血を絶やさぬことは義務でもある。父王は未だ力にあふれた壮年だが、万が一のことがあればその地位と責任はゼファードが継ぐことになるだろう。

そしてさらに、ゼファードの身にも？万が一の？ことが起きれば、王位は父王の腹違いの末弟へと転がり込む。それを願っている者たちが、末弟派が少なからずいるからこそ、ゼファードの腰は重くなる一方なのだった。

とある令嬢とゼファードが親しいようだと噂がたてば、その令嬢の家と競り合っていた家門が妬んで、末弟派の味方に流れてしまうかもしれない。末弟派の息がかかった令嬢がゼファードたちの懐へもぐりこみ、暗殺者となるかもしれない。

父王もそういった危険は承知のはずだが、だからといってどうしようもないことなのだ。友好的な外つ国に年頃の王女はおらず、また、諸国の王の直系でない姫をもらい受けるのでは外交上グランヴィールの面子が立たない。

結果として、末弟派の問題があるものの、国内から王妃候補を選ぶしかないということになる。

「グラントリーの家に娘でもおれば、一も二もなくおまえと娶せたのだがな」

父王はそう言ってため息をついたが、いないものを嘆いても仕方
がなかった。たしかに王族同士の婚姻であれば貴族間に波風は立ち
にくい。しかしジルフィスは男なのだし、ゼファードと同様一人き
りで、兄弟姉妹はいないのだ。

父上は俺に、いつたいどんな娘を選べというんだ？

いつそ決めてくれれば楽なのにと思わないでもなかったが、無論
それは無理な話だ。ゼファードでさえ動けば波風が立つというのに、
王みずからが采配を振るおうものならどうなるかわかったものでは
ない。

折々に目にしてきた令嬢の中に「これぞ」という娘がいたならば
話は別だ。波が立とうが地割れが起きようがその娘を妃にするのだ
ろう。けれどもゼファードは知り合った貴族令嬢に心動かされたこ
とはなかったし、幼い頃あこがれた小間使いは彼の気持ちを察する
と、すぐに姿を消してしまった。使用人は王妃になれないと教えら
れたのは、そのときだ。

みんな、似たり寄ったりだ。

そうして選びようもないまま時はたち、今日に至る。焦れた父王
が、まずは王子の妃候補を（あくまで候補だ）数人選ばんとして夜
会を設定したのだ。

王が主催する正式な夜会だ。慣例にのっとり、ゼファードも誰か
女性をエスコートしなければならぬ。姉妹や従姉妹がいなくとも、
母が生きていれば、伯母が遠国からはるばる来てくれたなら、その
手をとって入場さえすればよかった。

だがいずれも、無理な相談なのだ。

夜会を明日に控え、今日はアーラの授業どころではなかった。

セリステインはコルディア嬢の衣装合わせに余念がなく、ジルフ
イスも会場警備や段取り確認のために近衛隊長に引き回されている
はずだ。

ゼファード自身は彼らよりもさらに、追いつめられていた。

「殿下、いったいどうするおつもりです？」

エスコートの相手を決めずに夜会を迎えるなど、王子ともあろう者にあるまじき事態。そんなことはいわれなくとも、ゼファードにもわかりきっていた。

クオードは口やかましい家庭教師のようなしかめ面をしてゼファードをにらんでいる。

「夜会は明日です。もう時間がありません」

ゼファードはため息をついて肩をすくめた。

「しかたがなかったんだ。だれかひとりを選ぼうものなら、まわりはかならずその令嬢が俺の婚約者だと決め付ける。たかがエスコートの相手役なのに、だ。俺に姉妹がいればよかったんだがな。それなら婚約者だ王妃候補だと騒がれることも、派閥争いの火に油を注ぐようなことにも、ならないんだが」

クオードは咳払いをして、ゼファードに現実を突きつけた。

「たればをいくら考えてもしようがありません。これは内内の遊びではなく正式の夜会なので、エスコートの相手は必須なのです。くじでもあてずっぽうでもかまいませんから、さっさとお決めになってください。一夜のことと割り切って、まわりがなんと騒ごうと婚約者ではないとおっしゃり通せばよろしいのですから」

「それができたら俺はこんなに悩まないさ」

ノックが響いたのは、そのときだった。

20、名を騙りて

ドアの向こうから声がかかる。

「殿下、お茶をお持ちいたしました」

アーラだ。

いつもならばゼファード付きの女官たちは、王子やその友人である騎士たちにお茶や菓子を運ぶ役を取り合って大さわぎするのだと聞いている。しかし今日ばかりはこの張り詰めてぎすぎすした空気を敏感に嗅ぎ取って、その空気の中に踏み込まぬほうが賢明と考えたものらしい。

とはいっても誰かがやらねばならぬことだ。彼女らは自分たちに火の粉が降りかかるのを恐れ、最近王子がどこからか拾ってきて緘口令を敷きひそかに住まわせている謎の娘　アーラにその役を押し付けたようだった。

「ああ、入れ」

ゼファードが応じると、アーラが焼き菓子とポットをのせたトレイを手に入ってきた。

くるぶしまである濃褐色のワンピースに鹿革の短靴。つややかな黒髪を背に流し、横髪は顔にかからぬように掬って留めている。いくら隠れ暮らしているとはいえ、寡婦や年増女官ではないのだから、もう少し華やかなりをすればいいと思うのだが。ゼファードが部屋のクローゼットの服を着てもかまわないのだと説明しても、彼女は受け取らなかった。王子専属の教師の給金がいったいどれほどの額か知っているか、ドレスやガウンの一枚二枚何でもないぞと彼が言うと、「私は雇われた教師ではございませんので」と皮肉を返されただけだ。

やっぱり、俺を恨んでいるのだろうか。

それはそうだろう。いまさら悔やんでも詮無いことだが。

アーラはトレイ手近なテーブルに置き、ゼファードとクオードを

見て「ああ」とうなずいた。彼女も、なぜ女官たちからこの役を任されたかを納得したらしかった。

「甘いものを召し上げれば疲れがとれます。少しお休みになってはいかがですか？ 何のお話か存じませんが、しばらくすれば名案が浮かぶかもしれません」

優雅ではないが、慣れた実際的な手つきで焼き菓子をとりわけ、お茶を注ぐ。無駄に凝らないアーラのしぐさが、ゼファードは気に入っていた。

アーラが淹れたクラモン茶を飲み、粉砂糖がたつぷりまぶされた焼き菓子をかじりつつぼんやり彼女の横顔をながめていたゼファードは、突然ひらめいた。

「おまえ、戸籍がないと聞いていたな」

びくりと、アーラの肩が揺れた。だがゼファードはそのことで彼女を責めるつもりはない。

「心配するな。おまえがおびえるようなことじゃない。俺はおまえに、戸籍をつくらないかといいたいただけだ」

「戸籍を、つくる？」

いまさら？ そう彼女の瞳が問うている。ゼファードはうなずいた。

「そうだ。ジルフィスの妹としての、おまえの戸籍をつくるんだ。アーラ・グラントリー……悪くないだろう？」

「つまり、殿下の従姉妹になれとおっしゃるのですか？」

飲みこみが早い。やはり下町の宿屋手伝いとして埋もれさせるのはもったいないと、改めてゼファードは思った。

「傍系王族だ。グラントリー叔父は信頼できるお方だし、奥方もすばらしい女性だ。おまえも身の振り方に悩まなくてすむ。一生食うにはこまらずに過ごせるぞ」

「春の芽吹き亭でだって、一度も食うにこまったことはありません」
アーラのまなざしがするどくなる。こちらが宿屋を侮辱したと思っ
っているらしい。そんなつもりはなかったのだが。

「私はいまのままでも十二分に心苦しいんです。王城にこうしているだけで場違いで、税金で着るものや食べ物を用意してもらっているとと思うとたまらなくて。それなのにさらに王族だなんて肩書きがついては、窒息してしまいます」

「大げさに考えなくていい。俺の伴侶が決まるまで、おまえが俺の血縁だとわかる名前で、夜会の際のエスコート相手を務めてくれさえすればいいんだ」

「畏れながらおことわりいたします。私に王族のご令嬢だなんて役が、務まるはずが」

「アーラ殿、これは依頼でも提案でもない。命令です」

突如響いた冷やかなクオードの声に、アーラの体がこわばった。

おびえさせるつもりはないというのに！

ゼファードはクオードに文句を言ってやりたかったが、先にクオードに、何も言うなとばかりに視線で釘を刺されてしまった。

クオードは、すべてを了解しているのだ。ゼファードがどんな思いつきから、アーラに戸籍の話を持ち出したかを。

「アーラ殿。あなたには明日の夜会に、王子のエスコートのお相手をしていただく」

「けれど私にジルフィスの妹役なんて無理に決まっています。私はジルみたいに整った顔ではないし、第一、髪の色も目の色もまったく違うのですから」

「髪や目の色がちがうのはいくらでも言い訳がききます。顔立ちも問題ではない。似ていない兄妹など掃いて捨てるほどいます。それから、否という応えは考えないでいただきたい。あなたがたのためにならないでしょうから」

あなたがた、というところを強調している。ゼファードは唇を噛んだ。名案だと自分で思ったのはたしかだが、これはただの思いつきで、彼女を傷つけたくはなかったのだ。

クオードの言葉に、アーラも唇を噛んでいる。彼女は宮廷の女性たちの多くとは異なり、脂のにおいがする紅を唇にのせていない。

だから余計に幼く見える。不思議に思つてきいたとき、もともと血色がいいのだから蜂蜜をなめるだけで充分だと言つていたのを思い出した。その唇は蜂蜜で甘いのか、噛み傷で血の味がするのか、どちらだろうか？

アーラが顔をあげた。そのときにはもう、唇を噛んではいなかった。

「私には、選択肢はないのですね」

「物分りがよいとたすかります」

つんと顎を上げるといふ、淑女にあるまじき作法でアーラはクオードを睨め上げた。

「少なくとも、納得してはいません。ただ、春の芽吹き亭のご主人やおかみさんに迷惑がかかることだけは許せません。ですからグラントリー公家の名を騙れとおっしゃるなら、そういたしましようというだけです」

「名を騙るわけではありません。実際、そのものになるのですから」
クオードは薄い唇に勝利の笑みを浮かべて、ゼファードに向きなおった。

「尚書官にすみやかに、ごくひそかに書類をつくらせましょう。ジュールフィスには後で伝えておきます」

「ああ」

「グラントリー公邸に早馬を走らせますか」

「いや……俺が行こう。俺が出向いてグラントリー叔父に許可を得るのが礼儀だろうから」

ゼファードが答えると、クオードは水を得た魚のようにすばやく部屋を出て行った。きつと夜会が始まるまでには、りっぱな戸籍が出来上がっていることだろう。

アーラ・グラントリーの。

幕間

目の前には、この一年で書き溜めた物語の帳面が詰まれている。

高価そうな万年筆と飾り石がはめ込まれたインク瓶もあるが、ア
ーラはまだそれらを使ったことがない。布を巻いた木炭で鉛筆のよ
うに書くほうが、ずっと気楽だからだ。

アーラはあてがわれている部屋の書き物机に頬杖をつき、思いき
り大げさなため息をついた。そうすれば、少しは気分が落ち着くか
と思つて。

「傍系王族のご令嬢、ねえ……」

声に出してつぶやいてみたが、実感がわかない。

突然消えた娘を心配しているに違いない、実の両親の顔を思い浮
かべる。平均よりは少々裕福かもしれないがそれでも一般的な家庭
に生まれ育つたアーラにとって、市会議員でさえ別次元の存在のよ
うな気がしたものだ。

それなのに、自分は突然王弟閣下のご令嬢になるらしい。文字通
り別次元のグランヴィールに転げ落ちてきたとはいえ、まさか自分
がそのような上流階級に組み込まれることになるとは思ひもしな
かつた。

だが、だからといって自分が悲嘆にくれているわけでもないこと
を、アーラは冷静に認識していた。

面倒で厄介なことに巻き込まれたには違いないが、？こちら？の
世界　グランヴィールは所詮、アーラの世界ではないのだ。真実
とは異なる戸籍かつくられようが、国王陛下の弟君の娘になるうが
？あちら？の両親や弟妹、友人たちの知るところではないし、？あ
ちら？の戸籍が抹消されるわけでもない。しばらく行方不明になつ
ていて搜索願くらい出されているかもしれないがけれど、それだ
けだ。しかもそれはアーラが？こちら？で宿屋の手伝いをしていよ
うと令嬢にされようと、いっさいの関係がないはずだった。

引き受けたことがらさえ真面目にこなしておいたなら、いつか？
あちら？へ帰るすべが見つかったときに、押し付けられたものを後
腐れなく脱ぎ捨てていけるだろう。

もちろん、なぜ自分の身にこんな大きな面倒ごとが降りかかって
きたのかは未だ納得できない。いと高きところにおわす方々の世間
に入るものならおそろしく厄介で息も気も詰まるというのも、想
像に難くない。だが、だからといって、嫌だ嫌だとわめいてどうに
かなるものでもあるまい。

大切なのは恩人に　春の芽吹き亭のご主人夫妻に、迷惑がかか
らないようにすることだ。アーラは？あちら？に帰れたなら、クオ
ードの爬虫類じみた冷たいまなざしで睨まれることなど二度とない
が、グランヴィールに根を下ろして生きている人々は、そうは行か
ないのだから。

本当に、クオードって嫌なやつ。

くすんだ髪と煙色の目を思い出すだけで、腹の底がむかむかとし
てくる。

「これは依頼でも提案でもない。命令です」？　あなたに何の
権限があつて私に命令ができるというの。あんなの、王子殿下の権
威をかさに着てるだけじゃないの。

ジルフィスは出会ったばかりの時から親切にしてくれたし、ゼフ
アード王子は間諜の疑いをもって監禁したことを不器用ながら詫び
た。しかしクオードは一貫してアーラに冷たかった。優しくされる
期待などしていないが、どことなく敵意さえ感じることもある。

私のことが気に食わないなら、お城からさっさと追い出してく
ればいいのに。

そう思うのにクオードは、ゼファード王子の言葉より先回りする
かたちで、グラントリー公の娘になることをアーラに承知させたの
だ。少なくとも王子自身はまだ、「戸籍をつくらないか」と誘い、
そうしてほしいそぶりを見せただけで、アーラに「命令」はしてい
なかつたのに。

王子様の希望だったら、クオードは何が何でもかなえるというの？ そんなの、いつかどこかで無理がたたるわ。……まあ、？ あちら？に帰ってしまえば、私には関係ないけれど。

帰る方法が存在しない、という場合は考えていなかった。

学生の頃までアーラは、まず最悪の事態を想定して、その対処法を複数用意しておかなければ安心して物事を始められない性質だった。しかしそのやりかたは、数年前にすでに放棄していた。

どんなに周到に準備をしても、なるようにしかならない。社会に出てから、そう学んだ。最悪の事態におびえて防御をめぐらすことばかり考えるよりも、なるようにしかならない範囲の中で、おのれの力で泳いでいけるかが問題なのだ。

だからアーラは、グランヴィールという見知らなかった世界でそれなりに泳いできた。一年たっても、帰る方法の手がかりの「て」の字すら見つからないが、悩んで立ち止まっていてもどうにもならない。泳ぎながらそのときさしかかった景色に目をこらして、見つけたいと望んでいるものを見つけるしかないのだ。

そんな考えを脳裏で展開しているとき、ふと自嘲する。「年食ったなあ」と。

頬杖をとり立ち上がる。セリステインから返してもらってからというもの、ずっと詰まれたままだったの帳面を引き出しにしまう。窓際に干しておいた枕をベッドにもどし、カーテンを閉めた。

なるようにしかならない。できることしかできない。だから、目の前のできることからできるかぎりやって行く。

21、王子殿下の従姉妹

目の前が真っ白になった。

しばらくすると、今度は赤くなった。怒りのためだ。

視界の端がちかちかする。ジルフィスは罵倒すべきかこぶしを振り上げるべきか従弟の胸倉をつかむべきか、むしろそれらすべてを同時にやってのけたくなり、結局、壁にこぶしを打ちつけてゼファードをにらんだ。

「むちゃくちゃだ」

ジルフィスのいつになく低いうなりに、ゼファードはたじろいだようだった。

「どうしてまず俺に言わなかった？」

「それは……初めにグラントリー公に許しを得るのが順当だと」

「その前に俺にひとこと言うことが親父への無礼になるわけじゃないだろう！」

ジルフィスはともすれば剣の柄に手をかけたくなる衝動を何とか押さえ込み、手近な椅子にどさりと腰を下ろした。

耳の奥ががんと鳴っている。額に手をあて、何とか落ち着こうとするものの、自分で思った以上に取り乱している自分の手綱をとるのは簡単ではなかった。

「アーラが俺の妹になるだって？」

ゼファードが、今回の夜会のエスコート相手探しに難儀していたことは知っていた。それはゼファードの生真面目さによるものであり、物事の先の先まで考えなくては取り掛かれない性質のせいでもある。まどろっこしいのが苦手のジルフィスは、適当に選んで後からどうあしらうか決めればいいじゃないかと助言したのだが。

まさか本当に「適当」な人材を選んで、面倒なことを後回しにするなんてな。

ゼファードらしくない　自分が言ったことを棚に上げて、そう

思う。

アーラならまさに「適当」、うってつけだ。戸籍がもともとのだから改ざんの必要がなく、新たに作ったものをそつと貴族系統簿に滑り込ませればよい。作法やダンス、貴族の最低限の慣例などは彼女なら覚えられるだろう。あれほどまでに複雑怪奇な文字を習得し、なおかつさまざまな物語を頭の中に詰め込んでおけるのだから。

それに、授業を引き受けたことから考えても、彼女は気が進まなくても嫌だとはいえないだろう。しぶしぶながらエスコートの相手役を承諾し、それにふさわしい肩書きとして「ジルフィスの妹」という名を甘んじて受けるに違いない。

ようやく時間ができてアーラの顔を見ようかと立ち寄ったら、「彼女は夜会用ガウンの採寸のために留守だ」とこの従弟がぬかした。ジルフィスはアーラが気を変えて夜会に出てくれるつもりになったのかと喜んだが、次の瞬間、ゼファードはとんでもないことを言い出したのだ。

彼女をジルフィスの妹にして、自分のエスコート相手役を務めてもらう、と。

狡猾な末弟派を欺くには確たる証拠書類と念入りな背景設定が必要だ。口先だけでジルフィスの妹だと紹介しても、なぜ今まで隠していた、髪の色も顔も違いすぎる、本当だとすればグラントリー公がどの女に生ませた子だ、とかっこうの攻撃材料になってしまう。しかもグラントリー公の養女ではいけない、血のつながりが伴っていないければ有力貴族たちは王子のエスコート相手として、納得しない。

地盤づくりは、水面下にすみやかに且つ綿密に行われた。クオードとセリステインと？なじみ？の尚書官の協力を得て、アーラにはグラントリー公の娘としてのれっきとした過去が出来上がった。

それらがすべて終わってからのなのだ、ジルフィスがこのことを知ったのは。

兄妹、か。

アーラがジルフィスの妹なら、当然ゼファードの客室を出てグラントリー公邸と一緒に住まうことになるだろう。それはよいことだ。今までよりも自由に彼女に会えるし、一目を気にせずに出かけられるようにもなる。妹を悪い虫から守るためだという大義名分で、筆頭騎士としての任務がない限り、ずっとそばについていることもできる。

だが、兄妹なのだ。

ジルフィスは自分の中に芽生え始めている感情の正体を知っていたし、それを育てるのも悪くないと思っていた。けれども血のつながりのある兄妹となれば、この感情の芽はどうすればいい？

ジルフィスは大きく肩で息をついて、立ったままの従弟を睨め上げる。ゼファードは戸惑っているらしかった。

「……ゼファ

「ジル？」

「おまえは、アーラをどうするんだ？」

「どうするって……俺の伴侶が正式に決まるまで、従姉妹の傍系王族の姫として夜会や式典行事を手伝ってもらつつもりだ」

「そのあとは？」

「そのあと？」

ゼファードが眉をひそめる。王妃から受け継いだ彼の深海色の瞳を、ジルフィスは挑みかかるようににらんだ。

「そうだ。ゼファのフィアンセが決まったら、アーラがエスコートの相手役を務める必要はなくなる。それなのに、アーラはずっと？王子の血縁？という見えない枷につながればなしになるんだぞ？非道いと思わないのか」

「もちろん、彼女にはできるかぎりのことをする。恩には報いるつもりだ。必要なものがあれば俺の力が及ぶ限りなら……」

「傍系王族の姫が、政略結婚の標的にならないと思ってるのか？」
ゼファードが息を飲んだ。

ゼファードのことだ、まったく意識にのぼらなかつたはずはない。わざと無視してきたに違いない。それとも……

「ゼファ、夜会は明日だ。今ならまだ間に合う」

自分の声が怒りのためだけでなく、懇願の意味でも震えていることにジルフィスは気がついた。

「アーラをグラントリーの戸籍からはずしてくれ。俺は、アーラをこれ以上つらい目にあわせたくない」

22、言い訳

ゼファードは、一応逡巡する様子は見せた。だがそれだけだった。群青の瞳に罪悪感めいたものは浮かんでいたものの、撤回するつもりはないらしかった。

「俺も、彼女をつらい目にあわせたいわけじゃない」

ゼファードの言葉はジルフィスに言い訳じみて聞こえた。

「この提案は、彼女にとつても悪くはない話だと思っただ。セリステインは彼女の授業に意欲的だから、遅かれ早かれあの複雑雑多な文字を覚えてのける。そうなれば彼女の教師役は終わって、宿屋の手伝いにもどるだろう。それでも正式な市民としての身分は持たないままだ。何しろ、戸籍がないんだから。宿屋の主人夫妻かその親戚筋を親に仕立てて戸籍をつくってやるくらいなら、グラントリ―叔父の娘になってもっといい暮らしをさせてやったほうがいいじゃないか」

「宿屋の手伝いと傍系王族の娘と、どちらの暮らしがいいのか決めるのはアーラであるべきだった。なのにおまえは、アーラにゼファの都合がいいほうを押し付けたんだよ！」

ゼファードは言い返さなかった。自分の台詞が言い訳でしかなかったと、認めているようなものだ。

ジルフィスがにらみ続けていると、ゼファードは睫毛を伏せて視線をそらした。多くの物事をそつなくこなし、花街で遊ぶこともほとんどなく、感情をめつたに表に出さず、ジルフィスよりもよほど大人びた顔で日々過ごしているはずのゼファードが、ふいに年相応に見えた。

腹立ちをこれ以上ぶつけても、何にもならない。ジルフィスは立ち上がった。

「ゼファ。おまえはアーラに甘えているよ」

羞恥のためかそれとも救いようもなく侮辱されたと思ったのか、

ゼファードの目元にかつと血の気が上った。それでもジルフィスを振り返りはせず、無言でごぶしをにぎりしめている。

「グラントリーの家にアーラを入れるなら、貴族系統簿に戸籍を新しく作るより、ほかの方法もあるって知ってたか？」

ジルフィスの言葉にゼファードの睫毛が震えたが、まだこちらを向きはしない。ジルフィスは扉に歩み寄り、取っ手をにぎりしめた。「俺は、アーラを奥方に迎えてもいいと思ってたんだ」

今度こそ、ゼファードが振り向いてジルフィスを見た。目を見張り、こくりと喉が動く。

「もちろん、それはアーラがいい返事をくれたらの話さ。王位継承権を持たない俺なら、町娘を奥方にしたってうるさく咎めるやつはいない。物珍しいだろうがそれだけだ。俺はアーラを利用するでも恩に報いるでもなくて、そばにいて、アーラのためにできることがしなかった」

それなのに、
「それなのに兄妹だって？ しかも義兄妹じゃないときた」

血のつながりがなければ、ゼファードのエスコート相手役には適さないからだ。

「褒美といってクラレン金貨を放ったり、家名が名乗れないからって閉じこめたりするおまえのことだ。できる限りのことをするって言ったって、役目を終えたあとの彼女を幸せにできるか？ 王家とのつながりや地位を求めて砂糖にたかる蟻みたいに？ 王子の従姉妹？ に下衆がたかって、守れるのか聞きたいね」

ジルフィスはそれだけ言い置くと、廊下に出た。

兄として妹を守ることはできるだろう。だが、できることはそこまでだ。身分がつりあっていてこれといった障りがないならば、兄とはいえ妹への縁談を片っ端から壊すことはできない。そんなことをすれば敵を増やして攻撃される材料を量産するだけだ。

俺の奥方になれば、そんな心配はいっさいなくなるのに。

「ジル？」

突然の声に、しかも今考えていた人物の声が聞こえたことに驚いた。

顔を上げると、目の前にアーラが立っていた。宵の空のような、あざやかな藍色のガウンをまとって。

「ちようどよかった。殿下に見ていただけどうかと思ってきましたんだけど、ジルのほうがセンスよさそうだから。これ、明日着なきやいけないドレスの仮縫いな。どう思う？ 私はちよつと青があざやかすぎるんじゃないかと思うんだけど」

よい生地だ。レースは東部製の最高級品だし、裾にちりばめられたビーズの刺繍も嫌味にならない。仕立て屋がいい仕事をしている。ジルフィスはそれらのことを頭の隅で考えながら、アーラを見つめていた。

「たしか採寸、って」

「うん、私も最初は採寸って聞いてたのよ。でも夜会は明日だから、そんな悠長なことは言ってもらえないからって。採寸がすんだと思ったらあつという間にこの仮縫いが出来上がってきたの。お針子さんたちを総動員させたみたい。……やっぱり、ここにもう一枚黒か少し暗い色の生地をかぶせてもらったほうがいいわよね？」

「いや、すごく似合ってる。かわいいよ」

ジルフィスは本心を言ったのだが、アーラは当然のようにお世辞だと思っっているらしかった。

「ありがとうございます。男の人にほめられると、社交辞令でもうれしいわね。殿下なら私ではなくって、仕立て屋さんの腕前をほめられるんですよけど。……でも、ジルがそう言うってくれるなら、余計に布を足してもらうこともないわ。もったいないしね。仕立て屋さんに行くてくる」

そのままもどろろとする彼女を、ジルフィスは呼び止めた。

「アーラ」

「なに？」

褐色の瞳が、ジルフィスを見返している。

ゼファードのこと。末弟派のこと。この先のこと。胸の中で燃える前に蓋をするように言いわたされた、感情のこと。伝えたいことはたくさんあったはずなのに、ジルフィスの口から出てきた言葉は、これだけだった。

「……ダンスを、教えてあげるよ。必要だろうか？」

「ありがとう！ これをぬいで着替えたら、ぜひお願い。一曲ぐらいは踊れないと、おかしいものね。引き受けたからには、ジルフィスの妹としてはずかしくないようにきちんとしたいから」

アーラはにっこりした。それは感謝と不安と疲労と責任感がないまぜになった、泣きたくなるような笑顔だとジルフィスは思った。

23、物思い

執務室に取り残されて、ゼファードは呆然としていた。彼が生まれるよりも前からこの部屋にあった書斎机に手をつき、何とか椅子に戻る。

息をつくくと、耳の奥で脈打つ音とともに従兄の声がきこえた。

「グラントリーの家にアーラを入れるなら、貴族系統簿に戸籍を新しく作るより、ほかの方法もあるって知ってたか？」

はっと気がついて時計を見ると、ずいぶんのあいだぼんやりしていたようだった。ゼファードは額に手をあてて唇を噛んだ。

ジルフィスの台詞が耳から離れない。

「俺は、アーラを奥方に迎えてもいいと思ってたんだ」

普段なら陽気で、わざと軽薄さまでまとっている従兄が本気で怒ったのだ。しかもジルフィスの言葉はどれもまっとうで、間違っていないかった。

そうだ。責められるべきは俺だ。

物見部屋に閉じ込められたときも後悔したのに、なぜ同じようなことを繰り返してしまうのだろうか？

クオードのことがちらと脳裏をかすめたが、ゼファードはその影を振り払った。人のせいにするのはよくない。言い出したのはゼファード自身で、真実彼女が従姉妹の役を努めてくれれば都合がいいと望んだのだから。

末弟派を欺くために戸籍をととのえ、グラントリー公の娘としての過去を作り上げれば、彼女がこれから一生そのとおりに生きなければならぬことはわかっていた。それでも、期限なく彼女の物語りや話を聞けるようになればゼファードもうれしいし、大きな屋敷に住み、誠実で公明正大な傍系王族夫妻を両親とし、一流の料理人の腕による料理と一級の仕立て屋の手による衣装に囲まれるのは、あまねく一般平民のあこがれだろう……そう考えてしまったのだ。

あいつは、一般平民などではなかったのに。

今でも信じがたいことだが、異世から転がり込んだ娘なのだ。押収した帳面を調べた時点でセリスティンがそう結論し、何度も授業を受けるうちに彼女の話は真実だと断定されたのだ。

ゼファードはこれまで、さすらい人の語り手や吟遊詩人を呼んでその業を披露させたことはあつた。なかなか興味深いものもあつたし、執務の苦勞を紛らわせることができたのも事実だ。彼らは褒美をもらつて一様によるこび、もしくは更に吊り上げようとして頼みもしないのに追加のバラッドを歌つた。そして金貨を放れば、後腐れなく去つていった。

けれどもアーラはそうではなかった。宿屋の手伝い娘だと聞いていたのに、喜んで金貨を受け取るどころか金と業の価値について述べ、自分が披露した物語りへの代価が「多すぎる」と口答えをしたのだ。

彼女の物語りは面白く、おだやかな語りも冒険の場面での生き生きとした目の輝きも、耳に心地よい声もゼファードは気に入っていた。彼女と打ち解けてしゃべりいろいろな話で笑い合えるセリスティンやジルフィスを、うらやましいとも思った。けれども彼女はいつでも自身をわきまえていて、ゼファードには丁寧な口調を崩さないのだ。

そこまで思い返したとき、ゼファードは不意に気がついた。アラがジルフィスの妹になれば、ジルフィスのように自分と打ち解けて話すのも当然といえる。王子の従姉妹であれば、王子に軽口をたたいてもだれも不敬だとは思わない……。

それに。

父王の言葉が脳裏に響く。

「グラントリーの家に娘でもおれば、一も二もなくおまえと娶せたのだがな」

グラントリー叔父に娘がいれば　ジルフィスに姉妹がいれば。

王族間の婚姻なら、派閥びいきの貴族たちは表立って非難すること

はできない。

あいつが、妃候補に？

なりうると気がついて、混乱した。

ジルフィスは、アーラを奥方に迎えたかったのだと言った。「アーラを利用するでも恩に報いるでもなくて、そばにいて、アーラのためにできることがしたかった」と。

ジルフィスは、アーラを好いている。

懇意にしている花街の娘とは別の意味で。だからこそ、ゼファードとクオードが彼女をジルフィスの妹にする手続きを進めてしまったとき、あんなにも怒ったのだ。

自分はどうかだろう？

ほかにだれも聞く者はない。自分ひとりきりの執務室で、そつとつぶやいてみる。

「アーラ」

はじめて彼女の名を呼んだときの満足そうな、可笑しそうな微笑、故郷の文字を教えるときの懐かしそうなまなざし、慇懃な皮肉。思い返せばどれもゼファードの内側でざわざわとさざ波を起こす。だがそれが何なのかがわからない。ただ、幼い頃あこがれていた小間使いを慕う気持ちとはどこか違っていているような。

だが先ほどのジルフィスの厳しい叱責が浮かび、ゼファードの物思いを打ち消した。

「できる限りのことをするって言ったって、役目を終えたあとの彼女を幸せにできるか？ 王家とのつながりや地位を求めて砂糖にたかる蟻みたいに？ 王子の従姉妹？ に下衆がたかっても、守れるのか聞きたいね」

俺が妃に選べば、アーラを守れるだろうか。

しかしそんなことをジルフィスに言えば、それはアーラのためを思っただけでなく責任を果たした気になりたいだけの自分勝手さだと責められるだろう。

たとえ、責任を果たしたいからだけではなかったとしても。

24、ダンスの時間

ジルフィスがつれてきてくれた舞蹈室は想像していたよりせまく、がらんとしていた。

それでも壁の一面は総鏡張りで、照明が反射して明るく、奥行きがあるように錯覚させる。

部屋の隅にクモの巣が張っているのに気がついて、アーラは思わず眉をしかめた。

「ここは誰も使わないから、ドアを開けておいても見つかる心配はないよ」

クモの巣が張っているくらいだから、本当に使われていないのだろう。

ジルフィスはドアの下に燭台をもたせかけて、勝手に閉まらないようにしていた。女性慣れしているようで軽薄そうに見えるのに、実は律儀で気配りのできる人だということを、アーラは知っている。二人きりのとき密室にならないようドアを開け放しておくというやり方を、アーラは大学時代にゼミの先生から教わった。アーラ自身は、論文の添削をしてもらうときに先生と二人だけになってもまったく気にしなかった。けれど「気にする子がいるし、こういうのは誠意だからね」と言われて、なるほどと大いに納得したものだ。ドアを開けておいたなら叫べば声が外に聞こえるし、万が一のときに逃げられるという安心感が湧く。

セリステインはジルフィスの花街での武勇伝を面白おかしく聞かせてくれるが、優しく、さりげない気配りができるジルフィスが女性の人気を得るのは当然だと思える。

突っ立ったまま舞蹈室とジルフィスとを観察していたアーラに、彼はにっこり笑いかけた。

「音楽がないのが残念だけどね。リズムの取り方と一通りのステップを覚えれば、まあ、あとは何とかなるだろ」

「私の運動神経には期待しないでね。でも、この役を引き受けたからには、ジルや殿下に恥をかかせないように努力するから」

「アーラなら大丈夫だって」

あざやかな藍色のドレスは明日の朝一番に出来上がってくることで、アーラはすでに地味なワンピースに着替えていた。足もとも今は鹿革の短靴だが、本番では刺繍がびっしりとほどこされた、かかとの高い舞踏靴を履かなければいけないと思うと気が重い。

手招きをされて、アーラはジルフィスに言われるがまま鏡の前に立った。姿勢の注意を受け、構え方を教わる。長身のジルフィスと並ぶと、頭ひとつ近く違う自分の身長が恨めしい。

あと五センチ、あつたらな。

一時間ほど練習をして、普段使わない筋肉が悲鳴をあげ始めた頃、ジルフィスは休憩を入れてくれた。鏡にもたれて座り、アーラは膝をかかえた。

「夜会で一曲だけ踊ったら、おとなしく紳士淑女を見学することにするわ」

足を踏まないよう気をつけるだけでせいっぱいになりそうだ。

やるからにはそれなりにしてのけたいのに、あまりにも練習時間が足りない。

「そんなのもつたいたい。俺がリードするから、一緒に踊り続けていればいいさ。……兄妹がペアを組むのは、ぜんぜん不自然じゃないんだから」

すぐとなりで片膝を立て座っているジルフィスを、アーラはまじまじと見た。狐色の髪に金褐色の瞳、凛々しくもどこかあまやかな面立ちと、筆頭騎士の名にふさわしくしなやかに引き締まった長身は貴婦人たちの注目の的だろう。いくら妹を名乗るとはいえ、そんな人を自分が独占していてよいはずがない。

「ねえ、ジル」

「ん？」

「本当にごめんなさい。急にこんな世間知らずの妹ができて、迷惑

でしょう。いくら殿下がそうするように望まれたとはいえ、私はどうにか理由をつけてお断りすべきだったのかもしれない。こんなにお荷物で、ごめんなさい」

アーラが頭を下げると、ジルフィスの手のひらがそっとアーラの髪をなでた。

「それはアーラがあやまることじゃないよ。あいつらが勝手に決めてアーラに押し付けたんだから。むしろ、ゼファとクオードがアーラにあやまるべきだ」

アーラが顔を上げると、こちらを見ているジルフィスは本気でゼファードたちのことを怒っているようだった。

「あいつらが考えた君の過去だってむちゃくちゃなんだ。聞いたかい?」

「ううん、まだ。殿下があとで教えてくださるらしいけど」

ジルフィスは怒りを鎮めようとするように大きく息をついて、アーラに向きなあった。

「今回つくられる戸籍では、アーラの年齢は二十歳だ」

「は、はたち?」

思わず耳を疑った。成人式など、遠い思い出になりつつあるというのに。

「どうして? たしかにそれは無理があるわ。六歳も年齢詐称だなんて!」

「いや、アーラなら充分二十歳でいける。十八といっても不自然じゃないさ」

たしかにグランヴィールの人々の感覚では、幾分彫りの浅い顔立ちのアーラは幼く見える、らしい。店を手伝いだしたばかりのころは、春の芽吹き亭の常連さんにも十代だと思われていたのだ。

「戸籍、二十六歳じゃ駄目なの?」

「親父は愛妻家なんだ。貴族の常識では愛妾愛人が何人いてもおかしくないが、親父はおふくろ以外に見向きもしない。でも、親父の金髪とおふくろのブルネットではアーラのような髪色は生まれない。

つまり、正妻のおふくろ以外の女に生ませた子どもが君だという設定になる」

「でも、そういうことがありえないくらいの愛妻家でいらっしやるんでしょ？」

「ああ。だから、親父の精神状態が普通じゃなかったときに……まあ、そういうことがあったことにするわけだ」

ジルフィスの視線がわずかにさまよったのを見てとって、アーラは首をかしげた。

「誠実で実直を人型にしたようだといわれるグラントリー公でも、そのようなお心持ちになられたことがあるの？」

「あるんだ。二十年前、俺が七つになったばかりのころ。俺が人攫いにあつたとき、親父もおふくろも半狂乱だったらしい。ゼファいわく、そのときにご主人様をおなぐさめしようとした女中とのあいだにできた子が、アーラなんだってさ」

アーラは自分が騙るべき荒唐無稽な過去よりも、「人攫いにあつた」というジルフィスの事実のほうが衝撃だった。

「ジルはそのとき攫われて、大丈夫だったの？」

「大丈夫だったから、ここにこうしているんじゃないか」

彼の手がアーラの髪をくしゃくしゃにした。その手のひらは頭から頬に下りて、ジルフィスは優しいまなざしでこちらを見つめていた。

「さて、と。練習を再開するか」

「……うん」

つとめて軽い口調で話し、安心させようとしてくれている彼のおかげで、アーラはあたたかい気持ちになった。

「お兄さんがジルで本当によかった。……クオードとかじゃなくて

そう告げるとジルフィスはうれしそうに、それでいてどこか気まぐすそうに微笑んだ。

25、作られた過去

「うん、だいじょうぶだ。これだけ踊れば、ぜんぜんはずかしくないよ」

努力の甲斐あって、アーラのダンスにもついにジルフィスのおすみつきがもらえた。基本中の基本ができるようになったただけだが、できないよりはいいに決まっている。

アーラは練習を終えて、ジルフィスと共にゼファードの執務室を訪れた。明日から演じなければならぬ？ グラントリー公の娘？ について、ぼろが出ぬようその背景設定を詳しく聞かためた。

顔を合わせたジルフィスとゼファードのあいだに妙な緊張感がただよつたのをアーラは感じ取ったものの、彼らはそれについて何も言わなかった。

ゼファードは書類を裁いていた手をとめて、机の上で指を組んだ。「適当に座れ。クッションがほしかったら、そっちにあるのを勝手に使っいいい」

アーラは手近にあったスツールに腰かけようとしたが、ジルフィスに腕を引かれて窓際の長椅子と一緒に座ることになった。ゼファードは不機嫌に鼻を鳴らして、アーラたちに向きなおった。

「さて。アーラ・グラントリーについてだが」

前置きなく、単刀直入に本題に入った。今度はジルフィスが面白くなさそうに鼻を鳴らす。ゼファードはそれを無視して続けた。

「まず、王家のことから話しておこう。俺の父上　グランヴィール王には姉が一人と、弟が二人いる。姉の名はカダリア、上の弟はサリアン、そして父上と十五も年が離れた末弟ヴァーデイス。俺ではなくこのヴァーデイスを次の王に据えようとしているのが末弟派で、水面下でだが俺たちと対立している。カダリア伯母は三十年も前に外つ国に嫁ぎ、サリアン叔父は婚姻と同時にグラントリーを家名として、王位継承権を放棄した」

「王弟サリアン・グラントリーは幸せな結婚をして一子をもうけたが、その息子ジルフィスが七歳になったとき、事件は起きた」

ゼファードのあとをひきとって、ジルフィスが幼い頃自分の身の上で起きたできごとを他人事のように語った。

「息子がさらわれたんだ。身代金の要求も、脅迫も一切なかった。

グラントリー家は天地をひっくり返したかのような混乱に陥り、王弟閣下の一人息子を探し回った。だが犯人の目星はつかず、息子の居場所の手がかりすら見つからなかった」

「そのときの叔父上の様子は、尋常ではなかったそうだ」
ゼファードが細く息をつく。

「公明正大で人望厚い叔父上が見る影もなくやつれ、憔悴しきっていたという。奥方はシヨックと心労のあまり倒れて病床についていた。……この時期、南東部出身の娘がひとり、女中として奉公していた。これは作りごとではなく、事実だ」

そしてたちまち、群青の瞳に燭台の火が映る。

「この女中がこれから、アーラ・グラントリーの母親になる」

冷静に燃えているゼファードのまなざしが痛かった。アーラは不意に、自分が震えていることに気がついた。こぶしをにぎって震えをこらえようとすると、ジルフィスの左手がアーラの右のこぶしを包み込んでくれた。彼の横顔を見ると、ジルフィスが一瞬微笑んだ。それを咎めるような視線をゼファードがよこした。

「女中の名前はアリザ。病を得て、若くしてグラントリー公邸で死んでいる。身寄りがなく、屋敷に来たときに紹介状は持っていたがたしかな素性は不明だ。さすらい人のように籍をのこさない、流浪の身だったのかもしれない。……黒髪に濃い色の瞳をした女中だったと聞いたから、俺は南の海の民だったんじゃないかと踏んでいるんだが」

「南の海の、民？」

アーラが聞き返すと、ジルフィスがうなずいた。

「ゼファアのお母さんがそのお姫様だったんだよ。グランヴィール

人よりは彫りの浅い顔貌で、華奢で小柄な人が多い。真珠や珊瑚をとって細工物にするのがうまい、手先の器用な民だ」

振り向くとゼファードと目が合った。黒い髪、深い海の色の双眸。バルコニーで国民に手をふっていた国王陛下とは異なる髪と瞳の色。「おまえの面立ちに近いんだ。ありがたいことに」

「肌の色はもう少し濃いんだけどな。海の民だから日焼けしているだけかもしれないけど」

その女中アリザと精神的に追いつめられていたグラントリー公のあいだに交わされた、たった一夜によってアーラ・グラントリーが生まれることになる、ゼファードは言った。

グラントリー公は生まれてきた娘をおのれの子と認め、外聞をはばかって屋敷の中でひそかに育てた。アリザは間もなく亡くなるが、アーラは父と奥方、兄ジルフィスらによって何不自由なく成長する。

しかし二十歳を迎え、外の世間を自分の目で見たくなつたアーラは家族と使用人たちの目を盗んで屋敷を飛び出す。家出を決行したはいいが、そこは世間知らずの箱入り娘、右も左もわからずにいるところを親切な宿屋の主人夫妻に拾われる。宿屋での暮らしが気に入り、手伝いを始め、そうこうしているうちに一年がたった。偶然兄のジルフィスが王子ゼファードの語り手を連れてくるようにとの命を受けて宿屋を訪ねたところ、近所で評判の語り手とは自分の妹アーラだった……。

「そこで兄妹の感動の再会、今に至るといっわけだ」

なんともいえない心持ちで、アーラはゼファードを見返した。

「うかがったお話は理解しましたし、覚えました。けれどとてつもなすぎで、私の身の上にするには無理があるように思われるのです」

「異界から転がり落ちたというよりは現実的だろう」

ゼファードの返事はにべもなかった。……たしかにその通りのだが。

「人に出自を聞かれたら、グラントリーの娘ですと答えればいい。

しつこく母親について訊かれたら今の話をもっともらしく匂わせてやれ。あとは、俺とジルでうるさくたかってくる八工を追い散らす」
アーラは肩をすくめた。

困難だとわかりきっていたことだが、話を聞くたびに責任と無謀さの重みがのしかかってくる。だからといって、いまさら投げ出すわけにはいかない。くじけないようアーラは腹の底に力を入れた。「これでおまえの過去の話は終わりだ。おまえを部屋に帰す前に、もう一つやっておくことがある」

うんざりした気分が表情に出ないように気をつけながら顔を上げると、ゼファードがすぐ目の前まで歩み寄ってきていた。

「あいさつの流儀の練習だ」

あいていた左手をとられ、指の関節に軽く唇が押しあてられた。ひゅつと、ジルフィスが息を飲む音がする。

西洋の絵画や絵本の挿絵によくある場面なのに、ゼファードが実践するとまるで冗談のようだと、アーラは啞然としたまま頭の隅で思った。

26、あいさつの流儀

はたから眺めたならおそろく、彼は冗談どころか、流れるような動作で女性の手に口付ける「王子らしい王子」に見えるのだろう。

相手が貴婦人ではなくて私なのが、滑稽だけど。

だが、彼は女性の名を呼ぶことすら避けて通るゼファードなのだ。臆面もなく慣れた様子でふるまうこのさまは、冗談でなければ何だろう？

アーラはぼかんとあけてしまっていた口をかるうじて閉じて、唇を離れたばかりのゼファードを見つめた。

「殿下。ひとつ、うかがいましてもよろしいでしょうか」

ゼファードは長い睫毛をまばたいて、アーラを見返した。

「なんだ？」

「女性の名を呼ぶのも恥ずかしいとおっしゃる殿下が、手に口付けるのはなんともお思いにならないのですか」

「そうはいつでも、これがあいさつの流儀なんだ。ふつう紳士は淑女の手をとって口付け、淑女はあいているほうの手を自分の胸において膝を曲げる。親しくない間柄なら、紳士はこぶしを腹につけて頭を下げ、淑女は両手をおろしたままだ膝を曲げる」

彼にしてみればアーラが疑問に思うことが疑問らしかった。

「それから、その持ってまわるような堅苦しい言葉遣いはやめたほうがいいな。ジルの妹なら、幼い頃から俺と面識があってもいいはずだ。兄に倣ってもっとくだけた話し方をしろ。ジルはくだけすぎているくらいがあるが」

「ご命令ですか？」

アーラが思わず顔をしかめて訊くと、ゼファードはそうされたことが意外だったようできよんとしている。

「おまえはもうずいぶん前から、ジルやセリスとは親しいふうにしやべっているじゃないか。どうしてそれが俺にはだめなんだ？」

「殿下はジルやセリスとは違って第一位の継承権をお持ちの王子でいらつしやいます。はじめというものがありませんでしよう?」

「だがその王子の従姉妹になるんだぞ、おまえは」

それはたしかにそうなのだ。アーラはため息をついて、こめかみをもんだ。

「ご身分のある女性は、たとえ血縁であろうとくだけた話し方などなさらないのではないですか?」

「血縁の女性がないからわからないな、俺には」

ゼファードの答えを聞いて、アーラは気まづくなった。そういえば母君である王妃はずいぶん前に亡くなっている。傷つけるようなことを言ってしまったのだろうか。

助けを求めるような気持ちで隣のジルフィスを見上げると、優しく肩をたたかれた。

「ゼファ、おまえはもつとアーラの気持ちを汲むべきだ。突然おまえの従姉妹にされてただでさえ混乱してるのに、アーラは引き受けたからにはちゃんとやろうって、努力してるんだぞ。ダンスの練習もしたし、勝手に捏造された過去も覚えた。それなのにゼファがああしろこうしろって次から次へと言うんじゃ、いくら人間がよくてできるアーラだってたまらないに決まってるだろ」

ジルフィスに指摘され、ゼファードは大いに困惑したらしかった。「俺は、ただ……」

群青の瞳は勢いを失って、気まづそうにアーラを見ている。

言葉も手のひらもあたたかいジルフィスとは異なり、王子の態度にも口調にも思いやりは感じられないが、彼にはまったく悪気がないということはアーラにもわかっていていた。

不器用で損な性格なんだ、このゼファード殿下は。

政務には至極真面目で平民出身の官吏たちからの信望も厚いようだが、ジルフィスとクオード、それにセリスティンのほかに?友人?の姿を見たことがない。一段上のところから指示をし、王族にふさわしい情けをかけ、鶴の一声を発すれば事足りたゼファードは、

きつと人づきあいが下手なのだ。

ゼファードはゼファードなりに必死に言うべき言葉を選んでいろいろで、アーラは辛抱強く待った。

ようやく、彼は口を開いた。

「……俺はただ、おまえともっと打ち解けて話がしたいだけだ。おまえが俺をうらみに思っているなら、いくらでも詫びよう。それに、俺も……おまえのことを名前で呼べるように、努力する」

「へえ？」

ジルフィスが挑発的な声を上げた。

「だからアーラにも『くだけて話すよう努力しろ』って、命令するの？」

「ちがう。そうじゃない」

ゼファードはジルフィスをにらんでから、アーラに目を向けて、言った。

「本当の従姉妹のように、親しく俺と話してくれるか？ アーラには、殿下ではなくて、ゼファと呼んでほしいんだ」

勇気を振り絞りでもしたかのように語尾が震えたのが可笑しかったが、アーラは笑わない努力をした。それでも最後にはやはり、少し笑ってしまった。

「わかったわ」

ゼファードは明らかにほっとしたようで、表情がゆるんだ。ジルフィスは面白くなさそうに腕組みをする。今日のジルフィスは、従弟を見る目がどこことなく冷たい。

この二人、知らないあいだに喧嘩でもしたのかもしれない。

今度はジルフィスもまじえて、さまざまな場面におけるあいさつのやりかたを教わった。国王陛下への礼、式典で頭を下げる角度、女性同士でかわす礼、年長者に対するお辞儀の深さ、などなど。

それが終わるとアーラとジルフィスはゼファードのもとから退室し、アーラは明日に備えて早々に眠ることにした。先ほど練習したダンスからグラントリー公の娘としての過去、そして今習ったあい

さつの仕方が頭の中でぐるぐる渦を巻いている。目が冴えてしまわないといいのだが。

「ねえ、ジル」

あてがわれた客室の前で、アーラはジルフィスにたずねた。

「ジルと殿下って、喧嘩でもしたの？」

「どうして？」

「なんだか、様子がおかしかったから」

ジルフィスは苦笑いをしただけで何も教えてはくれなかった。そのままアーラの手をとり、中指と薬指の関節にゆっくりと口づけた。

「おやすみ、アーラ。明日の心配はしなくていいよ。俺がついてる」

「うん……ありがとう。おやすみなさい、ジル」

アーラも胸に手を当てて膝を曲げて応じた。淑女の礼だ。

ジルフィスは微笑んで、今度は関節ではなくアーラの指先にそつと唇で触れた。そのまま振り返らずに彼が帰ってしまったので、指先に口付けるのはどんなあいさつの意味なのか、アーラはこの日わからずじまいだった。

27、夜会

胸をちりちりとかきたてる弦楽の調べ。金管が時に小鳥のように、時に森のため息のように、はなやかに穏やかにいるどりゆたかな音色をふりまく。

白と黒の大理石で抽象的な羅針盤がえがかれたフロアでは、グランヴィール中の紳士淑女が衣装と歓談の花を咲かせていた。

ついに、？ゼファード王子殿下の妃候補を選ぶための夜会？が始まったのだ。

ジルフィスは許されるものなら、今すぐ職務を放棄してアーラのところへとすっ飛んでいきたかった。アーラは無事入場を果たし、王子のエスコート相手という大役の第一幕を終えて、今はシャンパングラスを手にはほっと一息ついているように見える。

星が輝く宵の空のような藍色のドレスが、色白のアーラの肌に素晴らしく似合っていた。普段ならひとつに束ねるか背に流しているかの黒髪は、心得ある女官の手によって生まれつきの巻き毛のように軽やかに波打っている。それを左耳の上でゆるくまとめ、白と青の生花が飾られていた。

ただでさえ年齢よりも若く見える丸顔の彼女だが、今宵は薄桃色の紅を唇にのせられて、それがまた初々しかった。ふだんアーラが紅をつけているところを見ないジルフィスの目には、なおさらだ。彼女が心配する必要などなく、充分二十歳のデビュタントで通じるだろう。

似合ってるよって、夜会の前に言いたかったな。

ついもらしそうになるため息を、ひそかに胸のうちで消化する。

筆頭騎士であるジルフィスは、近衛隊長とともに王の左右に控えていなければならなかった。グランヴィール王は雛壇の一番上の座に深く腰かけてくつろぎ、息子と、突如出現した姪の様子をそれとなく眺めている。しばらくすればクオードと交代になるが、それま

でに流れる時間が鉛のように重く、遅く感じられた。

ゼファのやつ、アーラをいやな目にあわせたらしばいてやる。

ジルフィスが雞壇から見ているかぎり、ゼファードはあいさつに訪れる人々に思いのほかきちんとアーラを紹介しているようだった。アーラも生真面目に、昨日習ったとおりの流儀で応じ、切り抜けてきた。彼女が休める時間が、少しでも長いといいのだが、そうジルフィスが考えていたそのとき。向こうのテーブルからゼファードとアーラを指して、新たな客がやってこようとしているのが見えた。

「ジルフィス、めずらしく落ち着きがないな」

ささやき声にぎくりとした。平静をよそおってうかがうと、グランヴィール王が灰色の瞳をきらめかせてにやりと笑んでいる。

「？妹？のことが、心配か？」

「デビユタントの妹を心配しない兄など、いないでしょう」

ジルフィスが答えると、王は愉快そうにのどの奥を鳴らした。

アーラの経緯については、あらかじめ王に報告してある。グランヴィール王は、息子がひそかに手もとに留めたときからその語り手に興味を持っていた。ジルフィスがどんなに彼女が優れているかを何度となく熱く報告したためか、王は降ってわいたような姪の出現を面白がっているようだ。

「ずいぶんと気に入っているんだな。見たところ、おぬしがこれまで咲かせてきた恋の噂の相手にはとうてい及ばぬのではないか？」

「たいした美人でもないようだ」

からかわれているとわかっていているものの、ジルフィスは面白くなかった。何もアーラが美人だから気に入ったわけではない。

「かわいいんですよ、アーラは。鼻先より長い付け睫毛をしてきつい香水をぶんぶん匂わせている中身の無いご令嬢どもとはわけが違います。彼女はとても頭がよくて、心配りができて、でも心のよりどころがないから……守りたくなるんです」

「ほおっ？」

グランヴィール王の片眉が上がる。

「どこの馬の骨とも知れない娘なのにか？」

「彼女はグラントリーの娘ですよ、陛下」

「知っている。だが、私が許したわけではない。ゼファードとサリアンが勝手に決めたことだ。あの娘が何か不都合な始末を犯した場合には、だれがどう責任を取る？」

ジルフィスはわずかに首をすくめた。

「アーラに限って、取り返しのつかない過ちをしでかすことはないでしょう。しかし万が一そんなことがあったなら、俺が喜んで責任をとりますよ。二人仲良く追放でもしてくださって結構です。ただそうなれば、ゼファも陛下も筆頭騎士を失うことになりますよ」

王は可笑しそうに目を細め、息子と共にいる？急ごしらえの姪？を見た。

「とんだ？兄馬鹿？だな」

「なんとでもおっしやればいい」

「あの娘に、そんなに価値があるのかな？」

王の目に皮肉めいた色が浮かぶ。

「ヴァーデイス側に見れば、つつき甲斐のある材料ができたとほくそ笑んでいることだろう」

「彼女は、ヴァーデイス殿下に対抗する力にもなり得ます」

そう言い返したい気持ちを、ジルフィスは答えた。アーラがゼファードやセリスティンに異世の文字を教えているという事実は、王にも知らせていない。

グランヴィール王が末弟ヴァーデイスではなく、息子のゼファードを跡継ぎにしたいと考えているのは間違いなかった。しかしゼファードを全面的に支援しているかといえば、そうではない。王と末弟の兄弟仲もはたから見て麗しいとは到底いえないが、息子のために弟を廃そうという動きはなかった。ゼファードがおのれの裁量で対抗勢力を抑えられぬのなら、王にふさわしい器ではないと言いたいのもかもしれない。

「クオードが来たぞ。ジルフィス、待ちに待った交代の時間だ」

王は笑いを噛み殺しながらジルフィスに告げた。ジルフィスは何も言わなかった。ただ王に臣下の礼をとって頭を下げ、クオードの肩をたたいて舞壇から下りた。

人ごみがうらめしい。顔を知っている令嬢に失礼にならない程度に軽くあいさつし、おのれの魅力を知り尽くしている未亡人の流し目を受け流し、ジルフィスは急いだ。

人々の歓談の輪を抜けると、ようやくアーラの姿が見えた。先ほどの客への紹介はすんだようで、アーラはゼファードと何やら小声で話している。

二人に声をかけようとしたそのとき、突如楽団がはなやかな調べを奏で出した。ダンスのための楽曲だ。

フロアにひしめいていた人々のうち、年長者は左右の壁際へと割れ、若者は中央に残って男女で向かい合った。

ゼファードはごく自然にアーラの手をとった。ジルフィスがどうしようかと考える間もなくダンスは始まり、ペアを組んだつもりもないのに、流行のガウンを隙なく着こなし全身に気合がみなぎっているどこぞの令嬢が彼の手を捕らえていた。

ダンスは一区切りごとにパートナーを変える。ジルフィスは次の区切りでアーラにたどりつけるよう、進行方向の判断に神経を集中した。

グランヴィールにおける夜会には、アーラが映画や絵画で見たことのある近世ヨーロッパ社交会ほどのきらびやかさはなかった。ベルサイユ宮殿の鏡の間のような目まぐるしく回すかもしれないと危ぶんでいた彼女は、ほっとした。

壁は金箔の黄金色ではなく象牙色で、鏡がそこかしこに張られているわけでも、神話の神々が極彩色で描かれているわけでもない。シャンデリアもダイヤモンドが束になっっているような代物ではなく、真鍮の台座にキャンドルが並んでいるだけだ。

しつらははなやかだが、異常なほどの装飾はない。上流階級が搾取し過剰に飾り、平民が飢えていたというアーラの知る世界史とは違い、グランヴィールの王はある程度わかまえているようだった。一言で言えば趣味がよいのだろう。しかしせっかくの音楽もご馳走も蜂蜜色のシャンパンも、アーラは満足に味わえはしなかった。

疲れた。不毛だ。めんどくさい。

外見はどうか繕うことができても、本心は偽れなかった。アーラは心の中で嘆息した。

目が痛い。足が痛い。人口密度が異様に高い。皆無駄に口が回る。それなのに一つとして臣民のための実のある話はない。……まったくなんて非生産的なもの！

次から次へと、客人が津波のようにアーラたちの下へ押し寄せてきた。目の前においしそうに輝いている料理を横目に、アーラは顔の筋肉を酷使して微笑みを浮かべ、サテンの手袋をしているとはいえ手への口付けを初対面の男性にも許さなくてはならなかった。ゼファードが男性客の連れの女性の手をとって口付けたなら、アーラもそれを許さなくては大変な失礼になる。

はやくお風呂に入って寝たいわ。

客人の襲来をいち早く察知できるようあたりに気を配りつつ、ア

ーラは胸のうちでばやいた。無論、そんなことができるはずもないとわかりきっているのだが。

この夜会はゼファードのためのものだが、おのずと王子が従姉妹をお披露目する場にもなってしまった。昨日ベッドにはいる前に覚悟は決めたつもりだったのに、アーラは早くも崩れかけそうな自身の限界を叱咤し、保とうとした。

甘いシャンパンをちびりちびりとなめながら、アーラは傍らのゼファードを見た。当然このような夜会に慣れているらしい王子殿下は堂々としていて、余裕すら感じられる。

「疲れたか？」

唐突に訊かれて、アーラは反射的に答えてしまった。

「いいえ、大丈夫」

皮肉の一つでも言えればよかったのだが、ゼファードとは違い、あいにく今のアーラはそのような余裕を持ち合わせていない。虚勢を張り、虚構の笑顔を貼り付けて、虚像の姫君を演じるだけでせいっぱいだった。

来る人来る人、誰もがアーラに興味津々という思いを懸命に隠そうとして、失敗していた。アーラを不躰にならないよう　しかし充分アーラは値踏みされているのを感じた　観察しながら近づいてきた客人たちは、まずゼファード王子に懇慫に挨拶をした。貴族社会など知る由もないアーラが聞いてもありませんに聞こえる陳腐なものだ。その後さりげなさを装って（もちろんそのさりげなさがわざとらしかった）、「このお美しく可憐なご令嬢はどなたですか」と問うのだ。

お美しく可憐？　お世辞にもならなくて虫酸が走るわ。もう少し独創性があるお世辞とわからない褒め言葉を考えてみなさいよ。

月並みな美辞麗句に辟易しながら笑顔を保ち続けるのは、至難の業だった。だがなんとか、アーラはこれまでそれをやり遂げていた。引き受けたこと、自分がやり遂げると決めたことを途中で投げ出す

のは性に合わない。胸の内側でどんなに愚痴をこぼそうが、相手を罵倒しようが、表面はそれなりにつくろって自身が及第点を出せるところまでもっていくのが彼女だった。

でもさすがに、疲れが顔に出始めたかもしれない。

何しろ、今日は朝から夕方まで丸々支度に費やさねばならなかったのだ。

明朝一番にできあがってきたガウンの試着のために叩き起こされ、鯨骨入りコルセットをつけられそうになったところを頑として拒んだ。渋る女官に布製の胴着しかつけないと宣言したものの、それでも胃腸がよじれるかと思うほど締めあげられた。胴着をいつになく強く締められたせいで相対的に胸周りが大きくなり、きつくなってしまうたガウンの襟元をなおしてもらわねばならなかった。

試着の後は、語り手として初めて王城に連れてこられた日のように、洗濯物のごとく洗われた。髪をとかさされ、全身に花の匂いがするクリームをすりこまれ、爪が磨かれた。アーラは、夜会やパーティーのたびにこのような扱いを受けるのだろう世のご令嬢に心から同情した。そしてすぐに自分もそうなる運命だと思い出して、気が遠くなった。

着付けと化粧、髪結いがすみ、出かける前からアーラはすでにげっそりした心持ちだった。それでもゼファードと最後の打ち合わせをし、表情を放棄したい顔の筋肉に鞭打って、なんとか微笑みらしものを浮かべて入場を果たしたのだ。

国王陛下に拝謁し、遠目ながらこれから戸籍上？実の親？となるグラントリー公に目線で会釈をし、十組ほどの客と挨拶を交わした。……疲れはらずだわ。

シャンパンの甘さに、思わずほうつと息がもれる。その気配を察して、ゼファードは「疲れたか？」と訊いたのだろつ。

アーラは「いいえ」と答えた端から、目を閉じてこめかみをもんだ。読書が趣味のおかげで目が疲れやすく、視力は決まっていはいえないが、裸眼でも生活に支障はない。眼鏡が自分に必要ではな

いことに、こちらへきてからアーラは何度となく感謝した。グランヴィールにも眼鏡は存在するが、とても高価なのだ。

「目が痛いのか？」

ゼファードの口調が、思いのほか心配そうだった。

「目が疲れただけよ。着飾った人たちが視界でちかちかするの。夜会って、いつもこんなふうなの？」

「こんなふうだな」

アーラはげんなりした。

「気が滅入るわね」

「ふつう、令嬢というものは夜会では気が浮き立つらしいぞ」

「あいにく、私は生粋のご令嬢ではございませんので」

小声で答えると、ゼファードの唇の端がやや持ち上がった。

「皮肉が言えるだけの元気は出てきたか」

アーラが肩をすくめたとき、楽団がこれまでと違った音色を奏でた。だした。

「ダンスが始まる。練習の成果を見せろよ」

年長の紳士淑女は波のように壁際へと引いてゆき、中央フロアには若者と、年齢不詳の若々しい男女が残された。

緊張に体をこわばらせながら、アーラはゼファードと踊った。想像していたよりもゼファードのダンスが上手いことにアーラは驚いた。

「肩の力をぬくんだ。手首も硬い。男がよほどの下手じゃない限り、素直にリードされて踊ればいい」

そうはいわれても付け焼刃のアーラにとって、ダンスについていだけで神経も体力も削り取られた。

楽曲の区切りがついたとたん、ゼファードが目であなづいたかと思つとアーラのとなりにいた女性の手をとった。と同時にアーラの前に新たな男性が現れ、まごつく間もなく手と肩に触れられた。パートナーを次々に変えて踊らなくてはならないのだ。

「ジル、どこ？」

練習のとき、一緒に踊り続けなければならないといってくれたジルフィスの姿を探したが、見つからない。ゼファードも紳士淑女の中にまぎれてしまった。

ようやく楽曲がダンスの終わりを告げて、アーラはゼファードもジルフィスも見つけることができなかった。さすがに心細くなつて、談笑している人々から離れ壁際に寄る。

自分からすすんで二人を見つけないほど、ガウンの裾さばきにも人への応対にも自信がなかった。下手に行動を起こして迷惑をかけぬように、おとなしく待っていたほうがいいだろう。

寂しさと心もとなさが出てしまわぬように、なけなしの気合をかき集めて表情を引き締め、アーラはたたずんでいた。

一人のときに、誰からも話しかけられませんが、祈ったそばから、声をかけられた。

「アーラじゃないか！」

喉元まで飛び上がった心臓をおさえながら振り返ると、そこにはセリスティンが立っていた。

夜会のために正装したセリスティン・ヴァレンは、頭からつま先まですべてが完璧だった。一つに束ねた銀髪が濃紺のヴェストコートにかかり、上着に留めた準貴族証とともにきらめいている。研究者らしく衣装の色味は大人しくまとめ、そのかわり靴の留め金に小さな宝石をつけている。アーラは以前彼が商家の生まれで、首席で学院を出たことにより準貴族の身分を賜ったのだと聞いていたが、生まれつきの貴族よりもよほど立派に見えると思った。

声の主が彼だったことに心からほっとする。しかし安堵した直後、彼に少女が寄りそっているのを見とめてアーラは小さく息をのんだ。「いやあすばらしいよアーラ！ 化けるもんだね。いつも地味な格好してるものだから、見違えたよ。あのへんでたむろってるおばさんたちみたいなければしいなりをしるとはいわれないからさ、君も普段もうちよつとかわいい服着たら？ 女の子は清く正しく着飾るべきだ。目の保養になる。……ところで殿下やジルはどこ？」

まくし立てられてアーラはたじろいだ。正直に、ゼファードとはぐれてしまったこととジルフィスは筆頭騎士の務めが終わらないのかフロアで見かけていないことを話した。セリスティンは形のない鼻を荒っぽく鳴らし、つんと顎をあげて憤った。

「まったく、エスコート相手をほっぽつといて殿下はどこをほつき歩いているんだ！ 殿下のくせに紳士の風上にも置けないよ。ジルもジルだ、かわいい妹を一人にしたら飢えた野郎がうぞうぞ寄って来るってことくらいわかってるだろうに」

「ねえセリス。ところで、そちらのおかたは？」

焦れてアーラがたずねると、「ああこれ？」と彼は気軽に傍らの少女を指差した。

「そうか。アーラには紹介したことなかったつけね。えー……では、アーラ嬢、これは付属研究院高等研究員付助手にして僕のフィアンセのオルディア・クレーベ。オルディア、こちらが噂の、ゼファの従姉妹にしてジルの妹、今宵の夜会のひそかなる華、アーラ・グラントリー嬢だよ」

「お会いできまして光栄ですわ、アーラ様」

オルディア・クレーベと紹介された少女は、アーラに臣民の礼をとった。貴族ではないのだ。

この子が、オルディア。セリスのフィアンセ。

じろじろ見るようではいけない。なめるように見られる不快感は、今夜だけですでに滅入るほど実感している。アーラはおのれを律して、あわてて視線を落とした。それでも少女の美しさと容姿は網膜に焼きついていた。

オルディアは、絶世の美貌のセリスティンと並び立つても霞まぬ美少女だった。大きな瞳はぬばたまの黒で、間違いなく生来のものらしい睫毛は驚くほど長い。ふわふわと波打つ黒い巻き毛はたつぷり垂れ、一部編みこんだところに赤い花が挿してある。身の丈は小柄だがはつきりした顔立ちと目の輝きは、気の強さと聡明さをうかがわせた。

そして何よりアーラにとって印象的だったのは、彼女の肌の色だ。多くのグランヴィールの人々に比べて色が濃い。熟れる前のオリブのような、濃い蜂蜜のような、美しい黄褐色。浅黒いともいえるが、おそらく日焼けとは違う。深い襟ぐりからのぞく豊かな胸も華奢な肩もすべらかなオリブ色で、全身が黄金や琥珀でできているかのようだ。

アーラの戸惑いを察したのか、それともこのように見られるのに慣れてしまったのか、オルディアはにこりと笑った。皮肉の笑みだ。「これでもわたくし、グランヴィールの市民権を持っていましたよ。ちゃんと戸籍もあります。それでも、皆様やはりこの肌に驚かれますわ。レモン水を塗ると白くなれると聞きましたのに、とんと効果

が出ませんの」

「つつかかるなよコルディア。アーラは君をさげすんでるわけじゃないんだ。アーラは殿下にとって降ってわいた賜りものであって、腐った卵みたいに香水臭さを撒き散らすご令嬢じゃないんだよ。むしろ君たちは？同じ？なんだから、仲良くやれるに決まってる」

同じ？ なにが？

コルディアも意味するところがわからなかったらしく、愛らしく小首を傾げ、セリスティンとアーラを見比べた。アーラはセリスティンが口をすべらしたのか、わざとコルディアにアーラの正体を匂わせたのかわかりかねて、はらはらしていた。

やがてコルディアは一人で納得したようだった。

「もしかして、彼女もユンナの？」

「シッ！」

セリスティンが唇の前に人さし指を立てる。目つきはするどくなり、彼は狼のようにすばやく周囲をうかがった。

「そういうことは、わかってもこういうところで口にしちゃいけない。後日時間をつくって、ちゃんと種明かしをしよう。きっと君たちはいい友達になるよ。アーラも知り合いが野郎ばかりでつまらなかったらどう？」

アーラはコルディアを見た。コルディアも大きな目でアーラを見ていた。とても美しいのになにやら事情を抱えているらしいこの少女のことを、アーラはもつと知りたいと思った。

けれども、今宵それはかなわなかった。

突然、セリスティンの表情がけわしくなった。眉間に皺が三本も刻まれている。

「どうしたの？」

「厄介なやつが来るよ」

アーラが彼の視線の先をたどると、若い男が一人、こちらへ近づいてくるところだった。コルディアも眉根を寄せてセリスティンの腕をとり、セリスティンはわずかに歯軋りした。アーラには、近づ

いてきた若者が貴族で、どうやらありがたくない客らしいということくらいしかわからなかった。

「おやおやセリスティン・ヴァレン、王子殿下の従姉妹の姫君の前で鉢合わせるとは奇遇だね」

若い男は癪に障る笑みを浮かべてそう言った。アーラの本能が「こいつはろくでもないやつ」だと告げている。

「姫君へのあいさつは終わったかい？ それならお次は僕にゆずっておくれ。僕もこの美しい姫君にお見知りおきいただきたいのでね」
セリスティンは殴りかかりでもしそうなほど険悪な表情で、コルディアを伴ってアーラのそばから去っていった。準貴族のセリスティンは宮廷のルールとして、貴族の紳士が現れたなら快くその場を譲らなければならぬのだ。アーラは海に放り出されたのに、救命胴衣をもぎ取られたような心地がした。

男のにやついた顔は、正視にたえなかった。耳の奥で警鐘が鳴る。「僕はジュビス侯の次男、デリオス。あなたは王子殿下の従姉妹君、アーラ様でいらっしゃいますね？ こうしてお会いできまして望外の幸いです」

アーラはこの男に手をとられ、たとえ手袋の上からでも口づけられるのがたまらなく嫌だった。何とかして逃れる方法を探そうと、疲弊した頭に鞭を打った。しかし何も浮かばない。

手にふれられて、思わずアーラは身を引いた。デリオスと名乗った男の顔に翳がよぎる。

「ごめんなさい、立ちくらみをしましたの。夜会などはじめてなものですから」

アーラの言い訳をきいて、男の顔ににやつきが戻った。

「そうでしょう。初めてのときは、そんなものです。よろしければ僕がいるとご案内しましょう。気分が悪いなら、夜風に当たるのがいいですよ」

手首をにぎられ、引っぱられた。たたらを踏んだアーラの腰に、デリオスの手がまわる。ぞっとした。そのままこの男が目指す夜の

庭に連れ出されたら、助けなど呼べなくなる……。

「申し訳ございません。私、兄と待ち合わせをしているんです」

「筆頭騎士殿には、あとから僕が言っておきますよ。まずは庭に出ましよう」

屈辱と怒りと気色悪さが我慢の限界となり、それが爆発するに任せアールが満身の力でデリオスを振りほどこうとした、そのとき。

肩が、すっと温かな手のひらで包まれた。

30、救出

アーラは反射的に振り向いた。

「ひさしぶりだな、デリオス・ジユビス。あいかわらずそっかしいところは治っていないらしい。今宵もお連れの女性を間違えているようだが？」

ゼファードが眉間に皺を寄せてデリオスを見下ろしていた。ジルフィスほどではないが、ゼファードも長身なのだ。

アーラの肩に置かれた彼の手に、力がこもる。

「彼女はわが従姉妹のアーラ・グラントリー。紹介が遅れて申し訳ないが、貴殿のお連れということはありえない。妹御をお探しならこんな壁際ではなく中央フロアのほうがかどるだろう」

デリオスは空気や餌を求める金魚のように口をぱくぱくさせ、おまけに目を白黒させている。ゼファードはさらにたたみかけた。

「まず、その手をお放しただけどうか。貴殿の妹御と間違えているならしかたのないことだが、淑女の手首をそんなにも強くにぎるといふのは、紳士の振る舞いにそぐわないだろう？」

「お、お、お、王子、殿下」

ようやく、デリオスは声が出せたらしい。ゼファードの目がすうと細くなった。

「なんだ？」

「アーラ嬢は、ご気分がすぐれず外の空気を吸いたいと」

「それなら俺が連れて行く。初対面の貴殿が引っぱっていくまでもない」

ゼファードににらまれてようやく、デリオスはアーラの手首と腰から手を放した。手袋の上からにぎられただけが、アーラはすぐにも手をきれいな水で洗いたくなった。

紳士であれば、王子殿下のうるわしくないご機嫌を察してこの辺りが潮時と立ち去るべきだろう。しかしデリオスは煮え切らないよ

うすで指を組んだり、体を傾けたり、ベルトについた房飾りをもてあそんだりした挙句、言った。

「今日、妹を連れてきていますよ」

「それはそうだろう。貴殿の名と共に招待状のリストに載っていたおぼえがある。だから俺は、アーラを妹御を間違えたのかときいたんだ」

「たった一人の妹は、兄の私が言うのもあれですが、なかなか見られるよい見目をしています。どんな世間知らずでもジュビスの姫と噂を聞けば頬を染め、巷では薄紅のバラのようたたえられているとか」

「どの巷だ。少なくとも世間知らずのアーラには、そんな話は聞こえてこない。」

けれどもゼファードは知っているようだった。

「侯の姫の美しさは俺も聞く。だが、それが何か？」

「はい。殿下のお妃に、ぜひいかがかと思ひまして」

アーラはただ出さえ言葉を挟む気はなかったが、デリオスの言いように絶句した。

まるで押しかけ訪問販売員じゃないの。少なくとももうちょっと婉曲に、それとなく匂わすくらいの芸当ができないの？

妹を売り込むあまりに直截な言葉に、アーラはあきれるを通りこして、正直、「ばっかじゃないの」と思った。もちろん、そう思ったことは口にも顔にも出さなかったが。

ゼファードも、デリオスの幼稚なやり方についての感想を表面には出していなかった。

「兄としての貴殿のお気持ちは承知した。しかし、美しさだけでは妃候補にすべからぬこともご存知のはずだが？」

「はい、はい、もちろんです。ですが妹は気立てもよく、まさに理想の乙女。ぜひ殿下のお目にも留まるかと。よろしければ今すぐにも妹のところにご案内しましょう。そうしたら私はお若い二人のためにアーラ嬢と一緒に席をはずしますんで」

いったい何がしたいのかまだ自分を外に引っぱっていくのをあきらめていないらしいと知って、アーラは内心げっそりため息をついた。こんな幼稚で洗練のかけらも持ち合わせていない男に同行して夜の庭を散歩するなど、どんな対価を積まれようと願い下げだ。

ありがたいことに、ゼファードもデリオスにそれを許すつもりはないようだった。

「一つ忠告をしておこう、デリオス・ジュビス。今すぐ急用を思い出して俺の前から去るなら追いはしない。だがそうでないのなら、それなりのお覚悟をしてくださう」

「覚悟ですって？ またなんで？ 私は薄紅のバラと謳われる乙女を殿下にご推薦しただけじゃないですか」

だんだんとゼファードに対する口調が無礼になってきた。デリオスは自身でそのことにすら気がついていないらしい。

「殿下と妹が玉座に並べば美貌の両陛下ということで各国の尊敬を集めますし、さらに私とアーラ嬢が契りの盃をかわしたなら、われわれの絆はいつそう深まるってものです。わがジュビス家は末代まで忠誠を誓いますし、そうなれば輝かしき……」

「忠告はしたぞ、デリオス」

うなじの産毛が逆立つほど冷ややかに、ゼファードが言った。デリオスは言いさしたまま目を見開き硬直している。あまりに馬鹿馬鹿しいデリオスの演説に辟易していたアーラも、凍らされたように動けなかった。

「貴様は嘘をついたな。ジュビスの姫は少なくとも乙女ではない」

ゼファードが言い放ち、アーラはおどろいて息を呑んだ。デリオスは指先まで固まったままなのに目だけきよときよと動かした。ゼファードは続けた。

「貴様の妹御はこれまでに何度も、謁見の時間に愁訴に来ている。

『屋敷の馬丁といい仲になって子までもうけたのに、家族に反対されている。馬丁は屋敷から追放されそうだが、そんなことになっては自分は生きていけない。引き離されるくらいなら死ぬ覚悟だ、だ

から殿下や陛下から父をなだめて私たちが夫婦になれるように説得してください』……とな。知らなかったのか？」

デリオスの顎がぐんと落ちて、閉じようとしたらしいが閉まらなかった。

「だがそんな訴えは、俺たち王族が介入する問題じゃない。愁訴のたびにそう返事をしているのだが妹御は聞き入れてくれなくてな。貴様らは社交界にこの醜聞が広まらぬよう火消しをして回っているのだから、ご令嬢みずから王城に愁訴に来ては元も子もないな。

ともかく、妹御は馬丁と一緒にになりたいと言っているんだ。さつさとそうしてやれ。そうでなければ、子までなした姫を乙女と偽り王子に売り込んだとの噂が宮廷に広まっても、いたしかたがないだろうな。何しろそれは根も葉もない？噂？ではなく、真実なのだから」

デリオスの額が脂汗ででらたらと光る。

「し、しかし、それが真実だという、証拠は……」

「証拠ならいくらでもある。貴族の醜聞は外つ国に漏れれば国の一大事にもなりかねないからな。もちろん調査させて裏は取ってあるし、嗅ぎつけた者には口をつぐむよう強く言っている。なにより、妹御が一番の証人だろう。違うか？」

ぎ、ぎ、ぎ、ときこちなく敬礼したデリオスに、ゼファードはうなずいた。

「そう、去るのが賢明だ。それから貴様には関係のないことだが、一つ誤解のないように言っておく。俺がどの家の令嬢を娶ろうと、その家門をひいきにするつもりも天領を分け与えるつもりも爵位を授与するつもりもさらさらない。それらを期待している者たちには悪いが、家門の子女を俺に差し出しても何の得もない。もしも勘違いしている友人でもいれば教えてやれ」

ようやく、デリオスが去った。

31、襲来

アーラには、他人の醜聞に耳を大きくし目を輝かせる趣味はない。あちら？ではワイドショーも苦手だったのだ。芸能人の誰が誰と付き合っているかなど、どうでもいい。与党と野党が互いに些細なことをおおげさに罵り、不毛な足の引つ張り合いばかりをする。口先では何ごとも国民のため国民のためといいつつ、庶民の平均年収をはるかに上回る給料を手放そうとしないのをニュースで見るとつつけても、うんざりしていた。

春の芽吹き亭にいたころは、毎日気持ちよく立ち働いて過ごしていたのに。

王城で催される夜会が、はなやかできれいなだけではないことは想像にかたくなかったが、まさか洗練と対極に位置するような輩が平然と出席しているとは思わなかった。きっと、？あちら？の政治家たちが一流ホテルで開く政治資金集めのパーティにも、こんなタイプの出席者がいるのだろう。

「一人にさせてしまつてすまなかった。セリスたちと話しているのが見えたから大丈夫だと思って、他の客の相手をしてしまった」

ゼファードの声にはっとして、アーラは物思いから現実に引きもどされた。

そうだった。ぼんやりしてられる時じゃない。

「ううん……ありがとう。助かったわ」

アーラは、デリオスをうまくあしらえなかった自分を情けなく思った。今考えれば、もっと理性的に、はっきり拒絶するやり方があったはずなのだ。

「さっきの人、あれでも侯爵の息子なんでしょう？ あんなふうに言いたい放題言っちゃって、大丈夫なの？ 末弟派に組したりしない？」

ゼファードは鼻で笑った。

「ジュビス家のデリオスが手に負えないというのは有名なんだ。末弟派だって、あいつを抱え込んでわざわざ面倒ごとを増やすようなことはしないだろう。心配は要らない」

ほっとした。おのれがうまくいなせなかつたばかりに不穏な事態になるのでは、胃にいくつ穴があくか知れない。アーラは自分の神経が理想としているよりもかなり細かいことを知っていた。だからこそ、神経の負担にならぬよう思いつめずに淡白であろうと心がけている。そうできないことも、あるけれど。

「なら、よかった」

にわかには、ゼファードが頼もしく思えた。アーラより年下でも、やはり将来人の上に立つことを前提として、幼い頃からさまざまなことを課されてきたのだろう。

庶民風情の私とはきつと、鍛えられかたが違うのよね。

愛想と笑顔のふりまきかたや、こじれかけた問題をいかにして無難に切り抜けるかというすべは二十数年生きてきて身に着けた。しかしアーラは、いつだってあからさまな敵意やお追従を受けることなどない、社会全体から見れば取るに足らない小娘だったのだ。一方で彼は、無表情に冷静に、相手を黙らせ、それでもなお恨みを買わない塩梅を若くして心得ているのだから、たいしたものだと彼女はゼファードを見直した。

「ジュビスはもともとたいしたものを持っていないから、力を増そうとしてあんな浅薄な考えを起こしたんだろう。ここしばらく何代も、貴族議会でたいした地位につけていないからな。ジュビスは問題にならない」

グランヴィールの政治について、アーラはもちろん詳しくない。しかしこれからは、おそらく詳しくならなくてはならないだろう。そうでなければ、ご令嬢というものは政略結婚なり部下への褒美として下賜されるなり、紳士がたの政治の駒として使い捨てられると相場が決まっている。自分の世界の歴史を見るかぎり。無論、アーラはそんな都合のよい駒として一生を終えるつもりなどないのだ

から。

いつかは、帰るんだもの。

「貴族議会でたいした位置についているお方が、問題だということね」

「ああ。一番厄介なのは、末弟派のポーロック公だ。ポーロックの名前には気をつける。関わったらろくなことにならない」

うなずいたアーラは、人ごみをすり抜けて何とかこちらにやってこようとしている人物をみとめた。狐色の前髪が揺れている。ジルフィスだ。

アーラの視線を追って、ゼファードも従兄に気づいたらしい。壁際に寄って、三人で邪魔が入らず話せるだけの場所を確保する。

「遅かったな。とつくにクオードと交代していたはずだろう？ どこにいたんだ？」

ようやくたどりついたジルフィスは、芝居がかったしぐさで肩をすくめた。

「好きでこっちに来られなかったわけじゃないさ」

アーラにはなんとなく想像がついた。

「きつと、あでやかな未亡人から初々しい十五六のご令嬢に至るまで、いろんな人から声をかけられて、いちいちそのたびに身動きとれなくなっただんでしょう？」

ジルフィスの目が見開かれ、金褐色の瞳に動揺が見てとれた。凶星なのだ。

「やっぱりね。だって、ジルはとってももてるんでしょう？ そうじゃないかと思ったのよ。王子殿下に話しかけるのは恐れ多くてできなくても、ジルフィス・グラントリーにはつい声をかけたくなるような雰囲気があると思うから」

「それは俺が安っぽい男ってことなのかな？」

どうやらジルフィスは憤慨しているらしい。

「どうしてひねくれるの？ 褒めているのに」

ジルフィスがちっとも喜んでいないようすなのが、アーラには意

外だった。美しく着飾った女性や少女にかこまれちやほやされれば、普通ならば有頂天になるだろうと思うのに。

不意に、ジルフィスの表情が硬くなった。ゼファードの表情は動かなかつたが、緊張感が伝染する。アールが視線で問うと、「来た」と短くささやかれた。

あれが、ボーロック公？

？敵？が来たのだ。

32、一難去つて

すごい腹。

ひどく率直に何の憤りもなく表現することが許されるなら、アラがボーロック公にいただいた第一印象は、まさにそれだった。

最高級の布地を、ゼファードやジルフィスのゆうに三倍は使っているのではないかと思わせるほどの巨漢。もちろん縦に大きいのではない。横に、だ。

ゼファードもジルフィスも敵対心などおくびにも出さず挨拶を受け、またそれなりに返した。アラもさりげなくようすをうかがいながら、初対面の作法どおりの礼をする。しかし相手はさりげなく装おうと務めるどころか、あからさまでぶしつけにアラを観察し始めた。胸元と腰のあたりを何度も視線が往復する。ふつつつと湧く怒りを隠し通すのに、アラはかなりの努力を必要とした。

殿下とジルに賛成。私も、こいつが大嫌いだわ。

ボーロックがゼファードにこの夜会の素晴らしさを、独創的とはお世辞にもいえない表現でつらつら並べ立てている隙に、アラは注意深くジルフィスの陰に下がった。それをみとめてジルフィスもうなずく。しかし彼に限らず、ボーロックもまた目ざとく、身内の後ろに隠れたアラに気がついた。

「しかし殿下にこんなにも美しい従姉妹君がいらっしやっただとは！ まったく、グラントリー閣下もお人が悪い。これほどの息女がいらしたならばもっと早くにお披露目してくださればよいものではない！ そうでしよう筆頭騎士殿？ お父上は出し惜しみがすぎるといふものです。あなたも自慢の妹君を自慢なさりたかったことでしょう。いやはや、わたくしめに息子がいれば、一も二もなく是非にと申し上げるところです」

是非にといわれても願ひ下げだ。アラはボーロックに息子がいないらしい事実感謝した。

それに、お美しいご令嬢をご所望なら、私なんかよりずっとおきれいな方々がこの会場にいくらでもいらっしやるじゃないの。もうちょっとましな口上を考えなさいよ。

胸の内で罵っていたのだが、じとりと見られて寒気がした。すると守るように、ジルフィスに肩を引き寄せられた。

「俺だつてもつと早くから堂々と妹を連れ歩きたかつたさ。ただ、妹は生い立ちに事情があるゆえおいそれと人前に出すのははばかられた、というのも理解していただきたいね。だがまあ諸々考え合わせた結果、いつまでも隠しておくわけにも行かなくなった。よつてこの運びとなつたわけだが……これ以上野暮なことを俺に言わせなくたつて、公ほどの宮廷人ならわかるだろ？」

「買いかぶられますなあ」

ジルフィスの話のあとをゼファードが継いだ。

「お聞きのとおり、幾重にも隠してきたために従姉妹は箱入り娘どころかまったくの世間知らずだ。人に見られることにも慣れていないし、無作法をしでかすこともあるだろう。ほら、もう消え入りそうな顔をしている。貴殿のような百戦錬磨のお方には、あちらに咲いている早熟な花々のほうをながめていただきたい」

「百戦錬磨とは、もつたいないお言葉です」

ポーロックはおどけたつもりなのか太い短い首をすくめると、去り際に、アーラに紳士として親愛の礼を尽くしたいと申し出た。指先に口づけるあの礼を、請うているのだ。

アーラを構成する細胞という細胞がそれを拒絶した。けれどもその申し出を跳ね除けることは得策ではないということも、理解していた。いくら水面下でゼファードと末弟派が足を引っ張り合おうとも、表立って拒むことはおそらくルールに反する。宮廷の駆け引きに設けられているはずの、ルールに。

アーラはサテンに包まれた手を差し出して、鉄の微笑みを顔に貼り付け、息を止めて切り抜けた。指の関節から全身に嫌悪の毒がまわるような気がして、気分が悪い。表情は維持できても顔色が生白

くなっているのではとアーラは危惧した。

「それでは近々またお会いいたしましうぞ、うるわしの姫君」

ボーロツクが去って、ジルフィスが齒噛みした。

「あの助平、なんて目でアーラを見やがる。ゼファ、ヴァーデイス叔父とおまえのことがなけりや、俺はあいつを三枚おろしにしてたぞ」

その言葉に返事をする代わりに、ゼファードは至極まじめな顔でアーラに言った。

「部屋に帰ったら、すぐにその手を消毒するといい。強い酒精を用意させよう」

「……紳士と淑女の礼を、改変すべきだわ」

できないことなど百も承知のうえで、アーラは心からそう思った。「あの人、いつたい何しにきたの？ 中身のあることをなんにもしやべらなかつた」

「おまえを見に来たんだろ。偵察だな」

「また近々、ですって？ ご令嬢というものはああいふ申し入れをどれくらいまでなら突っぱねるのを許されるものなの？」

「俺としても奴に懐をさぐられるのは避けたい。できうる限りおまえがやつと顔を合わせなくてもすむように、努力する。……ジル」

「なんだ？」

ゼファードは時計とフロアを見比べて小さく息をつく、ジルフィスをふり返った。

「俺は一応の務めを果たしてくる。あと何人か、この夜会の名目上踊りの相手をしなければならぬご令嬢がいるんだ。……アーラのことを、頼んだ」

「頼まれるまでもないさ」

ジルフィスが請合って、アーラの肩を軽くたたいた。

もしも本当に兄がいたらこんなふうだろうかと、肩にジルフィスの手のひらを感じながらアーラは考えた。実際にはアーラは弟と妹しか持ったことがないので、想像することしかできないけれど。

「アーラ」

ゼファードの姿が人ごみにまぎれて見えなくなると、ジルフィスが彼女の名を呼んだ。

「なに？」

「手、洗いたい？」

サテンの手袋を一瞬見遣り、アーラはすぐにうなずいた。布地にくるまれていたのだから直接接触したわけではないとわかつてはいても、感触がまだ残っている。

「おいで。外に、手が洗えるところがあるんだ」

また、ダンスの楽曲が始まった。フロアでは人の流れが乱れ、そしてやがて壁際に引いていく者と中央に残る者とに分かれるのだろう。人々の目は中央に注がれるから、抜け出してもおそらくたいして目立たない。アーラとジルフィスは連れ立って、ひそやかに庭にすべりた。

「紳士も淑女も噂好きな連中の視線をかいくぐって、夜会の途中に庭へ抜け出すことがままあるんだ」

藍色の夜に沈んだ石畳をたどりながらジルフィスがささやいた。

「そしてほとんどの場合、木陰や丹精された植え込みの裏で、まあ……逢引する。両者焦がれての逢瀬ならくちばしをつっこむ余地はないけど、何も知らない社交界に出たての乙女を言葉巧みに暗がりには引き込もうとする輩もいる。聞いていて気分のいい話じゃないだろうけど、アーラにはちゃんと知っていてほしいから、こうして話すんだ。俺やゼファアと一緒にいられなくなった不測の事態に、デリオスのような馬鹿が君に言い寄ってくるかもしれないし、もっと弁の立つ輩が近づいてくるかもしれないだろ？」

「大丈夫、わかっている。だからデリオスのときも誘いを断ったの」

ジルフィスが指さした先に、人工の小さな泉があった。石の獅子の口から水が流れ出している。アーラは早速手袋をぬいで水に肘までぬらしながら、ジルフィスを見上げた。

「相手がジルか殿下かセリスでもなければ、信じたりこのこついで

ていつたりしない。今ここでジルに襲われるようなことがあれば、私はただのまぬけだけれど。……あ、冗談よ？」

月明かりに仄見えたジルフィスは、泣き笑いのようななんともいえぬ面持ちをしていた。

水をきって、夜風に腕を乾かす。この時間になると秋の風は冷たかった。

しばらく黙っていたジルフィスが、ぽつりと言った。

「アーラ。明日は、一つ片付けなきゃいけない仕事があるぞ」

「授業を再開するんじゃないの？」

「宿屋に、いつしよに挨拶に行くんだ。アーラはグラントリーの娘として屋敷で暮らすことになる。だから、アーラの顔を知っている宿屋の夫妻にうまい言い訳をしにいかなくちゃいけないのさ。……わかるだろ？」

アーラは震えた。夜風の冷たさのせいではないと、わかっていた。

33、別れ

「最初っから、アーラは普通の娘さんとは違うと思つてたのよ」

夜会の翌日。春の芽吹き亭にて。

ジルフィスの話が終わると、おかみさんは落ちつかないにエプロンの裾をもみしぼりながら、言った。

「だって、下町の育ちにしてはお上品すぎたもの。記憶をなくしたつて言つてたけど、育ちのよさは隠せないからねえ。でもまさか、まさかグラントリー公のご令嬢だつただなんてねえ！」

アーラのわずかばかりの荷物はとつくに馬車に運び込まれていた。書き物をした紙の束と木炭を入れた箱、質素な普段着と下着、給金で買ったこまごまとしたもの。それくらいしか春の芽吹き亭の部屋にはなかつたし、それが、グランヴィールに来てからアーラが築いてきた全財産だつた。

「たいそうな箱入りのお嬢さんだつたら、買い物計算ができなかつたてしかたないわよ。だって、ぜんぶ召使いがやってくれるんだろつからねえ。そんな大金持ちのお嬢さんにうちは店の手伝いさせて、金の勘定を教えていただなんて！ ああアーラ！ ごめんなさい、ごめんなさいね」

「こらおまえ、グラントリー公のお嬢さんになんて口のききかたをするんだ！ アーラ様、だろう！」

ご主人はおかみさんの肩をなだめるようにたたきながら、大きな体を精一杯小さくしてジルフィスに何度も頭を下げている。アーラはたまらなかつた。

「そんなの、気にしないでください。私、ご主人とおかみさんには言葉で言い表せないくらい、本当にとつても感謝しているんです。私のほうこそ、本当のことを言わなかつたことを謝るべきなんです。ですからどうか、頭を上げてください」

「アーラの言うとおりです。あなたがたは彼女の恩人だ。おもてを

お上げください」

「あなたさまも、グラントリー公のご子息とはつゆ知らず、先日はとんだご無礼を働きました。どうかご容赦を」

「ご主人、今日俺たちはお礼に伺っただけなんです。何もとって食おうってわけじゃありません。家出をした不肖の妹が世話になったことを、心から感謝しているんですよ。あなたがたが大切にしてくださったおかげで、アーラは身を危険にさらさずに一年間過ごしてこれたのです。だからこそ、俺もこうして妹を見つけることができただ。……近所で評判の語り手がまさか自分の妹だとは思いませんでしたから、ゼファード王子の使いで始めてここへ来たときは、驚きましたけれど」

ジルフィスは恐縮し通しの宿屋の主人夫妻にクラーレン金貨がぎっしり詰まった袋をわたそうとしたけれど、夫妻は受け取るうとはしなかった。だから立ち去り際に、ジルフィスは金貨入りの袋をカウンターの果物籠に押し込んでいった。主人夫妻はきつとすぐに見つけることだろう。

アーラは二人の手をにぎっただけで、胸がいっぱいになってしまった。感謝の気持ちの利いた言葉でたっぷり表したいのに、いざとなるとただありがとうとしか言えなかった。

アーラはジルフィスにうながされて、後ろ髪を引かれながらも馬車に乗り込んだ。馬車のドアが無情に閉められる。鞭があてられ、馬車は走り出す。窓から外をうかがうと、角を曲がって見えなくなるまで、おかみさんとご主人は見送ってくれていた。

アーラは大きく息を吸って、すんと座席に腰を下ろした。喉が締め付けられるように痛くなり、こらえていたものが熱い雫となって目元から零れ落ちた。

どんなに歯を食いしばっても、涙は止まってはくれなかった。次から次へと湧き上がり、あふれ出て、ぽろぽろと頬を伝う。

肩を震わせるのも嫌だった。けれども一度泣き出すとなかなか泣きやめない性質であることは、アーラ自身が一番よく知っていた。

本に感動して泣くことはよくあった。何かが悲しくて泣いたことは数えるほどしかない。怒りやくやしさのために泣いたのはたくさんすぎて、数えるのがおつくうなほどだ。そして永遠の別れが痛くて泣いたことは、その別れの数だけあった。

これも、きっと永遠の別れの一種なんだろう。

馬車はからからと単調に走る。アーラは嗚咽が漏れないように呼吸を最小限に抑え、みっともない泣き顔を見られまいと、ジルフィスがいるのとは反対の壁を見つめていた。体が震えないように、こぶしをきつくにぎりしめる。爪が食い込む痛み集中して胸の痛みをごまかそうとしたのに、残念ながら涙腺はごまかされなかった。

「アーラ」

よばれても、喉が痛く熱く、ふさがるように苦しかったせいで返事はできなかった。

けれど、そんなことをジルフィスは知らない。もう一度呼び声をする。

「アーラ」

それでも返事がないと知れると、手が伸ばされた。頬にジルフィスの指先が触れ、アーラはびくりとする。その拍子にしたたった涙が彼の指に落ちて、泣いているのがばれてしまった。

「……アーラ」

やれやれといった響きが、ジルフィスの声ににじむ。彼が立ち上がった気配がして、馬車の窓のカーテンが閉められたようだった。これでたとえアーラが振り向いても、すれ違う人々に窓から涙でずぶぬれの顔を見られるという事態にはならないだろう。アーラはジルフィスの配慮に感謝した。

のだが。

ジルフィスの右腕が視界の端を横切り、左頬に手が添えられたかと思うと、アーラは振り向かされた格好でジルフィスと顔を突き合わせていた。カーテンが外からの視線を遮断してくれた代わりに、金褐色の瞳がこちらを見下ろしている。見られているというのに、

アーラの喉はひくつき、唇はわななき、涙が次から次へと流れ続ける。

アーラにとって、泣いた顔を見られるのはとてもみじめで屈辱的だった。穴があったなら入りたい気分、せめてもと目を伏せた。その伏せた目の端に、わずかにかさついたやわらかなものが触れて。

触れただけでなく涙の跡をたどるように動くその感触に、アーラは思わず身を引いて目を開けた。

ごく近くに、狐色のゆたかな睫毛があった。その睫毛とともにまぶたが上がり、現れた蜜色の虹彩が近すぎてにじんで見えた。

なぜこんなに近くにジルフィスの瞳があるのか、なぜジルフィスはなおも近づこうとするのか、アーラの脳が正常な速度で情報を処理できぬうちに唇に吐息が降ってきた。まばたきをする間もなく、吐息以上のぬくもりが唇をふさぐ。

息ができないと思ったのが最初で、涙の塩辛さを感じた途端、息が止まった。

情報処理が異常な速度でこなされたというよりは、電気的な反応のようなものでアーラは悟った。

涙の跡に口づけられ、そして……キスされたのだと。

34、節制

ジルフィスの体を押すと唇が離れた。アーラはなおも下がろうとしたが、しかし狭い馬車の中では壁まではわずかな距離しかなく、すぐに背中行き止まりになってしまった。

現状は把握できたものの、どういった事情でこのようなことになったのか理解が追いつかない。混乱する頭をそのままに、とりあえず目じりと頬に残っていた涙を袖口でぬぐった。

何がどうしてこうなったの？

ここは赤くなるべきなのか青くなるべきなのか、それすらもわからない。これが少女小説ならばころりと恋に落ちるか、そうでなければ無礼な相手を平手でぶつ展開なのだろうとは思いつくが、あいにくアーラはそのどちらの態度も取りかねたので何の参考にもならなかった。

ジルフィスの乾いた唇の感触が、まだ残っている。そしてなおもジルフィスはこちらを見つめていた。

その蜜色の瞳に浮かぶ熱が、アーラの混乱に拍車をかけた。そのまなざしの意味を察したけれども信じられなくて、呆然とする。

どうして？

心の内で問いかけながらも、そういった種類の熱はなぜと理由を問うのも馬鹿らしいものだとこのことを頭の隅ではわかっていた。

落ちつけ、私。冷静になれ。

ひとつ、ふたつ、深呼吸をする。怒涛のように轟々としていた思考の手綱を手繰り寄せる。

？あちら？で、異性から好意を寄せられたことがないわけではない。けれどもそれはアーラが受け取りたいとは思わなかった相手からの好意だったので、気づいても気づかぬふりをし通した。「試しにつきあってみる」などということは面倒以外の何ものでもなく、不経済で時間の無駄だと信じて疑わないのがアーラなのだった。

シスターたちとともに過ごした中学、高校生の頃は同じ年ごろの異性に会う機会などなく、共学の大学に入ってから特に恋だの愛だのと意気込むことはなかった。思いを打ち明けることなく終えた小学生時代の初恋を胸の奥に大切にしまいこんでからというものの、そのようにうるわしくはなやかな感情とは疎遠だったのだ。成人してもアーラは自分自身のこぢんまりとした世界に充足していて、ときめきや安らぎを他人に求めることはなかった。

けれど今日の前にある金褐色の双眸は、蜂蜜のように甘やかな色と蠱惑的な感情をたたえ、アーラを求めているらしかった。

今度は顎に手がかけられて上向かされそうになるのを、アーラはかぶりを振って止めた。ジルフィスの表情がわずかに傷ついたかのように揺れ、その様子にアーラも心苦しくなった。

泣いたせいで喉が痛くて、思うように声が出せない。ひゅうひゅうとかぼそく鳴る喉元をさすって、なんとかなだめた。

「ジル」

呼ぶと、期待をこめたまなざしで見つめられた。声が喉にひっかかったようにかすれるのがもどかしい。彼は何か言いたげだったが、黙ったまま、アーラの次の言葉を待っている。彼が望むような言葉をかけられないのをアーラは申し訳なく思った。

「まずひとつ、言わせて」

何度か咳をすると、ようやくかすれてはいるものの聞き取れそうな声が出た。

「キスをするなら、それは相手の気持ちを聞いてからにすべきだわ」「え？ ああ……わ、悪かった」

アーラは至極もつともなことを言ったつもりなのに、ジルフィスは瞳目しひどく戸惑ったようすで、詫びる言葉をささやいた。

きつと、ジルはこれまで女の子にキスを断られたことなんかなかっただろうから、相手の気持ちを確認するのをはぶいても不都合はなかったのかもしれない。

しかしシスターから貞節と節制についてこんこんと聞かされて思

春期を過ごしたアーラは、そういった物事に潔癖だった。色めいた事柄について他人がどんな主義を持っていようと干渉するつもりはないし、ギリシャやローマ、北欧の神話の神々の奔放な愛を物語として読むのも面白いと思う。けれども我が身となると潔癖でいたほうが何かと面倒ごとにならないのはたしかならずで、その信念が揺らぐほどの異性に出会ったことがないのもまた事実だった。

ここで曖昧なままにしておいてはお互いのためにならないと信じて、アーラは言った。

「ジルは私の兄さんでしょう？ こういうのは、よくないと思うの」とすると泣き笑いのような痛々しい表情でジルフィスが問うた。

「俺のこと、嫌いになった？」

ジルフィスの手のひらがアーラの手を包む。そのぬくもりをアーラは好ましく感じたが、その感情はジルフィスから求められたものとは違うのだとわかっていた。

「ジルはかっこいいし、優しいし、親切よ。兄妹にされる前からいろいろよくしてもらって、とっても感謝してる。好きか嫌いかと訊かれれば私はもちろん好きだと答えるけれど、でもそれは唇にキスを許す好きとは違うわ」

「……これから、そういう好きに変わるかもしれない可能性は？」

アーラは困惑した。訊かれてもわかることではないから答えられないというのに、ジルフィスのまなざしに責められているような気さえする。悪いのは自分ではないはずなのに、アーラは目をそらした。

「はじめて、だったのに」

声に出すつもりはなかったのに、ため息とともに恨みがましくこぼれてしまった。ジルフィスが息を吸い込んだ音が聞こえ、続いて大きな両手のひらで頬を包み込まれた。せつかく顔をそむけたのに、彼の瞳とまた向かい合う羽目になる。

「……はじめて？」

ジルフィスの指の腹がそつと唇をなでてゆくのを、噛み付いてや

ろつかと考えながらアーラは「そうよ、いけない?」と返した。

「いけなくは、ないさ」

驚きの表情のままでシルフィスがつぶやく。アーラは彼の手をどけて、今度こそ体ごと背を向けた。

馬車に乗っている間中、気まずさのために窒息しそうな気分だった。

35、慚愧

閑散とした廊下をたどり、ジルフィスが尚書局の薄暗い一室を訪ねると、顔なじみの尚書官が燭台をともして山のような書類を築いている最中だった。

裾が長い詰襟の漆黒の上衣と、裾の合わせからのぞく同色のズボンは尚書官の制服だ。キツネかイタチのように少々吊った切れ長の目に、耳の形がはつきりわかるほどみじかく刈り込まれた黒髪。尚書官という生き物は太陽よりも紙の束を愛する類の者なので肌色に血の気はなく、青白い。その蒼ざめた左の頬には小さな片眼鏡が乗っていた。

「筆頭騎士様が事務屋にいったい何の用かな？ おや？ 面白い顔をしているじゃないか」

片眼鏡の尚書官はジルフィスの気配に顔を上げ、書き物の手をとめてにやりと笑んだ。

「この世の終わりを見てきたって顔をしているな。あんたともあるう御仁がめずらしい。どうした？ 生まれてはじめて女にふられでもしたか？」

「……………どうしてわかる？」

そう返したジルフィスを、尚書官は珍獣でも見るような目で見た。「まさか、本当なのか？ うわあ、たしかにそりゃあこの世の終わりだな！ ジルフィス・グラントリーが女にふられた？ 私はあんなが男の子に恋をしたと聞いたとしてもこんなには驚かないぞ！」

ただでさえこれ以上ないほどに落ち込んでいるというのに、たいそうな言われようだ。ジルフィスはげんなりした。

「気色悪いことを言うなよ。俺にそういう趣味はない」

「知ってて言ってるんだよ。あんたをふった奇特なご婦人に幸あれ！ ……で、なんだ？ 私のところに何をしに来たんだ？ なくさめてもらえるだなんて思ってたないだろ？」

ジルフィスはおのれの額に手を当てたため息をつき、同情の片鱗すら見せない黒く澄んだ瞳を見返した。

この尚書官は、生まれ育った環境が並みの尚書官とはいっぷうどころかも二風も三風も変わっているのでも口も態度も不遜だが、ジルフィスが信用できる数少ない人間の一人だ。同い年で、出会ってから十年以上の付き合いになる。煮ても焼いても食えないし食いたくもないが、今回ばかりはほかに頼るあてが見つからなかったのだ。

「おまえに、女心を教えてもらいに来たんだ」

恥を忍んで用向きを白状すれば、「はあ？」と思い切り馬鹿にした声が返ってきた。

「ふられて頭のねじがぜんぶぶつ飛んだか？ ジルが私に女心の教えを乞う日が来るなんざ、天地がひっくり返ってもないと思っただんだが。コルディアに訊けばいいだろ？ 彼女はその道の玄人だつたんだから」

「玄人じゃ駄目だからコルディアのところじゃなくてここに来たんだよ。コルディアと違って、少なくとも、おまえはその道の経験がないだろ？」

「敬意をこめて乙女と言え、乙女と」

この尚書官 ユンナ・ゾルデは「乙女」という言葉から連想される可憐さとは無縁だが、ジルフィスはひかえめに肩をすくめただけで言い返さなかった。男女共通の制服を着ていると華奢な男か、幾分譲歩しても少年にしか見えない。そんな彼女でも実際女性であり且つ乙女であることは間違いないと知っているからこそ、ジルフィスは今日ここへ来たのだ。

「なんだ？ ジルを手痛くふったのは花もはじらううら若き乙女なのか！ 私はてっきり結婚後三十年を経てもなお夫と大恋愛中の何某夫人かと思っただぞ。だからあんたでも太刀打ちできないのかと」

「うちのおふくろみたいなのを想定してくれるな」

「じゃあ相手は誰なんだよ？」

ユンナが身を乗り出した。片眼鏡の奥の瞳が楽しげに光る。ジル

フィスはおのれに残された冷静さを総動員して、低く告げた。

「……アーラだ」

「アーラって、おい、あのアーラ嬢？」

素っ頓狂な声をあげるユンナを張り倒したいという思いに駆られつつも、ジルフィスは耐え忍んだ。ユンナこそが、アーラを王弟グランドリー公の娘でありジルフィスの妹であると証明する戸籍を作成した張本人なので、彼女はこのあたりの事情をすべて承知している。

「ってことはつまり、あんた自分の妹に手え出したのか！」

戸籍上は兄妹だが、血は一滴もつながつていないことを知った上で言っているのだからユンナは人が悪い。

「人間きが悪いことというな。まだ手は出してない。キスしたらすぐに断られたんだ」

「ああ？　？　まだ？　とはなんだ、聞き捨てならんな！　キスしたらそれは手え出したってことなんだよこの色男。それすらもわかんないのか。あんたに気のない女の子に是非問わずそんなことしでかしたら嫌われてあたりまえだぞ！　まったく、あんたは今より年が半分の思春期のうちに手痛い失恋のひとつやふたつ経験しとくべきだつたんだよ」

まくしたてるユンナに圧倒され、彼女の言葉の意味を理解するにつれて血の気は引いてゆき、ジルフィスは胃の底が冷える心地を味わった。

「やつぱり……嫌われた、のかな」

「あんたらの話を聞く限り、アーラ嬢はしっかりしたお嬢さんらしいけど、本当に清く正しく生きてきたお嬢さんならあんたの振る舞いを大いに軽蔑しただろうな」

「軽蔑」

「そうだ。私だって軽蔑するよ。私も初めておやじさまにキスされたときには思いつきり引いたからね。花街でおしろいくさい姐様がたにかこまれて育った私でさえ、心の準備なく持ってかれたときに

は乙女心に大いに傷を負ったんだ。もしもあんたが奪った唇がお嬢さんにとつての初めてだったりしたら、最悪だね」

その最悪をまさにしでかしたのだと再認識を突きつけられ、ジルフィスは壁に頭をぶつけたい気分だった。

「凶星かよ？ あーあ、打つ手なしだ」

「あんなかわいい泣き顔見せられたら、ついってことも」

なんとか弁明しようとしたが、自分で口にしても最低で馬鹿らしい言い訳としか思えなかった。ユンナは腕組みした体をそらして、大きく鼻を鳴らした。

立っていられなくなつて、ジルフィスは手近にあつたスツールに腰を下ろした。

アーラを守りたいと思い、ゼファードの従姉妹になったことで否応なしに宮廷に引つ張り出された彼女を守るつもりだったのに。

夜会の晩、庭の泉で手を洗いながらアーラは何と言つたのだったか。

「相手がジルか殿下かセリスでもなければ、信じたりこのこついでにいたりしない。今ここでジルに襲われるようなことがあれば、私はただのまぬけだけれど」

彼女から寄せられていた信頼を、ジルフィスは自分からものものごとに壊してしまつたのだ。

「ユンナ。俺は、これからどうしたらいいんだ？」

「それくらい自分で考えろよ。ま、心から謝つて誠意を態度で示すより他ないだろうけど。そうしたつてゆるしてもらえるかどうかは知らないがね。……まあ、せいぜい頑張りたまえ」

悄然と尚書局を出たジルフィスは、柱の陰で深々とため息をついた。

そつと、指先でおのれの口元に触れる。アーラの唇のやわらかさと、涙と蜂蜜の香りが思い出されて、ジルフィスはきつくにぎつた拳を柱に打ちつけた。

36、二人だけのお茶会

夜会が終わり、春の芽吹き亭から荷物を引き上げることすんだので、アーラの授業は再開された。

セリステインは漢字というものをいたく気に入ったようだった。「そう、これだよ！ やたら直線と曲線を書き込まなくちゃならないのに、これでたった一字だなんて非効率にもほどがある。文字というよりもはや芸術じゃないか！」

太陽、月、星、朝、昼、夕、夜。アーラが試しに教えてみた漢字と意味をあつという間に完璧に覚え、彼女を驚かせた。もちろん、習字の基礎を知るよしもなく書かれた漢字はどことなくいびつではあつたけれど。

「特に太陽の？ 陽？ という字がいいね。このごちゃごちゃしたのが、日の光という意味？ あとは明るいかあたたかいか、そんな意味もあるだつて？ たった一文字にそれだけの意味を見出すっていうのは、なんだかさすらい人の絵札占いみたいだ。一枚の絵札から過去や未来を読み解くっていう、あれさ」

セリステインの驚異的な記憶力にはかなわないものの、ゼファード王子にも習得の進歩が認められた。ジルフィスはいえば、今日は何やら尚書局に用事があるとかで姿を見せていない。彼が授業を欠席するのは、はじめてのことだった。

やっぱり、？あのこと？があつたからよね。

アーラは小さくため息をついた。春の芽吹き亭からの帰り道、馬車の中でできごとを思い出すと気が重くなる。

まさか、あのような形でファーストキスが奪われるとは思っても見なかったのだ。両親も認める相手とお見合いでもして、結婚に至る過程の中でおそらく生じるのだらうと、漠然と想像していたものなのに。

アーラ自身はジルフィスに至極まともなことを言っただけで間違

った振る舞いはしていないと自負している。だが、だからといってこの宙に浮いたような居心地の悪さを割り切ってしまうのも難しかった。

しかもこれは相手があることだから、アーラー一人でどうにかなるものでもない。時間が解決してくれるだろうと楽観的になる努力をすることにして、アーラーは手元の帳面を閉じた。

「今日はここまでにしましょう。明日、セリスが気に入りそうなもつと芸術的な漢字を教えてあげる。……さて、お茶を入れてくるわね」

「アーラー、僕の分はいらないよ。コルディアと約束があつて、早くもどらなくちゃいけないんだ。君たちだけで午後のお茶を楽しんでくれたまえ！」

セリスティンは美しい銀の髪をひるがえして、軽やかな足取りで執務室を出て行った。すばやいことだ。

コルディアさんと、デートなのかもしれない。

アーラーはセリスティンを見送ると給湯室におもむき、ポットとカップと焼き菓子を準備した。つい癖で普段どおりに四人分用意しかけたところで今日は二人欠席なのだと思い出し、アーラーは苦笑した。私と殿下だけだったわね。ずいぶん静かなお茶会になりそう。

ジルフィスのいないお茶会は、考えてみれば今日のアーラーにとつて好都合だった。

ゼファードに、頼もうと思っっていることがあるのだ。何を頼もうとしているかジルフィスが知ったら猛反対されるような気がしていたから、彼が欠席しているこの隙に、ゼファードに相談してしまうのがいいだろう。

トレイを捧げ持ち、給湯室を出る。途中で、顔なじみの女官とすれ違った。廊下に置かれている花瓶に飾るらしい生花をたっぷり抱えていたが、きつとそれは方便で、ゼファードに命じられて見張りをするのだろう。今日はジルフィスもセリスティンもいないのだから。

アーラが執務室にもどると、ゼファードは教材の紙束と顔をつき合わせていた。復習をしているらしい。カップと焼き菓子を差し出してアーラが席についても、彼は顔を上げなかった。

「殿下、あの」

「返事さえない。」

「殿下？」

無言のままだが、アーラがもどってきたのをわかっていてわざと聞こえないふりをしているのだと、彼女は察した。

「ゼファード王子殿下」

彼の機嫌が悪いわけではない。アーラは小さく息をついて、短く呼んだ。

「ゼファ」

「呼べるんじゃないか」

唇の端で笑って、ゼファードは紙束を脇に置いた。試合の勝者のような満足げな光が群青の目にちらと浮かぶ。

彼に思いのほかかわいらしい一面　否、年相応な一面があると知って、アーラは苦笑した。彼女にはひとつ違いの弟がいるが、ゼファードがその弟よりも年下であることを、つい忘れてしまうのだ。

「何が可笑的い？」

ゼファードはげんそうな面持ちになった。

「いえ、ちよつと弟のことを思い出していたの」

「弟がいるのか」

アーラはうなずいて、目を細めた。年子の弟と、ひとまわり近くも年の離れた妹。当然のように毎日とともに過ごし、それゆえときに疎ましく思うことさえあった弟妹が、とても懐かしい。

「俺には兄弟がないからわからないな。どんな弟だ？」

「弟のくせに、私の世話を焼きたがる変わった子よ。姉さんに変な虫がつかないように見張るとか、真顔でいうの。可笑しいでしょう？ 私なんかより、蝶々にたかられてる自分を心配しなさいっていうのに。一歳違うだけだから、今年もう二十五になっているはずね」

「……二十五？」

ゼファードがあるうかことか、ぽかんと口を開けた。やがて操り人形のようにぱくんと閉じて、座りなおす。

「弟が二十五？ 兄ではなく？」

「？ 兄さん？ のジルは二十七でしょう？ 私が二十六歳で、弟が二十五」

「二十六？ アーラが？」

「言っでなかった？」

力をこめてうなずくゼファードを見返す。年齢を打ち分けたのはたしかにジルフィスだけだったかもしれないと、アーラは思い返した。

「二十歳ぐらいだと思っていたんだ……」

「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

「いや、だから、本気で」

年上だと知れてゼファードがショックを受けたなら、それは申し訳ないことだとアーラは思った。もちろんアーラ自身に罪はないが、戸籍を二十歳という設定にしてしまう以前に打ち明けるべきだったかもしれない。

「ごめんなさいね、実は大年増で」

「ちがう、べつに、そんなでは」

実年齢で驚かれてあれこれ解説をするなど、ジルフィスのときの一度きりで充分だ。アーラはうんざりする前に、早々に話題を変えることにした。

「そんなことより、ゼファ。お願いがあるの。きいてくれる？」

「こちらが本題なのだ。」

「お願い、だと？」

ゼファードはなんとか立ち直ったようすで、ティーカップに口をつけた。むせずに飲み下せているから、もう大丈夫だろう。

アーラは言った。

「ええ、お願い。私に仕事をさせてほしいの。給金のいただける仕

事を「

幕間

両親は今日も遅くまで何かと飛び回っているのだろう。家の居間は静まり返って、妹の徳子とくこがテレビもつけないで宿題をしているだけだった。

長屋ながやはネクタイの結び目を緩めると、ソファから新聞を取り上げてざっとすばやく　しかしすべての記事に目を通して、ため息をついた。

載ってない。

唇を噛み締める。毎日藁のように頼りない希望にすがってテレビのニュースを見、新聞を確認するが、彼が期待するような事柄はどこにもなかった。

無論、それはわかりきっていることだ。「何か」があつたなら、新聞に載るよりもカメラマンと記者が駆けつけるよりも先に、自分たちの耳に入っているはずなのだから。警察や、そういった類いのしかるべき筋から。

「お兄ちゃんも、お父さんもお母さんもどうかしてるよ」

金属的で神経質な声が疲れた頭に響く。顔を上げると、徳子がノートをペン先で攻撃しながらこちらをにらんでいた。

「なんでお姉ちゃんのことばかりなの？　だつてさ、普通に考えたらもう絶対死んでるよ？　事故が起きてからどれだけたつてると思ってるの。あんな崖からバスが落ちてさ、死んだ人がいっぱいいて、生きてる人もすつごい怪我なんでしょ？　それでさ、行方不明のお姉ちゃんが無事なわけないじゃん？」

「徳子」

「現実的に考えようよ。絶対死んじやつてるよ。なのにさ、なんでそうやって、生きてるって思おうとするの？　お姉ちゃんの死体が見つかったときにむちゃくちゃ嫌な思いするだけじゃん」

「おい徳子！」

咎めるように名前を呼ぶと、ますますへそを曲げた顔で徳子は長屋を見返してきた。

「あたしが本当のこと言うとき、そうやって怒るんだよね。お兄ちゃんも、お父さんも。なんで？ 死んだ人のこと、いつまでもうじうじ考えてたつてしようがないじゃん？ お姉ちゃんは死んでも、あたしたちは生きてるんだよ？ あたし、来年受験生だよ？ だから今のうちにやっときたいこといっぱいあるんだ。なのにお姉ちゃんが帰ってくるまでがまんしなさいとか、そういうのっておかしくない？ お姉ちゃん、きつと帰ってくるわけないのにさ」

毒と棘を撒き散らす妹の言いように負わず手を挙げたくなって、長屋はそれを理性でおしとどめた。

長屋にとつて、ひとつ上の姉はいちばん身近で、それでいて遠い目標だった。何ごとにも真面目で成績がよく、気配りができて友人も多かった姉に、長屋は子どもの頃から対抗意識を燃やしてきた。中学生になると数学や物理に関しては長屋のほうが得意だとわかり、テストの点を自慢して見せると、姉はくやしがつたものだ。

そのくやしがる顔が見たくて、「負けないからね」とまっすぐに見据えてくるまなざしか好きで、長屋は勉強にも部活動にも励んだ。偏差値だけでいえば、大学受験時にすでに超えていたのだと思う。けれど、長屋は姉という存在を越えた気にはなれなかった。

それは、彼が一学年後に生まれたという年齢の隔たりだけではなかったと思う。すぐそばで笑っているときも、正面から問いかけるように長屋を見つめているときでさえ、彼は姉から、人が気づかない何かを悟ったばかりに世界を包む薄い膜の向こう側へ行ってしまったような、奇妙で切ない気配を感じたのだ。

姉の消息が知れなくなつて、長屋は世界の半分がすんと切り落とされたような心地すらした。

けれど十四歳の徳子にしてみれば、人に好かれ優秀で口うるさく鼻につく姉という存在が消えたことで、清々したというのが本音なのかもしれない。年が近くても比べられるが、年が離れていても同

性だからか「お姉ちゃんはこうだったのにね」と親戚連中は比較する。そのたびに徳子は眉間の皺を深くし、暗い気持ちを育てていたに違いない。

長屋は妹から目をそむけて、ソファに体をしずめた。「現実的な考え」を受け入れようとし折れそうになる望みと戦いながら、祈ることしかできなかつた。

37、王子殿下の家令

「私に仕事をさせてほしいの。給金のいただける仕事を」

ゼファードはカップを置いて、まじまじとアーラを見つめた。そこまで見つめられると、彼の群青色の虹彩の筋までが、アーラにも見分けられるほどだった。

「王弟の姫君であるアーラ・グラントリーが労働を？ 冗談だろうや」と、彼は言った。

「宿屋にいた頃のように皿洗いがしたいというのか」

もちろんアーラも二つ返事で承諾してもらえとは思っていないかったので、へこたれはしなかった。

「私、洗い物は好きなの。皿を洗ってお給金をもらえるなら、喜んで厨房に行くわ。でも、そういうた労働は令嬢にふさわしくないというのも理解できるの。私はあなたたちの立場を難しくするようなことを無理にさせると言っているわけではないし、私が今の立場でも問題ない仕事をあたえてほしいと頼んでいるのよ」

「グラントリー王弟閣下の私有財産はかなりのものだ。ほしいものがあるなら、叔父上に頼んでみればいだろう。気が引けるのならジルでもいい。筆頭騎士の俸禄だって相当だ。あいつは、きっと喜んでおまえにドレスやに髪飾りやら靴やら買い与えるぞ」

「私がドレスや宝石つきの髪飾りをほしいから働きたいと言ってるって、本気で思っているの？」

「……いや。違うだろうな」

ゼファードは眉間に皺を寄せながらため息をついた。

「いったい目的は何だ？」

「気兼ねなく、心置きなく自分のために使えるお金がほしいのよ」
嘘ではない。詳しく言えば「帰り方を見つけるためにほっぽうで手を尽くす資金がほしい」のだが、そこまで正直に打ち明けられないのだから。

だがやはり、ゼファードにしてみれば納得しかねるようだった。

「令嬢が自分の家の財産を使うのは当たり前のことだし、それが気が咎めるなら農場のひとつでも分与してもらって経営すればいいだろう。アーラが汗水たらして働く必要なんてどこにもない。むしろ、不自然だ」

「気兼ねするんだからしかたないじゃない。だから汗水たらさない仕事を紹介してくればいいでしょう？ 経理の経験はあるわ。それに春の芽吹き亭でお勘定を教わったから、グランヴィールの文字でも数字ならあつかえるし。どう？」

ゼファードは腕組みをし、宙に視線をさまよわせた。

「経理、か。……そうだな」

「心当たりがあるの？」

濃い藍の瞳をひたとアーラに留めて、ゼファードは引き締めていた唇の端をわずかに緩めた。

「いい条件のものがひとつある。王侯貴族に連なるものがその肩書きを持っていても不自然ではなく、なおかつ俺の目がきちんと届く仕事だ。そしてもちろん給金もいい」

期待をこめてアーラが見返すと、ゼファードはおのれの思いつきに満足しているのか、いつになく楽しげだった。

「私は何をすればいいの？」

「俺の家令だ」

「家令？」

アーラの頭に浮かんだのは英国貴族が抱える男性使用人筆頭のハウススチュワードだったが、ゼファードの話を聞くと、それとは少し異なるようだった。

グランヴィールにおける家令は、もちろん屋敷をとりしきる家付きの存在であることが多いが、一人の主人に付き従ってその個人財産の管理をしたり相談役を務める者も少なくないという。手紙の代筆もすれば主人の代わりに出て行って交渉もする。身分が隔てられた使用人ではなく、むしろ権威のある個人秘書、と言われたほうが

しつくりするかもしれないとアーラは思った。ちなみに現王の懐事情を管理する家令は、さる大貴族の出なのだという。

「腹違いの弟が次期当主である兄の家令を務めるなんてことは、めずらしくはない。親類が出来るいい息子を本家や主家の人間に家令として差し出すこともある。もちろん、女きょうだいや従姉妹が家令となる例はめずらしいだろうが」

それでも、そういつた例がないわけではないと彼は言った。

しかしそうであったとしても、アーラにしてみればそれ以前の問題なのだった。

「家令は宮廷に精通している人間がなるべきなんじゃないの？ それに、今までゼファの家令をしていた人はどうなるの？」

「俺は今、家令を置いていないんだ。前に使っていた奴が末弟派と通じて情報と金を流していることがわかってから、人間不信でな。領地の運営や財産管理はできるだけ自分でやっている」

「万が一私がゼファの家令になったらとして、そのいつさいを素人の私に任せるつもりじゃないでしょうね？」

「おまえは仕事がほしいんだろう？ その身分や境遇に不都合のない仕事だ。素人だって素地がよくてそれなりに打ち込んだらいつかは使える人間になる。アーラはいい素地で打ち込める才能もあると見込んだから、俺は家令にならないかと持ちかけたんだ」

真顔で告げられて、アーラは言い返すべき言葉を見失った。

「おまえならやれるだろう？ 見込み違いだと、がっかりさせるな」
耳の奥で、ざあつと血流の音がする。心臓が、胸郭をすさまじい強さでたたいた。

呆然とゼファードを見ると、彼は取り澄ました顔で席を立った。

人からこんなにも直截な、期待をこめた言葉をかけられたのは何年ぶりだろう？ 子どもの頃は何かイベントがあることに担任の先生から大役をおおせつかったものだが、大人の世間では、平凡の皮をかぶっているほうが平和に過ごせることが多い。アーラはいくつかの挫折を味わい、結局小さな世界でつましやかに過ごす日々を

選んで一応の満足を得ていたけれど、それでも心の奥では誰かに期待されたり、見込まれたり、期待以上の働きをしたことを賞賛されたりしたいとの想いが常にくすぶっているのだった。そんな彼女の想いに気づいていたのは、おそらく弟の長屋だけだろう。アーラは誰の迷惑にもならないように、目立ちすぎないように、穏やかに生きてきたのだから。

それでもゼファードの言葉のせいで、長らく眠っていた熾き火がめらめらと燃え出したのだ。そして負けず嫌いの性分が、その油となった。

家令、か。

受けて立つとはつきり口にしたわけではないのに、ゼファードは彼女が引き受けたと決め込んでいたようだった。口に出してはいないが、答えが顔に出ているのかもしれない。ゼファードはとなりの部屋から巻紙のようなものを持ってきて、アーラによこした。

「家令の仕事のやり方はおいおい教えていく。おまえならすぐに飲み込めるだろう。これは、先日の夜会で決まった婚約者候補のリストだ。これからはじまる雑事のためにまずは頭に叩き込んでおけ」それはたしかに人名の一覧だった。人の名前程度なら、グラソヴィールの文字に精通しないアーラでも読める。一番上から順に目であたり、最後の名前の上に視線を合わせたところで絶句した。

アーラ・グラソヴィー。婚約者候補リストに、アーラの名前が載っているのだった。

番外編、猫とシンデレラ（前書き）

謹んで初春のご挨拶申し上げます。皆様に感謝をこめての番外編です。

本編の時系列とは異なります。時期的には本編のだいぶ後です。ご了承くださいました上でお楽しみいただければ幸いです。

番外編、猫とシンデレラ

グランヴィールで新年を初めて迎えたときには、アーラはたいそう面食らったものだった。今ではもう心構えができていたので反り返るほど仰天することはないものの、それでも日本の愛すべきお正月に慣れ親しんだ身にしてみれば、この時期に城で行われる無駄にきらびやかで騒がしく公害ともいえそうな行事の数々には辟易してしまうのだった。

寿命が一年縮むかと思われるほどの新年の宴を控えて、アーラはグラントリー邸の書庫に閉じこもっていた。今頃は、使者や女中たちがアーラの名を呼びながら、あちこちを駆けずり回っていることだろう。

宴で礼を失しない程度に微笑んでいるだけだっただけでげっそりするのには、こんな早い時間から準備に追い立てられるだなんて、まったくごめんこうむるわ。寿命がいくらあっても足りやしない。

肌磨きに髪の手入れに爪磨きに香油のパックにバラのパウダー。布の洪水のようなドレス合わせに、そのドレスに相応しい肌着選び。鼻がおかしくなるほどの調香にくしゃみが出そうなほどのおしろい……考えるだけで頭が痛くなる。アーラは書棚にもたれかかってため息をついた。

どこぞの美男子の気を引きたいわけじゃないんだから、もとの顔かたちがわからないほど飾り立てる必要なんてないのに。身だしなみで充分よ。

「それなりの品位を見せかける身だしなみ」に要する時間を逆算すると、まだしばらくは静かな時間をすごすことができる。アーラは絨毯に腰を下ろし、革張りの背表紙にぼんやりと目をやった、そのとき。

ノックもなしに書庫の戸が開いた。

！ 鍵、かけたはずなのに。

反射的に振り向いたアーラの目は、蜜色のまなざしとぶつかつた。揺れる狐色の髪、端整な面立ちにふつと広がる安堵の表情。

「やっぱり、ここだった」

「ジル」

ジルフィスが後ろ手にドアを閉め、もどおりに鍵をかけた。少し首をかしげながらこちらに歩み寄る彼をアーラは呆然と見返して、口にすべき言葉が見つからなかった。

「どうしてここにるのがわかつたかつて、訊きたい？ そりゃあ、アーラが一人きりになりたいと願って選びそうな場所で、なおかつ鍵を持っているところなんて、かぎられているからさ」

「でも、今までは見つからなかつたわ」

「女中じゃわからないだろ。俺だから、アーラのことかわかるってわけ」

アーラは唇を噛んだ。力ずくで連れ戻されるならば、抵抗は無駄だ。しかしおとなしくドレスと化粧品品の洪水の中へもどるのも癪で、恨みがましくジルフィスをにらんだ。

「私を引きずっていくの？」

「いいや、そんな野暮はおことわりだね。せつかく二人つきりだつていうのに」

ジルフィスはアーラのとなりに座ると、手を伸ばして肩を抱き寄せた。

新春 真冬とはいえ、グラントリーの屋敷は空調が行き届いていて暖かい。この書庫のように暖炉がない部屋や廊下でも、床や壁の中を暖気がめぐる構造になっていたので、屋敷の住人は薄着ですませている。外の気候をまったく無視した室内ドレスの広くとられた襟ぐりは、ジルフィスの興味を充分に引いたようだった。

項にそつと唇が寄せられる。首筋をくすぐるやわらかな感触に、アーラは身じろぎした。

「兄さん」

「兄さんじゃなくて、ジル」

警告の意味で呼んだのに、暖簾に腕押しだった。

「じゃあジル、くすぐりたいからやめてくれる？」

ジルフィスは答えずに、逃げようとするアーラを後ろからとらえた。そのまま背に流された長い黒髪に顔を埋める。両腕でしっかり拘束されていると知って彼女はため息をつき、脱出をあきらめた。

そのうち気がすむでしょう。

抵抗すればするだけジルフィスは面白がるにちがいない。実際何度も試して失敗した前例がある上、最悪でも、彼にはアーラが最低限の身づくろいをするのに必要な時間がせまる頃になればやめるだけの良識はあるはずだった。

「アーラは、ずっとここにいればいいよ」

未練がましい口調でジルフィスは言った。まるで里親の決まった仔猫を手放したがない男の子のようだと思つて、思わずアーラは笑った。

たしかに私はジルにとって、拾つてきた猫みたいなものなのかもしれない。

かわいがり、甘えさせ、勝手なことをすると怒り、自分だけになつてほしいようなことを言い、自分が温まりたいときに有無を言わず抱きしめる。そして手元になくなると寂しがる。

けれど一時保護しただけの仔猫と一緒に、きつと必要不可欠な存在ではないのだと、アーラは考えた。

アーラとて、ジルフィスのことは好きだ。とはいえその気持ちは仔猫が庇護してくれた人間を慕うのと似た種類のものので、抱きしめられるのも撫でられるのも甘受しながら、恩を感じながら、それでも対等な位置では思いを交わせないものだろう。

「アーラ」

「いい加減気がすんだ？」

「うっん全然」

「……そう」

「アーラ」

「なに？」

「好きだよ」

「うん、知ってる」

「ずっと、俺のところにいればいい」

アーラはジルフィスの方を振り返らずに、目を伏せた。

すぐ手が届くところに、自分の背中ofすくうしろに両腕で抱きしめてくれる優しい存在がいるというのに、甘えきってしまったていい相手ではないとおのれを律するのは、甘やかでそしてほんの少し苦い。

ジルフィスは、アーラが本気で嫌悪する行動には及ばないだろう。その良識と彼が失うべきものとおのれの価値を天秤に乗せて危うい釣り合いがとれていると信じているからこそ、アーラは血のつながらないこの兄を、どちらが甘えているのか曖昧なこのような触れ合いを、未だ突き放さずにいる。

蜂蜜のような、洋酒を混ぜすぎたシロップのような、そんなとりとした時間は刻々と過ぎてゆき、もうすぐ、シンデレラの鐘が鳴る。

38、王子殿下の従妹と従兄

もちろん、アーラはなぜ自分の名が載っているのかをゼファードに問うた。しかし彼は、王子の従姉妹である姫君が王妃候補に挙がらないほうが不自然であるとの旨をのたまった。

アーラはこめかみを押さえた。たしかに、従兄妹同士や叔父姪の婚姻は、多くの物語に登場する。史実でも、古代貴いとされる血筋では血は濃いほうがよいといわれ、異母兄妹の婚姻だってありえたのだ。近親者で適当な年齢の者ならば、婚約者候補に入れられるのは致し方ない。

彼の言うことはもつともで、アーラも納得せざるを得なかった。

まあ、名前を貸したと思えばいいのよね。これも事務的な手続きのひとつよ。

こだわっても仕様のないことを考え続けても無意味なので頭を切り替える。

「この中からさらに候補を絞るのでしょう？ 私は、いつまでに何を最低限しておけばいい？」

リストの名前の一つ一つを覚えこみながらたずねると、ゼファードがふつと笑った。

「……楽しそうだな」

アーラには意外だった。

「楽しくはないと思うわ、こういう地道で間違いを最小限に抑えなければいけない仕事というのは。やりがいはあるでしょうけれど」

「でも、アーラの目が違う」

彼女は肩をすくめて、

「仕事を任されると、多かれ少なかれやる気が起きるものよ」

「授業だって立派な仕事だろう？」

「たしかにそうだけど、やっぱりそれとこれとは少し違うのよ」

日本語の授業は、意思とは関係なしに引き受けざるを得なかった。

けれど今回は、アーラから「仕事をさせてほしい」と望んだのだ。加えて、ゼファードから期待の言葉をかけられたことが、思いのほか嬉しかったのもまた事実だった。

けれどこれを知ったら、ジルがいい顔をしないでしょね。

ジルフィスとの間に横たわる微妙な空気が嫌でも思い出され、彼女は大きいため息をついた。

その夜。アーラはグラントリー邸で与えられた私室に閉じこもって、猛烈にグランヴィールの文字の勉強をはじめた。

もちろん？こちら？に転がり出てからの一年間というものの、それなりに学ぼうとしてはみた。けれども「どうせ？あちら？へ帰るのだから」という思いのためにこれまでは身が入っていなかったのもまた事実だった。

それに、ひとたび？こちら？の世界に何不自由なく溶け込んでしまえば、？あちら？と己の繋がりが希薄になってしまふような気がしていた。？あちら？の言葉に、文字に、物語に固執することで？こちら？になじみきらずにいることで、帰りやすくなるのではと無意識のうちに願っていたに違いない。

だが一年、春の芽吹き亭にて何も変わることなく時間は経った。

そしてごく最近、轟音を立てるようにしてアーラの周囲は様変わりした。それも帰る手がかかりが見つかったのではなくその真逆、？こちら？での戸籍と確固たる身分まで手に入れてしまったという変化だ。

その上みずから望んで仕事を得たのだから、「気がする」だけでグランヴィールの文字を敬遠していいはずがない。アーラは春の芽吹き亭から運び込んだばかりの、一年間書き溜めたグランヴィール語のメモのたぐいを引っ張り出した。

実際に気合を入れて始めてみれば、そう難しくはないことがわかった。読めずとも、一年余りの間に毎日目にしてきた言葉たちなのだ。ふつつ、新たに文字を覚えるとなれば身構えてしまいがちなも

のだが、日本語を教える過程で意識せずとも両方の言語に触れていたことで心理的な壁さえ低くなっていたようだった。

満足に書けるようになるまでには時間を要するだろう。しかし意味を拾って読む程度になら、そんなにはかからないとアーラは踏んだ。

試験に追い立てられ机に向かうよう強いられるのは甚だ不愉快だが、学ぶこと自体は嫌いではない。興味さえ湧けば短期間でめりこむようにして吸収できるのをアーラは自分で知っていた。膨大なギリシャ神話や百話近い日本昔話を読み通せたのはその性質ゆえなのだから。おかげで学生時代、歴史や古典の成績はすこぶる良かった。

「ファットン家のカスティア嬢、ペレーズ卿の末娘エレーヌ嬢。ええとそれから」

ゼファードから借りたまるで箱のような分厚さの「王族・貴族並びに一等の税を納めし名家の記録」通称、名家録と呼ばれているらしい。を繰りながら、婚約者候補一覧にある令嬢の名とその家の規模など今わかるだけのことを、小さい帳面に日本語で書きとめる。まるで図書館で調べものをしているような気分で、少し可笑しかった。

独りでくすりと笑ったそのとき、ひかえめなノックの音がした。時計を見るともう真夜中をすぎている。いくら女中がアーラの夜更かしを知ったとしても、お茶を持ってくるには遅すぎる時間だ。

「はい？」

いぶかしく思いながらふりむいて応えようと、返事の代わりにゆっくりとドアが開いた。

入ってきたのは、女中ではなかった。

「ジル」

夜着にガウンを羽織っているアーラに対し、ジルフィスはまだ上着を脱いだだけで、ほとんど筆頭騎士のなりのままだった。今帰ってきたばかりなのかもしれない。

彼がドアを完全に閉めてはしまわずに足元の置物を噛ませたのを見て、少し安堵した。早速どこかで家令の話を耳にしたのだろうか。それとも、何とも言い難く張り詰めた二人の間の空気の正常化を図ろうとして、来たのだろうか。

どちらにしても、こんな時間に？

アーラはジルフィスの何かを決め込んだ、決然とした口元を見て不安を覚えた。微妙になってしまった関係の修復を図るだけにしてはどこか切羽詰ったものがある。「王子殿下の家令なんぞという厄介な仕事はやめるべきだ」と諭されるのだろうか。

彼はアーラのすぐ目の前まで歩み寄ったかと思うと、そのまま跪いた。アーラは面食らって息を呑んだ。

「許してほしいんだ。俺が浅はかで馬鹿で、アーラの気持ちを考えなすぎた。本当に悪かったと思ってる。でもあれは本当の気持ちで、物のはずみとかその場かぎりの気まぐれなんかじゃない」

まくし立てるように言われ、アーラは彼を呆然と見つめることしかできなかった。

「兄妹なんてくそくらえだ。俺たちは血がつながってなんかないし俺はアーラが好きだし浮気も花街遊びも金輪際ないと誓える。もちろん、すぐに応えてくれなんて言わない。今はただ赦してもらえればそれでいい」

「ちよ、ちよっと待ってジル」

跪いたままのジルフィスに夜着のたつぷりした裾の端をつかまれているので、アーラは立ち上がることもできなかった。

もちろん、こんなにもまっすぐに好意を告げられたのは初めてだ。ジルフィスが両親が用意してくれたお見合いの相手であったならきつとすんなりと何ごとに進んだらうのにと、アーラは無意味なことを考えた。けれども現実には彼はジルフィス・グラントリーであり、見合い相手ではない。

「あなたが勘違いしているようなら言わせてもらおうけれど、多くの神話で語られる原初の婚姻が兄妹姉弟か母子なのを理屈として当然

のことと受け入れられる私は、兄妹の恋愛を非難する主義ではないわ。もつとも私たちは血が繋がっていないんだからそれが障害と
いうでもないの」

「だったら」

「こちらを見上げた彼のまなざしに気圧される。目をそらさぬよう
おのれを奮い立たせて、アーラは続けた。

「馬車の中でも言ったでしょう。私はジルのこと好きよ。でもそれ
は恋人たちがささやく好きとは違うし、そんな私の気持ちがか
らどついうふうに変るのかなんて不確かなことは私にだってわか
らない」

倫理観や道德観といった点では障害とは思わないが、世間の目や
敵の目には醜聞に映るだろう。心底お互いを求めているなら周囲に
かまわず双子のジークムントとジークリンデのように手に手を取り
合えばよいが、アーラはそうではないのだ。少なくとも今のところ
は。

「……あのときのことは、もう怒ってないから大丈夫。だから気に
病まないで」

もつと気が利いていて、相手を傷つけず、それでいて相手にこち
らの意図が通じる台詞があるならばぜひそれを引用したかったが、
アーラにはこれが精一杯だった。どこかしら独善的で余計にシルフ
イスを傷つけはしまいかと悩んだが、告白され慣れているわけでも
袖にし慣れているわけでもない彼女には答えなどわからなかった。
ジルフィスは何かを言いかけて、思い直したらしく口を閉じた。
そしてしばらく逡巡した後、こう問うた。

「抱きしめても？」

アーラもたつぷり二十秒近く逡巡して、最終的にはうなずいた。
椅子から落ちるようにすとんとすべりおりたアーラを、ジルフィス
は息をつめて抱きしめた。激しくも苦しくもない、守るような抱擁。
毛布のようだとアーラは思った。

その後アーラが家令の仕事を引き受けたことを報告しても、ジル

フェイスは眉間にわずかに皺を寄せただけで何も言わなかった。

ゼファードの見込んだとおり、アーラには実に家令向きの素質があると知れた。勤勉でよく気がつき、責任感が強い。頭の回転が速く、よく相手の気持ちを汲む。

砂に水がしみるように物事を覚えてくれるのは気持ちのよいものだ。

部下が皆、アーラのように良かったのに。

無論一度では通じかねる事柄もいくつかあったけれど、彼女は教える側を焦らさず、また、嫌な気分にはさせないこつを心得ているようだった。

ゼファードとセリスティンに向けた授業も今までどおりにこなし、お茶の後に仕事の段取りを少しずつ覚え、さらに屋敷に帰ってから、はグランヴェール語の読み書きを勉強しているらしい。まるで学舎の模範生だ。

例の夜会からちょうど一週間にあたる明日、婚約者候補が正式に公表されることになっている。そのときには令嬢の顔と名が一致するようにとアーラに予習の念押しをするつもりだったのだが、聞いてみれば先日渡した婚約者候補のリストはとうに彼女の頭に入っており、しかもそれぞれ令嬢の家がどれほどの規模で宮廷でどういった力を持っているのかなどまで、言う前からすでに調べていた。

本日の授業が終わり、茶器と焼き菓子が運ばれてきた。

「漢字」の「へん」と「つくり」の役割について知ったばかりのセリスティンが興奮のあまりわめき、ジルフィスが甘ったるいなまなざしで戸籍上の妹を見守る中、

「期待以上だな」

ゼファードは、婚約者候補らに関する質問にすらすらと答えてのけたアーラを感心して見つめ、つぶやいた。お茶会のお馴染みの面々のために木の実とシナモンのパイを切り分けていた彼女は顔を上

げた。

「当たり前のことをしただけよ。いつかは調べなければいけないものでしょう？ 覚えるべきことはいくらでもあるんだから、できることからやっておかないと苦しいのは自分だもの」

ここまで真剣に取り組んでくれるとは、正直ゼファードも考えてはいなかったのだ。がっかりさせるなど声をかけはしたものの、彼女の実力はゼファードの評価をさらに上回るものだったらしい。話を聞いてくれる相談役になってくれれば充分だと思っていたのだが、しかるべき教育役がついたなら、彼女は実に有能な宮廷人になるのかもしれない。

「世間には、言われたことすらきちんとやれない者が少なからずいるんだ」

「それは僕に対する皮肉かい？」

恍惚と独りの世界に浸っていたセリスティンがたちまち現実に返って睨んだが、ゼファードはまともにはとりあわなかった。もともとセリスティンを想定して言ったわけではないし、それを自分への皮肉と受け取ったのであれば彼自身に後ろめたさが一さじほどでもあったらしいというのは意外な発見だった。学者や研究者といった種類の生き物は概して自分勝手に、おのれの興味の外側の物事をいっさい重要視しないものなのだ。そんなことは皮肉もあてこすりも言うのが馬鹿らしくなるほどにわかりきっている。

「少しでも心当たりがあるなら、やるべきことは監査官の目をすり抜けられる程度にはやっておくんだな」

「コルディアに伝えるよ」

「自分でやれよ」

すかさず返すと、それを聞いていたアーラがジルフィスと顔を見合わせてくすくすと笑った。たちまち、ゼファードの胸郭の底がひやりと冷えた。

一時ジルフィスとアーラの間ぎくしゃくとした空気が流れたことがあったが、それはまさにわずかのことで、気づいてみればジル

フェイスはこれまでどおりアーラを何かとかまいたがり、彼女はそれを適当にうまくあしらうのだった。一見、二人は仲のよい兄妹らしく映る。しかしジルフェイスの気持ちを聞かされているゼファードには、ジルフェイスから好意がとめどなくアーラに降り注ぐようすが目に見えるようで、落ち着かない気分になるのだった。

「アーラ」

名前を呼ぶと彼女は向きなおって、「なあに？」と目で問うた。

ゼファードは短く息を吸い込んで、視界からジルフェイスを締め出した。

「アーラなら、きつとすぐに俺の片腕になる。頼りにするから心してくれ」

年下にそのようなことを言われて　その外貌からはかるかぎり今でも信じられないが、アーラは三つも年長なのだ　彼女が機嫌を損ねるのではとゼファードは一瞬危惧したが、それは杞憂だった。

アーラは照れたように微笑むと、小さく、けれどしっかりとうなずいた。嬉しげに赤みがさした頬に、わずかにすくめられた首に、彼の胸の内側はざわめいた。

不快ではなく、むしろ手放すのが惜しいそのざわめきだ。それをひっそり抱えたまま、彼は執務にもどった。

執務机に山と詰まれた書類を黙々と処理しながら、ゼファードは考えた。これだけの公務をさばきつつ彼女に仕事を教えるのでは、彼女が吸収する速度に追いつかないかもしれない。事務の専門家を彼女の教育役としてはどうだろうか？

アーラに教育役兼補佐官をつけるか。

尚書局に、少なくとも一人は信用に足る尚書官がいるのだから。

候補の公表がすんだら、呼び出して話してみるか。

一日の公務がすみ、寝台に入ってから彼はその計画について考えた。

アーラの戸籍をひそかに用意した者ならば、きつと心強い教育役となるだろう。女の尚書官だから、心配も要らない。

心配。……何の？

枕もとのランプを消さぬまま、いつの間にか眠っていたらしい。仄暗い中、ふわりと、甘く誘うような香りがする。

さらさらと衣擦れの音が近づいて、寝台がわずかに軋みをあげた。夢が現かわからないまどろみの中で、ゼファードは足元に人の気配を感じた。殺気も悪意もない。ただシーツにひかえめな皺が寄り、それは優美な夜の獣のようにひそやかにやってくる。

ゼファードは、ぼんやりとその存在を眺めた。なめらかな肩から、さらりと黒髪が流れ落ちる。唇が蠱惑的な弧をえがき、夜着の襟元からちらちらと白い胸が垣間見えた。招くようにさしのべられた手に、こくりと喉が鳴った。

アーラ？

まさかとは思った。しかしゼファードはまっすぐな黒髪の女性をほかに知らなかったし、従僕や見張りの者が私室に見知らぬ女を通すとも思えない。それを言うならばアーラがこのような夜更けにたずねてくることもおかしいが、目覚めきっていない脳はそこまで突き詰めることをしなかった。

腕を伸ばして彼女の手に触れると、彼女が体を寄せてきた。すべてとした髪がゼファードの頬をなでる。髪が甘く、とろかすように香る。

髪の毛の香りに包まれそっと指を握られたとき、彼の意識は一瞬にして覚醒し、緊張のために張り詰めた。

これはアーラでは、ない。

アーラの髪からはこんな香りなどしない。煽るように香るなど。

それに、アーラの手は爪が小さくて、少しかさついているはずだ。香油を塗れと言われても、そうしては手がべたついて紙もペンも触れられないから嫌だと言って。

刹那、ゼファードは女の手を掴み返すと引き倒して、枕の下から抜き出した短剣を、その細いうなじに突きつけた。

40、クリームの添えられたケーキ

こうして見てみると、アーラとは似ても似つかない女だった。まったくすぐな黒髪と肌の白さが同じだけだ。

大きな瞳は白っぽい灰色で、鼻筋が通りおよそ美人といえるが、口が少し大きすぎるくらいがある。アーラは幼くも見える丸顔だが、眼前の女の輪郭は美しい卵形をしていた。

「誰の手の者だ？ 名乗れ」

刃を突きつけたまま、低く唸るように問う。女はシートに黒髪を散らし、夜着の裾からむきだしの足をさらした姿勢で、あるうことかゼファードに笑いかけた。

「予定よりも随分早くにお気づきになられましたわね。こうなってしまうたからには、逃げも隠れもいたしませんわ。その剣をお収めくださいまし」

女の声は絹糸のように細いくせに甘ったるく、ゼファードは眉をしかめた。

「娼婦か？」

「ええ。あたくし、リルグリッドと申しますの」

名乗った娼婦が愛嬌たつぷりに小首を傾げると、髪の一房が肩を滑って広くあいた胸元に落ちた。ゼファードは短剣をにぎる手に力をこめた。

「誰に遣わされた？」

「夜が明けるまでにはすべて残らず白状いたしますわ。けれどその前に、なさることがおありではなくって？ お堅くいらっしゃるとは伺っておりますけれど、クリームが添えられたケーキでさえ、殿下はお召しあがりになりませんか？」

彼女は短剣を恐れるようすなく半身を起こし、しなやかな腕を伸ばしてゼファードの首に抱きつこうとした。ゼファードはそれを肩でいなすつつかんでいた左手を放し、リルグリッドを寝台から床へ

と転がした。

「生憎、娼婦を買うのは俺には向かない。楽しいとは思えなくてな」
床に転がされても、リルグリッドは笑みを絶やさなかった。

「お気の毒に！ けれど、娼婦を汚れ物のように思ってらっしゃるのなら無理もないことですわね。それを心配なさるのでしたら、あたくしの体はきれいなものでしてよ。殿下のために、今夜のためにあたくしは育てられたのですもの」

俺のために……育てられた？

ゼファードが眉をひそめると、女の灰色の目がきらきらと光った。
「お疑いになる？ でしたら試してごらんになっではいかが？ 殿下の閨のための体ですもの、下賤な男を知らぬことは請合いますわ」
リルグリッドの話を聞いていると気分が悪くなる。

これまで、何者かが女を彼のもとへ送り込もうとした未遂事件は何件か起きていた。しかしそれらはすべて見張りの兵士や従僕たちによって阻止されており、これまで不当にゼファードの私室を侵した女はいなかった。

それなのに、今回はシーツの上まであがりこまれてしまったのだ。それはおそらく、ひとえにリルグリッドがアーラを装ってきたためだ。ゼファードの近習たちは、主人が従妹と何かと親しくしていることを知っている。床に落ちている外套はアーラが城に来る際に羽織ってくるそれとよく似せてあり、髪もよくよく見てみれば生来のものではないらしく、蒸気などを当てて伸ばしてまっすぐにしようだ。耳の近くに、リルグリッドの素のままの巻き毛がみとめられた。

末弟派だな。

「……何が望みだ？」

問い詰めるのを後回しにし、ゼファードはたずねた。すると

「殿下の寵を」

あっさりリルグリッドは答えた。

「殿下のお恵みをこの身に賜りましたら、すぐにでも姿を消しまし

よう」

ゼファードは痛む額と目の前の現実とリルグリッドの言葉が示す事柄にほとほと嫌になりながら、ため息をついた。

「子種をもとに俺を脅迫するか失脚させるかするつもりなんだろう。そういう下卑た発想はポーロックか？」

リルグリッドは「あらあら」と声を上げて、長い睫毛にふちどられた目を瞬いた。

「どうしておわかりになりましたの？」

わからないほうがおかしいだろう。

娼婦でありながらほかの男の手に染まっていないのは、子ができたとき確実に王子の種だと主張するためだ。さらに、瞳の色がひどく淡い娘が選ばれたのは、ゼファードの濃い青の目を赤子に受け継がせる心積もりだったとも推測できる。リルグリッドは子を宿すのに最適な時期と体調に整えられてここまで送り込まれたに違いない。

馬鹿にされたものだな。

心の内で嗤おうとして、ゼファードは嗤えなかった。

もしもこれが娼婦ではなく、本物のアーラだったら？

身がこわばる。娼婦だと気づかず、彼女をアーラと信じ込んだままだとしたら？

「そこまでお分かりになっていらっしやるのなら、あたくしが口をつぐむのも馬鹿みたいですね」

彼の物思いに気づかぬらしいリルグリッドの声に、ゼファードははっと現実を引き戻された。首の後ろが熱く火照っているのに、背中には冷たい汗が流れている気がする。

「夜明けまでまだ時間がありますけれど、全部お話いたしますわ。そうすれば、あたくしがこれから命の危険におびえなくともいいように、はからってくださいる？」

「ああ……約束しよう」

何とか威厳を取り繕ってゼファードはうなずいた。リルグリッドはにっこりして、床に座りなおした。

「どこからお話すればよろしくつて？ …… ああ、あたくしが殿下のために育てられたというのは本当ですよ。あたくしの母は娼婦でしたけれど、父の血は賤しからぬものですわ。そのあたくしの父が、世間ではポーロック公と呼ばれているお方なのです」

思わず声を上げそうになったのを、ゼファードはこらえた。

ポーロックには庶子すらいると聞いたことはなかったが……娼婦に生ませて、隠していたのか。こうして利用するために。

「先日、殿下のお妃候補を決めるための夜会がありましたでしょう？ そこで目星をつけられたお妃候補が明日公表されるのだとか…… あら、もう深夜を回りましたから、今日のことになりますわね。

その候補の中に、ポーロック公はあたくしを入れさせるおつもりのようにでした。夜会に出て正面から挑んでも、きっと殿下はあたくしをお選びにならないでしょう？ ですから殿下の寵をいただいてポーロック令嬢として候補に入れていただき、ゆくゆくはお妃にしていただくという作戦でした。それがかなわぬのなら生まれた子を証にして、醜聞を武器にすることもできますもの」

リルグリッドは実にぺらぺらとよくしゃべった。陽気で、悲観的にならない性質なのだろう。

「ポーロック公はあたくしに失敗は許されぬとおっしゃいました。これがどういう意味か、ご想像なさって？ きつとあたくし、始末されますわ。ですからこうして正直にお話しました見返りに、保護していただきたいんですの。大変なお金をよこせなどは申しません。花街から出て、追っ手の手の届かぬところでひっそり暮らせれば充分すぎるほどですわ」

ゼファードはその申し出に応じることにした。

彼は侵入を許した見張りを罰し、別の兵士にリルグリッドを引き渡してひとまず牢に入れさせた。そしてその場に居合わせたもの皆に、決して今夜のことを口外せぬと誓わせた。

ようやく一人に戻って、寝台に腰を下ろす。そして、両手で頭を

抱えた。

もしも、アールだったなら。

そう考えてしまったことで、ようやく気がついたのだ。おのれが
どれほどまでに彼女を信頼し、心許しているかということに …

… 否。彼女をそのような対象として見ていたという、自分の気持ち
に。

41、宣戦布告

翌朝一番に、ゼファードは父王に掛け合いジルフィス呼び出した。父は夜半の出来事について何も知らないはずなのに可笑しげに眉を上げ、ジルフィスの退出を許可した。

人払いをした執務室で、ゼファードは従兄と向き合った。

「どうしたんだ？ おまえがこんな朝っぱらから血相変えてるだなんて、めずらしい」

ゼファードは単刀直入に告げた。

「夜、俺の私室に女が侵入した。ボーロックの差し金だ」

聞いたジルフィスの表情がたちまち引き締まる。

「未遂なんだな？」

「結論を言えば俺に害は及ばなかった。だが、寝台まで上がられたのは確かだ」

「くそっ！ おまえんとこの近習は何やってたんだ？」

「その女はアーラの扮装をしていた」

それを聞いてジルフィスの顔から見る見る血の気が引き、数瞬の後は怒りのあまりにこめかみに筋が浮いた。落ち着くと、ゼファードは諭した。

「これが落ち着いていられることか！」

「だが興奮してもどうにもならんだろう？ …… 女は、黒髪の巻き毛をまつすぐになるように手を加えて、アーラのものに似せた外套を着てきた。それで見張りはあざむかれたらしい」

「夜番の見張りは、いくら従兄妹同士とはいえ深夜におまえを訪ねに行くほど軽薄な令嬢だとアーラを思ってたってわけか？」

「その点については厳しく言っておいた。彼女を侮辱しているに等しいとな」

「あたりまえだ。それで？」

従兄の表情がいつになく険悪になっている。ゼファードは小さく

息を吸って、はいた。

「侵入者は俺が気がついて短剣を突きつけても、ひるまずに誘惑してきた。無論俺は応じなかった。すると女は洗いざらい白状する代わりに保護を求めてきたんだ」

「保護だと？」

「ああ。……驚くなよ、その女は、ボーロックが娼婦に生ませた庶子だったんだ」

口を開きかけたジルフィスを押しとどめて、ゼファードは続けた。「俺の子種を宿して強請る計画だったと言っていた。ボーロック令嬢として正式に妃候補の一覧に加えて公表し、ゆくゆくは妃にするようにと。女はリルグリッドと名乗ったが、おそらくボーロックと娼婦の娘として生まれた瞬間から、その人生はすべてたった一晚のために仕組まれていたんだろう。アーラが現れなければどんな変装をするつもりだったかは知らないが、何であれ、妃候補公表の直前に実行するつもりで綿密に準備されていたらしい。そして、失敗が知れたらボーロックに始末されるといつていた。だから父親の企みを話す代わりに保護してくれと願い出たんだ」

地の底から絞り出すような声でジルフィスが問うた。

「その娼婦は今、どこにいる？」

「牢に入れてある」

「処刑だろう？ 普通なら」

「普通ならな」

「おまえは……アーラの姿と名を騙られて、腹が立たないのか？」
ゼファードは怒れる従兄をまじまじと見返した。そして、アーラを彼の血の繋がった妹としたことの残酷さを　ジルフィスにとつての残酷さを、はじめて実感した。

多くの女性を虜にし、花街でも名をとどろかせた過去のあるジルフィスだ。これまでなら奔放で不真面目に見せかけることさえしたのに、今ではアーラただ一人にその心は向けられている。人前では妹を溺愛する兄を演じていても、その実はアーラを心底求めている

のだろうということ、身内だけの場で見せるふとした視線や言動からうかがえた。

「ジル」

「なんだ」

「まず、お前にあやまりたい」

怒りに燃えていたシルフィスの目がたちまち冷え冷えと凍る。シルフィスは探るようにゼファードを眺め、彼の真意を質したがっているようだった。

「おまえは、俺ににあやまらなくちゃなんないようなことをしでかしたのか？」

つま先を見つめて拳を握る。強く握りすぎて手が震えた。ゼファードは、ただ声だけは震えぬようにと祈った。

「俺も、アーラを伴侶にしたい。半端な気持ちでも責任からくる偽善でももちろんジルへのあてつけでもなくて、だ。本気だからこそ、あやまるべきだとわかったんだ。自分の気持ちに気がついて、公にアーラを奥方にできない立場の意味がわかって恐ろしくなった」

シルフィスに胸倉を掴まれ罵られるのを覚悟していたのに、そうはならなかった。

顔を上げるとシルフィスは視線をそらしており、痛みをこらえるように唇を噛んでいた。

ゼファードは彼の真意をはかりかねた。正々堂々とアーラを争わせてほしいというつもりで、気づいたばかりの彼女への気持ちをこらして打ち明けたというのに。

「ジル？」

「ああ……いいんじゃないか」

いいんじゃないか？ いいんじゃないかだつて？

ゼファードは混乱した。シルフィスがアーラを想っていることは確かなのに、牽制するでも罵倒するでもなく恋敵の告白を「いいんじゃないか」ですませてしまう意味がつかめなかった。

アーラとのあいだに、何かあった？

半日か一日ばかり二人がぎこちないことはあつたが、ちよつとした行き違いをしたくらいにしか思えなかった。実際、今では彼らのあいだにわだかまりがあるように思えない。それなのに、ジルフィスはこの話題についてアーラに何らかの遠慮を感じているようだ。百戦錬磨のジルフィスに比べて、いくら兄妹という肩書きがついていなくとも自分のほうが大いに不利だろうと信じて疑わなかったゼファードにとって、この従兄の反応は不可解なものだった。

「ゼファアが本気だというのなら、駄目だという権利は俺にないだろう？ もしも万が一アーラが遠慮や責任感からじゃなく心からおまえを選ぶなら俺は祝福するし、もっとふさわしい男の求愛をアーラが受け入れるなら俺もそれを認めるしかない」

静かに噛み締めるようにジルフィスは語った。

「でも、だからって俺はあきらめるわけじゃない。紙の上で血が繋がってようがそんなもの俺には関係ないんだ。いつかアーラに求めてもらうつもりで俺もいる。それでいいんだろ？」

ゼファードはうなずいた。

「もちろん、それでいい」

「……リルグリッドとかいう娼婦は、助けてやるのか？」

「そうしたいと、思っている。有益な情報提供者だ」

「それなら、ユンナに話を通してみよう。あいつは花街の出身だから、信用できる知り合いを身元引受人として紹介してくれるだろうな」

「ああ」

ありがとと彼がつぶやくと、ジルフィスは背を向けたまま軽く片手をあげて退室した。

42、教育役

食堂でつめてもらった食料を外に持ち出して、アーラは日当たりのよい芝生で昼食をとっていた。すぐ傍らではジルフィスが、肉とチーズをはさんだパンにかぶりついている。

「ねえジル」

「うん？」

「今日、ゼファのお妃候補の八人を公表するのよね」

彼は咀嚼していたものを飲み下して、手についた粉をはたいた。遠くからかすかに鐘の音が聞こえる。もうじきに持ち場へ戻らなくてはならない時間なのだ。

「ああ。その中に、アーラも入っているね」

水筒の水を飲み、残りで口と手をすすぐ。パンの粉にたかろうとしていた小鳥たちが跳ね散る水に驚いてあわてて飛びのいた。アーラがタオルを差し出すとジルフィスはにっこりした。

「ありがとう」

「うん。私の名前は、最終候補まで残すってゼファが言ってたわ」
「まあ、虫除けだと思っておけばいいさ。王子のお妃候補に手を出すような馬鹿はそうそういないだろ。しばらくはアーラがジュピスの坊主みたいなやからに悩まされることはなくなるよ」

「血の繋がった兄さんに悩まされるかもしれないけども？」

アーラがからかうように言うと、ジルフィスは笑って彼女のこめかみにキスをした。アーラはそれを微笑んで受け流すことができた。これくらいならグランヴィールにおいて、兄が妹へ対する親愛の情として行き過ぎたものではないだろう。たぶん。

ジルフィスから馬車の中での振る舞いを謝罪され、はつきりと思いを告げられたあの夜。アーラは彼の思いを受け入れられないと答えたとこのに、ジルフィスは一向にへこたれる様子を見せなかった。少なくとも、アーラが表面から見る限り。

もとよりさまざまな経験が豊富らしい彼はすぐに、アーラが許すものと眉をひそめる行いと境界を見定めたらしかった。実際、その後ジルフィスは何かと機会を見つけてはアーラに触れようとするが、それは頭をなでたり肩を優しくたたいたりというもので、アーラを安心させこそすれ、戸惑わせたり迷惑がらせたりはしなかった。ジルフィスにはきつと、すばらしい奥さんが見つかるわ。

彼には意外にも年上の奥さんが似合うのではないかと、アーラはこっそり決めつけていた。ジルフィスを受け止めるならおそらく相当の包容力がなくてはならない。しかし地位や家柄にこだわらない彼のことだから、社交界の外をも探せば、ふさわしい女性が見つかるだろう。

「さて。そろそろ陛下のところにもどらないとな」

ジルフィスが立ち上がり、剣帯の具合をたしかめた。彼は国王陛下に待す騎士交替の合間を縫ってこうしてアーラに会いにくるが、休憩は短くわずかな時間だ。その貴重な休み時間にわざわざ自分を訪ねてくることもないのにとアーラが言っても、彼は聞き入れなかった。あわただしいといったらないが、休憩時間の使いようは彼の自由なのだからそれ以上は言わないでいる。

「じゃあ、またあとで。授業のときに」

「うん。いつてらっしゃい」

アーラも立ち上がって、ジルフィスにひらひらと手を振った。ジルフィスは振り返ってなにか言いかけたようだったけれど、芝生の向こうから近づいてくる人影に気がついて眉を上げた。

「ユンナ？」

ジルフィスの表情が見る見る曇る。

尚書官の黒い制服を粋に着こなしたその人物はアーラの目の前までやってくると、大げさな身振りで礼をして見せた。

「お初お目にかかります、お嬢さん。しかしお嬢さんのお噂はかねがね、この頭の中がお花畑な御仁からいろいろと聞き及んでいますよ。私の名はユンナ・ゾルデ。尚書局に属するしがない事務屋です。

どうぞお見知りおきを」

アーラは思わず夜会ですのような淑女の礼をしかけたものの、どうしたものが迷ってジルフィスを見た。ジルフィスは肩をすくめ、何かを察したらしく、少し離れた場所に控えていた女官に下がるよう命じた。ゼファードがアーラにつけた忠実な女官はわずかに眉をひそめたが、律儀なお辞儀をして立ち去った。

「……ユンナ、どうしておまえがここにいる？」

ユンナ・ゾルデと名乗った尚書官は薄い唇をにやりとゆがめて、「ごあいさつだな。今朝、殿下から至急のお手紙をいただいたのさ。もう燃やしたがね。私は直筆の書簡によって、王子殿下の家令の任をお引き受けになったアーラ嬢に事務的なあれこれを教えて差し上げるお役目をおおせつかったんだよ」

「尚書局の方はいいのか？」

「午後を非番にした。先日二日酔いで午前出てこられなかった奴の仕事を代わりにやって、貸しが作ってあってな」

このジルフィスと同じ年頃らしい尚書官にどう対応すべきかアーラははかっている、ジルフィスが子どもをなだめるかのように彼女の頭に手をのせた。

「大丈夫だアーラ。こいつは信用できる」

そして彼は声を落とし、囁いた。

「ユンナは、アーラの境遇も知っている。なんせこいつが、アーラを俺の妹に仕立てる戸籍書類を作ったんだからな」

アーラは驚いてまじまじと尚書官の顔を見た。切れ長の目は楽しげに細められ、左目にかけられた片眼鏡が陽光を反射する。隣で、ジルフィスが小さく鼻を鳴らした。

「おまけにこう見えて、こいつは女だ。そちらの方面を警戒する必要はない」

アーラはぼかんと開きたがる口を閉じているのに、かなりの努力が必要だった。線の細い男性だとばかり思っていたのだ。

「まあ、私はそういうのかまわらない性質なんでね。間違えられよ

うが女子便所に行こうとするのを止められようがなんとも思わないんだ。だから気にしてくれるなよお嬢さん」

「ユンナは気前よく言って、

「さて。そんなことよりジル、あんたは陛下の御前にもどるところだっただろう？」

ジルフィスはとても嫌そうな顔をして、けれどももどらざるを得ないためにしぶしぶ体の向きを変えた。

「いいなユンナ、ぜったいアーラに変なこと吹き込むなよ！」

「あんたが心配するようなことは言わないさ。過去の武勇伝は、せがまれば話すかもしれないがね」

ジルフィスは何かが気になるらしく、たいそう未練がましく去っていった。

「……お嬢さん。あいつは、あんたにとっていいお兄ちゃんかい？」

「はい、とつても」

間髪いれずに答えると、ユンナはさも可笑しげに笑った。

「そうか。ジルはすばらしい妹御を持ったもんだ」

「いいえ、私は世話と心配ばかりかけています。自分で自分が厄介です」

「一介の事務屋に向かつてそう丁寧な口を利くものではないよ、お嬢さん。それに女同士なんだ、堅っ苦しいのはぬきだ。私なんざ身分にこだわってちゃあジルとだって目え合わせて話せやしないさ」

なんて懐が深い素敵な人なのだろうとアーラは感激した。もしもアーラが通っていた女子校にユンナのような先輩がいたなら、その見目の魅力とあいまって、ファンが殺到することだろう。

「わかったかい？ お嬢さん」

「……はい。お気遣いありがとう。私、とつても人に恵まれてるわね」

「お嬢さんの人徳だよ。お嬢さんは最初、殿下に語り手として呼ばれたんだって？」

「語り手だなんて、そんなたいそうなものじゃないわ。でも、みんな

楽しんでくれてるみたい。今でもお茶の時間に物語りをしたりするの」

「私もぜひ拝聴したいものだね。何でもかまわないから、一つお願いされてくれるかい？」

アーラはうなずいた。

43、昔物語

「ユンナさんはどんな物語りがご希望？」

「そうだな、甘ったるい恋物語じゃなけりやなんでも歓迎さ。あんたの引き出しはいっぱいあるんだろ？ おまかせするよ」

ユンナの微笑みを見ると、アーラはなんだかこそばゆいような心地がした。

「本当におまかせでいいの？」

「女に二言はないってね」

ユンナと話しているうちにアーラの脳裏に浮かんできて、ちらついてはなれない物語があった。それは大学生のころに論文を書くために読んだもので、確かな年代は不明だがおそらく鎌倉時代に書かれたらしい物語だ。アーラはそれを、グランヴィール風にかみくだいて話すことにした。

「私の故郷で遠い昔につむがれた物語をお聞かせするわ」

「楽しみだねえ。……じゃあ、ぶらぶら歩きながら聞くとしようか」

セキレイが早足で目の前を横切つてゆく。二人は王城の芝生の小道を、ゆつくりと歩いた。

アーラはおもむろに、丁寧な改めた口調でゆつたりと物語りを始めた。

「昔々あるところに、心正しくよい家柄だけれど、なかなか子宝に恵まれない貴族がおりました。この貴族は妻とともに、何度も神様に『跡継ぎとなる息子をお恵みください』とお祈りしました。そしてようやく子どもを授かったのですが、生まれてきたのは願った息子ではなく、玉のように美しく凜々しい女の子だったのです」

「アハハハ！ 神様もまったく粹なことをなさるね！ でも、その夫婦はやつとこさ生まれたその子をかわいがつたんだろ？」

「もちろん、目に入れても痛くないほどにかわいがりました。それに、その女の子が生まれたとき、夫婦は神様のお告げを聞いたので

す。女であることを世間に隠して男子として育てよ、と。そうすればゆくゆくは、大いなる名誉と権威が約束されると」

「へえ」

興味深いというように、ユンナは両眉をあげてアーラを見た。

「貴族は、神様のお告げのとおりに息子が生まれたと発表しました。生まれた姫は男子としてすくすくと育ち、負けず嫌いで好奇心旺盛な彼女は弓に剣、語学に詩歌など学ぶことすべてを砂が水を吸い込むように吸収していきました。そして文武両道の、世にもまれな美貌の少女に　表向きには美少年に、成長したのです。

特に音楽が得意で、彼女が横笛を吹くと花が舞い風が香り空が輝くほどでした…… 比喻ではなく本当に花は降ったし、風は甘く香り、笛の音のすばらしさに惹かれて神々の庭で遊ぶ妖精が下りてきて踊ったのです。

あらゆることに秀でたこの美少女は長じて、美貌の貴公子として宮廷に上がるようになりました。家柄がよくて実力もあり、すぐに武官長に任命された彼女と若き王とは年が近かったので、人より秀で人の上に立つもの同土気が合い、彼らは親友となりました。

王の覚えもめでたい貴公子のもとには、『うちの娘をぜひ』という申し出がなだれ込まないわけがありませんでした。ですがもちろん貴公子とはいえ正体は女です。どんな娘を娶ったところで子どもができるわけがないのです。そこで彼女は、心無い身内からの振る舞いにより身ごもってしまったかわいそうな姫君を見出して、助けて自分の妻に迎えました。姫君のお腹にいる子を自分の子だということにして」

アーラがちらと見あげると、ユンナは含み笑いをしていた。

「……それで？」

「皆はそれを信じ、世間的には貴公子が姫君を娶って子どもができたということになりました。子ができて、傍から見るかぎりお家は安泰、ますます隆盛といったところです。けれども貴公子自身は、世間や親友である王をだまし続けているということに葛藤し、苦し

んでいました。悩みのためにやつれていく彼女は痛々しく見えましたが、そのために儂げな美しさに磨きがかかって、王は親友を心配すると同時に『もしもこいつが女だったら、何が何でも妻にするのに』と強く思ったのです。その思いは日に日につのって、二人きりになったある日、ついに王は貴公子に迫り気持ちを打ち明てしまいました。その拍子に、長らく隠し続けてきた彼女の正体は暴かれてしまったのです」

物語が佳境に入り、アールは少し間をとって、かわいた唇をしめさせた。ユンナが先をうながすようにうなずいている。

「王は貴公子の正体を知り、親友に裏切られたと思う気持ちもありましたが、長く近く過ごしていたのに彼女が女であると気づかなかった自分自身にあきれていました。そして彼女の儂げな美しさと強いまなざしにうたれ、なにがあっても彼女を手放したくないと思っただのです。」

王は、その思いを実行しました。武官長である貴公子は朝が来れば務めに戻らねばならないのですが、王は夜が明けても彼女を私室から放しませんでした。美しい小鳥を鳥籠に閉じ込めるように。彼女の美しさを、もはや誰の目にも触れさせたくなかつたのです。

しかし何日も武官長が出仕しなければ、皆が怪しみます。王は仕方なしに彼女を屋敷へ帰らせました。彼女は親友と思い信賴していた王に正体を知られ、恋を打ち明けられて、死を望むほどに思い悩みました。王に知られてしまった今、このまま男として偽り武官長を続けていいとは思えないのでした。

彼女の両親は苦しむ我が子をなくさめ、彼女が女として生きていけるように策を講じました。まず、貴公子にはそっくりの妹姫がいるのだといううわさを流したのです。世の宮廷貴族たちは貴公子によく似た美貌の姫の存在を聞いて、ぜひ我が妻にとさざめきました。

その噂が充分に真実として知れ渡ったとき、男装の女貴公子は武官のマントを脱ぎ、華やかなドレスに着替えました。両親は貴公子が病に倒れて帰らぬ人となったと公表し、その喪が明けるのを待つ

て、噂の妹姫　　女の身なりに変えた元貴公子を、王に嫁がせたのです。

彼女を王妃に迎えた王は大いに満足し、城の奥深くで大切に大切に、何ひとつ不足なものがないよう気を配って暮らさせました。しかも彼女を自分だけのものにしたと思うあまり、社交界にすら出させなかったのです。王の愛情の深さは、臣下が驚きあきれるほどだったといえます」

長く黙って耳を傾けていたユンナが、おやおやと肩をすくめた。

「どうやら、王妃になれてめでたしめでたしってわけにはならなさそうだね。女貴公子がそんな結婚をして幸せになれたとは思えないな。一途に愛してもらえるのはいいかもしれんが、そこまでいくと鬱陶しそうだ」

「そのとおりです」

アーラは力をこめてうなずいた。

「王妃となった元貴公子はまったく満足していませんでした。彼女は弓にも剣にも学にも秀で、実力で武官長の任を拝命し、同僚である男性官吏のねたまやそねみを蹴散らしてきた強者なのです。ドレスや宝石や豪華な部屋を与えられても、男として宮廷で活躍していた日々を思えば、しかも王の愛情の檻に閉じ込められ通しとあつては、なんとも息苦しく味気なく退屈なものでした。

彼女にとって一番つらいのは、大好きな横笛を吹けないということでした。この国では横笛は男の楽器とされ、女が演奏するのは認められなかったのです。

やがて息子を生んだ王妃は成長した彼に横笛を譲り、自分はリュートを奏でることにして、親子の合奏を宴にて披露したいと夫である王に願いました。王はそれくらいならと受け入れ、ようやく彼女は公の場所に出る機会を得たのです。……そして、彼女のささやかな復讐が始まりました」

アーラはさすががしい思いで息を吸い込んだ。

アーラがこの話を好きな理由はいくつもあるが、最も印象深いと

思い気に入ったシーンは、これからの「ささやかな復讐」の場面なのだ。

「息子が女貴公子の横笛を吹くと天が割れ、雷が走りました。王妃がリユートを奏でると風がうなり、雲間が光り、そこから幾人もの妖精が舞いながら現れます。笛とリユートの音色は激しく竜巻のように渦巻いて、城の明かりが一斉に消え、王も臣下たちもあわてふためき、雷雲と風のあいだを自在に行き来する妖精の乙女たちに恐れおののくことしかできませんでした。

妖精の乙女の一人が、震える王や男たちには目もくれず、王妃のもとへと歩み寄りました。そして手にしていた花を王妃に捧げ、『わたくしは、あなたさまと天上の庭でともに楽しく過ごした日々を忘れはいたしません。我が君』とこの世ならぬ美しい声で歌ったのです。実は王妃は、神様に愛された妖精の女王の生まれ変わりだったのです。

王妃は妖精の乙女から花を受け取ると、息子とともにまたひとたび華やかにリユートを奏でました。人の世とも思われない激しく狂おしい雷と花と風と乙女の饗宴が最高潮に達したところで、この物語りは終わりです。

この及ぶべくもない力を目の当たりにして恐れおののいた王が、妻を所有物のように 一 等上等な飾り箱に鎮座させる宝石のように扱っていたのを後悔し、彼女にひれふして謝罪し、若かりしとき親友として彼女を対等に見ていたころのようにしようと心を入れ替ええたかどうかは、御聴衆の想像におまかせいたします」

アーラが立ち止まって本物の語り手よろしくお辞儀をすると、ユンナが楽しげに拍手してくれた。

「ふつう、王様と結婚したらめでたしめでたしで終わる物語りが多いのに、こりゃあおもしろいね。竜が出てくるわけでも魔女が出てくるわけでもない、主人公の敵が実は愛情深すぎる王様ってところがさ。私はこの王妃様の気持ちがよくわかる気がするよ」

アーラは苦笑した。

「私もなの。だから、この話が好き」

二人は再びぶらぶらと歩き始め、やがてユンナが言った。

「例の授業まで、まだ時間はあるんだろ？ 今の物語りのお礼に、私も一つ、昔語りをするとしようか」

44、セリスティン

「セリス」

ゼファードが声をかけると、城塞のように積み上げられた書物の奥から部屋の主の返事が聞こえた。

「勝手に入ってどうぞ。ただ、気をつけてよ。前みたいに雪崩れて埋まっても僕もコルディアも助けてやらないから」

研究室というよりも、本をどのように配置したらいかに威嚇的に見えるかという観点において積まれた前衛芸術の展示室のようだ。

しかもレンガや石材に見立てられたかのようなそれら書物の多くは、セリスティンが専門にしているはずの国史学とはまるで関係のないタイトルを背表紙につけている。「現代薬品総覧」、「軍事暗号実例集」、「植物より抽出される毒物」、「犯罪心理考察」などなど。

美貌の友人はそんな本の要塞に守られて、アーラから課された「宿題」に取り組んでいた。

「しっかしめずらしいな、殿下から僕の研究室に出向いてくるなんてさ。どうせ午後には授業で会ったから、用があるならそのときに言えばいいじゃないか」

「第四市街を視察する公務があったから、帰りについてに寄ったんだ」

「ふうん。その公務とやらは、家令になったっていうアーラもいっしょ？」

「アーラには今日からユニナ・ゾルデを教育役につけた。尚書官から学ぶべきことは多いだろう。城で勉強中のはずだ」

「あの子も勉強家だねえ」

くせのない銀の髪をかきあげてゆるゆると首を振る。

「ま、僕ほどじゃないだろうけど」

アーラがもたらした言語を恐るべき速さで習得しているセリスティンは毎日の授業だけでは飽き足らず、アーラに会うたびに「宿題」

をせがむのだ。今では簡単な手紙程度なら書けるようにさえなっていて、「宿題」の多くは、アーラが設けたテーマに沿ってセリスティンが書いた手紙を彼女が採点するという流れになっている。

短文がいくらか読み取れるようにはなったゼファードでも、残念ながら、アーラと手紙をやり取りするほどの力はまだついていなかった。同じ時間だけ授業を受けているというのに、セリスティンはゼファードの数歩先どころか、背中が見えないほど前方をひた走っている。

勉強家というより、勉強馬鹿だ。

ゼファードの胸中など知る由もなく、セリスティンは幸せそうにため息をついた。

「まったく、次から次へと湧いてくるこの複雑怪奇な漢字という存在は神秘だな！ ひらがなという便利な文字がありながらそれをわざわざ難解で筆順の多い漢字に置き換えるだなんて、アーラの国の人たちは素敵すぎるよ」

「……楽しそうだな」

セリスティンはこれまでに何十人何百人もの女性を（ときには男性をも）卒倒させてきた殺人的に輝かしい微笑みをゼファードに向け、うっとりとして手紙の表面をなでた。

「そりゃあ、楽しくないわけがない。これがあれば僕は一週間食べなくても生きていけるね！」

「言うておくがちゃんと食べるよ。前、一週間どころか十日近くほとんど食わず眠らずで倒れただろ？ コルディア嬢がいなければおまえはもうすでに三回は死んでるぞ」

「僕が死んだらここの本全部の写本を用意して一緒に墓に入れてよ。あの世でも読めるようにしなくちゃ気が狂うくらい貴重な書物ばかりだからね」

「そういうものは自分で用意してから死んでくれ。……それに、俺はこんな世間話をするために今日来たわけじゃない。あまり長くかかると、外で待っている供の者たちが怪しむ」

まあそうだろうねとつぶやいて、セリステインは美しい目をぐるりとまわしてみせた。

「何のご用で？　アールがまたおもしろい文字でも思い出したとか？」

「おまえの？　趣味？　について、少々協力をあおぎたい事柄ができた」
酔ったようにアールの言語を賛美していたセリステインだが、たちまち口元に別人のような酷薄な笑みを浮かべた。

「へえ？　殿下がそつちのほうで僕を頼るだなんてめずらしい。趣味って、？　あの？　趣味のことだね？」

「できれば使いたくはない。だが、使ったほうがいい場合もある」「そりゃそうさ！　頼ってくれて嬉しいよ」

薄い青灰色の瞳が狂喜している。ゼファードは胸の内でも嘆息した。試せる機会がそうそうないんだから、嬉しいだろうな。

セリステインの？　趣味？　は、見世物小屋から逃げ出して今の身分を勝ち得たコルディアに影響されたものだ。二人が本に埋もれたこの研究室で世間から隠れてどんなことをしているか、ゼファードは長いあいだ見て見ぬふりをし、そしてときには彼らの力を頼んだ。

「で、何にどう使っんだい？」

「昨夜、俺の私室に侵入した輩がいる」

「へえ。末弟派の暗殺者？　拷問用のやつをご所望で？」

クオードならば、王族へ無礼をはたらいた者はすべて処刑してしまえというだろう。しかし事はそう簡単ではない。王権びいきのクオードは貴族議會を毛嫌いしており、それゆえ貴族議員たちの陰湿な情報網や子飼いの力について軽んじている節がある。国法では、王権への侮辱や王族を害そうとした者に対しては裁判なしで処刑を下せるが、そうした場合に、王権乱用について民衆に大げさに喧伝する貴族議員たちを納得させるのは大変面倒なのだ。

ポーロツクの血を引いているらしいが、それは生まれてきた娘の罪ではない。

くだんの侵入者がまもっていたむせるような甘い香りが思い出さ

れ、ゼファードは頭痛を覚えてこめかみをもんだ。

「拷問用じゃない。そいつはすぐに降参して情報提供の代わりに保護を求めてきた」

「え。でも、殿下の寝込みを襲おうとしたなら命乞いしたって、クオードだったら絞れるだけ絞って殺せっていうだろ？」

セリスティンもある分野については過激な部分を持つ学友について、ゼファードと同じ想像をしたらしい。

「だが、気の毒な捨て駒だ。殺すのは忍びない。……理由はそれだけともいえないが」

できることなら処刑は避けたい。だが、大きな危険をはらんだまま野に放すこともしたくない。ゼファードは言った。

「だからおまえに、侵入者の記憶を曖昧にする薬を借りに来たんだ」
セリスティンは氷色の瞳を気狂いのように危うくきらめかせた。

「薬だなんて無粋な名前で呼んでほしくはないな。あれは何種類もの神経毒の絶妙な配合によって出来上がる芸術品ともいえる代物で肉体への負荷を最小限に抑えた上で一種の酩酊状態にすることよくあ」

「細かいことはどうだっていい」

いつまでも続きそうな講義をゼファードはぴしゃりと切って、

「とにかく、用意しておいてくれ。誰にも知られないようにな」

「……了解」

セリスティンはひらひらと片手をあげた。

「後日改めて連絡してよ。コルディアと都合つけて、投与しに行くから」

ゼファードはうなずいた。この件についてリルグリッドの記憶がセリスティンたちの功勞によって茫漠としたものになれば、ボーロツク側に寝返る心配はなくなるだろう。そんなことをしなくとも、万に一つもその可能性はないだろうが。

けれども、セリスティンたちがその？趣味？をリルグリッドに生かす機会は訪れなかった。永遠に。

幕間

お偉い方々がまします王城にいったい何箇所、どれほどの種類の牢があるのか知ったものではないが、自分が放り込まれたこの牢の居心地はさして悪くないとリルグリッドは思った。

ここえないように暖気が送られ、マットレスこそないがシーツでくるまれた藁の寝床は香りよく、清潔な毛布もある。はばかりにもきちんと衝立があつて、用を足したあとは臭いが気にならないよう砂がかけられる。娼婦見習いの少女たちが詰め込まれて雑魚寝する共同部屋よりもずっと素晴らしい住まいだ。

市街の酔っ払いや親と喧嘩した家出娘みたいなのが放り込まれて、一夜明かして帰されるときのための牢なのかしらね？

リルグリッドは、高級娼館とはいえないがその日暮らしの労働者を相手にするわけでもない、言うなれば中流の店で生まれた。店は広くはなく、看板娼婦たちが個室を持っているだけで、下働きをする見習いの共同生活は楽ではない。彼女は貴族である父の命令で特別扱いで育てられたが、同じ年頃の少女たちの暮らしがいかに大変であるかを目の当たりにしてきた。それでも空腹と寒さに悩まされないだけまだよく、場末の店ではもつとひどいのだろう。

政治の中枢に出入りするという父ポーロック公がなぜ高級娼婦ではなく中流の店にいた母に白羽の矢を立てたのか？ その理由を、彼女は何度となく考えてきた。あまり学がないので確かな自信は持てないが、いつも同じ一つの答えにたどり着く。

きつと母さんは、秘密を漏らさないためにポーロック公に殺されたんだわ。あたくしを生んですぐに。

名の売れた高級娼婦であれば、有力な貴族や金持ちを客に持つていることが多い。そんな人物では、簡単に消してしまうことはできない。

だからあたくしが失敗したとわかれば、ポーロック公はあたく

しを消すわ。

仮に成功していたとしても、その成功と引き換えに安穩とした生活が約束されたかは疑問だ。

あたくしが殿下の一夜の寵を得ても、子を生んだら始末されるに違いなくつてよ。……母さんのように。

だからよかったのだ。ことをなす前にゼファード王子殿下に見破られ、すべてを伝えることができてよかったのだ。

殿下は、非情な方には見えなかったわ。

きつと、リルグリッドの訴えを聞き入れてくださるだろう。どこか遠い静かな場所で、何も知らない一人の女として暮らす自由を与えてくださるだろう。

政治の難しいことなどわからない。ポーロック公がわざわざ娼婦の娘を王子の閨に滑り込ませるために二十年かけて自分という駒を準備させた理由も、知りたいとは思わない。現王陛下の御世かその系統に畏れ多くも何かの不満があつて失脚を望んでいるのだろうとは思つが、そんなことはリルグリッドにはなんの関係もないことだ。

あたくしはただ、食うに困らず何事にもおびえず暮らせれば、それだけでよくてよ。

リルグリッドはひとつ大きくあくびをして、寝床にもぐりこむことに決めた。

そのとき、ブーツが石敷きの廊下を踏み鳴らすコツコツという音が聞こえてきた。牢番だろうか？

現れたのは、簡素なお仕着せを着た牢番ではなかった。

「貴様が娼婦のリルグリッドか」

灰色がかつた淡い金髪に、オオカミのように引き締まった精悍な面立ち。見上げれば首が痛くなるほどの長身で、広い肩幅と厚い胸板が騎士の見本のように素晴らしい。リルグリッドは返事をするのも忘れて、突如出現した騎士にほうと見蕩れてしまっていた。

「ゼファード王子殿下の御寢所に侵入した咎で収監されたと聞いた。間違いないか？」

我に返ったりリルグリッドはあわててうなずいた。

「ええ、間違いありませんわ。反省しています」

「ボーロツクの差し金らしいな。血も涙もない父親を持って気の毒なことだ」

「仕方のないことですね。お偉い方々のお考えはあたくしのような下賤のものにはわかりませんもの」

無言で騎士に見下ろされて、リルグリッドは射すくめられた心地だった。

ああ、このお人は、何を考えてらっしゃるの？

「……殿下のお体に、傷はつけなかったか」

「は、はい！ 恐れ多くも大変な真似をしでかしましたけれど、お体に傷一つつけなかったと誓って言えます」

「そのしでかした馬鹿な真似を、悔いているか」

「もちろんですね。ですから、すべてお話したのですもの」

騎士はしばし瞑目すると、ブーツの裏側から何か細長いものを取り出した。銀色に冷たく光る。

刃物？

リルグリッドはその騎士が、そのナイフで牢の錠を壊し開けてくれるものだと思っていて疑わなかった。彼女は牢の冷たい鉄柵を握り締め、期待をこめて騎士を見つめた。

「貴様を解き放つてやる」

騎士は抑揚のない声で言った。囚われの身から解放してくれるのだから心ときめいてもよいはずなのに、リルグリッドは背筋に尋常ではない何かを感じた。

「同時に、貴様の罪を償え」

鉄柵を握り締めていた手に、騎士の大きな手のひらが重ねられる。革手袋の感触。

そして、銀のナイフが閃いた。

45、昔語り

ユンナは低く耳に心地よい声で語り始めた。

「私の生い立ちには驚くべきものでも隠すべきものでもないが、ややめずらしいたぐいのもものではあってね。私は、花街の娼館で生まれた」

アーラは努めて平静を保った。アーラの平静の下を見透かしたかのようにユンナは可笑しそうに目を細めた。

「母が娼婦だったんだ。ジルフィスが昔よく遊びに行ったような至れり尽くせりのもてなしが期待できる高級娼館ではなくてね、だがまあ姐さんがたはそれなりにきれいに装っていられる、中流の店だった。」

姐さんがたの噂によれば、私の父さんは学者だかどこかの先生だかってことだった。娼婦が生んだ子どもの父親なんてものは九割九分、たしかなことはわからんがね。

妊娠して早い時期に気づけば裏町の医者を呼んで下ろすことが多いが、母が気づいたときには腹の中で私はもうだいぶ育っていたそうだ。生んでから始末するほうが早いだろうってことで、男の子が生まれたらまびいて、女の子だったら育てて娼婦にして働かせようって寸法だったらしい。

ちなみに母は、私を生んですぐに亡くなったんだ。産後の肥立ちが悪くてね。幸か不幸か、男のしるしがついていなかった私は、生まれ娼館でそのまま見習いとして育てられることになった。

でも店の期待は大いに外れてさ、私はがりがり痩せててちっともかわいげのない、かわいくもない子どもにしかならなかった。こんなのが娘盛りの年になっても、男どもは見向きもしないだろうってくらいの不器量な子どもさ」

そのころの自分を思い出したのか、ユンナはクツクツと喉の奥を鳴らしてハトのように笑った。

アーラはユンナの横顔をまじまじと見上げた。たしかに美女といえる外貌ではない。しかしそこには熟練の職人が手がけた道具にある機能美のような、簡潔にして無駄のない顎のラインと涼しげな目元がある。不器量という言葉はとても不似合いに思えた。

「十二歳の年だった。厨房で夕飯の用意をしていた私はちよつとした不注意から髪に火をつけちまつてね。ああもう、燃える燃える。驚いた姐さんたちが寄ってたかつて消してくれたんだけど、少しでも女らしく見えるようにと伸ばして髪はほとんど燃えちまつてね。炭になったところを切り落としたら、どこからどう見ても痩せぎすの男の子にしか見えなくなった。」

胸もなけりや尻もない、おまけに髪もほとんどない。馬番の男子よりみすばらしかったね。ただ背だけがひよろひよろと高くつてさ、どうしたつてスカートが似合わないんだ。姐さんたちのお古のスカートをはくと、通りに行く人みんなが私を指差して笑う。坊主が母ちゃんのスカートはいてつぞ、つてな具合にね。しかたなしに私は古着屋で一番安いズボンを買ってきてもらって、それを着るこ
とになった。

その格好で店の前を掃除していたときに、私の人生は変わったんだ」

目つきが遠く、そしてやや優しくなった。

「夕方。そろそろ商いを始めようって頃合だった。私は集めたゴミを始末するために、箒を仕舞って戻ってきたところだった。」

ゾルデ卿とあだ名される御仁が 貴族ではないただの金持ちだから、卿ってのは正しい呼び方じゃなくてあだ名なんだ 私が生まれた店の前で足を止めた。そして、私をじっと見て何やらうなずくと、『この子にしよう。もう店は開けてるかね？』って言うのさ。私は娼婦としての作法もまだ習っていないまったくの子どもだったから、店に出られるはずもなかった。店側も、仕込んでないって断るべきだったのさ。だけど、私みたいなやせっぽちで見込みなさそうな娘に客ができたことに店は大喜びしてね、ほいほいとゾルデ卿

を上の階に上げちまった。私は目を白黒させることしかできなかった。……いつくら花街育ちって言ったってさ、そんな見てくれじゃ客もつかないって高をくくってたから」

アーラは息を呑んでユンナを見返した。ユンナは歩調も口調ものんびりしているが、これはのほほんと語れる種類の話ではないように思える。

「ゾルデ卿はもちろん、私の服を脱がせようとした。まあそうする場所だからな、娼館は。だが私はもう泣きじゃくって暴れてわめいているんなことを叫んで、とにかく手がつけられなくてさ。ゾルデ卿は怒るといふよりあきれて、あきれるといふより困っちゃまったんだよ。そうこうしているうちに、卿は自分の思い違いに気がついた」

「……思い違い？」

「ああそうさ」

あろうことが、ユンナはいたずらが成功したときのような笑みを浮かべた。

「ゾルデ卿は、私を男の子だと思い込んでいたんだよ！」

こらえきれないというようにユンナはアハハと大きく口を開けて笑った。アーラも大きく口を開けた。しかしそれは笑ったからではなく、ぽかんとして。

「おついお嬢さん、そんなに口を開けてると羽虫が飛び込むぞ？」

指摘されて、アーラはぱくんと閉じた。ユンナはニヤニヤした。

「ゾルデ卿はそちらの趣味のおかただったのさ。女の子にはまるで興味がわかないらしくてね。世の中にはいろんな人がいるからな。背ばかり高かった私を、十五、六の幼顔の少年と勘違いしたんだ。あの店には一人も男娼を置いてなかったのに」

アーラはうなずいた。ようやく思考力が戻ってきた。

そう、世の中にはいろんな人がいるものよ。

アーラ自身にはそちら方面の趣味はなかったが、ギリシャ神話のガニメデから江戸時代の念者から彼女の母校の女子校特有の文化に

いたるまで、そういったたぐいのものには触れてきている分、理解はあるつもりだ。文学や文化を学ぶ者ならその種の話が決してめずらしいものではないことくらい知っている。

アーラが驚いたのはそちらではなく、悲惨な過去の告白と思われるユンナの話が、思っても見なかったほうに転がったせいなのだ。

アーラの口が閉じたのを見届けると、ユンナは続けた。

「かくして私の貞操は守られた。ふつうなら、これでゾルデ卿が『とんだ貧乏くじだった』と帰ってしまえば終わりだった。けど卿はなぜか私を気に入ったらしくてね、養子にしたいからと店に掛け合つて私を買い取ったのさ。」

こうして私とゾルデ卿　おやじさまは出会ったんだ」

ユンナはとても嫌そうに……しかし愛情のこもったようすで、顔をしかめて見せた。

「貿易で財を成したが独り者のおやじさまは花街でちよつと遊ぶくらいでは使い切れない金をたんまりため込んでね、ひとり養子をとるくらいなんでもなかった。」

たまるいっぽうだった金におやじさまは新しい使い道を見出した。それが、私への投資さ。おやじさまはとにかく、一人前の男としても最高の女としても通用するものに私を仕立て上げたかったらしい。金持ちのぼんぼんやご令嬢が習うものは一通りやらされたね。私はどれも、まあ及第点というところまではこなして見せた。こう見えて負けず嫌いなんだよ、私は」

「私も負けず嫌いだから、わかるわ」

ユンナはアーラにニヤリとした。

「おやじさまがお嬢さんを見たら、養子第二号にしたがったかもな」
「ユンナさんのおやじさまは、今もいっしょに住んでらっしゃるの？」

「いいや、死んだよ」

本当になんでもないことのように、さらりとユンナは言った。

「おやじさまのおかげで花街生まれだったのに私は尚書官にまでな

って、いまや王子殿下の従妹君とまでお近づきだ。癪だけど、感謝しなくちゃならんな」

ユンナの長い指が、アーラの頬をすべる。そのままアーラの顎を軽く持ち上げて、ユンナはしげしげと彼女を観察した。

「ふうん……こういう子が、ジルの好みなのか」

アーラは視線の置き場所に困った。ジルフィスはいったい、何をどこまでユンナに話しているのだろうか？

「頬が丸くてかわいいな。うん、睫毛も長い。あいつは絶世の美女系が好みかと思いきや、素朴な女の子に射抜かれたのか。……おや？」

ユンナがアーラを解放し、目をすがめて遠くを見た。

アーラも振り返って、ユンナの視線を追った。すると、木立の向こうから女官が駆けてくるところだった。

なにかあったの？

46、疑念

せつかくユンナと近づきになれたというのに、宮廷の煩雑極まりないらしい事務業務の何たるかを少しも教えてもらえなかった。そうアーラが残念がると、ユンナは夕方にグラントリー邸をたずねると約束してくれた。

芝生も散歩もユンナの微笑みからも離れがたかったが、アーラはしかたなしに、女官に急ぎ立てられるようにしてゼファードの執務室に向かった。

何かが起きたらしかった。だが、女官はただアーラを呼んでくるようにとゼファードに命じられただけで、詳細は知らないようだ。

アーラが執務室に入ると、そこにはゼファードのほかにセリステインがいた。二人の表情を見て、瞬時にアーラはかなり喜ばしくない事件が起きたのだと察した。

「アーラ。俺は、おまえにも話すべきかどうか迷った。初めはやめようとしてユンナ・ゾルデにおまえを預けたんだが、行きつ戻りつして考えるうちに、仮にも俺の家令なら知っておいてもらうべきだろうと結論したんだ」

気が進まないようすで、しかめた眉間を指先でほぐしながらゼファードは唸った。とても疲れているように見える。

「今からの話すのは、ジルとセリスとクオードと、そのときに居合わせた見張りたちしか知らない」

アーラは眉を上げた。

「ジルも知ってることなの？ さっきまでいっしょだったけどそんなそぶり全然なかったし、何にも教えてくれなかったわ」

「簡単に口外できることじゃないんだ。相手が誰であっても」

ゼファードの口元がゆがむ。彼はたいそうアーラの反応を気にしており、その様子から相当話にくい内容であると知れた。

「気分のいい話ではないが、聞いてもらいたい」

そう言った彼にアーラは心得顔でうなずいた。

「わかったわ」

そして、アーラは知った。昨夜ゼファードの寢所にポーロツクの娘が侵入し、彼を誘惑したことを。

たしかに、理由はどうであれ、おのれの寢台に女が不意に入り込んできた事実を女性であるアーラに告げるのは、気が進まなくて当然だろう。侵入者に気づいたゼファードはすぐに短剣を突きつけその娘を牢へ送り緘口令を敷いたらしいが、一連の出来事を聞かされてアーラはなんとも言い表しがたい気分になった。

ゼファードは淡々と事実だけを語ってくれたようだが、日本の一般家庭で生まれ育ったアーラにしてみれば、その事実はあまりに現実離れしたものだっただ。

政敵を脅迫するために、自分の娘をその寢所へ送り込むだなんて。

「あちら？でも歴史上そういった？ささやかな？事件はいくらでもあったと知っていてさえ、アーラにはポーロツクの神経が理解できなかつた。

彼女は改めてゼファードを見た。アーラの視線を受け止めて、彼が小首をかしげる。寝不足で疲れてはいても清潔な印象のゼファードがポーロツクの娘に誘惑されるさまを想像してみようとしてすぐにやめた。とても後ろめたい気持ちになり、首の後ろがむずむずする。

かぶりを振って、アーラは気を取り直した。

「その娘さんは、このあとどうなるの？ポーロツクに引き取りに来いって言うわけにも行かないでしょう？」

「アーラ嬢。今ここで問題になってる問題ってのはさ、殿下がベッドで襲われかけた事件そのものじゃないんだよ」

セリステインが美しい顔をしかめて見せた。

「そのあとに……たぶん今さっき、牢屋で起きた事件についてなんだ」

「牢屋で起きた事件？」

話の先が見えずに、アーラが助けを求めるようにゼファードを見ると、彼は苦々しげにつぶやいた。

「例のポーロツクの娘が、死んだんだ。城の牢でな」

「……死んだ？」

あまりに展開がめまぐるしく、アーラは目をしばたいた。

「どうして。拷問とかそういった非文明的なことはしてないんでしよう？」

「しない。拷問死はありえない。まず前提として、俺の私室への侵入を許したなんて失態を公にできるわけがないだろう？ ポーロツクのにやついた顔が浮かぶように忌々しい。だからただの娼婦を軽微な罪で捕らえたことにして、奴を牢に入れたんだ。この物事を片付けるにはほんの少々の時間が必要だった。わずかな時間稼ぎのつもりで閉じ込めておいただけなんだ。それなのに死んだなど、信じられない」

「一見自害したように見えるそうだよ」

セリステインがアーラに教えた。

「ナイフで喉を刺してたって」

「だが、奴は俺に命乞いをしたんだ。命乞いをした奴が自害するか？」

しないだろう。アーラは思わず自分の喉をさすった。

「ポーロツクがやったのではないの？ 自分がそういう非道なことをさせたってほかに知れる前に、口封じを」

「牢番は怪しい人間を見ていないんだ。見回りをしている牢番仲間と様子を見に行ったクオードくらいしか出入りしていないと、彼らは証言している」

「だから自害したとしか考えられないんだよね。どんなに不自然でもさ」

セリステインが肩をすくめたが、彼の氷色の瞳は別の可能性を考えているに違いないとアーラは見て取った。

アーラも口にこそ出さなかったが、疑念が鎌首をもたげている。おそらくゼファードも同じ疑念を抱いていることだろう。疲労の色が濃いのは、何も寝不足だけが理由ではないらしい。

クオードが。

アーラはその可能性を脳裏に留めつつも、表に出さぬように努めた。

「……その亡くなった女性は、どうなるの？」

遺体こそ、ボーロックは引き取りに来ないだろう。血を分けた娘であつても。

「軽微な罪で囚われているあいだに病気や事故などで死んだ者たちは、共同墓地に葬られる」

淡々とゼファードが教えた。

「実際はどうであれ、罪状は王族の私室への侵入、ではないからなさらし首にはならない」

共同墓地であれ、一応は葬ってもらえるのだと聞いてアーラはほつとした。城門や街中でさらされるならたまつたものではない。

アーラ自身の心身の衛生上。

「今日の授業はなしだ、アーラ」

ゼファードが告げ、セリスティンがつまらなさそうに口を尖らせた。

「しかたないけど調べるべきことが山ほどできたからね。それに今日は殿下のお妃候補発表の日だから、授業をやつたら時間が押しちゃうわけだ。……じゃ、僕は検死官に頼んで遺体を見せてもらうよ。喉の傷、どんなものかたしかめておきたいからね」

退出するセリスティンの背中を見送つてから、アーラはふと気になったことをゼファードにたずねた。

「でも、そもそもどうして、ゼファードを守る一流の近衛兵たちがその人の侵入を許してしまったの？」

ゼファードは一瞬言葉につまり、アーラから視線をはずしたものの再び彼女を見て何かを言いかけ、思い直したのか口を閉じた。明

らかに挙動不審だったのでアキラが問うように見つめると、彼の目元が薄紅に染まっている。

何か訊いてはいけないことを訊いてしまったような気がしたが、侵入を許してしまった理由を訊くことの何が不都合なのかさっぱりわからない。

はからずして見てしまったゼファードの反応にこちらまでも気恥ずかしくなり、アキラはうつむいてしばらくつま先を見つめることにした。

47、ユンナの授業

娼婦リルグリッドの死は、いわゆる経験豊富な検死官により、若い女が起こしがちなヒステリーから引き起こされた獄中での自害と結論された。しかしセリステインは喉の傷の角度と血痕に疑問を述べたくてうずうずしており、それでも立場をわきまえている彼は検死官にそれらを指摘することはなかったという。

？軽微な罪？で一夜牢に勾留された女一人が？自害？したところで、宮廷の予定が覆るはずもなかった。

王城の筆頭広報官により王子ゼファード・グランヴィールのお妃候補八名がつつがなく発表され、その話題は急使が鞭を当てた馬よりもはやく走り王都中に広がった。

二日後には選ばれた令嬢を招いての晩餐会が催される。無論、アーラも出席せねばならない。そのためにあらかじめ渡された候補の一覧を頭に叩き込み、財力から親戚関係までも覚えたのだ。候補の一人・グラントリー令嬢として参加するほかに、晩餐会ではゼファード王子の家令として候補者たちを観察し、さらに候補を絞り込むための情報を収集しなければならない。きらびやかな洪水のような宮廷を泳ぐのはまだ不慣れだが、社会の荒波ならばしよっぱい思いをしつつもかいくぐってきたのだ。舞台はコンクリートの群れではなく石積みの中城だが、目を開き耳を澄ましていれば、それなりの働きができるだろう。

令嬢のふりをして夜会に出るのは懲り懲りって思ったはずなのに、家令の仕事だと思えばそんなにつらくないのは、不思議ね。

降ってわいた侵入者死亡の調査にセリステインとゼファードが忙しく、授業が取りやめになったのでアーラは早目に屋敷へ帰った。先ほど聞いた事件について、自分のための覚え書き 家令日誌に細かく記入する。もちろん、日本語で。

夕方。

約束通りにグラントリー邸まで訪ねてきてくれたユンナを出迎えようとして、アーラは目の前の女性がしばし誰だかわからずに呆然とした。

大きな帽子を小粋な角度でかぶり、隙なく白粉と頬紅をはたき、既婚者らしい褐色の肩掛けとたつぷりしたミモザ色のドレスを着た背の高い貴婦人。この女性が口を開くまで、アーラは彼女がユンナ・ゾルデだと気づかなかった。

「どうしてそんな格好をしているの！」

思わず素っ頓狂な声を上げたアーラに、ユンナは貴婦人然とした身なりにまったく不似合いな大笑いをした。

「だから言っただろう？ 私は男としても女としても一流で通せるだけのしつけをされたんだって。お上品な既婚婦人を気取るのだからってわけなのさ」

「だからどうしてお上品な既婚婦人を気取らなくちゃならないの？」

ユンナは茶目つ気たつぷりにアーラを見つめた。

「あなたは王子殿下のお妃候補なんだよ、お嬢さん。公表されただろ？ そんなお嬢さんのところへ夕暮れ時に男のなりをした尚書官が訪ねていったら、他の候補者たちはどう思うだろうね？」

アーラの中で一瞬にして反論が幾通りも出来上がったが、その反論に対する世俗的な反駁をも次の瞬間には容易に想像することができて、納得せざるを得なかった。

「……なるほどね」

「小金のありそうな既婚婦人なら、王弟閣下のお宅を訪ねても大して問題じゃないってわけさ」

アーラの部屋で帽子をとったユンナはやはりユンナらしいユンナで、綿密にほどこされた化粧と短く刈り込まれた髪のコントラストが何とも言いがたかった。

「さて、私がお嬢さんにしてさしあげる？ 授業？ はグランヴィールの政の基盤、王権と貴族議会並立制のしくみあたりからとりかかる

うか」

「ユンナの説明は簡潔でわかりやすく且つユーモアがあつて、アラはまったく退屈しないどころか、かなり楽しんでさえいた。おぼろげにしか把握していなかったグランヴィールのありかたが、ようやく具体的な輪郭を得て腑に落ちる。」

「グランヴィールは二百年ほど前まで封建制であつたが、その後中央集権型の絶対王政に移行し、やがて王族と貴族と抑圧された民衆の三つ巴の争いとなつた。短期間で絶対王政と貴族連合が立ち代りて政権をにぎり、どちらも民衆の支持を得られないまま、百二十年ほど前によくやく現在の形態となる。」

「現在まで続く王権・貴族議会並立制は、その名の通り王族と貴族議会がどっちがぬきんでるつてこともなく国政を仕切つてくやり方だね。立法権は貴族議会にしかないから、まあ概ね、貴族議会で決められたことを王や王族が承認するつて形になる。だから殿下を見てりゃわかるように、王族の仕事つてのはほとんど、議会から上がつてきた書類に署名や印章を押すことなのさ。もちろん王族にも拒否権はあるし、会議ですり合わせもできるから、よくない案件は王族と貴族議員の高等会議に出した上で廃案にできる。この廃案にすべき案件や議会への要求案件なんかの書類の用意と管理が、お嬢さんの主な仕事の一つになるだろうね」

「書類の様式や書き方などを今後、順を追つて教えることをユンナは約束してくれた。」

「これからもうつして来てくれるの？ 変装して？」

「ああ、変装してな」

「ユンナが楽しげに答える。そしてアラが、日々尚書官のもとに提出される数々のとんでもない書類のエピソードについて聞いてみると、ドアがノックされた。」

「どうぞ」

「入ってきたのはアラの予想通りジルフィスだった。ありがたいことに、アラは今日夜着ではない。」

ジルフィスはドレス姿のユンナをまるで羽をつけた蛇でも見たように観察し、ものすごく嫌そうな顔をした。

「兄妹水入らずで話がしたいんだすぐに出て行けこの珍獣」

ユンナは意味ありげに眉を上げて、

「ねえお嬢さん、お嬢さんはこの部屋で珍獣なんかを飼っているのかい？」

アーラもユンナを真似て眉を持ち上げた。

「まさか！ 猫は飼ってみたいと思うけれど、密林や奥地から取ってきたような珍獣を飼いたいとは思わないわね」

「おまえのことだよユンナ・ゾルデ！」

ジルフィスが息巻く。ユンナはけたけたと笑いながらアーラに片目をつぶってみせると、

「それでは今晚はこれにてご無礼いたしますわ。アーラ様、ごきげんよう」

半オクターブ高い声音で言い、大きな帽子をかぶりなおすと完璧な貴婦人の物腰で部屋を出て行った。

「……あいつ、ぜったい胸に詰め物してるな」

「ジル、ものすごく失礼よ」

つぶやきをアーラに聞きつけられたのが意外だったらしく、ジルフィスはたいそう気まずそうに向き直った。

「せっかくユンナからいろいろ教えてもらっていたのに。兄妹水入らずで話すべきことっていったいなんなの？」

「ええと……そう、昨晚ゼファが襲われた件についてだ」

目が泳いでいる。アーラはすぐに、ユンナを追い返したいばかりにジルフィスが適当なことを言ったに過ぎないのではといぶかった。ジルフィスとユンナはいったい仲がいいのか悪いのか、まるでよくわからない。

「お昼にゼファから聞いたわ。その人、牢で自害したんですってね。表向きには」

ジルフィスはアーラがすすめたソファにすわり、アーラ自身は書

き物用の椅子の向きを変えて腰を下ろした。

「きつとゼファは、その人が死なずにすんだなら私に打ち明けはしなかったと思うの。だからジルもお昼のとき私に言わなかったんでしよう？ でも実際は、ポーロツク公の娘が死んでしまった。ポーロツクが妙な出方をするといけないから、ゼファは警告の意味で私に教えてくれたのよ。私が帰ったあと、何かそれ以上の進展があったの？」

ジルフィスは首を傾げてまじまじとアーラを見返していた。

「なぜ見張りがポーロツクの娘をゼファのところまで通したのか、聞いてないのか」

「訊いたけど、ゼファが何も言わなかったの。特別な理由でもあったの？」

「いや、べつに」

ジルフィスはたいそうわざとらしく話題を変えた。

「ゼファは、侵入者の件のほかに何も言わなかったのか？」

これを確認したくて彼はここに来たに違いない　ジルフィスの落ちつかなげな様子に、アーラはそう確信した。

「ほかにって、例えば？」

しかしいつたいジルフィスが何をこうまで気にしているのか、見当もつかない。事件など、一日に一つでも充分すぎるというのに。

「……いや、ないならいい」

眉をひそめるアーラの頬をジルフィスは両手のひらで包み込み、そつと髪を撫でた。そのまま見つめられて、アーラはにらめっこでもしているような気分になる。目を閉じたら、そらしたら負けだ。

アーラが相当に鬼気迫る表情をしていたのか、ジルフィスは苦笑して、前髪に唇を落としただけではなれた。そしていやに明るく口調を変えて、言った。

「明日は大変だぞ」

「どうして？ 明日も、じゃないの？」

「明日は今日の比じゃない。二日後の晩餐会にアーラが着るガウン

を選ぶんだって、おふくろがはりきってるからな」

アーラは肩をすくめた。王城に呼ばれてからこのかた、大変ではない日などないような気がするのだった。

48、母娘

王弟サリアン・グラントリーの妻でありジルフィスの母であるテイアーナと二人きりで話すのは、今日が初めてだった。

テイアーナ・グラントリーは齡四十半ばをとうに過ぎ五十に近づいているはずだが、未だ少女のような愛らしさを感じさせる女性で、なるほどサリアンが熱烈に大切にするのももともととアーラは納得した。

緩やかに波打つ豊かな栗色の髪、明るい褐色の瞳。頬はふっくらとしてつやがあり、ほとんど年齢を感じさせない。目じりには笑いじわが刻まれているが、それはむしろ好ましく感じられた。

ジルフィスの背の高さや顔の骨格は父親似だが、その甘やかな面立ちは母親譲りに違いないとアーラは思った。やわらかなまなざしも優雅な弧をえがく唇も、よく似ている。

ジルフィスが予言したとおり、テイアーナは晩餐会のガウン選びを心底楽しんでるようだった。仕立て屋が馬車に山積みにしてきた布地とレースとりボンのサンプルの波間をすいすいとかわけてゆく。仕立て屋もお針子も、「母娘水入らずでゆつくり吟味したいから」とのテイアーナの言葉に従って一人残らず席をはずしていた。「わたくし、あなたが娘になってくださって本当に心から嬉しいのよ」

明るく甘い微笑みをアーラに振りまきながら、あれこれドレスの布地を手にとつてテイアーナは言った。

「ありがとうございます。ご迷惑ばかりかけてしまつて心苦しいばかりですが、テイアーナ様にそう言っていただけで、私は幸せ者です」

アーラがこたえようと、実に楽しそうにテイアーナはころころと笑つた。

「そんな鹿爪らしいこと言わないで頂戴。わたくし、あなたのこと

を実の娘のように思っていてよ、アーラ。本当よ」

アーラは珊瑚のようにあざやかなピンクの生地を胸元に当てられてたじろぎながら、

「けれど私は、王子殿下の命と御はからいによってここにいられるだけの者です。貴い血筋などではございませんし、顔立ちも姿もまったく優れたものでは」

「まあまあ！ だれがそんなことを言ったの？」

ティアーナは柳眉を跳ね上げて、

「アーラ、あなたは充分かわいらしくつてよ。折れそうに細い首や腰、人形のように小さな口ばかりがもてはやされたのは昔のこと。今でもそうだったことに腐心している方々はいらっしやるようだけれど、わたくしはあなたの素直なお顔が好きよ」

素直なお顔とはどんなだと思いつつも、そのような無礼な疑問はおくびにも出さずにアーラはつましく礼を述べた。

「ありがとうございます、ティアーナ様」

「堅苦しいのはなしよ、アーラ。だからお母様と呼んで頂戴な。わたくしは自分の？娘？とガウン選びを楽しみたいのよ」

「ですが、ティアーナ様も聞いておいででしょう？ お嫌ではないのですか。私は、サリアン様の庶子ということに」

「そんなのふりだけだとわかっていきますもの。なんでもなくつてよ。サリアンはわたくしを愛してくださいさるし、わたくしもサリアンを愛しているわ。それだけで充分ではなくて？ それにあなたが仮にサリアンの庶子だとしても、わたくしは自分の娘として接したはずよ。だってアーラは、わたくしの赤ちゃんが大きくなって戻ってきてくれたようなんだもの」

しみじみとティアーナは言った。

「わたくしとサリアンにはね、本当に娘がいるはずだったの。昔のことよ」

アーラにとってそれは初耳だった。藍色や群青、濃い紫の布をより分けていた手を止め、耳を傾ける。

「そう、ジルフィスにも一つ違いの妹がいるはずだったわ。生まれるまでまだふた月はあるというとき、わたくしは侍女たちと出かけようとしていたの。王都の外の、すがすがしい空気を吸いたくなつたのよ。けれど都の城壁を出て街道を少し行つたところで破水してしまつて……お医者様は間に合わなかつた。生まれてきたのに、あまりに小さすぎて、生きられなかつたの。わたくしのかわいい女の子」

ティアーナのつぶらな瞳にうつすらと涙の膜がゆらめく。睫毛をぬらしたその雫をそつと払いながら、彼女はアーラに笑いかけた。「……ごめんなさいね。あなたは二十歳なんだもの、あの子が生きて育つていれば二十六のはずで、そんな子といつしよにされたくないわよね」

「いいえそんなー!」

ティアーナは、アーラが異界から転がり出てきたという事情も、実際の年齢も、ジルフィスの妹になつた成り行きの詳細も知らない知らせた上で演技をしてもらつよりも知らせないほうがいいと、ゼファードが判断したのだ。

アーラは驚いたのと慌てたのとで混乱し始めた頭の手綱を取るのに必死だつた。

「すごく、すごく嬉しいです、そんなふうに思っていただけで。ティアーナ様……いいえ、お母様のよい娘になれるように、がんばります」

「がんばらなくなつてよろしいのよ! 時々いつしよにお茶をして、時々いつしよにお買い物をして、毎日ちよっぴりお話をしてくれれば、わたくしはそれで大満足なの」

育つていれば、生きていれば二十六歳……私と同じだわ。

偶然なのか必然なのか判じかねるこの一致に、アーラはくらくらした。この情報にこそ?こちら?と?あちら?をつなぐ鍵があるよくな気がしたが、早産のため亡くなつた赤子と、予定日と大差なく安産で生まれたアーラ自身に、生まれ年以上の共通項を見つけるの

は困難なように思われた。

「さあ、わたくしの娘のために、明日のために素敵なガウンをつくらなくてはね！ このレースで、袖をたっぷり飾るのはいかが？」

ティアーナは「二十歳なのだもの！ 若い子にはピンクが一番似合うわ」と大いに主張したが、アーラは持ちうるかぎりの技術を総動員しピンクをあきらめるようなんわり説得することに何とか成功した。できれば濃色にしたかったアーラだがティアーナの嘆願により藤色で折れることに決め、レースとフリルの分量を減らすために何度も骨を折らねばならなかった。

ガウンの生地と形とを決めて仕立て屋に託したころには、アーラはげっそり疲れきっていた。

午後からゼファードと打ち合わせの予定があり、屋敷で昼食をとってから一人馬車に揺られて王城にやってきたものの、ともすればまぶたが閉じそうになる。

従僕にきいてみると、ゼファードは少し席をはずしているらしいかった。控えの間で待つことにするが、長椅子に座ってあくびを噛み殺していると目の奥がぼんやりした。

布地選びのときに、目を使いすぎたのね。

眠い。ゼファードを待たねばならないのに。

アーラは眠気と戦い、勝利したという実感を得ることができないまま、知らぬ間に意識を手放していた。

数分後、ゼファードは長椅子でまどろんでいるアーラを見つけることになる。

49、ゼファード

国境付近に不穏な動きがあるということは、ゼファードも前々から報告を受けて知っていた。王族よりの貴族議員たちはそれを末弟派の何らかの動きによるものに違いないと信じ、しかし末弟派はどんな噂を囁かれようとまったく動じていなかった。

幸いというべきか、リルグリッドの件についても何の動きも示さない。

牢番たちは、年にそうそうあるわけではないものの決してないわけではない獄中の自害や病死の囚人に対するのとまったく同じ手際によさで、リルグリッドを共同墓地管理人に引き渡した。何事もなかったかのように牢は掃除され、そのうちに酔っ払いか、喧嘩沙汰を起こした若者が、許可なし営業の夜鷹かが放り込まれることだろう。

何がどうであれ、明日には王子妃候補者たちをそろえての晩餐会が行われる。目が回りそうだ。そのような不毛な茶番など無駄遣い極まりないのだからやめてしまえと思う一方、貴族に対する建前や王族としての権威を誇示し牽制することを考えざるをえない。亀の歩みの会議も言ってしまうえば有職故実にがんじがらめになった一種の儀式であり、そういった無駄な舞台がなければ維持できない現実に気が滅入る。

貴族議会の機嫌を損ねる危険性を考慮すれば表立って動くことかなわらず、おとなしく慣例に従うふりをしながら、密偵に末弟派の周辺を探らせるしかない。

末弟派が国外に利益を流している物的証拠や人身売買の現場を押さえられたら、おおっぴらに片付けられるんだが。

公職という表と別に裏の顔を持つ密偵たちが書き送ってくる報告書と今朝の会議内容を頭を悩ませつつも、ゼファードは晩餐会についての打ち合わせのために執務室へと戻ってきた。時間に几帳面な

アーラなら、きつと早目に来てすでに控えの間で待っていることだろう。

アーラと話せば、気分が晴れるかもしれない。

従僕に会議出席用の重いマントを押しつけて片付けに行かせ、控えの間をのぞく。予想通り彼女はそこへ来ていたが、いつものようにゼファードに気づき顎を上げて手を振ることはなかった。

「……アーラ？」

信じがたいことに 合理的で効率的できちんとした物事を好む彼女には甚だめずらしいとしか思えないことに 長椅子に座ったアーラは、上体を肘置きに預けるようにたおして、眠っていた。

ゼファードはその意外性に驚き、同時に微笑ましいとしか言いようのない気持ちがかみ上げてくるのを感じ、足音を立てぬように長椅子に歩み寄った。呼吸に合わせて穏やかに肩が上下する。アーラの長い髪は肩と肘置きにたつぷりと流れ、幾筋かは頬にこぼれていた。

顔にかかったその髪がくすぐったそうだったので指先でよけると彼女の薄いまぶたがごくかすかに動き、身じろぎした。彼女が起きてしまわぬように思わず息をつめる。すると再びアーラはまどろみに囚われたようで、一定のやわらかな呼吸が戻った。

打ち広げられた髪からはほのかに、紫草の穏やかながらさわやかな香りがたちのぼる。アーラに似合いの匂いだ。

少しならば大丈夫だろうという大いなる希望的観測を自認しながら、ゼファードはその髪に触れた。猫の毛のように細くやわらかく、そして猫よりも随分とつややかだ。まるやかな丸みの頭部からそつと指をすべらせて、その梳き心地を味わう。多分の罪悪感と名づけがたい甘やかな気持ちがない交ぜになり、彼はしばらく彼女の髪の手触りを楽しんだ。

ずっと傍らにいてほしいと告げたなら、彼女はどんな顔をするだろう？

その想像は良い見込みよりも恐れのほうが強く、いつも彼女の具

体的な表情を思い浮かべるよりも先に打ち消した。このまっすぐで有能でユーモアがあり悪意がなく信用の置ける存在が、自分でも戸惑うほどに好ましいのに、その気持ちを伝えてよいものなのか伝えるとしたらどうすべきなのか、まるで見当がつかない。

いまは、まだ。

見当がつく日が来るのかどうかさえ疑わしいが。

膝の上に投げ出されていた彼女の左手に、そっと触れる。香油やクリームを塗ると紙や本がさわれなくなるからといって、令嬢らしからぬ、少しかさついていて手。清潔で小さな爪。剣の練習で硬化している自分の皮膚とは違い、ふっくりとやわらかそうな指先。

ゼファードは彼女を起さぬように静かに身を乗り出して、アラの指先に口づけた。首の後ろと背筋がちりちりする。さらに身がかがめて、脈打つ手首の内側にそうつと唇を押し付ける。痛いほどに己の胸郭に鼓動を感じて、名残惜しく思いながらも彼女の左手を元に戻した。

ジルフィスなら、きっと気を引くうまいやりかたを百通りも知ってるんだろう。

だが生憎、ゼファードはジルフィスではない。彼女の不興を買わずに彼女に思いを伝えるすべなど思いつくまで待つていたら百年経ってしまいそうだ。

ゼファードは己のふがいなさのため息をついて、立ち上がった。

わざわざ起すこともない……打ち合わせはアラが起きてからでいい。先に、決裁書類を片付けよう。

上着をぬいで、肩が冷えぬよう彼女に着せ掛けようとしたところで小さく息を吸う音が聞こえた。息をのんでそちらを見ると、まぶたがきつく閉じられ、次の瞬間にふつと緩む。身じろぎとともに睫毛がうごき、生まれた隙間から褐色の瞳がのぞきこちらを伺っていた。

気まずさと言いい知れない安堵と湧き上がった気持ちを飲み込んで、ゼファードは笑って見せた。

「待ちくたびれたみたいだな。よく寝ていた。……遅くなって、悪かった」

アールがゆるゆるとかぶりを振る。あのやわらかい髪が肩でかすかな音を立てた。

「ごめんなさい。控えの間とはいえゼファの執務室のすぐ隣で居眠りだなんて、どうかしてるわ。……ありがとう、上着、大丈夫だから」

彼女が長椅子から立ち上がるのに腕を貸しながら、ゼファードは考えた。

妃候補を三人まで絞るのは、新年の祝いの席だ。

それまでに突破すべき課題と障害と埋めるべき外堀の広さを思いうめきを上げそうになるのをこらえて、ゼファードはただ腕にアールの手の温かさを感じた。

ほのかなこそばゆさに身じろぎする。眠りはすうつと浅くなり、アーラの意識はぎりぎりの水面下まで浮かび上がった。

耳元で髪がさらさらと音を立てる。まぶたという膜を通して感じられる世界は明るい。

夢とうつつの曖昧な境界でアーラは早朝の「あと五分」の心地よさを味わうべく、目を閉じたままだった。毎朝の起床は飛び起きるのではなく、早目に設定した目覚ましによって段階的に、ゆるやかに意識の手綱を手繰り寄せるのが彼女のやりかたなのだ。猫のように毛並みを撫でられて、うっとり息をつく。

けれどもふと思いつく。ここには目覚まし時計のスヌーズ機能も「あと五分」もあるはずがないのだと。そのうえ、幼い時分は別としてこの二十年近く、まどろんでいるときに頭をゆったり撫でる「誰か」の心当たりもないのだということ。

誰かが、私を撫でている……？

たちまち意識が鮮明になる。人待ちをしながら居眠りをするという失態に自身を叱咤し、今後は睡眠時間と体調の自己管理を徹底せねばと決意する。

それでも目を開けるのが、そこにいる何者かに起きていると悟られるのが恐ろしくもあり、アーラは細心の注意を払ってごくごく薄くまぶたを持ち上げ、睫毛のわずかなすきまから「誰か」の正体を見極めようとした。

十中八九、ジルフィスだと思ったのだ。ゼファードの執務室に入ることができてためらいなくアーラに触れる人物といえば、ジルフィスのほかに思いつかない。けれども睫毛のすきまから見出せたのは狐色の髪でも蜜色のまなざしでもなかった。

ゼファ？

アーラの側頭部から長い髪をすると梳き、手のひらで黒髪を

すくつてはまた梳くということを繰り返している。やがて手を止めたかと思うと今度は長椅子の肘置きにこぼれた毛先を長い指先に絡めて、もてあそんだ。

目覚めていないふりをしている以上、まぶたをさらに引き上げる勇氣もゼファードの真意をさぐる度胸もないアーラはただ、いつものようにして起き上がるべきかと悩んだ。

そうしているうちに、ゼファードが動いた。髪から指が離れる。この時機を逃してなるものかとアーラが目を開けかけたとき、左手首に触れられてぎよっとした。

慌てて寝たふりに戻り、薄目でゼファードの横顔を盗み見る。彼はアーラが眠っていると信じて疑わない様子で（あれだけ髪を梳かなくても起き上がらなかったのだから無理もないが）、それでも起こさぬようにだろう、恐る恐る、息をつめるようにして、アーラが投げ出していた左手を取る。

完全に起き出す時機を逸してしまい、アーラはおのれの眠気と意気地とゼファードのわけのわからない行動を呪いながら、ただただ次に目覚めるべき不自然でないタイミングがおとずれるのをひたすら待った。

アーラの左手が、わずかに持ち上げられる。その指先を見つめるゼファードの横顔が、そのまなざしが、なんとも言い表しがたく優しかった。彼がこれまで見せたことのないたぐいの表情を盗み見ている心地に、罪悪感を覚える。戸惑いつつも身動きのできないアーラの心中を知る由もなく、ゼファードはそつと身を乗り出した。

そしてアーラの左手の指先に、かすめるように口付けた。そのまま身をかがめて、手首の内側にも。

すつと首のうしろが冷たくなったように感じ、次の瞬間、たちまち顔が熱くなった。心臓は敵前逃亡を決行したかのようにすさまじいスピードで駆け出し、その異常な鼓動と顔に集中した血の気がゼファードに狸寝入りを知らせてしまつのだと思ひ、気が気ではなかった。

ジルフィスにも指先に口付けられたことはあるが、世の中の女性にすべからく愛想が良い彼とゼファードでは違っだろう。指先に残るやわらかな感触と、愛しげとも言えるまなざしで見られている我が左手にアーラは答えを見つけることができず、状況把握を放棄した。

ひとたびきつくまぶたを閉じ、小さく息を吸い込む。すると左手は膝の上にそつと解放された。

今度こそ何か？ 何が？ 起きる前に目覚めてしまおうと決心して、あらかじめ覚醒していたと気取られぬように気をつつつ、気だるげに身を起こす。ゆっくりまぶたを持ち上げると、ゼファードがぬいだ上着をまさにこちらにかけてくれようとしているところだった。

「待ちくたびれたみたいだな。よく寝ていた。……遅くなって、悪かった」

アーラは髪をなおしつつかぶりを振る。

「ごめんなさい。控えの間とはいえゼファアの執務室のすぐ隣で居眠りだなんて、どうかしてるわ。……ありがとう、上着、大丈夫だから」

差し出された腕をありがたく借りて立ち上がりながら、明日の晩餐会に集中すべく頭を切り替えようとした。眠気はとうに吹き飛んでいたものの、物事を冷静に考えられるようになるにはしばしの時間が必要だった。

5 1、髪遊び

明日の晩餐会の流れとテーブルマナーのおさらい、候補者たちの名前と特徴。それらとそのほかの諸々を確認してアーラはすべきことの指示を仰ぎ、打ち合わせは予定よりも短時間で終了した。

アーラが退室しようとするときゼファードに呼び止められた。彼があまりに深刻な表情だったので何事かと思えば、語られたのはリルグリッドの死についてで、クオードへの尋問の内容だった。

牢番たちの証言にもとづき、公にはできないながらクオードに疑いがある件を問うと、クオードはまったく表情を変えずに覚えがない旨を告げたという。その場はそのままクオードを帰したと言うものの、ゼファードは彼への疑いをぬぐいきれていないのだと、口調と言いよどんだ間からアーラは察した。

「クオードの忠誠は昔から、なんと言うか……時々、行き過ぎていると感じることもあるんだ。あいつは王家に忠実だが、裏を返せば王家をよく言わない者には容赦がない」

「どうして私にその話を？」

アーラがたずねると、ゼファードはただアーラに知っておいてほしかったのだと言った。

リルグリッド事件の詳細について知っているのは近しいわずかな者たちだけで、アーラはその中に自分も含まれていることに何とも言い表しがたい。緊張感のような優越感のような。奇妙な感覚を覚えた。人の死が絡む事件では不謹慎と思いつつも、それは？あちら？で仕事のみとめられたときの気持ちと似ているようで、それよりも少し、こそばゆかった。

屋敷へ戻ると、仕立て屋がほぼ出来上がったガウンをティアーナに見せているところだった。

「あらあ、お早いお帰りなこと！ ちょうどよかったわ。アーラ、

ほら御覧なさいな。なかなか良くできているとは思わなくて？
早速着てみて頂戴」

アーラは返事をする間も選択の余地もなく強制的に着付けられた。腰の紐はきつく編み上げられ、息が詰まる。ティアーナの独断で肩も袖も衿も取り払われたデザインは、アーラにしてみればたいそう心もとなく、首の後ろで結びリボンだけがドレスがずり落ちないことを保証する最後のよすがだった。

「とってもよく似合うわ、アーラ！ 肌の色が白くって、藤色が映えていてよ。もっと腰のうしろを膨らませて、前をすっきり整えるとスタイルよく見えるわ。それからそちらの人、ここにひだを寄せて見せてちょうだい……そうよ。アーラ、じっとしていてね、針が刺さるといけないから」

たつぷり布地が足され、ひだが寄せられる。新たにレースが何巻も持ち出され、アーラの目にはほとんど完成しているように見えたガウンのそこかしこに手が加えられてゆく。

「真珠も清らかさをアピールできてよいけれど、銀とダイヤモンドのよく光る首飾りのほうが見栄えがするのではなくて？ それとも月嶺石のしとやかな輝きがいいかしら？ 靴もよいものを探させなくてはいけないわね。わたくしのだとサイズが小さいと思うもの」
天気の良い日の梢にとまった小鳥のように楽しげにさええずるティアーナにアーラがなんとか微笑みを返していると、ジルフィスが壁にもたれてこちらを見ているのに気がついた。

いつからいたんだろう？

マネキンのようになされるがままで、作り笑いを浮かべ続けているさまを観察されていたのだと思うと、穴を掘ってでも隠れたくなかった。ティアーナは知らないかもしれないが、ジルフィスは、アーラが夜会や晩餐会のために贅を尽くした準備や装いをするのを好まないと知っている。

ようやく一段落してティアーナが八分目程度の及第点を出すと、黙って外野から眺めていたジルフィスが歩み寄ってきた。

「おふくろ、アーラを借りてもいいかな」

「あらジルったら、いつの間に帰っていたの？」

「さつきからいたよ」

ジルフィスがアーラの手をとって歩き出すと、ティアーナは、
「またこちらへつれていらっしやいよ。まだ髪飾りをあわせてみなくてはいけないんだもの」

ジルフィスは母親にひらひらと手を振って、階段を上がり、アーラをいくつもある客間のひとつに引っぱり込んだ。

「おふくろの相手は疲れるだろ。あの人は昔からああなんだ。……でも、娘ができて心底よろこんでる」

彼はアーラを椅子に座らせて、ドレッサーをぞんざいに開けるとその中からブラシとこまごまとしたものを取り出した。

「ここは客間だけど、客を泊めるより夜会を主催したときの控え室に使うことのほうが多いんだ。アーラ、じつとしてて」

ジルフィスはなれた手つきでアーラの髪をとかし始めた。午後、つい執務室の控えの間でまどろんでしまっただけで、髪を梳かされたことを思い出して、いたたまれない気持ちになる。それでもゼファードのブラシは優しくすべらかに動き、彼は落ち着きのない馬をなだめるときも同じようにブラシをあてるに違いないと思った。

「どうするの？」

「ちよつと遊ぼうかと。……おふくろだけにアーラを独り占めされるのは癪だからさ」

「人で遊ぶのは趣味が悪いと思うわ」

「君も楽しめばいいんだよ、アーラ。俺、こういうのはちよつと得意なんだ」

ジルフィスはつやが充分出るまでくしけずった髪を、耳の横から一房すくって長く編んだ。同様にもう一本編み、それらをそろえて冠のようにぐるりと頭に一周させる。

「ぜんぶ結び上げるのも大人っぽくていいけど、首筋がきれいに見えるしね、でも、こつやつて後ろ髪を残すのもアーラには良く

似合うよ」

「こんなにきれいに編めるなんて、よっぽど器用なのね」

それかよっぽど修練を積んでいるんだわ。

おそらく花街で遊んだあと、相手の女性たちに何度となくこついった技を披露したのだろう。

「やってみてほしい髪型があったら、言ってごらん。やってあげるから」

「シンプルなのが一番いいわ。あんまり凝った髪型だと、肩まで凝るの」

アーラは正直に白状した。ジルフィスは笑って、

「もつたないなあ。こんなにきれいな髪なのに」

結び目をほどいて編み目をほぐし、ジルフィスはふたたびブラシをあてた。

けれどもブラシは毛先をすり抜けたきりもどつては来ず、代わりにジルフィスの頬がアーラの髪に押し当てられた。

「アーラ」

「うん？」

すぐそばにジルフィスの体温がある。アーラはささやかな警戒とひそやかな安心感を矛盾なく同居させて、小さく息をついた。

「とつてもきれいだ。似合ってる」

「ありがとう」

「……アーラが望めば、俺はポーロックにも他のどんな卑俗な貴族どもにもアーラが煩わされないですむように、ここに閉じこめるのに」

「閉じこめられるのはごめんよ。言っとくけど」

「だからアーラが望めば、の話さ」

背もたれのうしろから回された腕の温みに、アーラは軽く目を閉じた。

優しく甘く強い誰かに絶対的に守られるという想像は、甘美には違いない。けれどもそれは同時に、彼が秘めている剣の刃の鋭さと

同じくらいに怖ろしくもある。どのみち自分が望むことなどありえないのだから、その怖ろしさは実現しないと信じたい。

ジルが本気じゃないのを願うばかりだわ。

そう、きつと本気ではないのだろう。青髭でもあるまい。

アーラはそう思うことで、自分を安心させた。

52、歡談会

晩餐会で饗されるせつかくの贅沢な料理も、アーラはちつとも味わうことができなかった。あたりで囁かれる会話に耳をすまし、自身がどのように見られているのかをさりげなく観察しなくてはならなかったのだから。

それでも、ただのアーラとして参加するのではなく、ゼファード王子の家令であり婚約者候補であるアーラ・グラントリーの役を演じればよいのだと自分に言い聞かせてから、気持ちは少し楽になった。ここに出席している御歴歴は、アーラの本質など知りもしないし、知ろうともしないはずなのだから。

「自分は何でも心得ているのだ」と取り澄ましたようすでいるよりも、幾分世間知らずで素直な娘を装うほうが便利なことは多い。アーラはすでに？あちら？で、社会に出てそう学んだ。およそ？大人？というものは、教え甲斐のある者には寛容なのだ。話しかけられたときには小首をかしげ、また熱心に耳を傾けるようにわずかに身を乗り出し、彼らが自慢話をする際には大げさに目を瞠って見せると良い。すると相手はおのれの優位性を信じて気分が良くなり、熱心な聴衆を演じたこちらの印象もいいというものだ。

選ばれた妃候補の令嬢たちの多くはアーラなど足元にも及ばぬほど見目麗しく、所作も育ちを感じさせる流麗さだった。事前に仕入れている知識によれば、年齢は十六から二十四までいるはずだ。アーラは二十歳と触れ込んでいるものの実際には二十六なのだから、最年長ということになる。けれども最年少の十六歳は人目でその若さと初々しさがわかるものの、次の十九歳からその上は、肌つやも化粧の濃さもたいした違いはないようにアーラの目には映った。たぶん、皆必要以上に化粧をのせすぎなのだ。もったいない。

食事がすむと場を移して歓談会となった。王子が主役の今宵ではあれ、もちろん王も出席しているが、筆頭騎士のジルフィスは候補

者の一人の家族であるからとして、王のそばに侍すのを免除されていた。

家令の主であるゼファードが主役の務めを果たすべく多忙を極めている今、ジルフィスが近くにいるのはアーラにとって心強い。つい数時間前、冠を戴いたかのように彼女の髪を編んで巻きつけ、白と薄紫の花を飾ったのがこの筆頭騎士だとは、きつと誰も思うまい。

アーラとジルフィスのもとにはひっきりなしに客が訪れた。ほとんどはほかの候補者とその家族で、どう考えてもうわべだけのお世辞としか聞こえない美辞麗句を連発してじろじろアーラを眺め回し、去っていった。腹の中では「この程度の見目でよく出て来られたものだ」「王弟の娘という親の七光りで候補になっているだけだ」等々蔑みがあふれかえっているにちがいない。

せいぜい蔑むがいいわ。

アーラは心の中で肩をすくめた。

私は務めとしてここにいるだけで、美貌をひけらかしに来ているわけではないんだもの。

「ダンスでもあればよかったのに。歓談会なんて馬鹿みたいに退屈だよ」

ジルフィスがぼやいた。

「耳栓持ってくればって思うよな。あんな連中ばかりじゃ、耳ふさいでいて適当に相槌打ってたって変わらないさ」

「でも、耳栓なんかしたら向こうの腹が探れないじゃない」

アーラは言った。声の高さや調子、笑いをにじませているか乾いているか……声を聞き分けるのは、「当たり前障りのない返事」をするためにも重要だ。

「探る価値があるやつなんてそうそういないよ」

そう答えたそばから、ジルフィスの表情が険しくなった。

「……末弟殿下のお出ました」

アーラは初めて末弟派の頭目　ヴァーデイス・ゼ・グランヴィ

ール殿下を目にした。

アールが抱いた第一印象は「ハンサム」だった。ボーロックの印象が強すぎて似たような恰幅の中年だと勝手に思い込んでいたのだが、末弟ヴァーデイス殿下は映画俳優を思わせる美男子で、三十代半ばの魅力を余すことなくひけらかしている。その絶対的な自信に満ち満ちた仕種と自身の魅力に酔っているに違いない微笑みが、アールの美意識とは永遠に相容れないものだった。

「君が噂の、私の新しい姪だね。なんとかわいらしい！ 君が選外になったなら、ぜひとも私の妻にしたいくらいだ」

ジルフィスがそつなく妹を紹介したが、彼は望まざる叔父の出現にたいそう腹を立てているのがアールにはわかった。グランヴィールではたしかに、法律上叔父と姪の婚姻は禁じられてはいない。とはいえ推奨されてもいないはずだが。

「お初にお目にかかり光栄です、ヴァーデイス殿下。私など殿下にとっては小娘同然でございましょう。そのようなものにあたたくお声をかけていただき、ありがたく存じます」

「謙遜するものではないよ、アール嬢。私が本気でないことを口にするなどないのだからね。妻がだめなら養女になるのはどうだい？ サリアン兄上にはこのジルフィス君がいるのだし、君が独身で庶子もない私の家族になってくれるのなら、私は君のためにあらゆることをしてあげよう」

「お言葉ですがヴァーデイス殿下。アールは我が妹であり、ゼファード殿下の婚約者候補です」

ジルフィスは声が必要以上に低くなってしまつのを懸命にこらえているようだった。しかしヴァーデイスはどこ吹く風で、

「だから選外になったらの話さ。ジルフィス君だって、大切な妹のことを思えば彼女を私に預けるのが一番いいと思うだろう？ だって、王族で一番私有財産が多いのは私 なのだからね。陛下だって個人の財布では私にはかなわないさ。陛下はいい王かもしれないが、金儲けが下手だからね」

周囲を取るに足りないもののように扱う態度に、アーラの負けず嫌いな性質が大いに反発していた。女性問題が取りざたされたり汚職が騒がれたりしてもまったく動じない日本の政治家と同じくらい傲岸で不遜だ。国会を仕切る大物議員たちより若くて見目は良いかもしれないが、それだけだ。

そのハンサムな面の皮は、いったいどれだけの厚さがあるのかしらね？

反発が表に出ないようにねじ伏せるのに、大いに精神力を消耗した。

こいつが末弟派の頭なら、ぜったいに王様になるべきではないわ。

全き個人的な感情からアーラはそう決め付けた。

しかし同時に、この軽率そうな末弟殿下が、それだけの人物ではないだろうということも彼女は感じていた。その予感がなぜかとても恐ろしく、背筋がこわばる。

ユンナにヴァーデイス殿下のことを聞いてみよう。ユンナならきっと、そういった話にも詳しいはずだから。

そう決意するとアーラは家令として末弟の腹の底を探るべく、恐れを反発と同様に抑えつけ、ジルフィスと彼の会話に耳をすました。

53、報告

晩餐会が無事に済み、日常が戻った。

しかしこれからは二か月余り年の暮れにかけて、新年早々七日続く祝宴のための準備が静かに、しかし熱心に始まってゆくのだろう。日常と思えるのはおそらくわずかの時間で、気づいたときには、人々が新年を待ち焦がれる気違いじみた熱気につつまれているに違いない。

今日、ゼファードの執務室は静かではあったが日常ではなかった。そこにいるのはアーラでもジルフィスでもなくユンナ・ゾルデで、一介の尚書官が部屋の主よりも堂々としている。

萎縮することなく執務室のソファに腰掛けて長い足を組んだ尚書官を、ゼファードはまじまじと眺めた。このジルフィスの古馴染みは、文書でやり取りはするものの王子の執務室は始めてのはずだったが、物怖じの「も」の字すら彼女の辞書にはないらしい。

「あのお嬢さんは本当にいい生徒だね。飲み込みが早いし、熱心だ」
挨拶もそこそこに、ユンナはアーラをそう評した。ユンナの口調がくだけているのは手紙であつても同じことで、彼女は常々「育ちが育ちなものでね、礼儀がなつちやいないのさ」とおのを笑うが、彼女がその気になれば最高の紳士にも貴婦人にも化けられることをゼファードは知っていた。

「事務の基礎は初めからできているみたいだし、この分だと半年もあれば、立派な家令に仕上がるだろうよ。本当に殿下は、いい従妹姫をお持ちだね」

まっただ。

いわれなくとも重々承知している。

話題はアーラの勉強の近状から、尚書局に回ってくる書類から読み取れる末弟派の思惑の報告へと移った。末弟派は国境警備の予算要求を表立ってではなく、かなり遠まわしに水面下からおこなって

いるらしい。ユナは彼女なりの筋から手に入れた暗号文書をゼファードに差し出し、それらが国境付近でかかれたものであると請合った。

「それ、セリスの好物だろ。解読してもらおうといい。きっと穏やかならぬことが書いてあるだろうね。殿下が持つてる地所の一つも国境近くじゃなかったかい？ これを機会にひとつ、代官から帳簿を回収して調べなおすようおすすめするよ。田舎代官の帳簿の監査くらいなら、今のアーラにもできるだろう。やらせたらどうだい？ 実践もだいじだからね」

ゼファードがうなずいて、それで話は終わりのはずだった。

けれどもユナはソファから立ち上がることはせず、にんまりと笑みを浮かべてゼファードを見ている。ゼファードは自分の部屋にいながら居心地の悪さを感じて、身じろぎした。

「まだ、何か報告があるのか？」

「末弟ヴァーデイスがお嬢さんに並々ならぬ興味を持ったらしいって話、ジルから聞いてるかい？」

低くささやくように発せられた彼女の言葉に、ゼファードは目を見張った。

「なんだって？」

「晩餐会で食事が終わったあと、部屋を変えて歓談会ってことになったんだろう？ その場で、ヴァーデイス殿下がアーラお嬢さんに言い寄ったらしい」

聞いてない。

ジルフィスはヴァーデイスに会ったとは言っていたが、アーラが言い寄られたなどは一言も告げていない。血の気だけでない何か、ゼファードの中で引いた。

「お嬢さんも言っていないんだろう？ そうだろうね。だってゼファード殿下の婚約者候補という肩書きがあるってのに、ヴァーデイスに妻か養女にと望まれたっていうんだから。私はお嬢さんから直接聞いたんだが、それは彼女がヴァーデイスの情報を聞きだしたかつ

たから仕方なしに話したんであつて、できることならその出来事を口にもしたくなかつたんだと思うよ。我らがお嬢さんはヴァーデイスをたいそう嫌っているようだからね」

「……それでも、アーラは俺に言うべきだった」

「ユンナは温かく微笑んだ。」

「そうだね。でも私は、お嬢さんの気持ちもわかるな」

「家令の務めとして、あつたことは報告すべきだろう」

「家令としては、ね。だがお嬢さんは　あの子は、あんたをこんなくならないことでわすらわせたくなかつたんだろうよ」

ゼファードはユンナの意図がわからずに、眉間に皺を刻むより仕方なかつた。ユンナは意図が伝わらないのを承知の上で言つたらしく、微笑んだままだつた。

「まあいいさ。とにかく、ジルフィスがお嬢さんに熱を上げているのは見てりやわかるが、殿下だつてお嬢さんのことが好きなんだろう？　末弟派の毒牙からお嬢さんを守んなきゃならないのは事実だし、私も協力を惜しまない。ゼファード殿下、あんな、候補を絞るだなんて無駄な過程すつ飛ばして、さつさとお嬢さんを妃に決めたらどうだい」

とてつもなく重大で大変なことをさらりと口にしたユンナはそこまで言つてのけて、ようやくソファから腰を上げた。

「だが……アーラの気持ちという問題がある。俺はもう、あいつに何も強要なんて」

おのれの気持ちを、格好だけでも否定することすら省いてしまったことに気づいたときには、すでに遅かつた。熱くなる顔と反比例してあばらの底がすうと冷える。

だがユンナはからかいもせず、面倒見のよさそうな風情で彼に笑いかけた。

「あの子の気持ちがあんたに向いたなら、それは強要じゃないさ。だからそうなるようにがんばるんだね。私も力添えするって約束するよ」

「どうしてそんな申し出を？」

退室際にユンナは肩をすくめて、言った。

「どうしてだと思う？ ……それが、みんなのためだと思うからさ」
ユンナが去つてからも、ゼファードはしばらく執務室の中央に立ち尽くしていた。

みんなのためって、どういうことだ？

あっさり彼を応援すると告げたジルフィスの古馴染みは、ジルフィスの味方ではないのだろうか。アーラの気持ちを獲得する努力はもちろんおしみなどしないが、だからといって候補者を絞るようすでに定められている過程をすっ飛ばすのはいかがかと思う。何事も

アーラに近づくことも 段階というものが大切なはずだ。

ともすれば混線しがちな思考をいったん切り上げて、ゼファードはため息をついた。今は嫌われてはいないと思うが、勝算はと問われれば疑わしい。

いったいユンナは何がしたいんだ？

ともあれ、やることは目の前にたくさんある。

ゼファードはまず、今日も言葉の授業にやってくるアーラのために、とっておきの茶葉と蜜入りの焼き菓子を用意しておくことを心に決めた。

54、悪夢

こんなにも表計算ソフトが恋しくなる日が来るとは思わなかったわ。

凝り固まった肩を揉んでほぐしながら、アーラはため息をついた。アーラはゼファードから渡された帳簿の確認作業という、なんとも「家令らしい」仕事にいそんでいる。ここには表計算ソフトどころか電卓すらないのだから、昔から数学とは懇意とはいえないアーラは、すべて筆算で地道に計算し確かめていくより他なかった。

書き損じの紙の裏を計算用紙にし、ひたすら筆算を繰り返す。もちろんグランヴィールの数字ではなくアラビア数字におきかえて、だ。自分の計算がおかしいのではと思われるほど 得意の国語や歴史と反比例するように、数学ですさまじい点を取った前科は数知れずなのだ 帳簿には怪しい箇所が大いに見つかった。

暗算程度では見逃してしまいそうな小さな減額があちこちにあるが、総額ではかなりの金額になるだろう。それらが横領されているのはほぼ間違いなく、どこの世界でもこの手のことでは似たようなものだ。アーラは思った。

「一冊の帳簿でこれほどなら、国境近くにあるっていうゼファの地所にはどれだけの不正帳簿があるのかしらね？」

苦勞の成果をまとめて報告書を作り、それを提出する際にアーラは地所の経理を洗いなおすようゼファードに進言した。もともと収支が合わず金はどこかに流れていると予想していた彼でも、報告書に記載された金額は驚くべきものであったらしい。

ゼファードは報告書を見終えるなり、悩むよりも先に国境付近の領地への短い視察を取り決め、留守役たちに手際よく指示をして、翌々日にはアーラを伴い王城を出発していた。

彼のすばやさ、アーラはこっそり舌を巻いた。年末にかけてこれからどんどん忙しくなるのだから、行くなら一日でも早く出発す

るべきで、悩むだけ時間の無駄なのだそうだ。ゼファードはできることならジルフィスカクオードのどちらか一方も連れて行こうとしたが、王が許可しなかった。父王を説得する手間をかけるよりも彼はさっさとことを済ませるほうを選んだ。

王城に残ることを余儀なくされたジルフィスは、アーラが随行することにはたいそう反対した。けれども王子が地所の代官を尋問しに行くというのに、その家令が行かないのもおかしい話だ。そうアーラが説得し、ジルフィスは渋い顔をしつつも、彼女を何とか送り出してくれた。

王子が田舎の地所をただ視察に行くとしかとおおやけにはされていないので、見送りはわずか。少数精鋭の一行のいでたちは王子の連れにはいささか地味で、ゼファードと騎馬中隊と二台の荷馬車とアーラが乗る馬車のみだった。アーラはできることなら馬に乗っていったかったが、散歩程度ならば一人で乗れても、遠方まで行くあいだ御してられる体力の自信はなく、おとなしく馬車に押し込まれることを受け入れた。

王都の城門を出たのって、ものすごく久しぶりな気がする。

ゼファードは愛馬にまたがり馬上の人となつているので、馬車の中にいるのはアーラと彼女付きの女官だけだ。蹄と車輪の小気味よい音をひびかせて一行は街道を進んでゆく。

アーラがぼんやり窓の外を眺めていると、忘れようにも忘れられない風景に目が留まった。

私が、転げ出た場所だ。

？あちら？の世界の底が抜けてから、？こちら？に転がり出てきた場所。今ここに王子殿下の従姉妹として、家令として、婚約者候補として存在するのもすべて、そこに転げ出てきたからなのだ。

その繁みを見ていると、不意に視界が揺れた。

街道と繁みが掻き消えて乾いた大地が映る。砂埃の臭い。金属と、何か、不吉なおい。

誰かが私を捕らえに来る　　たくさんの兵士に、囲まれる。抜き

身の刃がちらつく。見たことのない鎧。もちろん、グランヴィールのものではない。簡素な麻の衣服に革の胸当て、耳の前で結わえた角髪。

それは、アーラが実際に見たことはなくとも、何度も想像したことのある風景だった。

すらりとしなやかで、美しい面立ちの青年が引つ立てられてゆく。角髪からほつれた長い黒髪が揺れる。彼は怒りと絶望と自嘲をない交ぜにしたような表情で、言った。

「天と赤兄あかえが知っている。私は知らない」

裏切られたのだ。

そして乾いた大地に、処刑台がずらりと並んだ。

吊るされている。人間がそこに吊るされていて、生きていないことは明らかだった。アーラはそれが自分自身だとすぐにわかった。

しかし首がねじれたそれはかつて美しかった角髪の青年の顔に変わり、すぐに、褐色の髪を胸にたらしした若い女性に変わった。その女性には絞首されて面変わりしてもなお、どこかしらティアーナに似て見えた。ジルフィスにも似ている。血が通った生前は可愛らしかったに違いない。

生まれても生きられなかった、ジルフィスの本当の妹？

アーラが辺りを見回すと、別の絞首台にはジルフィスも吊るされていた。ほかにも知っている人たちが、王城でも働いている人たちがいる。変わり果てた姿で。アーラは悲鳴の出し方すらわからなくて、倒れるように座り込んだ。

するとアーラから青年へ、それからティアーナに似た女性へと顔の変わった体が、吊るし食い込む縄に耐え切れなかったのか、どさりと落ちた。続いて、体から離れた首もころと転がる。

目の前まで転がってきたその首は黒髪で、アーラは自分の頭だろうと思った。力をなくした腕を無理に動かして、それを拾い上げる。体を失ったその頭のうつろな瞳が藍色だと知れた瞬間、アーラの感情も声帯も決壊して悲鳴がほとばしった。

「ゼファアあああつ！」

めちやくちやに手を振り回しながら飛び起きると、そこには荒野も絞首台もなかった。

アーラは小さな天幕にのべられた寝具で横になっていたようだった。馬のにおいはするが、死のにおいはない。

ここはどこ？ 私は……

そのとき天幕の出入り口が開いて、若者が入ってきた。呆然としていて身構えることすらできなかったアーラは、その若者の目が藍色であり、それどころかゼファード以外の何者にも見えないことに気がついてさらに呆然とした。

「おまえがいきなり奇声を上げるものだから、女官は肝をつぶして馬車から転げて、もう少して馬の下敷きになるところだったんだぞ。いったい何があった？ 馬車の中に油虫でも出たか？」

寝具の上にかがみこんでこちらをうかがっている彼の頬に、アーラは両手を伸ばした。腐りかけているところか若くみずみずしく、目は涼しく澄んでいる。深海の青。死んだ魚のようなうつろな青ではなく。

「ゼファア？」

恐る恐る問うと、アーラの指先のすぐ近くで、彼の口の端がからかうように持ち上がった。

「俺が俺でなければ誰だというんだ？」

夢でも見たの？ 起きたまま？

そうでなければ、気がふれたのか。

唇に微笑を乗せたまま、しかし心配そうにこちらを見下ろすゼファードの無事こそがまだ夢のようで信じられず、アーラは彼の首筋に手のひらを当てた。ゼファードは驚いたらしくびくりと身を震わせたが、アーラの好きにさせてくれた。

彼のシャツの襟が許す限りアーラはゼファードの首に触れてじつくりたしかめたが、ありがたいことにその首はきちんと体と繋がっ

ており、縄の痕もそのほかのどんな恐ろしい痕跡も見つからなかった。そのありがたさに喉がつまり、目の奥が熱くなる。

「……よかった」

心からそうつぶやいて、アーラはゼファードの胸に額をつけた。

ゼファードの手がためらいがちに、しかし優しく彼女の髪を梳いた。

「何があった？」

アーラは目を閉じ、しばらく思い出さずにいた自分の本当の名を思い出した。

「私の名前の夢を見たのよ」

55、自覚

グラントリー家の令嬢の一大事ということで、一行は馬をとめてアーラを休ませるための天幕を設けたらしかった。そこはアーラが「転げ出た」箇所ですぐそばで、馬たちは退屈そうに鼻を鳴らしたり、文字通り道草を食ったりしている。

悪夢の衝撃が潮のように引いて落ち着きを取り戻すと、アーラはおのれの醜態を詫びてすぐに出発するように頼んだ。ゼファードも随行者たちも皆もうしばらく休んでいくようにとうるさかったが、アーラは自分を卑下して見せつつも頑として出発の意向を譲らなかった。実をいうと、この場所では？あちら？と？こちら？がせめぎ合っているような気がして、少しでも早く離れたかったのだ。

あんなにも早く帰りたいと思っていたのに。

馬車に乗り込みながら、アーラは自分の心の内を見つめた。

どうして？あちら？に近い場所にいることが、こんなに怖いんだろう？

いったい、自分は帰りたいのか。

帰りたくないのか。

その可能性に思い当たって、アーラは絶句した。

？あちら？には家族もいれば、気のおけない友人たちもたくさんいる。こぢんまりした自分の部屋があり、書棚にびっしり並んだ文庫本をはじめたくさんの蔵書があり、日本語こそが国語であり、快適な生活環境がある。だが平和であると同時に退屈な日常も、そこにはある。

そしてなにより、？あちら？にはゼファードもジルフィスもユンナもセリステインもない……属していないのだ。？こちら？にアーラの実の家族が属していないように。

私は、？あちら？側の人間のはずよね？

なぜ疑問符がついてしまうのだろうか。自分が、どちら側でいたい

のかがわからない。

ぜったいに帰ると心に決めていたのに、簡単に方法は見つからなくてもいつか見つけ出して帰ると決めていたはずなのに、どうして悩まなくてはいけなのだろうか？　なぜ、こんなにも苦しむ必要がある？

ゼファのそばできちんきちんと仕事をこなしてきたのだから、それは後腐れなく帰るためだったじゃないの。

悪夢の光景がよみがえる。

絞首刑になった人々。吊るされた、アーラの大切な人たち。？　こちら？　側の。

……予知夢なんて馬鹿げたものではありませんように。

転げ落ちたゼファードの首が、目覚めた後にちゃんと体とつながっていたしなやかな首筋が、アーラの手のひらに感触としてよみがえった。あのまま悪夢が続いていれば自分は、死した首であれゼファードのものなら放り捨てるどころか抱きかかえて泣き叫ぶに違いないと思いついたとき、アーラは呆然とした。

もちろん死者を悼み敬う心はあるが、一部の人々が有する偏狭な愛好趣味は彼女にはない。つまり悪夢の中で胸を突いたあの感情は、気がふれたのでなければ、彼に対する……そう。そういうことなのだろう。たぶん。

冷静に考えれば、「物件」としてはジルフィスのほうが優良だ。愛想が良く華があり、狐色の髪と蜜色の目は希少でたいそう魅力的だし、王位継承権を放棄したサリアンの子なのだからしがらみが少ない。しかも、あんなにもアーラを好いてくれている。応えられないと告げたのにもかかわらず。

一方でゼファードは王の一粒種であり目下末弟派との冷戦に忙しい。面立ちは端整だがジルフィスほど甘やかではなく、気性も無愛想ではないが柔軟性にかけるきらいがある（とはいえアーラも、人のことを言えたものではないかもしれないが）。なにしろ、出会ってから初めのうちの印象があまりよくなかった。そのうえ重要なこ

とだが、ゼファードはアーラのことを都合のよい従姉妹であり便利な友人くらいにしか思っていないだろうと考えて、彼女はため息をついた。嫌われてはいないとわかるのだけれども。

このような七面倒な物思いにはまりこむなど十数年ぶりだ。ジルフィスにあれほどすっぱりと啖呵を切れたのに、？あちら？に帰ることを考えると同時にゼファードの深い藍色の目が脳裏にちらつく。これはつまり、おそらく、というかきつとそういうことなのよね？

ああ、嫌だ。自分が。とてつもなくジルフィスに申し訳ない気持ちになる。

大きな息をもらして顔をうずめたアーラに女官が「ご気分が悪うございますか」と慌てて聞いてきたのだが、アーラは力ない笑みを返して「大丈夫」とつぶやくことしかできなかった。

国境近くとはいっても、末弟ヴァーデイスの管理する一帯よりもゼファードの領地は南側にあり、王都からさほど遠くない。途中一泊の予定で、この日一行は辺境貴族の屋敷でもてなしを受けることになっていた。

おのれの情けなさにひどく恥じ入っていたアーラはせつかくのもてなしのご馳走も大して胃におさめることができずに、部屋へと引き上げた。

まだ時間は早い、さっさと風呂を浴びて寝てしまおうか。一応帳面や木筆は持ってきているものの、普段のように勉強する気も起らない。けれども眠ればあの悪夢にうなされそうで、そう考えるだけでかなり気が滅入った。かといって徹夜をしては旅に差し支えるだろう。

これだけ疲れているのだから夢など見ないはずで眠るべきだと自分に言い聞かせていると、ドアがノックされた。風呂に入る前であったかと思いつつ、細く開けて廊下をうかがう。

「……壁に耳あり、よ。よそのお宅で秘密の会議はすべきでない」と

思っわ」

「別にそういった話題を持ち込みたいわけじゃない」

熱い飲み物を作ってくれる女官を期待したのだが、ゼファードだった。アーラはしぶしぶ彼を入れたものの、ドアにしっかりと燭台をかませて隙間を確保した。

「今日あんな失態をしかしたんだもの。もうあなたたちに迷惑をかけるわけにいかないんだから、早く休もうと思ってたのよ」

「具合は、ずいぶん悪いのか？」

不器用ながら気遣わしさのにじんだ声をかけられて、アーラはなんと答えるべきか言葉につまった。

「……ずいぶんというのがどれほどの度合いにもよるけれど。大丈夫、命に別状はないわ」

アーラはさらりと返した。あつかいにくい感情の対象である相手を目の前にして照れるような年齢ではないのだ。「年齢」から連想して改めてゼファードは自分の弟よりも年下なのだという事実思い当たり、彼女は喉の奥で自嘲した。

帰らないと。？あちら？側へ。

両親や弟妹が待つ、本来あるべき場所へ。……正直、あの妹が待つてくれているとは思えないが。

ゼファのお妃がちゃんと決まったら、帰ろう。

感情にナイフを突き立てているような痛みが走る。帰るすべも見つかっていないのにそう考えている自分はやはり疲れているのだとアーラは認めた。とにかく目の前の難敵を問題なく撃退して、眠らなくては。悪夢の来訪の有無にかかわらず。

「本当に、大丈夫なのか？ 何なら薬師を手配するし、明日の予定も」

「大丈夫。心配してくれてありがとう。ねえゼファ、まだ早いとはいえ夕食がすんでから人の部屋を訪ねてくるだけの理由があるんでしょう？ あなたがジルフィスみたいに用もないのに遊びに来るわけがないわ」

さつさとすませてしまおう。

「本題はなんなの？」

ゼファードは一瞬ためらいを見せたもののすぐにそれを引っ込めて、その深海のような群青の双眸でアーラを見つめた。

「アーラに教えてほしいことがある」

「どうした？　うかない顔をして」

わずかな休憩時間に昼食をとっていた彼に声をかけたのは、顔を上げるまでもなくユンナ・ゾルデだった。

「殿下とお嬢さんがあんな抜きでご旅行つてのが、そんなに気に食わないか？」

ジルフィスはいらいらと無視を決め込んだ。

気に食わなくて、当たり前だろうが。

アーラが近くにいないという事実が、いらいらをつのらせる一番の理由だ。だが彼に残るよう命じた王は何を考えているのかわからないし、普段でさえ不機嫌に見えるクオードはさらに不機嫌な顔をしているので、居心地悪いことこの上ない。

ユンナはこちらの機嫌がたいそう悪く、無視しているのをわかった上で、楽しんでるらしかった。

「心配は無用だ。殿下は殿下だから、ジルみたいにお嬢さんに断りなく手を出すような真似なんざしないさ」

思わず声のほうを振り向いてから、しまったと思った。ユンナの顔は予想よりも近く　ごく近くにあり、彼女の短い黒髪が頬をくすぐった。しかも、彼女らしく人の悪そうな満面の笑みをたたえていた。

「……おまえ、俺を怒らせて楽しいか？」

「そりゃ楽しいよ。見りゃわかるだろ？　私は、ジルが怒ってても泣いてても楽しい」

「俺がアーラをどう思ってるか知ってるくせに、俺の邪魔しやがるつてのはどういった見だ？」

アーラの髪にも頬にも温かくやわらかな唇にもいつだって触れたいと望んでいるのに、一度崩れかけた信用を取り戻すために相当の自制心を持ってこらえているのだ。それでもグラントリー邸で寝起

きしていれば彼女が一つ屋根の下にいと、自分が一番近くにいると安心できたのだが。今回はゼファードこそがアーラと同じ屋敷で宿を取るといのは、仕方がないとわかってはいてもおもしろくなくて当然だった。

それなのに、ユンナはまったく悪びれずに澄んだ目で見返してくる。

「そりゃ邪魔したくもなるさ。あんただけじゃない、私だって、付き合うようになってからお嬢さんに首つ丈なんだからな。ジルみたいな馬鹿にお嬢さんをまかせてなんかやらないよ」

ジルフィスはできうる限りの恨みをこめてユンナを睨んだ。ユンナになつたアーラが近頃は何かとユンナを頼りにしているらしいのも腹立たしさの一因だ。もちろん、ユンナはジルフィスの恨みなどどこ吹く風で、ジルフィスもそのようなことなど承知の上なのだが。

不意にユンナは笑みを引つ込めて、生真面目な顔で言った。

「ジルだってわかってるだろ。あのお嬢さんほど身持ちのいいお嬢さんはいない。ジルみたいなのは頭のつくりが違うのさ。まさか信じてないってわけじゃあるまい？」

「俺がアーラを信じないだなんて、いつ言った？」

「信じるって、私は殿下のことを言ったんだぞ。お嬢さんじゃなくて」

二人のあいだに短い沈黙が下りた。

ジルフィスは黙ったまま立ち上がって剣帯の具合をたしかめると、そのまま王の元へ戻ろうとした。

「ジル」

今度は意識して、振り返ってしまわないように顎を引き締める。

「まだなにかあるのか？」

ジルフィスが振り返らずとも、ユンナが歩み寄って彼の正面に立った。

「コルディアが何か探り当てたんだろう、セリスのところから殿下

へ早馬が出た。末弟派に動きが合ったらしい」

そして片手をあげて、何事もなかったかのように尚書局へと帰っていった。

ジルフィスが戻ると、グランヴィール王は彼を待ち構えていたかのように迎えた。

王の執務室にはなぜか、王弟にしてジルフィスの父サリアンがいる。いつもならば、自身の部屋で職務に励んでいるはずなのだが。

「クオード。外に出て、誰にも中の話を聞かれないように見張っていてくれ」

王が命じるとクオードは隙のない辞儀をして退室した。扉が閉まる。その扉の向こうでは、クオードが仁王立ちをしているのだろう。

「……さて。ジルフィス、私がおまえを残したことを実に不思議に思っていることだろうな」

「陛下の気まぐれなのでしょう？ いつもものように」

ジルフィスの皮肉に怒るようなグランヴィール王ではなかった。

「サリアン、威勢のいい息子だな」

「親にとってはあまり嬉しくない方向の威勢がいいんですがね、うちの息子は」

サリアンはジルフィスをちらと見て、肩をすくめた。

「兄上がそんな世間話をするために私とジルフィスをそろえたわけではないでしょう。いったい何がおっしゃりたいんです？」

「おまえたちをここへ呼んだのはもちろん、優秀な弟や威勢のよい甥を相手に世間話をするためではない。私も持って回ったやりかたはきらいだから、早々にすませてしまおう」

だが、主の簡潔な物言いは意味不明だった。

「私は倒れようと思う。以上だ」

「……は？」

「何のご冗談です？」

甥にぼかんとされ、弟に呆れ顔で見返されても、グランヴィール

王は表情を変えなかった。

「冗談ではない。言ったとおりの意味だ。まず、私は常々この王制というものに　しかもほとんど権限のないわが国の中途半端な王制に　疑問を感じていた。たまたま長男に生まれついたというそれだけの理由でこれまで我慢してきてやったが、ゼファードもそろそろ一人前の年齢だ。じきに候補者がしぼられ、妃も決まる。私がいなくなったところで、だれも困るまい？　それどころか私たち王家一門が残らずいなくなったところで、貴族議会さえあればどうにかなるだろう。私の存在意義はない　倒れて、ぽっくり死んだことにしてくれ。からの棺を墓に入れてくれさえすれば、後は自分で始末をつけるさ」

永遠にも感じられるほど長い沈黙のあと、サリアンが低く唸った。「王としての、王の責任はいかがなさるおつもりです？　兄上はそれを放り出されるのですか」

「そうだ。さつきから放り出すと言っている。……ゼファードが王権を重荷だというのなら、王って肩書きを賞品か何かだと勘違いしているヴァーデイスにやってくれ。あいつなら飢えた犬が餌に飛びつくみたいに、尻尾を振って受け取るだろう」

どこまでも無責任な兄王に、サリアンは絶句しているようだった。ジルフィスですらこの伯父をとんでもなく無責任だと思わずにいられないのだから、まじめな気質の父サリアンの腹は相当煮立っていることだろう。

「兄上、なぜ今そんな馬鹿げ　」

「馬鹿げているか？　私にはこんな不自由な身分こそが馬鹿げているとしか思えん。……私だけじゃない。タリシャも、陸の王なんぞに嫁がされる自分の運命が馬鹿げてると思っただろうよ」

亡妃の名前をしばらくぶりに口にした王は、壁を透かして遠くを見るような目になった。

「タリシャが死んだのは、ゼファードを生んだせいでも医者腕のせいでも産後の感染症のせいでもない。あいつが、生きてがらなか

「たからだ」

故郷の海も見えない石の城の中で生きてくなかったからだ、王はつぶやいた。

「サリアン、シルフィス。あとはお前たちに任せる。ゼファードでもヴァーデイスでも、好きなほうを玉座に座らせる。もう私の知ったことではない。ゼファードは私がいなくてもかまわない年齢になったし、私は疲れた。……さあ、さがつてもかまわんぞ」

サリアンは留まってなおも兄王の説得を続けようとしていたが、シルフィスは早々に退散した。

ただでさえ問題ばかりで手一杯だというのに、さらなる無理難題を提供しようとする王を三枚おろしにしてやりたい気分だった。

ゼファードがいない日を選んでわざわざサリアン・シルフィス父子に話したのは、いったいどんな思惑があったのか。シルフィスを通じてゼファードの耳に入るのはわかりきっているはずなのに、だ。あまりにも身勝手な理由だが、もしかすると直に息子の前では今日のような弱音を吐きたくはなかったからかもしれないとシルフィスは考えた。

俺がアーラといっしょに行けなかったのは、馬鹿伯父のこんな我俣を聞くためだったなんて。

それなのに空は青く、明るく高い。シルフィスは齒軋りしながらも、この新たな大問題について話し合うべく、尚書局へと向かった。

57、囁き

「アーラに教えてほしいことがある」

そう言つてゼファードは部屋の奥の長椅子に腰掛け、アーラを手招きした。

アーラはテーブルを挟んで彼の正面にある一人がけの椅子に座ろうとしたのだが、ゼファードは扉に背を向けている長椅子に彼の隣に座るように示した。

アーラが思わず眉をひそめると、彼はほとんど空気音だけの早口で囁いた。

「悪いが本当に、秘密の会議をせざるを得ないんだ」

ゼファードはためらいがちに、「あのドアを閉めてもいいなら、多少声は出せるかもしれないが」と言つたが、アーラは燭台をそのままにして隣に座ることにした。なぜドアを閉めて音量を上げてもらうほうを選ばなかったのか、後で考えても良くわからなかった。

何であれ、隣り合つて腰掛けて身を寄せ合つていれば、万がードアの隙間からのぞき耳をそばだてる者がいたとしても、王子とその婚約者候補が親しげに語らつているようにしか映らないだろう。そのように映ることが不本意であっても、ゼファードの言う秘密とやらは守られるわけだった。

「で、何が起こつたの？」

アーラは囁き返した。

「教えてほしいことがあるつて言つたつて、こんなところで私がゼファに教えられることなんて、なかなかないじゃないの」

ゼファードは懐から折りたたんだ紙を取り出した。

「早馬が着いた。これを運んできたんだ」

アーラは黙つてそれを受け取り、ゼファードの視線にうながされて広げた。

そこにえがかれていたのは落書きのようなペン画で、しかしその

ペン先で雑多に引いたかと思われる柄の中にたしかに日本語の文章を見つけてアーラは目を見張った。セリスティンの字だ。

絵の中に字を隠したの？ 万一盗られても、気取られにくいように。

字自体はいびつでほとんどがひらがなだが、きちんと文の形を成している。さすがはセリスティンだと、アーラは舌を巻いた。

「なんて書かれているのか、教えてほしい」

ゼファードにうなずいてアーラはまず黙読し、そしてさきほどまでよりさらに声をひそめて読み上げた。

「国境方面から末弟のところへ早馬がきた。帳簿を燃やしているのを発見。殿下のそばに間諜がいるおそれあり」

ゼファードの表情がたちまち険しくなり、苛々とこめかみをこすった。アーラも「間諜」という良い思い出のない言葉の出現に顔をしかめていた。

「これだけで、どういうことかわかるの？」

「俺たちの今回の遠出は表向き、例の地所のただの視察だ。帳簿を調べに行くという目的を知っているのは、ごく一部にかぎられている。俺とおまえと、ジルフィスとクオード、セリスティンとコルデアとユンナ・ゾルデ、そして向こうの代官くらいだ」

「私たちがあつちに着いてないのに、不正がびっしり書き込まれる帳簿が王城までわざわざ持ち込まれて、さらに燃やされてるのなら……」

何通りもの可能性を考えて、そのどれもがろくでもない可能性でしかないことにアーラはうめいた。

「そつだ。俺たちが行くと知ったと同時に代官が証拠隠滅をはかったと考えるのが一番簡単だが、それならその場で燃やしたほうがずっと早いし安全だ。なのになぜ、わざわざ王城まで持ってきてから燃やした？ ……俺は、王城にいる？ 誰か？ にその帳簿を見せる必要があつて、その後でなければ燃やせなかったからだと思う」

「それに、遠くから王城まで持つてくるのだってそれなりのリスク

があるでしょう？ 確実に家宅搜索されると知らなければ 視察に來られて念を押される程度にしか思っていないならば、普通、隠すわよね。屋根裏なり床下なり、埋めるなり」

囁き声で話し続けるのはなかなか大変で、アーラは途中何度も唇を湿らせなければならなかった。

「徹底的に家捜しされるとわかってたつてことはつまり、間諜がそのことを知らせた、と」

「セリスはそう考えたんだろう」

「……やっぱり、私が間諜だと思うの？」

「そうは思っていないからセリスもアーラにしか読めない字で書き送ってきたんだ。俺だつて、疑っていたらこうしてこそこそしゃべるのをとうにやめている。茶番だからな」

そういわれてアーラは言いようもなく安堵した。自分が裏切らない身内だと認めてもらえていることが、とても嬉しかった。

「明日、どうするの？ 帳簿はなくなつていても、予定通り代官を締め上げに行くの？ それとも、王都に帰る？」

「証拠帳簿がなくなつたとわかつた上で行くのは無駄足だ。理由をなんとでもでつち上げて、帰ろうと思つている。代官にはあとで召喚状を出せばいい。だが、おまえの体調が優れないなら、もう一泊ぐらい休んでいってよ」

「一晩寝れば大丈夫。万が一私が明日の朝動けないくらいひどかつたら、置いてつてくれてもいいわ」

アーラは冗談めかして言ったのに、ゼファードはひどく憤慨した様子だった。

「妃候補を残して帰られるはずがないだろう」

囁き声で憤慨するというのは奇妙な芸当だった。たしかに彼がアーラを残していけばたいそう体裁が悪いだろうと彼女は思い当たつて、軽はずみな発言を反省した。

「ごめんなさい。たかだか候補者だけど、扱いがぞんざいだと周りの目に見えたらゼファアの評判にもかかわるものね。明日こそ、迷惑

かけないようにするから」

「違う、そういう意味じゃない」

ゼファードはかぶりを振った。アーラはまばたいて、首をかしげた。

「いいのよ、王子殿下が私風情にそんなに気を遣わなくなつて。表向きは、人の目があるからちゃんとしなくちゃいけないかもしれないけれど。私はごたいそうな生まれ育ちではないから、気にしないわ。晩餐会にずらりと並んだほかの候補者たちは、育ちのよさがにじむどころかあふれてるみたいだつたけれどね」

ゼファードがこちらをじつと見ている。アーラはいたたまれなくなつて目をそらした。

「そういえばゼファは、もう最終候補者の三人を決めたの？ でもまたいったん三人にしぼるだなんて、面倒よね。三人選ぶくらいなら、もう一気に一人に決めればいいのに。細かく段階を踏んで決めるのは伝統なの？ 私がゼファだったなら、晩餐会で私の斜め前に座つてた令嬢をえらぶわ。ゼッティーラ家の次女ね。話し方に嫌味がなくて、知的で、それに緑色の目がとてもきれいだった。ゼファもそう思わない？」

「ゼッティーラの娘より、俺はアーラがいい」

それは反射的に、独り言のようにこぼれ出た。

その言葉のために、アーラはいきおいよく振り返つてしまった。自身の言葉に驚いているらしいゼファードと目が合う。

彼は、本当に自分の舌がその言葉を発してしまったのか確かめようとするかのように口を開きかけ、また閉じた。

ゼッティーラ家令嬢よりもいいと言われただけなのだから軽く受け流すべきなのに、アーラは真つ白になった思考のために何もできずにいた。「そう言っていただけで光栄ね」とでも、「お世辞言つたつて何にもでないわ」でも、なんとでも軽口のたたきようはあつたはずなのに。

先に立ち直つたのはゼファードのほうだった。決然とは言いがた

いがあるかを決め込んだ様子で、彼は硬直しているアーラの肩に手を置く。そして、先ほどまでの会話よりもさらに低くかすかな声で、彼女の耳元に囁いた。

「俺は、アーラがいい」

深海のように静謐な青ではなく、今ゼファードの双眸は不安と恐れと罪悪感と期待でさざめき立ち、火花の青のように見える。アラは息をのむことすら、まぶたを動かして目を伏せることすらできずに、ただひたすらその瞳を見返していた。

アラの脳裏には不安と恐れと罪悪感とおのれへの罵りと、許しがたい自身の我侷とが渦を巻いていた。今朝方街道で悪夢のような奇妙な幻を見てからというもの、さまざまなおかしくなってしまう気がする。

どうしてゼファアが？

ジルフィスのときも疑問だったが、このような問題に理由を問うことは無意味以外の何でもないことを思い出す。

落ち着け、冷静に対処するの。

だがどう対処すべきなのかわからないのだ。ジルフィスのときは少なくとも、やりようがわかったというのに。

気づかないふりをして自分をごまかすには、もう手遅れだった。

「アラがいい」という台詞を、「アラなら面倒が少なく都合がいい」と解釈するには、いささかどころかかなり分が悪かった。ゼファードの目に浮かぶ恐れがその逃げの解釈を否定しているし、何よりアラ自身の本心が、意識の底でそのようには考えたくないと呼んでいるのだ。

アラの沈黙に痺れを切らしたのか、このまま化石のように二人して固まり続けることに恐怖したのか、どちらなのかわからないがゼファードがアラの手をとった。ほとんど手入れをしないためにかさついている小さな指先に、ゼファードの唇が押し当てられる。震えが、伝わってきた。

やっこのことで、アラは言った。

「訊いてもいい？」

あいている手でゼファードのもう一方の手をとり、彼がおのれに義務として課しているらしい剣技の鍛錬と実際の膨大な決済処理のために硬くなった指先に、彼を真似て唇で触れた。するとゼファードの震えは一瞬でとまり、とまるだけに留まらず瞠目してこわばった。

「これって、どういう意味があるの？」

ただの挨拶ではないんでしょう？」

ゼファードは言うべきか言うまいかかなりのあいだ逡巡していたらしかったが、ついには白状した。

「慕っている……応えてもらえなくてもただこちらは慕っていると、高嶺の花に片恋を告げるんだ」

たとえば、夫がいる貴婦人だとか、自分に対して身分が高すぎるご令嬢とかに。

前に誰かからこうされたことがあるのかと彼の視線は問うていたが、その問いかけにアーラは気づかないふりをした。どうしてもか、泣きたかった。

「私は、高嶺の花じゃないわ」

「アーラは高嶺にいる。だれも手折れない。自分から、降りてきてくれないかぎり」

返す言葉が、見つからなかった。

どうしよう。

さまざまな思いが洪水のようにアーラの中であふれかえっている。自身の単純な気持ちはその濁流にもまれてもなお明確だったが、「どうすべきか」という理性の網ではその気持ちをすくいあげることができなかった。

「私は」

頭の整理がつかないうちに話すのは、あまり得策ではないのに。さらに喉は熱い塊でふさがれているようで、囁き声は自分でも聞きとりにくいほど弱々しかった。

「私は、この国の人間じゃないわ。この世界のものですらない」

「だとしたら、本当にグラントリーの家にジルフィスの妹として生まれていたのなら、俺と血族の従姉妹だったなら、受け入れたと？」
複雑なまなざしで見返されながら、アーラは絞首台に吊るされていたジルフィスやテイアーナに良く似た女性を思い出していた。生まれたのに、生きられなかったグラントリーの娘。ジルフィスの、血を分けた本物の妹。

彼女なら、ゼファードにふさわしいに違いない。美しく可愛らしくて優美で血筋も申し分なくて。

だが、この世の人ではなかった。アーラとは別の意味で。

ゼファードが口調をやわらげて言った。

「嫌なら嫌と言えればいい。ただ、俺はアーラがいいんだ」

強制も何もなかっただの意思表示なのに懇願の響きが聞き取れたのは、ひよっとしたら自分の思い込みのせいではないかと、アーラはくらくらした。

手首の内側にも口付けられて、アーラの動脈が大きく波打った。

「嫌」とは言えない自分が、大いに嫌だった。

なんとも心苦しい宙吊りの状態を切り上げてくれたのは、ゼファードだった。

「……悪かった。おまえの体調が悪くないと聞いていたのに、こんなことで困らせて」

彼の目の中にはつきりと自己嫌悪が見てとれて、アーラはいたたまれなくなつた。彼が悪いわけではないのだ。何もはつきりさせられない自分こそが悪いのだと、アーラには良くわかつていた。

「よく寝ろ。明日出発するか、もう一泊させてもらうかは朝の体調を見てから考えればいい」

ゼファードはいつの間にか床に落ちていたセリステインからの手紙を拾い上げて、たたんで懐に戻した。ほかに何も重要な忘れ物がないのを確かめるように付近を見回すと、立ち上がった。

「遅くに邪魔したな。……本当に、悪かった」

「ゼファ」

言つべき言葉があつたわけではない。ただ、何か謝るなり彼が悪
いのではないと言ふなりしたほうがいいのではと漠然と思つただけ
で……否、そのようなものなどすべて後付けの理由で、アーラは反
射的に彼を呼び止めたのだつた。声は、普段の音量に戻つていた。
立ち去る一步を踏み出そうとしていたゼファードは振り返つた。

「どうした？ 具合が」

「違う。そういうことじゃなくて」

通常の半分の働きもしない頭がもどかしかつた。整然と考えるこ
とはほとんどできなくなっているのに、いつになく大量の情報や記
憶や切れ切れの事柄が潮流のように血管を駆け巡つているように感
じられるのが恨めしかつた。

次に口にする言葉が何かを変えるかもしれないが、アーラは
それを避けたかつた。だから、これだけを言つた。

「明日、一緒に馬車に乗つてもらえるとありがたいのだけど」

ゼファードはなんとも言いがたい面持ちをして、それでもうなず
いてくれた。そしてアーラが長椅子から立ち上がるのを助けると、
あとは口元を引き結んで、一度こちらを見ただけで部屋を出て行つ
た。

「おやすみ」

アーラは喉の熱さを飲み込んでつぶやくと、ドア下の燭台を片付
けた。

59、警告

ああ……これはまたあの、悪い夢だ。

アーラは目の前に現れた絞首台に、吊るされているおのれの姿を見た。首の骨は折れているらしく、頭の重さでうつむいているため、ありがたいことに死に顔は見えない。

さわさわとそよいでいる黒髪が、不意に波打つ褐色に変わった。ゆっくりと頭が持ち上がる。アーラは吐き気を催してしまわぬように腹に力を入れたが、こちらに向けられた顔は崩れても、鬱血してもいなかった。可愛らしい面立ちだ。

「これは、警告」

絞首台の乙女が、白いうなじに縄を食い込ませたままそう囁いた。

「これは警告よ」

アーラはまじまじと彼女を見返した。やはりティアーナに……：：：ジルフィスに似ている。その甘やかたおやかな、少女じみた女性が縄でぶら下がっているというのは、不謹慎かもしれないがどうも滑稽な画と見えた。

「あなたはだれ？」

「アーラは率直にたずねた。」

「ジルの妹ね？」

「私はあなたよ」

絞首台の彼女は即答した。

「もちろん、ジルフィス・グラントリーの妹でもあるけれど」

「知ってるわ。ティアーナが、街道の途中で破水してしまったって聞いたの。予定日よりもずいぶん前に」

「ええ、そうね。それでも私は、あなたでもあるのよ」

禅問答のようで、アーラにはわけがわからなかった。

「あちらをご覧になって」

うながされて、アーラは彼女の視線を追った。そこにはいつの間

にかもう一台絞首台が現れて、一人の若者が吊るされていた。後ろ姿しか見えないがそれはアーラであり、やがて角髪を結った皇子になり、王子に　ゼファードになった。

「これは警告よ」

彼女は繰り返した。

「このままでは、いずれこうなる」

「このままでは……いずれこうなる？」

彼女がはつきりうなずくさまを見て、アーラは慄いた。

「これは予知夢だというの？」

「夢ではないわ。これは警告。今のままでは、王子は殺されるわ」

褐色の髪 of 乙女は吊るされたまま、ほっそりとしたかたちよい指でゼファードを示した。

「王家の血を引き野望を抱く者にとって、正統なる王子は脅威だもの。彼は、きつと殺されてよ。私が　あなたが、止めない限り」

「私が？」

アーラは面食らいながら、脳裏で渦巻く記憶に心奪われていた。

歴史というよりもまるで物語りのように語られる千数百年前のこと。母はさして身分が高くないが、父こそが帝であった皇子は、義理の伯父に命を狙われる。周囲の多くが帝のあとを継ぐのは皇子ではなく伯父だと了解していたにもかかわらず、その伯父は皇子を脅威とみなしたのだ。

そして清らかな皇子は、陰謀と信じた者の裏切りのために、絞首となった。

「王子は殺されるわ。そして、あなたも。みんな」

アーラが途方くれた。

「私にどうしろというの？」

「おのずとすべきことがわかるはずよ」

わかるわけないじゃないの。

ふと、まるでノイズのようにアーラの意識に雑音が入り、乙女の声が遠くなった。

「あなたのしたいようにすればいいのよ」
そのときだった。

吊るされているゼファードの体が傾ぎ、乙女とは似ても似つかぬ生気のない首がちらと視界に入った。たちまちアーラの記憶と、自分の名前の由来と、それに伴う想像と、昨日街道で見た悪夢がすさまじい勢いであざやかな狂気となり、彼女に襲い掛かった。

警告は明確な恐怖となり、吊るされていた首が重力に従ってごとりと落ち、それがアーラの上に降ってきて……

自分の悲鳴で目が覚めた。

アーラは荒れ野でも絞首台でもなく、辺境貴族の客室のベッドにいたのだ。真上にゼファードと侍女でもある女官の顔があり、心配そうにこちらをのぞきこんでいる。

「アーラ様が大変うなされて、お苦しみのご様子でしたので、殿下にお知らせ申し上げてしまいました。お許しく下さいまし」

弁解がましく言う女官に「いや、おまえはよく知らせてくれた」とゼファードはねぎらってやって、彼女に退室するよううながした。アーラは壁のほうへと寝返りを打ち、流れ続けていた涙をこっそりぬぐった。麗しの美少女でもなければ涙など最悪だ。

ゼファードが言った。

「疲れているのかもしれないな。昨日から、うなされてばかりだろう」

アーラは「警告」についてどのように説明すべきか、まだわからなかった。伝えるべきだとは思うのに、自信で整理すらつけられないのだ。

何よりもまず、顔すら洗っていない夜着の姿で　もちろんベッドの中にもぐりこんではいるが、それがなおいつそう悪い気がする。早朝ゼファードと対面する羽目に陥っていることに気づき、うめいた。このていたらくでは、早くも家令失格だ。

ゼファもゼファで、来たりしないで女官に任せておいてくれ

は良かったのに。

「あの」

アーラが声を絞り出すと、ゼファードが耳を傾けて顔を近づけてきたのが心配でわかった。突然、昨晚「アーラがいい」と告げたときの彼の声が、まなざしが頭をよぎり、背中の内側が冷たい手で撫でられたかのようにひやりとする。

「身づくろい、するから。あの……廊下で、待っていて」

それを聞いてなぜかゼファードはやや不機嫌になったらしかった。だから言ってるじゃないか！ 無理がたたるのだと。今日一日ぐらい休めばいい」

「身づくろいくらいしなないと。仮にも殿下たるお方に、合わせられる顔じゃないもの」

「……俺が、アーラがいいと言ったのは」

無然とした口調が、壁と向き合っているアーラの後頭部にぶつかった。

「なにも、二十人の女官に洗濯されてドレスの山に突っ込まれたアーラばかりがいいと言ったわけじゃない。本当に」

「でも、仮にも王子殿下にこんな」

ひゅつと吸い込まれる息に彼のもどかしさを感じ取って、アーラは慌てて振り返り、言った。

「ゼファ」

見開かれた藍色の双眸とまともに見合う。生きている目。きちんとながっている首。それを見とめてまた勝手ににじもつとする涙をアーラは飲み込んだ。

「……大丈夫だから。ちょっと手を、貸してくれる？」

眠ったはずなのに、眠る前より疲れている気がする。アーラはゼファードの腕につかまって起き上がりながら、顔にかぶさった前髪をかきあげた。

「もう一泊しなくたって、大丈夫だから。それよりもお願い、帰りに馬車で話したいことがあるの」

なんとかして、彼にも「警告」しなければ。

私だって、馬鹿げていると思えるのに。

それでもアールは決意して、立ち上がるべく上履きを探した。

60、王子殿下の密偵

ジルフィスが尚書局の一室をたずねると、口を開くより前にユンナに目顔で止められた。

ユンナはしばらく気配を探るように耳を傾け、黙っていたが、しばらくして満足したのか唐突に口を利いた。

「散歩に出るぞ、ジル」

「あ？」

なぜ散歩などに出なければならぬのかわからず、ジルフィスはとんでもなく間の抜けた面持ちをさらしてしまった。

しかしユンナは有無を言わずに、

「真面目に根をつめている尚書官と、顔色の悪い筆頭騎士には休息が必要だ。ちょうど外の空気を吸いたいと思つていたところなんだ。つきあえ」

椅子にかけてあつた外套を羽織ると尚書局を出た。ジルフィスですら置いてきぼりにしかねない大またで石畳を歩いてゆく。女性にしてはかなり長身の部類である彼女のコンパスは、そこいらの騎士よりも長いのだ。南側の庭園に向かつているようだった。

王城に数ある庭園の中でもユンナが選んだのは迷路のようなバラ園でも凝つた形に刈り込まれた木々が並ぶ区画でもなく、芝生と花々の絨毯が広々と続く見晴らしのよいなだらかな丘だった。冬に近づいてゆく季節ゆえに花の種類は少ないが、それでも庭園としてそれなりの面目を保っている。

ユンナはジルフィスを振り返って、にっこりした。

「一介の尚書官ユンナ・ゾルデと筆頭騎士殿が旧知のあいだからであることは秘密ではないし、連れ立って散歩をするのだったびたびあることだ。誰も不信には思わんだろ。だが、用心するに越したことはない。ここなら誰にも立ち聞きされないし、どんな間諜も私たちに姿を見せずしてこちらをうかがうことはできない。さあ、思

う存分話してみる」

ジルフィスはユンナの用心深さを感心すると同時に、煙たいとも感じていた。

「こんなところまでくる必要があったのか？」

彼らが「旧知のあいだがら」であることによつて尚書局の一室でぐだぐだ展開される雑談に、末弟派の間諜たちがわざわざ聞き耳を立てているとは思えなかつた。

「あると私は思うね。あんたの話の内容にもよるかもしれないが。さ、話せよ」

このまま帰つたところで無意味なので、ジルフィスはグランヴィール王がつい先ほど打ち明けた旨を話し出した。

ユンナ・ゾルデは黙つたまま一通りジルフィスの話を聞いてくれたが、話しが終わるやいなやこういった。

「あんたは愚痴りにきたのか私の意見を聞きに来たのか、どつちなんだ？」

ユンナの声音に呆れと苛立ちを聞き取つて、ジルフィスは慌てて気分を引き締めた。

「意見を聞きに来たんだ、もちろん」

たしかに、大いに愚痴じみてしまつたかもしれない。だがあのように馬鹿げて無責任な話を王から聞かされたのだからたまつたものじゃない、仕方ないだろうといいかけたジルフィスを、ユンナはさえぎつた。

「ジル。アーラお嬢さんに恋するのは大いに結構だ。だが、恋は盲目というがな、恋と無関係なことにまで盲目になつてもらつちやこまるぞ。あんたはどこに目と耳と脳みそをつけてんだ？」

吸い込んだ空気がひゅつと喉で鳴る。理不尽な中傷にジルフィスの苛立ちは大いにふるえ、それは怒りに変わる限界でかろうじて留まつた。

「貴様はなにが言いたい？ アーラのことと、俺が今話した王の馬鹿げた話はまったく別問題じゃないか！」

「はつきり言おう、ジル。王がおっしゃったあれはデマだ」
沈黙が下りた。

ジルフィスはユンナの言葉を反芻し、それでもなおその意味が飲み込めずにいた。

「……王がおっしゃったあれ、というのは、どれが？あれ？なんだ？」

「疲れただとか王妃が恋しいとか王制への疑問とか、その辺の心情は陛下の本音だろうな。しかし陛下ご自身をぼっくり死んだことにしてもらって、後は末弟殿下だろうが好きにやってくれというのは餌だ。ひっかけるための」

ジルフィスは古馴染みの顔をまじまじと見つめた。大金持ちに花街で少年と間違えられて見出され、紳士にも淑女にも泥棒にも公僕にもなれる教育をほどこされたユンナ・ゾルデ。ゾルデ卿が養子である彼女にそれほどの知識と技術を習得させたのは、卿の交易という商売を拡大する一助にするためにちがいないが、それが達成されるより前に卿は鬼籍に入った。

「……おまえは、あの場で陛下の話を聞いてたのか？ クオードが見張っていたのに」

ユンナは唇の端をつりあげ、目を細めた。

「ドアに耳をくっつけなかったって、話を聞く方法はいくつもあるさ。王子殿下の密偵をなめてもらっちゃ困るな」

商売を他人に任せて尚書局で働くユンナをゼファードに紹介したのはジルフィスだが、ジルフィスを知る以上にユンナは大いに活躍しているらしい。……そう。ユンナ・ゾルデは、ゼファード王子殿下が抱える密偵の一人なのだった。

「ゼファード殿下だって気づいたんだ。同じかそれ以上に、陛下も末弟ヴァーデイスが国境付近でよからぬことをしてかしているのに気づいている。……そして陛下は、殿下がまだ疑ってすらいない、裏切り者の存在にも目星をつけた」

「裏切り者だって？」

ユンナは笑みを消してうなずいた。

「陛下ご自身とゼファード殿下を裏切り、あざむいている輩と言っべきかな。こいつをあぶりだすために、陛下はあんたたちをゼファード殿下に同行させなかつたんだよ。思うに、陛下が裏切り者候補として目してらっしゃるのはあんたとグラントリー閣下、そしてクオードだ」

ジルフィスは喉元をつかまれたようなショックを受けた。

「俺や、親父が裏切り者だつて？」

「ここでの裏切り者の定義は、グランヴィールという国家そのものや陛下よりもヴァーデイス殿下のほうに忠誠を誓っているということだろうな。だからこそ陛下はあんたたち三人を招いて もっとも、クオードはドアの向こうだったが話の内容は聞こえてるだろうからな デマを吹き込んだらうさ。ああしてとんでもない話を聞かされたんだから、あんたと閣下とクオードのうち誰か裏切り者の間諜は、主人であるヴァーデイスのところに報告に行くってわけだ。つまり、陛下の執務室を出てすぐにあんたには尾行がついたと思うよ。きつとこっちに近づくことができずに、あの繁みの陰あたりで気を揉んでいるだろうがね。かわいそうに」

その繁みを思わず振り返り、呆然とジルフィスはユンナに視線を戻した。誰が裏切り者なのか その問いの答えはひどく簡単なようにも思えたが、同時にそれはありえない答えでもあった。

「クオードなのか？」

「私にきくなよ」

ユンナはにべもない。

「でも、親父であるはずがない」

「じゃあ、クオードなんじゃないか？」

「それもありえないんだ。いや、万が一陛下とゼファアが争うようなことになったら、クオードは陛下を裏切つて、ゼファアに忠誠を尽くすとは思う。それは考えられる。けど、ゼファアを裏切つて末弟派につくなんてことは空が落ちてきたってありえない」

ユンナは肩をすくめて、遠くを見遣った。

「どつちにしろ、遠からず陛下が答えを突き止めるだろうさ。殿下やお嬢さんが帰ってくるよりも先に」

けれどもそうはならなかった。

ゼファードとアーラの帰りは、思いのほか早かったのだから。

6 1、決意

帰途を走る馬車の一定のリズムを刻む揺れに心を鎮め、アーラは深呼吸した。隣にはゼファードの存在があり、女官よりも高い体温がたしかに感じられる。視察は儀礼ではなく実務であり、視察用の実際の簡素な馬車の中は狭く、今は二人きりだった。

「……あのね、ゼファ」

ようやくアーラは口を開いた。ゼファードが問いかけるかのように、眉毛をわずかに上げる。

「馬鹿みたいだと思えば大いに笑ってくれて結構よ。けれど、私は気がふれたわけでもないいつものように物語りをするわけでもないわ。だから笑ってもかまわないけれど私が真剣だということを知った上で、聞いて頂戴」

「どうしたというんだ？ そんなにももったいぶって」

「私は、警告を受けたの。うなされる夢の中で」

アーラはほとばしりそうになる言葉を懸命に押しとどめ、噛み締めるように、努めて冷静でいるようおのれを保って悪夢について告げた。ゼファードが、アーラの名前の由来である？かの人？と同じように叔父に（かの皇子の場合は義理の伯父だが）殺されるという警告を。もちろん、あの吊られている気狂いじみた乙女については、何も話さなかったが。

ゼファードは、嗤いはしなかった。微笑いもしなかった。彼女の様子がよほど切羽詰っていたのか、それとも素直にアーラの前置きを受け入れてくれたからなのかはわからない。だが、きちんと聞いてくれたうえで、身の危険はこれまでも幾度となく感じてきたことだから改めて気をつけるほどのことでもないかと判断したようだった。彼ははつきりそう述べたわけではないが、アーラはそう感じた。

疲れているんだろうと再三言いかねない気遣わしげなゼファード

のまなざしのほうが、アーラはこの疲れよりも苦しかった。

アーラは不安だった。巫女でも予言者でもない自分だが、あのようにはつきりした悪夢を連続性を持って見るからにはなにか理由があると感じずにはいられなかった。虫の知らせといってもいい。このままにしておいていいとは、どうしても思えなかった。

ゼファードが脅威をもって感じられないなら、私が何とかしないと。

たいして何かができるとも思えないが。

話し終えて疲労感ばかりが残ったが、アーラは決意した。悪夢の中でもう一度あの？ジルフィスの妹？にあつて助言を得ようと。

悪夢を見るために眠ろうと努力するのはたいそう馬鹿げているが、今回ばかりは仕方がない。アーラは馬車の小気味よいリズムとソファに身をゆだね、そつとまぶたを下ろした。

なかなか寝付けなかったが、悪夢を見るには不安定な浅い眠りこそがうつてつけた。アーラはまたしても絞首台が建ち並ぶ荒れ野におり、褐色の髪を波打たせ首の折れた乙女の前に立っていた。

「殺されるわ」

首を捻じ曲げて顔を上げた乙女が言い、アーラはうなずいた。

「だから、私が何とかするの」

「剣も扱えないのに？」

乙女はおもしろがっているふうだった。

「あなたに刺客は倒せなくてよ。寝ずの番をしていたって、王子もろとも殺されてしまうわ」

「わかってるわよ、そんなこと」

アーラは言った。

「だから、刺客を送られる前にもとを断とうと思って」

「私にもあなたにもそんな技術も力もないわ。私たちはただの、非力な乙女ですもの」

「私のしたいことをすればいいといったのはあなたよ。非力な乙女だからこそできることがあるんじゃない？」

アーラは皮肉をこめて、

「さいわい、ヴァーデイスは私に興味を持ったようだから。誘い出して、抱きついて一緒に崖下に落ちるくらいならできるわよ」

ジルフィスの妹は、長いまつげがびっしりと並んだ目をさらに大きく見張った。

「死ぬつもりなのね？」

「私、死ぬのは怖くないの」

アーラは淡々と言った。

「私はグランヴィールの人間ではないわ。あなたが私なら、あなただつて知っているでしょう？ 私はこちらで死んだら、？あちら？に戻るんじゃないかとさえ思ってる。それに、ナイフで刺したり毒を盛つたりするのは嫌だけど、崖から水へ飛び込むくらいなら、末弟だつて運がよければ命だけは助かるんじゃないかって見込みがあるから、それほど罪悪感を感じなくてすむわ」

乙女は考え込む表情になり、やがて小さくうなずいた。

「あなたの推理はある意味一部正しくつてよ」

「正しい？」

「ええ。あなたは私で、私はあなた。その意味を、きちんと理解しているかしら？」

アーラはうんざりした。

「きちんと理解したいのにはつきりしたことを教えてくれないのはあなたよ」

「教える前に目覚めてしまっじゃないの。兎角、私たちは、どちらか一方しか生きることができない定めだったの」

その告白に、アーラは眉をひそめた。

「どういうこと？」

「なんと言えはわかりやすいかしら……精？^{シキ}魂といえはいい？

私たち、ごらんのように見目が違うでしょう？ だから体はもともそれぞれに用意されていたのよ。それぞれに両親がいて、母の胎内でこうしてまったく違う肉体をあたえられた。けれど、肉体の中

身 魂は、ひとつきりだったの。生まれ落ちる世界が隔てられているにもかかわらず、胎児の私たちはひとつきりの物を共有していた」

そんなことが……ありうるのだろうか？ アーラはそのさまを想像しようとした。別々の胎内に宿った胎児のあいだに横たわり、共有される魂とやらを。

「先に世に生まれ出たあなたの肉体に引きずられて、お母様の胎内の私から精が抜け出て、からっぽになったの。それで、中身のない私は生きられなかった」

引きずられて？

魂といわれればぼつと輝く光の球かと思うのだが、流動性のある固体のようなものなのかもしれない。寒天のような？

寒天状の魂が、ずりりと引きずられるさまを思い浮かべる。二つの器に盛られていたひとつながりの寒天は、一つの器を持ち去ったことによつて、残された器をからっぽにした……

罪悪感を感じることはない、アーラは自分に言い聞かせた。不可抗力なのだから。

ただ、先に褐色の髪の毛の乙女のほうが生まれ出ていたなら、生きられなかったのはアーラのほうだったというだけのことだ。

「だからあなたは？あちら？で死にかけて、？こちら？へ来たのよ。今度は逆に作用して、魂が肉体を引きずってきたのだけだ。生きる可能性があるもう一つの場所 グランヴェールへ」

同様の作用を見込むなら、こちらで死にかければもう一度？あちら？に渡る可能性は充分にあると、彼女は請合った。アーラは帰る方法が、少なくとも帰れるかもしれない方法がようやく見つかったというのに、喜ばなかった。

褐色の髪の毛の乙女が何かを言いかけた。

だが、それを聞き取ることはできなかった。

アーラは揺さぶられて目を覚ました。ごく近くにゼファードの双眸があり、アーラの心臓はつまづきかけ、馬車の振動は止まってい

た。

「城に着いたぞ。……降りられるか？」

アーラはうなずいて、自分の足で馬車から降りた。もともと、差し出されたゼファードの手をありがたく支えに使わせてもらったが、彼は旅を終えた一行に迅速に指示を出し、務めがある者はそれぞれに命令を遂行すべく散っていった。

ゼファードは王のもとへ報告へ出向く前に、アーラを客間まで送っていくと聞いて聞かなかった。はやく一人きりになりたかったので、グラントリーの屋敷に戻るよりも以前使っていた客間で休ませてもらうことにアーラも賛成だった。

客間に着き、女官が入れてくれたさわやかな風味をつけたお茶を飲むと、ずいぶん気分が落ちついた。一緒にお茶を飲んでいたゼファードもカップをあけたところで、立ち上がった。

「今日こそはゆっくりと休むといい。警告を頭に留めて、俺も身の回りには気をつける。アーラもきちんとう心しろ」

「わかってる」

アーラも立ち上がって、彼を見送ろうとした。真鍮の燭台を噛ませたドアにゼファードの手がかかる。

するとアーラの脳裏を、悪夢の中で考えた作戦がちくちくと刺した。末弟ヴァーディスとともに崖下に身を投げるといふ、はたから見たら心中でしかない馬鹿げた作戦が。それを実行したなら、成功失敗問わず、おそらくもうゼファードに会えることはないだろう。運がよければ？あちら？へ帰るだろうし、駄目なら死んで海の藻屑になるのだから。人魚姫のように。

人魚姫、ね。

こんなときに一番好きな童話を思い出すのは奇妙だった。幼いアーラがあこがれたのはシンデレラでもいばら姫でも白雪姫でもなくて、人魚姫だった。美しいあの尾にあこがれたのだ。

それは悲しい物語で、主人公と王子は結ばれないというのに。

「ゼファ」

決意するよりも先に、呼び止めていた。

「どうした？」

燭台を引き抜いて今にも廊下へ出ようとしていたゼファードが、振り返る。

アーラの中で見栄と虚勢と、これきりだからという悲しみとこれくらいなら罰は当たらないだろうという自分への言い訳がせめぎあい、かわいげもない懇願でもない無表情な疑問形となってこぼれ出た。

「キス、くれる？」

ゼファードの切れ長のはずの目が丸くなり、一瞬、間があった。囁む物が何もなくなつたドアが静かに閉まる。

そしてそれらは唐突に、怒涛のように起こつた。

疑問形への回答を待っていたアーラの後頭部がごつんと音を立て、背中が壁に押し付けられた。「ごっん」が繰り返されるよりも先に大きな手のひらが差し入れられ、アーラが後頭部をぶつけた文句をいうべきかそこを覆う手のひらについて問うべきか迷うよりも早く唇がふさがれた。これを熱烈と表現してよいものか経験のとぼしいアーラにはわかりかねたが、普段の彼からは想像しがたい、どこかすがりつくような、必死とも思えるものであるのはたしかだった。首の後ろが燃えるように熱くなり、なのに同時にひどく冷たいような気もする。おせじにも、物語で頻繁にえがかれるうっとりするよくなものではない。とにかくこのままでは息ができなくて死んでしまふということだけは理解できた。

「……キスをしてほしいとは思つたけど、窒息させてほしいとは思つてないわ」

やつとのこと、アーラは言った。世間は、初心者には酸素吸入器を準備するよう注意をうながすべきだ。無論、ここにはそんなものはないわけだが。

ゼファードはばつが悪そうな表情だったが、反論はせずにかがんで、座り込まずにいられなかったアーラに視線を合わせた。両手の

ひらでアーラの頬を包む。

「苦しかったのか」

「苦しかったわよ。こういうものなの？」

まったく馬鹿なことを訊いていると思ったが、訊いたことは取り消せない。ゼファードはなんとも言えない面持ちをし、次に、不思議と微笑んだ。

「苦しくないように努力する」

アーラは逃げようとしたが、もちろん両頬を包まれているので逃げ出せるわけもなかった。だが今回は、窒息の危険を感じずにすんだ。何度か呼吸を許されて、そのたびにやわらかな感触が降ってくる。ただ、どうしていいかわからなくて、身の置き場に非常に困った。こういう状況こそ居たたまれないというのだろう。しかし少しばかり、うっとりという表現を認めてもよい気分にはなった。

やっぱり、ゼファアが好きだ。

どうしてかという理由や、なぜジルフィスではないのかという謎はもはやどうでもよかった。

だからゼファアのために、私はヴァーデイスを消そう。

たとえ自分もともであって。

……たしかに何とやらは、盲目なのかもしれない。

62、砂糖と毒

砂漠で渴き果てて水を求める者が、あたえられた水甕の中身をむさぼり飲むように、ゼファードはアーラの両頬をしつかと包み込んで唇を合わせた。

水は渴きを癒して喉を満足させるが、アーラにはいくら触れていても充分ということにはなかった。「苦しくないように努力する」とは約束したものの、結果に見合う努力ができているかを客観視するほどの余裕は彼になかった。

右手を頬からそろそろと下ろし、彼女の喉もとに指先を当ててみれば、その薄くはかない皮膚の下で血管か神経かが震え、その震えはゼファードをも震えさせた。耳元が燃えているかのように熱く、目の奥はちかちかする。再び酸素（もしくは制止）を求めてさまようアーラの手を、ゼファードは捕らえてにぎりしめた。

ゼファードは今、酸素でも水でもなく、花酒よりも甘く習慣性のあるアーラとの口付けをただただ摂取していたかった。それでも脳裏の片隅ではアーラを休ませるべきだとわかつていたから、もうほんの一息後に彼女を解放するつもりだった。

しかし彼の？もうほんの一息？は、いささか長すぎた。

一方、アーラはといえば、残念ながら甘く酔うにはいたらなかった。狂気じみた悪夢に幾度も警告を受けているために理性の一部がすぐく醒めていて、それが「いつたいつまでこんなことをしているんだ」と針のようにせつつくのた。

仮に万事平和な世の中で恋人がお互いのことのみで没頭できる環境にあったとしても、アーラという人間は甘やかな誘惑においてそれと屈することはできないに違いなかった。生真面目が板に付きすぎたてしまい、よほど自身を甘やかす事情がなければ？だが？がはずれないのだ。

生来の生真面目さと長年染み付いた勤勉さが総力合わせて牙をむ

き 比喩ではなく、がぶりとして ゼファードの雨あられと降る口づけから彼女を脱出させしめた。

「……キスがほしいといったのはどこの誰だったか、教えてほしいんだが」

アーラの犬歯の一撃を食らって唇の出血に顔をしかめながら、ゼファードがぼやいた。？もうほんの一息？ほど前に彼女を解放したなら、不名誉な負傷をせずにすんだのだが。

「限度というものがあるわ」

アーラは視線を逸らして、そっけなく言い放った。しかし胸のうちでは、もう少しばかり加減すべきだったと、口の中に広がった血の味を飲み込んで反省した。

加減だけではない。彼がのたまうように、言い出したのはアーラのほうなのだった。思い出して恥じ入り、アーラはしおしおとした。「ううん、そうね。ゼファばかりを責めるのはフェアじゃないわ。

ゼファにはやるべきことがたくさんあるのに、時間を使わせてしまつてごめんなさい」

「アーラが謝ることじゃない。俺は有意義なことのために残ったんだし、あとは俺が仕事の効率を上げればいいだけのことだ」

有意義？

こちらを見つめるゼファードの目にたたえられた意味を、アーラははつきり汲み取った。それを自分も嬉しいと感じているのだと認めざるを得ず、彼女は心の中でうめいた。これで心おきなくヴァーデイスと心中の真似事ができるかと思つたのに、潔くはない自分にほとほとあきれた。

「たしかに……有意義だったわ」

彼はもう一度試みようとするようすで彼女の唇をなでた。だが、ゼファードは王子にふさわしい鉄の意志をかき集めたらしく、それ以上時間の有意義な無駄遣いをする事なく、効率的以上に仕事をやっつけるべく部屋を立ち去った。

アーラは心臓が平常運転になるまで待ち、頭も平常運行するのを

確かめて、やっと立ち上がった。

ヴァーデイスをやつつける計画を、具体的な形にしなくっちゃ。よろよるとベッドへと向かう。人を害する計画を練るのは、推理小説の構想では楽しいものだが、それを実践するという前提がある現実でははなはだ滅入る作業だ。

一番の難関は、どのようにして誰にも気づかれず　ゼファードにもジルフィスにもユンナにも疑われず　ヴァーデイスに接触を図るかということだ。

ベッドに突っ伏し、机上の空論的な数通りの方法を考えては却下し、これまで蓄積してきた城内の細かな情報をおさらいしながら最も破綻の少ない筋道をさぐってる。

不意に、ノックの音が響いた。無視しようかと思っただが、「あの、いらっしゃいませんか」とかけられた幼さの残る声に応えないのは、大人としてとても恥ずべきことのように感じられた。仕方なしに起き上がり、心持ち髪を整える。

そつと外の様子を伺うと、近頃入ったばかりの年若い女中がほんの十四、五歳だろう　優美なワゴンを押して心もとなげにたたずんでいた。

「お茶菓子をお持ちいたしました」
鍵を開けてやると、ワゴンをからからと押して入ってきた。少女がワゴンにかかったナプキンをとると、ほかほかと湯気の上がるおいしそうな焼き菓子があらわれた。

「春の芽吹き亭という店の者が、おかた様にと持ってきたものだと思います。こんなそっけないお菓子では謹厳卿のご息女に失礼だっけ料理番が言ったのですけど、おかた様は春の芽吹き亭が大好きだから持って行けて、女中の先輩があたしに言ったんです」

まだ宮仕えに慣れていない少女が精一杯丁寧に話そうとしながら笑顔で差し出した焼き菓子と紅茶を、アーラは断れなかった。

それに……なつかしい。

たしかにそれは、素朴で焦がし砂糖の香りがする春の芽吹き亭で

人気の菓子で、食欲のないアキラでも食べられそうだった。

あの店で働いていた頃が、まるで大昔のようだ。あの頃はただ毎日を昨日の影を踏むようにくりかえして平穩に過ごし、笑い、物語りをしてよろこばれ、この世界のことを学び、いつか帰るのだと希望を胸に抱いて、なんと安らかでささやかな幸せを味わっていたとか。

アキラは唇に残るかすかな温みに苦笑した。今の自分が幸せでないとは言うまいが、なぜ自分がいろいろなものを放り出して幸せではない結末にこれから走っていかなければならないのか、はなはだ腹立たしかった。

でもそれは、私がそうすると決めただもの。

見て見ぬふりをすればいいものを。

アキラは身の置き所に困っているような少女に微笑んでみせ、上品ぶるのも面倒で、そのまま菓子をつまんで口に入れた。

おいしかった。けれどすぐに、変だと気がついた。

世界が回った。否、めまいだ。体が揺れ、膝を床でたたかたに打ちながらも、何とか片手で壁をつかみ、上体を支えた。

しかしそれが限界だった。

毒だ。

?あちら?の二時間ドラマでありがちな青酸カリのように喉をかきむしりたくなる兆候や、血を吐く気配はなかった。

だがめまいがひどく、視界がぐるぐると回転を続け、己の首が支えられなくなつて、アキラはついに意識を手放した

意識が途切れるまぎわに、少女のすさまじい悲鳴だけが高々と聞こえた。

63、コルディア

死んだわけではないことは　死にかけたわけではさえないことは、すぐにわかった。

？そこ？はグランヴィールだった。目に映るすべてが、天井も照明も壁紙も、空気の色にいたるまでグランヴィールのだった。？あちら？の集中治療室にいるわけでも、？あの世？にいるわけでもなさそう。

毒を口にしてしまったにも関わらず、悪夢の中で首の折れた乙女が請け合ってくれたように？あちら？へ引き戻されはしなかったのだから、おそらく死ぬほどの毒ではなかったのだろう。

アーラの体は天蓋付きのベッドの上にあった。枕からはかぎなれた紫草の香りがする。先ほどまでいたのと同じ、アーラのための客間だ。

すぐ傍らに座っている人物は、ゼファードでもジルフィスでも悲鳴を上げていた年若い女中でもなかった。はじめ誰だかわからなかったのだが、わかったときにはあらゆる意味で意外すぎて、わけがわからなかった。

「ようやくのお目覚めですわね。まさか、再会がこんなかたちになるとは思ってもみなくてよ」

豊かな巻き毛の少女はつんとした態度で、しかし目にはおかしげな光を踊らせてアーラを見下ろしていた。

「コルディア、さん？」

先の夜会で出会ったとき、セリステインと連れ立っていた彼女は、そらおそろしくなるほどの美貌と個性を見せびらかしていたものだ。首筋や肩をむき出しにして黄金色の肌をあらわにし、豊かな胸をコルセットで強調し、実に装飾的に見せていた。微笑みはあでやかで、非日常的で、存在自体がなぞめいていて、アーラは呆気にとられたものだ。

しかし今日の前に座っている彼女は、とても同一人物だとは思えなかった。実用的なえび茶色のブラウスに、同色のロングスカート。夜会では強調されていた胸元は、いったいどのようにたたんでいるのか、品よく見事にブラウスの下に収まっている。巻き毛はうなじで無造作にたばねられただけで、面立ちはもちろん相変わらず美しいのだが、挑発的なあやうさがなりを潜めているおかげで、「ただの美人」ですませてしまえそうだ。

「コルディアさんが、どうしてここに？」

するとコルディアは文句のつけようのないすばらしい眉をひそめて、アーラを見た。

「仮にも王族の血を引くお姫様がたくしごときに？さん？付けななんてしてよろしいわけがあつて？ 臣民ですもの、呼び捨てていただけなくては」

丁寧なのか粗雑なのか理解しがたい口調で毒づくと、コルディアは冷やした布でアーラの額の汗を拭いた。

「身分をわきまえていただきたいわ」

コルディア嬢こそ身分をわきまえているにしてはくだけているとアーラは思った。

もちろん、くだけてくれていたほうがありがたいけど。

「ご気分はいかが？ すぐ解毒できたから、よろしいとは思っけれど」

「解毒？ あなたが？」

人は見た目によらないとは言つものの、とても白衣の天使のようには見えない。

コルディアは凄みのある笑みを浮かべ、アーラの襟元を整えるふりをしながらかがみこむと、唇がアーラの耳に触れるほどまで顔を寄せ、低い声でささやいた。

「わたくしは生まれも育ちも卑しくて、子どもの頃から太陽の下を歩けないような暮らしをしてきましたの。流れ者よ。わたくしを買つたらしい男は町々で見世物小屋を立てて、金を取っていたわ。…

…両親の顔？ 知らなくてよ。物心ついたときには仕込みが始まっ
ていて、見世物としてではなく商品として値が付いた日をはじめに、
わたくしは標的の寢床へやられるようになったのだけわ」

アーラは黙っていた。言葉をはさむことも、相づちを打つことす
らできなかった。

「わたくしのように美しい子どもは、とても人気があったの。こん
なふうにめずらしい肌の色と、豊かな髪を持つていればなおさらの
ことよ。だからわたくしを拒むものなどいなかった。わたくしがも
たらずのは、死だというのにね」

コルディアは低く笑った。

「わたくしでさんざん遊んで、満足の眠りに落ちた標的の口元に一
滴、垂らすだけでことは足りるの。わたくしは毒殺魔として訓練さ
れたのよ。ありとあらゆる毒の名を覚え、効能を覚え、流れ者一座
に富を引き入れるためにわたくしは死をばらまいたわ。セリスティ
ンに拾われるまではずつと、十年以上もそんな暮らしをしていて
よ。だからわたくし、毒には一等詳しいの。あなたの焼き菓子に入
っていた毒はもともと致死性のもではなかったし、安心していい
ことよ」

「……ありがとう」

コルディアは姿勢を戻して、にっこりした。

「お役に立てて光栄だわ。けれど、お礼はゼファード殿下におっし
やって」

「ゼファアに？」

首をかしげるアーラにコルディアはうなずき、今度は布巾をすす
ぐぶりをして、身をかがめた。

「殿下はあなたの忠告を聞いてすぐに、セリスティンの元からわた
くしを呼び出されたのよ。つかず離れず、アーラ様のまわりを見張
っていてくれとおっしゃって。末弟派の手の者が自分やあなたのこと
を害しに来るといけないから、アーラ様を守ってほしいって。」

アーラ様、あなた、わたくしをセリスティンのただの助手だと思

つていて？ わたくしは尚書局のユンナにこの名と身分を用意してもらってからと言うもの、ずっと王子殿下の密偵なのよ」

ようやく、さまざまなのが腑に落ちた。

それでは、ゼファードは悪夢の話を実に受けてくれたのだ。あれほどまでに心もとない、物的証拠のない、文字通り夢のような話をそして、アーラのそばについていてもたいして不自然には見えない密偵を 若い女性であるコルディアをよこしてくれたのだ。

まさか彼が毒入りの焼き菓子を送り届けられることまで予見していたとは思えないが、毒にくわしいコルディアが近くに潜んでいてくれたのは幸いだった。もしコルディアがいなかったなら、気を失ったアーラがどうなっていたのか、目覚めたときにこの客間にいることができたのかどうか、はなはだ心もとない。

末弟派が……多分ヴァーデイスの手下が、春の芽吹き亭のお菓子を買ってきて毒を盛ったのね。私を気絶させて、さらおうとも思ったの？

姿勢を元に戻し、すすいだ布巾をたたんでアーラの額に乗せると、コルディアは言った。

「ねえ、わたくしに物語りをしてくださらない？ 一度あなたのお話を聞いてみたいと思っていたの。だって、あなたはすばらしい語り手だってセリスが言っていたんですもの。引き受けていただけ？」

「どんな物語りがお望みななの？」

「毒の話がいいわ」

コルディアはけろりといつてのけた。

64、暗殺会議

ゼファードは唇の傷を舌先で探り、何の味もしなくなったことと指でなでて赤い色がつかなくなったことで血が止まったことを知った。

それをどこか惜しく思う自分を感じながらも、彼はやるべきことに着手した。

やるべき細かなことはたくさんあったが、それらはほとんど、末弟派に付け入る隙を与えないための日常の雑務と末弟派を排斥するためにめぐらせる罫でしかなかったから、結局、ヴァーデイスさえ取り除くことができれば、話はずっと簡単になるのだった。

ヴァーデイスが国境付近でひと悶着起こそうとしていることは具体的に言ってしまうえば、国境を預かる隣国の有力者を買収してグランヴィールでの地位を約束し、侵略を企てていることはあきらかだった。

その買収資金と武器購入資金にあてるために、ゼファードの地所の収益が横領されている。露見すればゼファードがヴァーデイスに与していると見られるおそれは充分にあり、表沙汰にして罰するのも角が立ちさらに王家の醜聞として輿論をかうという、何とも狡猾な計画で面倒な事態なのだった。

しかし、そのように狡猾で面倒きわまりない相手であるヴァーデイスも、甥を甘く見積もっていた。彼の印象では甥ゼファードはお堅い事なかれ主義者で、思い切った決断に踏み切るよりも、法にのっとり事務的に破綻のないやり方でちまちまと足掻くだけのものと計算していたのだ。

もちろん、当人であるゼファードも、ヴァーデイスどころか多くの宮廷人がおのれをそのように評価していることを知っていた。

実際のところ、ゼファードはお堅く生真面目な性質であるし、先例や道理からはずれた物事は至極面倒なのでできるかぎりそんな羽

目に陥らないよう立ち回っている。だが、アーラを自分の従妹にしてしまったり暗号じみた言語を学んだり一癖も二癖もある密偵を抱えていたり、グランヴィール王たる父の子にふさわしく、腹の中にそれなりのものは持ち合わせているのだ。

「いまのところ、後手後手だからな」

悪友のもとから呼び出した密偵を前にして、彼は言った。

「このあたりで先手に転じる。できることなら、荒っぽいことはやりたくないんだが」

「では、やらなければよろしいのに」

ゼファードが睨むと、くすくすと彼女は笑った。ごく実用的な服装の彼女は夜会でやたら目立つ存在と同一人物とは思えないほど、ありふれたただの美人に見えた。

「冗談ですわ。けれど、殿下がそういった手段をわたくしにお許しになるのはよくよくのことだと存じておりましてよ。……アーラ様のためなのではなくって？」

ゼファードはおのれの眉間にくつきり皺がよったのを感じた。目の前の少女は 否、アーラをしのぐほど若く少女のように見せかけて実は、ゼファードよりも年長の彼女は 彼女の悪魔じみた美貌の恋人と同じく、性格も大層悪魔じみているのだった。

「口が裂けてもアーラにはそう言うな。これはアーラの？ ため？ じゃない。政治的手腕だけで弟の暴走を止められなかった朴念仁の王と、どこに耳や目や脳みそをつけているのかわからないくらい阿呆な議会の面々の？ せい？ だ」

「それもそうですわね」

コルディアは悪魔めいた微笑を浮かべたままあっさりうなずいて、「で、どのように始末なさいますの？ 明らかに毒殺されたとわかる死に様では真っ先に殿下が疑われるでしょうし、ここは病気になるっていただき自然死に見せかけるのが一番だとは思いますが」

…… 食事にはすべて毒見がつき、立食の夜会では他の方々に被害が及ぶおそれがあり、皮下に注射できるほど近づくと手段がないとくれ

ば、いったいどうしろとおっしゃって？」

無論、寢所に忍び入らせるなどありえない。ゼファードは王子に仕掛ける罠となるべくのみ生かされていた憐れな娘のことを思い出し、身震いした。コルディアもセリスティンにすぐわれるまでは、あの娘とそう変わらぬ境遇だったのだ。

「おまえのほうに毒にはずっとくわしいだろう？　夜会のダンスのときにでも仕掛けられるんじゃないか？」

「ただ暗殺するだけなら、それも可能ですね。ダンスにかぎらずとも、ずっと簡単です。けれど周囲の目がなく、しかも証拠を残さず

針の痕すら残さず　やっつてのけるといのは、相当の運と素晴らしく細い針と、その細い針でも一瞬で致死量を　しかもゆるやかに死をもたらす効能の毒を……ああもつ！　つまり、九割九分無理ですよ。毒よりも、事故を装って崖からでも突き落とすほうが簡単ではなくって？」

「だれが突き落とすんだ？」

「……末弟殿下と二人きりになって不自然でなく、尚且つ突き落とした後しらを切りとおせるような都合のいい人物は皆無ですね」

「ああ。ヴァーデイスと心中でもしなければ、事故こそ無理だ」「暴れ馬の馬車をけしかけるとか？」

「古典的だな。あまりに古典的すぎて、都合よく暴れ馬がヴァーデイスにつつこんだのを、ただの偶然だと世間は見なさないだろうな。しかも、凶器が大きいだけにとばかりを受け取る者もそれなりに出ることだろう」

コルディアは小さな肩をすくめ、苦笑いした。

「つまり、毒しかないということですね」

「俺の頭では他に思いつかなかった。ほかにいい方法があったら言ってくれ」

「謙虚ですこと」

「心にもないことを口先にするのが得意だな」

「十年前までは、それが身上でしたから。……とにかく、考えてみ

ますわ」

そして優雅に臣下の礼をとり、立ち去ろうとした密偵を、ゼファードは呼び止めた。

「コルディア。もう一つ、頼みがある」

「なんですか？」

「アーラを守ってほしい」

コルディアはいぶかしげに首をかしげた。「体はひとつしかないのにどうやってアーラの護衛とヴァーデイスの暗殺をやったのけろと？」

そう考えているのが、ありありと伝わってくる。「護衛というわけじゃない。……俺が、アーラのそばにいられるときはいいんだ。ジルでもユンナでも、あいつらがいてくれるならそれでいい。だが、そんなときはばかりじゃないだろう」

「現に今はお一人でしょうね」

「おまえなら、尚書官であるユンナより目立たないだろう。尚書官がしばしば欠勤しては怪しまれるが、コルディアなら友人とでもセリスの使いだとでも何とでも言える。つかず離れずに、アーラのまわりを見張ってやってくれ。あいつを、守ってほしいんだ」

「それなら、腕っ節の強い者におっしゃればよろしいのに。王弟閣下の娘御ですもの、強面の護衛が一人二人ついたところでおかしくなくてよ。なぜそうなさないの？」

既に答えを知っている顔で、わざわざ彼女はそう問い返してきた。ゼファードは小さく息をついて、コルディアの大きな目を見返した。「腕っ節が強ければいいわけじゃない。……俺は、アーラから警告を受けたんだ。今のままでは俺は殺されるのだと。俺もアーラも危ない。だがそれは、どうやら力づくで殺されるわけじゃない。謀殺だ。謀殺に腕っ節ではかなわない」

「だから、？ここ？のよろしいわたくしの出番だと？」

こめかみをこつこつたたいてコルディアは艶然と微笑んだ。「厳密には違う」とは、賢明にもゼファードは口にしなかった。

「たのめるか？」

「期待しないでいただけなら」

それが暗殺のことを言っているのか、アーラのことを言っているのか、コルディアははっきりさせないまま出て行った。

だがしばらくの後、アーラが毒で倒れたものの回復し、近くに居合わせた少女が介抱していると聞き及んだゼファードは、コルディアを遣ってよかったとつくづく思い、胸をなでおろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7798n/>

王子殿下のカタリテ

2011年9月26日22時57分発行